

懷徳堂センター報

2004



大阪大学大学院文学研究科・文学部 懷徳堂センター



「バーチャル懷徳堂」タペストリ(本センター室常設展示、103 × 161cm)



「懷徳堂遺物パネル」(本センター室常設展示、各 70 × 70cm)



須田国太郎デッサン 二世金剛巖《鞍馬天狗》昭和 29 年

『懷徳堂センター報』二〇〇四 目次

巻頭言	奥平俊六 (2)
「須田国太郎 能・狂言デッサン」と昭和前期の能楽界	天野文雄 (3)
「須田国太郎 能・狂言デッサン」と父須田国太郎の思い出	須田寛 (19)
展示室を飛び出した「懷徳堂」——大阪大学懷徳堂センターの活動——	湯浅邦弘 (33)
洛訥奚囊——中井履軒の京都市	湯城吉信 (49)
大阪府立中之島図書館蔵『毛詩品物図攷雕題』について	井上了 (77)
並河寒泉『弁怪』翻刻 (一)	佐野大介 (95)
龍野文庫蔵懷徳堂関係文献簡介 (一)	井上了 (105)
彙報 (二〇〇二年四月～二〇〇三年三月)	(111)
第一次新田文庫暫定目録	池田光子 (3)
大阪大学附属図書館蔵「北山文庫続」暫定目録	井上了 (61)

巻頭言

懷徳堂センター室長 奥平俊六

懷徳堂の学問は、實際的な教養を身につけるために町人向けに工夫されたものでした。内に籠もる学問ではなく、扉はいつも外に向けて開かれていました。わたしは懷徳堂のことを考えるたびに「よき商人」の伝統に思いをはせます。一過

性の儲けは、本当の利潤ではなく、得たものから公に還していく。よく商売することはリベラルな感覚を育み、そしてリベラルな商人の住む町はさまざまな意味で豊かになる。学問も本来はそうした循環の豊かさの上に成り立つものではないでしょうか。江戸時代から「よき商人」の発想や生き方を支え続けた懷徳堂の学問は、いままさに新しいのではないかと思うのです。

懷徳堂センターは、懷徳堂資料および文学研究科関連資料の管理と展示・広報のために平成十三年に設置された文学研究科の付属施設です。平成十四年三月の「須田国太郎 能・狂言デッサン」展を皮切りに、さまざまな活動を展開してきま

した。平成十四年に設置された大阪大学総合学術博物館の企画展（於 大阪歴史博物館）への出展、また常設展示室での懷徳堂資料の公開も続けています。

「能・狂言デッサン」展は、須田国太郎画伯が三十年余りにわたって描きつけられたデッサン五千枚余をご遺族より文学研究科にご寄贈いただいたのを機に、それを整理し公開したものです。また、大阪歴史博物館の展示では「バーチャル懷徳堂」や「天図」「方図」などを出展するとともに、センターの委員が「江戸時代の天体模型図」と題するミニレクチャーを行いました。常設展示室の資料は、来訪した高校生にも見てもらいました。現在HPにおいて情報公開を進めており、財団法人懷徳堂記念会と協力して「電子懷徳堂考」のCD-ROMも出しました。今後より多くの人に懷徳堂の古き知恵に親しんでいただくように、情報発信の場としてここにセンターの広報誌を公刊するものです。

「須田国太郎 能・狂言デッサン」と昭和前期の能楽界

天野 文雄

はじめに

この一文は平成十四年三月二十三日に、大阪大学文学研究科の主催で大阪大学豊中キャンパス共通教育棟（B棟二一八教室）において行われた「須田国太郎 能・狂言デッサン」受贈記念講演会『洋画家が描いた昭和前期の能・狂言の名手たち——須田国太郎 能・狂言デッサンの世界——』での筆者の講演「須田国太郎 能・狂言デッサン」と昭和前期の能楽界」をもとにあらたに稿を起こしたものである。同講演会はその前年の平成十三年五月に故須田国太郎氏（昭和36年没、享年70歳）の追嗣であられる須田寛氏（J R 東海会長）から、須田国太郎画伯が残された五千枚におよぶ能・狂言の上演時のデッサンが大阪大学に寄贈されたことをうけて、その記念として催されたもので、そのおりには、筆者の講演のほか、原田平作氏（愛媛県美術館館長）の「須田国太郎の芸術と能・狂言」、須田寛氏の「「須田国太郎 能・狂言デッサン」と父須田国太郎の思い出」という二つの講演も行われた（このうち、須田寛氏の講演は本センター報に掲載されている）。この講演会は公開で行われたが、当日は一般の参会者も百名以上にのぼり、全参会者数は本学関係者とあわせ百五十名ほどであった。

なお、この講演会に続いて、四月十三日から五月十九日までの期間、伊丹市立美術館において、「須田国太郎 能・狂言デッサン展」が同美術館と大

阪大学との共催で開催され、そこにも八十点の須田デッサンが展示された。筆者はその会期中の四月十四日に、「描かれた名手たち——須田国太郎デッサンにみる昭和前期の能・狂言」と題する講演を行っているが、その内容は受贈記念における講演とほぼ同じ内容である。したがって、本稿は以上二つの筆者の講演をもとにしていることになる。

一 デッサンが寄贈されるまでの経緯

須田国太郎画伯が遺された膨大なデッサン群が大阪大学に寄贈されるにいたったそもそものきっかけは、平成十二年の三月末ころに、京都の観世会館での観能のあと、かねて知遇をえていた植藤芳一氏（演劇評論家に四条通りの酒房にさそわれて相談をうけたことにはじまる。植藤氏は須田国太郎画伯のこ子息の須田寛氏と旧制の同志社中学時代以来の親交があり、その旧友である須田寛氏から南禅寺の自宅に保管されている膨大なデッサンをそれにふさわしいいくつかの公的な機関に寄贈したいとの相談をうけていたのである。しかし、デッサンはとにかく膨大なものであり、須田画伯没後に京都市美術館（当時）の原田平作氏が整理をしかけたが、内容が能楽という特殊なものであることもあって、そのときの整理は完成せずそのままになっている。ついては、その調査をしてもらえないか、というのが植藤氏の要望であった。その時点では、植藤氏の念頭にあった寄贈機関

は、国立能楽堂や法政大学能楽研究所などで、場合によってはそれに大阪大学を加えてもよい、というようなことだったと思う。

そこで、筆者はその年の九月初旬に、権藤氏と研究室の二人の院生・中谷友美・田中みどりの両君とともに南禅寺の須田邸を訪れて、同家に保管されていたデッサン群についての調査を行った。デッサンは原田氏が整理されたときのままの形で、十五個の包みからなっていたが、大半がスケッチブックに描かれたもので、それに一部冊子ではない一枚もののデッサン用紙を用いたものも含まれていた。最初にその包みの山を見たときには、正直いっていささか途方にくれたが、ともかく基本的な整理だけはしようということになって、われわれ四人に須田氏も加わっての整理がはじまった。それまでの十五個の包みはそのまま一つの単位とすること、演目ごとに整理して、その演者・年次・場所の判明するものを記してゆくという方針のもと、デッサンの山に取り組み、作業は四時間ほどでほぼ終わった。デッサンには須田画伯が書き込んだ演目・演者・場所についてのメモ、あるいは能の詞章の書き込みがあり、その判読に全員が頭を悩ますことももしばしばだったし、描かれたデッサンのすばらしさに感声があることも少なくなかったが、今にして思うと、われわれはそうして須田芸術の一端にじかにふれていたのであった。

その後、そう時日を経ずに、演目を年次順に整理してリストを作成して、名古屋在住の須田氏のもとにお送りしたが、デッサンを一括して大阪大学に寄贈したいとの意向が権藤氏を介して伝えられたのは、たしかそのころのことだったと思う。九月の調査のおり、筆者は、複数の公的組織に寄贈するという当初の案にたいして、寄贈先は一つにして作品の分散はさけるべきだと強く主張したが、その一つの組織として、筆者の頭には大阪大学はまったく入っていなかったから、これはまったく思いがけない展開で

あった。大阪大学には演劇学とともに美術史の研究室があり、さきにデッサンの調査をされた原田平作氏も大阪大学の名誉教授であることがその主たる理由だったようであるが、九月の調査におけるわれわれの働きぶりもすこし認められた結果でもあったらしい。

こうして、須田画伯のデッサンは、約一千枚を須田家に残し、その大半の五千枚あまりが大阪大学に寄贈されることとなったのである。そこで、平成十三年五月末に須田氏と仲介者の権藤氏が文学研究科を訪れ、当時の肥塚隆文学研究科長とのあいだで寄贈についての確認がなされたあと、ただちに寄贈手続きがとられ、その結果、同年七月に寄贈手続きが完了したのである。



「須田国太郎 能・狂言デッサン」展
(本センター室にて)

平成十四年三月の受贈記念講演会は、このような貴重な作品をいただきたいからには、それを記念し、また大学の内外にもそのことを周知させる必要を感じての催しであった。また、記念講演会とともに、研究科内の懷徳堂センター展示室において、「須田国太郎 能・狂言デッサン」展が藤岡權助教授を中心とした美術史研究室の協力によって催され、多くの参観者があつた（会期は3月4日～29日だった）。また、さきに作成した作品リストをさらに整理し、須田家に残された作品をもあわせて、『須田国太郎 能・狂言デッサン（総目録）』（A4判、40頁）を文学研究科から刊行したが、同目録の作成には主として筆者があつた。

二 須田国太郎画伯と能楽

須田デッサンの具体的な紹介に入る前に、もうひとつ須田画伯と能楽（能と狂言）とのかかわりについて述べておきたい。そのことは須田デッサンを考える場合の不可欠の視点と思われるからである。そもそも、須田画伯が能楽を愛好していたことは、本稿で紹介するような膨大な能・狂言のデッサンを残したことに端的に示されているわけだが、この項ではデッサン以外の能楽とのかかわりについて述べておきたい。

須田画伯と能楽とのかかわりは、第三高等学校に入学した明治四十三年に金剛流のシテ方高岡鶴三郎に師事して謡の稽古をするようになったことにはじまるようである（昭和56年に京都国立博物館で催された『須田国太郎展』の図録の年譜による）。その後、金剛流の家元である初世金剛巖に師事するようになったようだが、その時期についてはつまびらかではない。その金剛巖との交流については、昭和二十六年の巖没後に創元社から再刊された巖の著『能と能面』（初刊は昭和15年の弘文堂の教養文庫に掲載された須田画伯の「金剛巖師」などにその一端がうかがえる（その一部はのちに紹介す

る）。なお、昭和五十六年の『須田国太郎展』の図録には、昭和二十八年に金剛能楽堂で催された野村徳七（得庵）追善の会での、大鼓の谷口勝三を相手に一調（いっしょう、大小の鼓や太鼓と組んで能の短い一節を謡う演式）を謡う画伯の姿を映した写真が掲載されている。



野村徳七氏追善謡（昭和28年）

右が須田国太郎氏、大鼓は谷口勝三氏

また、明治四十三年に謡の稽古をはじめたころには、すでに室町通りの金剛能楽堂に足をはこぶようになっていたようで、そのことは昭和二十二年に明治から大正にかけての金剛能楽堂のようすを回顧したエッセイ「明治から大正へ―室町舞台の思出」（『金剛』復刊第2号、昭和25年9月）から知られる。これはいかにも画家らしい記憶力と描写力によって綴られたエッセイで、ここに具体的に紹介する紙幅がないのが残念であるが、ひ

とり金剛能楽堂だけでなく、明治く大正ころの能楽上演の雰囲気はいまに伝える貴重な記録ともなっている。

また、須田画伯と能楽のかかわりを伝えるものに、画伯が丹念に記していた日記がある。この日記はその一部が岡田三郎氏著『須田国太郎 資料研究』（京都の美術1。昭和54年。京都市美術館）に紹介されているが、そこに能見物や能のデッサンのことなど、能楽とのかかわりが比較的豊富に記されているのである。そこで、以下では、その日記から画伯と能楽とのかかわりを紹介することしよう。



大原御幸（昭和17年）

まず、日記中でもっとも早い時期のものは、大正三年二月十二日の項で、そこには、「夜お祖父さんの前で大いに謡われる」とある。このあとは昭和十四年まで能楽に関する記事はないが、その昭和十四年の五月七日の項に、「金剛謹之助十七回忌能あり。写生帖四冊かく」という記事がある。この「写生」がほかでもない本稿で紹介しようとしているデッサンのこと

で、現にこのときのデッサンは寄贈分のなかに含まれている（ただし、現存するスケッチブックは二冊である）。ついで、昭和十六年から十七年の日記には、吉忠（老舗の呉服問屋）の吉田忠氏に依頼されて制作した『大原御幸』についての一連の記事がある。この『大原御幸』は須田画伯唯一の能の油絵で（現在は個人蔵）、たぶん金剛能楽の舞台を描いたものと思われるが、その『大原御幸』の制作について、「夜、夜桜つづき。吉田忠氏への能画かく」（昭和16年4月26日）、「午前、能画十号かき出す」（昭和17年5月3日）、「午後、寸暇を得て大原御幸かく。十号」（同年5月12日）、「大原御幸を訂正す」（同年5月13日）などとあつて、同年五月二十四日に、「午後、苗習会第二十五回、吟風荘にて。大原御幸持参す」とあり、一年あまりをかけて完成したことが知られる。

続いて、昭和十八年の五月十六日に「写生帖一冊かく」とある。これは同日の金剛能楽堂における能のデッサンで、寄贈分のなかに含まれている金剛能の『邯鄲』と茂山真一（三世千作）の『呂蓮』がこのときの作品である。また、昭和二十年の四月三日には、「九曜会、写生三十一枚」とある。九曜会は金剛流の能会だが、これは寄贈分にも須田家分にも含まれていない。この年は五月十三日に、「朝、動物園、つづき。午後金剛へ。写生一冊上る」、同二十日に、「午後金剛へ、写生一冊」とある。前者は金剛能の『野宮』、後者は金春光太郎の『柏崎』で、ともに寄贈分に含まれている。

昭和二十一年は比較的関連記事が多い。まず、一月十九日に、「今春会初会」とある。「今春会」は金剛能楽堂で催された京都金春会のこと、このときのデッサンである桜間金太郎の『東北』と桜間道雄の『春日龍神』が寄贈分に含まれている。ついで五月一日に、「久々図書館。雑誌「幽玄」への原稿かく。十枚」とある。この原稿は『幽玄』創刊号に掲載された「能の姿」というエッセイであるが、このエッセイは後にふれることに

なろう。その『幽玄』誌のことは十二月九日にも、「午後大学へ。つづいて片山邸にて幽玄社の座談会」とある。

昭和二十四年には、五月二十九日に、「朝、バラかく。午後一時間程、金剛能楽堂。かえってまたバラ」とあり、十一月二十日には、「金剛へも行かず、終日作画」とある。

昭和二十五年には、五月十四日に、「朝、出品画を修正。午後金剛へ」とあり、昭和二十七年は五月二十六日に、「十二号とりにくる。東京三越へ送る。夜、バラを写生、十二時半まで。薪能ゆかず」とある。この薪能は昭和二十五年からはじまった平安神宮での京都薪能のことで、翌昭和二十八年の京都薪能ではパンフレットの表紙の絵を依頼されたようで、同年四月十七日に「薪能目録表紙かくので夜まで。中々出来ず」、同二十二日に「薪能目録表紙渡す」とある。この年は、四月三十日に「茂山千五郎氏と芸談」という記事もある。

昭和二十九年も比較的関連記事が多い。四月二十八日に「平凡の日。薪能の目録表紙かく」、五月五日に「薪能の表紙、またまたかき直す」と薪能の表紙絵のことがみえ、十一月九日には「夜、この間の生島氏道成寺の素描をやる。どうもうまくゆかず」とある。「生島氏」はフランス文学研究で知られる京都大学教授生島遼一氏で、その六日前に金剛能楽堂で『道成寺』を演じたようである(岡田三郎氏の注による)。

昭和三十一年は、一月三十一日に「朝、扇子地紙へ胡粉で下地かく。片山博太郎氏婚礼祝用」、二月一日に「片山博太郎氏結婚祝の扇子をかいて十松屋に渡す」、二月十三日に「終日六号かく。バラ。片山氏より仲人の生島氏へゆくもの」、十四日に「六号大体かく。片山氏へ搬入」、二十七日に「片山氏への扇子を加筆」という一連の記事がある。片山博太郎は現在の片山九郎右衛門(シテ方親世流)、十松屋は能楽の扇子専門店である。

公開された日記にみえる須田画伯と能楽とのかわりは以上のとおりである。これらは画家としての営みが記されたなかの断片的な記事ではあるが、そこからは須田画伯の能楽との深いかわりや、京都の役者との交流がよく伝わってくる。また、デッサンについての記事もまことに興味深いものがある。

なお、右では、須田画伯の唯一の油絵の能画である『大原御幸』について言及したが、須田画伯には、これも唯一のパステル画の能画である『熊野』(昭和24年)もある。換言すれば、能楽を対象にした須田画伯の作品はほとんどがデッサンだということになるわけである。



熊野(昭和24年)

三 「須田国太郎 能・狂言デッサン」の概要

須田国太郎画伯が能・狂言のデッサンを描いていたのは昭和二年から昭和三十二年までのことである。能・狂言のデッサンをはじめた昭和二年ころというところ、約五年におよぶスペインを中心にしたヨーロッパ留学を終

えて帰国し、和歌山高等商業学校で講師として美術史を教えていたころで、画業が進まずおおいに悩んでいた時期にあたる。岡部三郎氏の『須田国太郎 資料研究』によれば、そのように悩んでいた須田画伯の画業が軌道にのつたのは、昭和四年正月に京都大学の恩師である深田康算氏（昭和3年没）の肖像を完成させたころからであるというが、須田画伯はそのような時期にその後三十年も続くことになる能・狂言のデッサンを開始しているのである。その点で、能・狂言のデッサンは須田国太郎という洋画家の生涯において、きわめて重要な役割をはたしているのではないかと思われる。

その三十年間に須田画伯が描いた能・狂言のデッサンは、大阪大学に寄贈された分と須田家に残された分を合わせると六千枚におよぶ。多少は知人に贈られたりして外に出ているものもあるが、それはごく少数のようで、だいたいこれが須田画伯が生涯のうちに描いた能・狂言のデッサンの全体とみてよいように思われる。ここではまずその概略を示すことにする。

まず、須田画伯がデッサンで描いた能・狂言の総曲数（舞台数）だが、それは寄贈分と須田家分をあわせると、演目不明のものもふくめて三九五曲にのぼる。その内訳は寄贈分が三三五曲、須田家分が六〇曲で、その三九五曲中の五〇曲が狂言である。また、描かれている曲目は判明しているものについていえば一〇七曲である。現在上演されている能の数がだいたい二五〇曲ほどで、そのうち比較的舞台にかかるのは一〇〇曲程度であるから、須田画伯はふつうに上演される能はほとんど描いていることになる。

これら大量のデッサンは、前述のように、多くは規格もさまざまなスケッチブックに描かれているが、一枚のデッサン用紙に描かれたものも一割ほどある。また、スケッチブックには、そこに描かれている能会の番組が表紙に貼られたり、なかに挿入されていたり、あるいは演目や演者が

須田画伯によって書き込まれているものもかなり多い。これらの番組や須田画伯のメモのおかげで、多くの演目や演者を確認することができたのである。このうち、番組がそえられている僅しは三九五曲のうち二四八曲である。このような番組はなかなか保存がむずかしいもので、それだけでも昭和前期の能楽についての貴重な資料になると思われるが、なかでも、第二次大戦末期の昭和二十年の武智鐵二主宰の断絃会の番組などはガリ版刷りの番組で、警報が鳴った場合には即座に中止という注記が付されていて、緊迫したなかでの上演だったことが現実感をもって今に伝わってくる。

また、デッサンのなかには、演目や役者名のほかにも、描かれた能の詞章や装束の色などかなり書き込まれている。詞章はもちろん描かれたその場面のもので、それらの詞章は長年にわたって金剛流の謡曲をたしなんでいた須田画伯の身体にしみこんでいたものであったはずである。文字はまことに味わいのある達筆で、その詞章とそこに描かれたデッサンは、能のもつとも能らしい瞬間をみごとにとらえているように思われる。

また、須田画伯がもつとも多くのデッサンを描いたのは金剛能楽堂であるが、同能楽堂では画伯はいつも脇正面の最前列からデッサンを描いていた。そのことは多くの人の証言があるが、須田画伯自身にも、その「常席」についての発言が雑誌『幽玄』昭和二十二年二月号の座談会にもみえる。デッサンに脇正面から俯瞰するような角度で描かれているものがあるのはそのためである。

以上が須田デッサンの概略であるが、右に述べた番組や書き込みの有無、それからスケッチブックの規格などについては、前述の『須田国太郎 能・狂言デッサン』総目録』にも記しておいたので、詳細は同目録を参照されたい。

四 描かれた昭和前期の名手たち

つぎに、須田テッサンに描かれている役者であるが、これはつぎの四十人である。配列はアイウエオ順。○印が東京の役者で、◎印が関西の役者である。

◎今井幾三郎	(金剛流。大正2年～昭和55年)	1回
○梅若万三郎〔初世〕	(親世流。明治元年～昭和21年)	3回
○梅若万三郎〔二世〕	(親世流。明治41年～平成3年)	2回
○梅若実〔二世〕	(親世流。明治11年～昭和34年)	2回
○梅若六郎	(親世流。明治40年～昭和54年)	3回
◎大江又三郎	(親世流。明治44年～昭和53年)	1回
◎片山九郎右衛門〔博通〕	(親世流。明治40年～昭和38年)	2回
○親世左近	(親世流。明治28年～昭和14年)	2回
○親世鉄之丞〔六世。華雪〕	(親世流。明治17年～昭和34年)	10回
○親世喜之	(親世流。明治35年～昭和52年)	3回
○親世寿夫	(親世流。大正14年～昭和53年)	1回
○親世静夫〔八世鉄之丞〕	(親世流。昭和6年～平成12年)	1回
○親世元正〔左近〕	(親世流。昭和5年～平成2年)	1回
○喜多六平太〔初世〕	(喜多流。明治7年～昭和46年)	5回
○喜多実	(喜多流。明治33年～昭和61年)	1回
◎金剛右京	(金剛流。明治5年～昭和11年)	6回
◎金剛巖〔初世〕	(金剛流。明治19年～昭和26年)	95回
◎金剛滋夫〔二世巖〕	(金剛流。大正13年～平成11年)	23回
◎金剛永隆	(金剛流。昭和26年)	1回

○近藤乾三	(宝生流。明治23年～昭和63年)	2回
◎金春光太郎〔八条〕	(金春流。明治19年～昭和37年)	11回
◎金春栄治郎	(金春流。明治28年～昭和57年)	3回
◎金春信高	(金春流。大正9年)	1回
○桜間金太郎〔弓川〕	(金春流。明治22年～昭和32年)	27回
○桜間龍馬〔金太郎〕	(金春流。大正5年～平成3年)	4回
○桜間道雄	(金春流。明治30年～昭和58年)	5回
○佐野巖	(宝生流。明治31年～昭和41年)	1回
◎茂山千五郎〔二世千作〕	(大蔵流。元治元年～昭和25年)	10回
◎茂山忠三郎〔三世〕	(大蔵流。明治28年～昭和34年)	12回
◎茂山真一〔三世千作〕	(大蔵流。明治29年～昭和61年)	11回
◎茂山千之丞	(大蔵流。大正12年)	2回
◎茂山弥五郎〔善竹弥五郎〕	(大蔵流。明治16年～昭和40年)	3回
◎茂山七五三〔現千作〕	(大蔵流。大正8年)	2回
○武田夏男	(宝生流)	1回
◎田中庸皓	(大蔵流)	1回
◎豊島弥左衛門	(金剛流。明治32年～昭和53年)	1回
◎豊島訓三	(金剛流。昭和6年)	1回
○野口兼資	(宝生流。明治12年～昭和28年)	13回
○橘岡久太郎	(親世流。明治17年～昭和38年)	4回
◎広田泰三	(金剛流。大正14年)	1回
◎広田隆一	(金剛流。大正12年)	1回
○宝生重英〔九郎〕	(宝生流。明治32年～昭和49年)	6回
○宝生英雄	(宝生流。大正9年～平成7年)	1回
○松本長	(宝生流。明治10年～昭和10年)	1回

○三宅藤九郎

(和泉流。明治34年〜平成2年) 1回

○山本東次郎(3世)

(大藏流。明治31年〜昭和39年) 1回

これを一覽すると、まず四十八人中、二十八人が東京の役者であることに驚かされる。そのほとんどは金剛能楽堂をはじめとする京都の舞台での能である。それら東京の役者を描いたデッサンはとくに戦中と戦後に集中しているが、東京の役者がこれだけ京都で能を演じているのは、その時期の東京では空襲や能舞台の焼失で、ほとんど能や狂言の上演ができなかったためである。つまり、その時期の京都の能・狂言はほとんど日本の能・狂言という様相を呈していたのであり、その結果、須田画伯のデッサンにはおのずと当時(昭和前期)の名手の舞台が多く描かれることになったわけである。

これら四十八人はそのほとんどが現在も名手と評価されている役者であるが、そのうち描かれた回数がもっとも多いのが、95回を数える初世金剛蔵で、以下、27回の桜間金太郎(弓川)、23回の新田滋夫(二世金剛蔵)、13回の野口兼資、12回の豊島弥左衛門、11回の新春光太郎(八条)、10回の観世鎮之丞(華留)、9回の梅若万三郎(初世)という順になる。以上は能役者の場合だが、狂言では茂山忠三郎(三世)が12回でトップ、これに茂山真一(三世千作)の11回、茂山千五郎(二世千作)の10回が続く。

また、一曲に描かれたデッサンの枚数はさまざまであるが、もっとも多いのは昭和十九年の金剛蔵の《道成寺まゝ》の56枚である。以下、40枚以上のものをかかざると、昭和八年の金剛右京の《焼捨》の52枚、昭和八年の金剛蔵の《花簾》の48枚、昭和十六年の金剛蔵の《船弁慶》の48枚、昭和十七年の桜間金太郎の《三井寺》の46枚、昭和十八年の金剛蔵の《隅田川》の46枚、昭和八年の金剛蔵の《熊野花之童》の47枚、昭和十

四年の桜間金太郎の《船弁慶まゝ》の46枚、昭和十八年の金剛蔵の《邯鄲》の45枚、昭和十八年の金剛蔵の《桜川》の43枚、昭和十一年の金剛蔵の《葵上》の42枚、となる。

このようにみてみると、須田デッサンに描かれている役者では、初世金剛蔵が断然多いことになる。これは金剛蔵が須田画伯の師であり、また格別に親交のあった役者であるから当然の結果ではあるのだが、もちろん初世蔵が当代の名手であったことにもよるのである。蔵が当時どのように見られていたかを、昭和十年の《鶴鳴小町》にたいする坂元雪鳥の長文の能評によってみると、その最後は、

「斯くて此日も」ト常座へくつろぎて扇を杖に替へ、中央の方へ帰り、ワキの立つて帰りがけるのを見て、「小町も今は是までなり」とト胸杖し、「杖に縋りて」ト泣きながら中央へ歩み、ワキと入違ひとなつて静に止りて見送り、常座まで跡を追ふやうに行き、臨一杯にワキが幕へ入ると、シテは斜にヒライテ拍子無く、囃子は残り留めとなつた。ワキの帰るのを見送る所には人知れぬ苦心があつたやうに思ふ。全曲を通じて十分に位を保ちながら、縛られてるやうな感を少しも与えなかつたのは嬉しかつた。

とある。辛口で知られる雪鳥にこのように評されているのである。もつて、当時の能界における蔵の評価がほぼ知られるかと思う。その初世蔵の芸術を須田画伯はどのようにみていたのか、それを蔵が没した直後に書かれた「金剛蔵師」(昭和26年刊の『能と能面』所収の一節にみてみよう。

師は何でも舞われ、それぞれに円熟の技を見せられたが、どんな境地が究極の理想か、それをきくと矢張り世阿弥のいう幽玄にあつた

らしい。その幽玄はどこに求められていたのか、これは言うべくして困難であろうが、大体師の最も得意とされた三番目物のうちにあるようであった。何の作意もなく、所謂見せどころのない言わば、あつと言わせるような妙技を必要としない、どこをどうというようなところもなく、上手とか未熟などいうようなことも忘れ、いつしか演了したあとで、ある香気にひたるというか、忘我の境に夢遊するかのようなものでなければならぬと言われていた。それで三番目のうちでも比較的劇的な要素の少ないもの、従って強力な太鼓などの入らぬものを好まれたようであった。勿論幽玄はそういうものにのみあるわけではないであろうが、師の芸風からいって、ここに最も幽玄境を感じられたのは無理からぬところであつたと思われる。枯木に花のような老女物も屢々手がけられた。先考の謹之輔翁は老女物に於ては存外、深がることもなく、極端な低弱音を用いることもなく、むしろそういった特別の秘伝的伝習を排して演じられたが、師もその点は同じ主調であつた。幽玄を、そうした特殊な秘曲に求めるというようなことはされなかつたのであつた。一つ一つの曲趣そのものからでなく、演者の芸格から出てくるべきものと考えられたに違いないのである。師が三番目物にこれを見出すというのは、結局この三番目物が最適であり、愛好された曲ということになるのである。

これはかなりの長文で、この前には、故金剛巖が面や装束に人一倍強い関心と造詣をもっていたこと、またこのあとには、家元としての巖のことや、巖が取り組んだ新作能や新様式能や学生能を例にその進取の気性などについて述べられているが、右の引用箇所には巖の芸風がかなりの確

にとらえられているように思われる。また、ここからは須田画伯の巖にたいする敬愛の念だけでなく、能にたいする造詣の深さも十分に感じられるであろう。



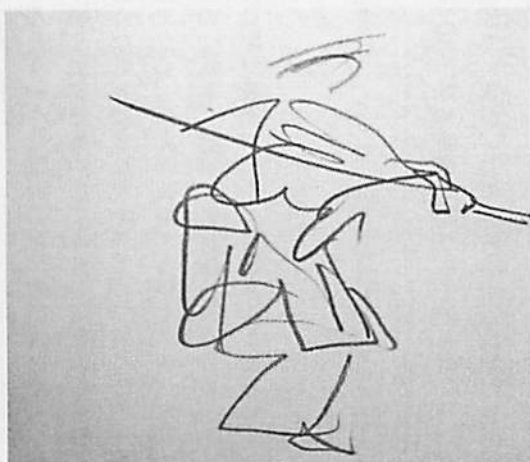
昭和58年創元社刊『能と能面』（金剛巖著）より転載

金剛巖のつぎに須田デッサンに多く描かれているのは、金春流の桜間金太郎（弓川）である。桜間金太郎は能楽研究者として著名な野上豊一郎とも親交のあつた昭和前期を代表する役者で、その名手ぶりについては坂元雪鳥の能評をはじめ多数の証言があるが、ここでは、その坂元雪鳥の昭和六年の『国民新聞』に掲載された能評を紹介しよう。

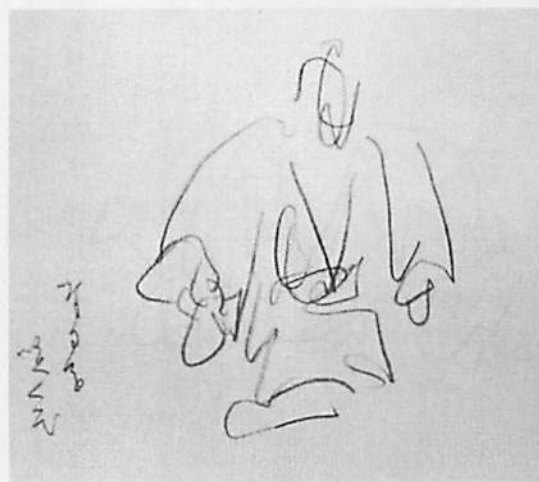
観世梅若の人々は、「松風」のやうな曲だと先ず声を殺す事に苦心する。極端な細工を施してそれが往々にして厭味となる。桜間金太郎氏



金剛巖《隅田川》昭和18年



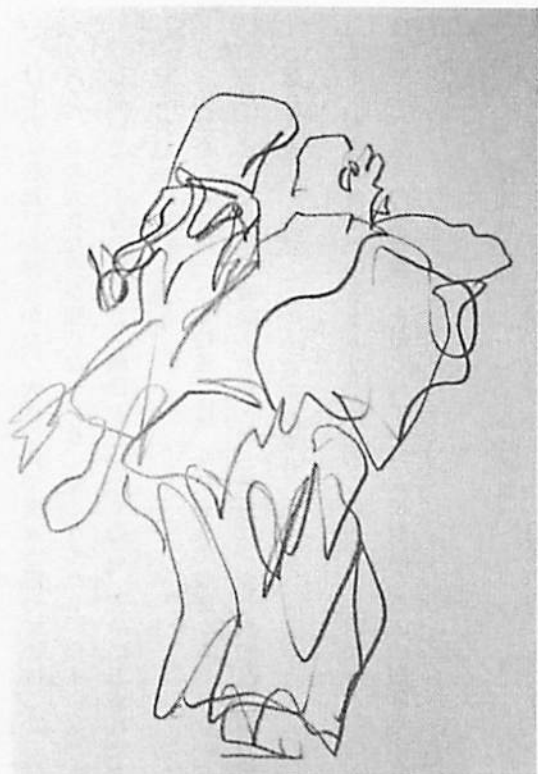
金剛巖《船弁慶》昭和16年



桜間金太郎《葵上》昭和7年



桜間金太郎《山姥》昭和17年



喜田六平太《花月》昭和17年



梅若才三郎《碇》昭和18年



金剛光太郎《定家》昭和19年



野口兼資《鈴木》昭和19年

はその「松風」を朗らかな、大きな声で楽々と謡つてのけるから妙である。その大きな声が強くなったり、荒くなったり、粗末になつたりしないで、十分の優しさと潤ひとを持つてゐる。天分に恵まれた人といふ外はあるまいと思ふ。

氏が金春会で舞つた「松風」は、今秋最大の収穫かも知れない。その活殺自在な調子、擒縱心のまゝなる緩急は、少しも冗漫單調の感を起こさせず、陶然として全曲を凝視せしめた。

また、当時の金太郎の名手ぶりを伝えるものとして、昭和十六年の『謡曲界』十二月号の短歌欄に掲載されている永田龍雄なる人の短歌も紹介しよう。

桜間金太郎 永田龍雄

七月六日。ゆふぐれちかく金太郎氏の鶺鴒を見る

背楓すきて日ぐれのうすあをきひかりはさしぬ暗き見所に

袴能はすでにあきてゐたりき

金太郎鶺鴒の松明うちふるや火の粉とびちるおもひせしかも

銀扇、白き円月を描けり

金太郎堀と銀扇をひろぐれば真白き月は浮きにけるかも

金太郎殿しきかもようつそみの汗のしづくは袴濡らしぬ

たまきはるいのち凝らせば麻ころも濡らして汗のひたにぢむ見ゆ

金太郎鎮みけるはやてりひかる大き舞台の生まなかに今を

金太郎虚空見つむる眼睛にそこちからつよく凝りてたるかも

宵かえで

うす暗き見所にみれば背楓しげれる簾は夏日かげこき

草庭に女童のゐてあそぶ見ゆゆふかげふかき能楽堂の庭

うつそみの身疲れふかし初夏の日のくれぐれに袴能はおへぬ

たぶん昭和十六年の夏の舞台なのであるう、桜間金太郎の袴能についての短歌であるが、このような多くのファンに囲まれていたのが当時の金太郎で、須田画伯もその一人だったわけである。なお、画伯の金太郎にたいする高い評価は、受贈記念講演会の須田寛氏の講演でもふれられていた。以下、須田デッサンに多く描かれていた役者について、その名手ぶりを当時の能評からかんたんに紹介しておこう。

まず、宝生流の野口兼資であるが、以下は坂元雪鳥の昭和六年の『国民新聞』の能評である。

氏は器用な技の人であるとは思はれない。如何にも拙いと感ずる点が、多々あるやうに思ふ。然しそれは技の末に於いてさう感ずるのであつて、能の精神の解釈とか、或は全曲の心持とかいふやうな、根幹的なところに欠陥があるのでは無い。これは氏の謡ひ方が、声は甚だ難渋で唇声の方でありながら、骨組は同流中第一の正しく味のある謡ひ方であるのと同じ消息である。氏はさういふ意味の拙さを持つてゐながら、実に悠然としてブラブラと舞台を歩き廻つてゐる。舞はうといふ気は忘れて、たゞ歩いてゐるとしか思へない事が往々にして見られる。全くボンヤリと突き立つてゐるとしか思へない事も再々である。その姿も均整の取れない場合だけである。それでゐてそこに何とも言へぬ味がにじみ出てゐる。汲めば汲む程津々として尽きない味が出る。

そんなら氏は熱を失つて、古色蒼然たるものになつてゐるかといふと、決してさうで無い。表面こそ悠々寛々としてゐるが、内面には烈々たる熱が燃えてゐる。氏は末技を意としなくなつて、心核のみに専

心集注してゐると見える。時とすると人を馬鹿にしてるやうな態度さへ見える。而してそこに奥底に光る物を、藏してゐるのが仄見える。斯ういへば真正の名人の域に入つてゐるものやうである。然り氏を名人とするに否かではないが、同じ名人といつても万三郎氏が、到るであらうところの境地、六平太氏が開くであらうところの門扉は、恐らく政吉氏が歩みつゝある路上の何處にも見出せない。彼の両氏の味は又全く別天地にあるものと考へる。

ここではさいごに同じ名人のレベルにある梅若万三郎や喜多六平太の芸風と比較されているが、その万三郎については、雪鳥は昭和十二年の『朝日新聞』に過ぎのように評している。

氏は何も考へなくても、身体が舞つてくれる。そしてそれが能の技として、今では最高位に置かれること確実である。それほど氏の身体は、能の良さを浸み込ませてゐる。

研能会で氏の「楊貴妃」を見た。案の如くそれは万三郎といふ、奥氣を全く隠し切つて、直接能楽その物の良さを展開してくれた。

能楽と観客との中間に、演者といふ媒介者があつて、その媒介者が浅薄な自己判断によつて、歪曲して能楽を見せるのが毎度であるが、この「楊貴妃」の如きは、その媒介者が全く能楽その物の、眞実を取次いだもので、少しも不純な分子が無かつたと思ふ。全く無理や逆手が無くて、美しく流れて行つたと思ふ。

何處がどうと拾はれるものでは無く、全部欠る所なきものであつたといふ外は無い。ワキの玉生新氏も良かつた。シテとの連吟の旨さなど憎い位であつた。

喜多六平太についても、坂元雪鳥の昭和九年の『朝日新聞』の能評を紹介する。

喜多会で六平太氏が「実盛」を舞つた。ワキは新氏、囃子川崎、幸金春、地頭は栗谷氏といふ最上の条件が、そろつたためでもあるが、全く感服せしめられた。

前でワキとの問答を淡々とやつて、それで少しも位を損じないのをえらいと思つた。強いて老人ぶる事なく、サラ／＼とやつてのけて、十分に味が出るのだから不思議だ。後の首洗ひの場、クセからキリへの型、別に替の型では無いのだが、全部始めて見る能のやうな、感激と興味とを以て引きつけられた。如何にも強くさはやかにやつてゐながら、確かに老武者であり、華やかに滑らかにやつて若々しくならず、終始感心し通してあつた。

こんな高級な芸術品を、僅々数百の人が見たゞけで、何等形の上に残らないのは、惜しくて堪らない。能が完全に映画に取られる工夫は、まだつかないだらうか。能を上演ごとに消え去らしむるのは、余りに贅沢だと思ふ。

このような能評に接すると、筆者などは、あらためて昭和前期の能楽界がいかに名手ぞろいであつたかを羨望とともに思いしらされる。金剛右京や金春光太郎や豊島弥左衛門の評価にふれる紙幅がないのが残念だが、須田デッサンが描かれた時期はこのやうな能楽の黄金時代と重なつていたのである。こうした綺麗羅星のやうな名手の舞台に須田画伯が大いに触発されたらうことはまず疑いあるまい。そこに名匠が名手を描くという趣の須田デッサンが生まれたわけである。

五 須田デッサンが描いたもの

三十年という長い期間、画家として能や狂言に向かい続けた須田画伯であるが、六千枚を越えるその膨大なデッサン群はいかなる点を志向していたのであろうか。このような問題は絵画の門外漢である筆者にはもちろん回答不能のことに属すが、その点にふれなくては、須田デッサンの紹介としてははなはだ不十分である。そこで、はなはだ雑駁ながら、須田デッサンが志向していたもの、あるいは描こうとしていたものについての私見を述べておくことにする。その場合、須田画伯が昭和二十一年に創刊された『幽玄』の創刊号に寄せたエッセイ「能の姿」がひとつの手がかりになるのではないかと思う。

このエッセイは二段組四頁のものであるが、その冒頭で、須田画伯は能を描くことのむづかしさをつぎのように述べている。

よく能は静かだからかきよいだらうと聞かれるが、実際は甚だそれに反してゐる。云はば全体これ動ともとれるのである。能が始つたワキが、橋掛りを進んでくる、全く微動だにもしない厳肅さである。しかもあたりを払う儼がある。この厳肅、威圧といふものは、既に既に動の動たるものである。シテが正先へすつくと立つた。これだけでも楽屋で写真師の前に立つ長絹をはね上げて、舞姿を立ちとまつて写してもらつてゐるときとは全く別の動きをもつてゐるのである。ただ舞台へ立つてゐる。それは能の全体の動きの一つの連続した一齣である。この緊張した立姿は、それだけ切り離されるものではなく、あともしきもあるもので、ただ立つてゐるのではない、それは一つの演技である。(中略)我々はこの意味の動きを、かき表はそうと欲するがために、能は静かだとは思へないのである。勿論、この動を静かといふな

らば、その静かは所謂「動中静在り」といったもので、ただの静止といふやうな静とは違つたものである。今は写真も進歩したが以前の能楽面報などに出る能舞台の写真は皆この静止状態の、楽屋的な肖像写真に他ならないのであつて、能中の姿とは全く別個のものであつたといはなければならぬ。

これはただ単に能中に於ける立つたまゝの姿についていつたに過ぎないが、これが歩き出しても、早舞になつても、能中の人物たることに変りはない。たゞ動作に緩急の変化があるために、かく方は、その迎接に奔命することになるのは勿論である。たゞ立つ姿に動があるといったが、その意味に於いての動中に更に静、動が起つてくるわけで、この動中の動は、能舞台外の動とは別物である。こゝにこの動が、即ち能姿として生きるのである。能への目は凡てこの観点に立つてゐる。

このエッセイはこのあと、能の所作がかならずしも文句と一体になつていないことを指摘して、能には「外す芸術」という側面があるとしたうえで、動きのある能を描く場合にも、画家の筆は実際の役者の動きから遅れるが、その遅れを記憶で補つて、一つの能の動きとしてまとめるところに、絵画としての表現が生まれることを述べ、さらに能衣装と能面について述べたあと、

能の動作は日常、我々の行ふそのものとは違ふ。然し我々の行動の最も深き印象をそのまゝに表はさうとしてゐる。そこに能が生れてゐる。その能の示す行動が我々の生活に根ざす限りに於て能の存在は消へ去らないであらう。能の世界に於て我々はこの意味での能の姿をみつめてゐるのである。

と述べて、このエッセイは結ばれている。

これを要するに、日常的には存在しない、能における「動中の静と動」を的確に把握して描く、というのが須田画伯が能・狂言のデッサンにおいてめざしていたものであったように思われる。須田画伯がもつとも留意したこの点は、たしかに能という演劇の演技のもつとも中核的な側面をいかにも画家らしい感覚で的確に言い当てていると筆者は思う。いうまでもなく、それは能の動きが舞踊的だということに起因するのであるが、そのような須田画伯のねらいは、現に本稿にかかげたデッサンのそれぞれにいかんなく実現されていると筆者は思う。寄贈されたデッサンの整理をしていた筆者は、しばしば一枚のデッサンにそこに描かれた演目をこえて、能そのものの本質とでもいうべきものを感じることがあったが、それは換言すれば、須田デッサンから能の本質のようなものを教えられたということにほかならない、と思っている。

むすび

以上で、須田デッサンと昭和前期の能楽とのかかわりを中心とした筆者の紹介を終えることにするが、さいごに伊丹市立美術館館長の大河内菊雄氏からうかがった須田画伯の絵のある特徴についてのお話しを紹介して、蕪雜な稿を閉じることにする。

それは伊丹市立美術館で須田デッサン展を開催することになって、大河内氏が大学にデッサンを見にこられたときのことである。付属図書館の貴重書室で一枚一枚ていねいにデッサンを見てゆかれた氏は、「ああ、須田さんは手の描き方に自信があったのだ」と、いかにも納得されたように呟かれた。氏によると、須田画伯はゴッホは手の描き方がうまくないという趣

旨のことを何かに書いているそうで、それは須田画伯が手を描くのに自信をもっていたための発言であるのがデッサンを見てわかったというのである。なるほど、いわれてみると、全体的にさらっと描かれているデッサンのなかにあつて、役者の手がていねいに描かれている例が少なくない。さすがに専門家は見るところがちがうものだと感じたのだが、伊丹市立美術館の図録の表紙に、手が印象的に描かれている桜間金太郎の《山姥》が採用されているのは、そのような「発見」があつたからでもある。

なお、平成十四年春の大阪大学での受贈記念講演会や展示、それに続く伊丹市立美術館での企画展のあと、須田デッサンは平成十五年の秋に東京日本橋の白銅鑼^{びやくわ}画廊で催された須田国太郎展でも須田家分が出版されている。また、大阪大学に寄贈された五千枚あまりのデッサンは、現在、大阪大学付属図書館において全デッサンの画像の電子化の計画が進行している。その計画が実現すれば、インターネット上で容易に五千枚あまりの須田デッサンを見ることが可能になる。本デッサンを大阪大学に寄贈された須田寛氏は、このデッサン群が須田芸術の研究や鑑賞のために生かされることを強く希望されていたが、画像の電子化はその須田寛氏の要望にもそうものであり、また須田芸術全体の研究のためにも大きく寄与することになるものと思う。

(本研究科教授)

「須田国太郎 能・狂言デッサン」と父須田国太郎の思い出

須田 寛

ただ今ご紹介をいただきました須田でございます。JR東海のものでございますので、能・狂言とは何の関係もありません(笑)。JR東海というのは、ご高承でしょうけれども、東海道新幹線を経営している会社でございます。正式な名前は「東海旅客鉄道株式会社」と申します。国鉄が昭和六十二年に分割をされて、六つの旅客鉄道会社になりましたけれども、そのひとつで、本社は名古屋にございます。東京から新大阪までの新幹線、これは全部JR東海でございますが、そのほかに米原から熱海までの東海道線その他八線区、名古屋付近ないしは静岡付近の鉄道を経営している会社でございます。お見知りおきをいただきますと同時に、なるべく新幹線をご利用いただきますよう、よろしくお願いしたいと思います(笑)。

今日は私の父のために、こんな盛大な会合を催していただいてたいへん光栄に存じます。皆様方に喜んでいただければ、父もさぞかし喜んでいらっしゃると思います。時間をいただきましたので、家族から見た父について簡単に申し上げて賁を果たしたいと思っております。

画家としてデビューするまで

私の父は、明治二十四年の生まれでございますけれども、画家としてデビューしたのは非常に遅くなっておりまして、昭和九年でございました。

最初は、画家ではなく、普通の大学の美学美術史料を卒業してそのまま大学院に進んでおりましたので、学者になろうと思っていたのだらうと思います。私が小学校へ入る前後、電話番号簿に職業欄というのがありますが、父の職業は「学校講師」と書いてありました。学校の先生ということですね。それで、「父親は学校の先生だよ」というふうに教えられておりましたので、「洋画家です」と父の職業を言うようになりました。は、小学校の高学年、中学校に入ってからだったように思います。おそらく父は自分は学者だと皆に思わせたかったんだらうと思います。それぐらいでございますから、画家としての父というのを私が認識したのはかなりあとのことだと申し上げた方がいいと思います。

最初はそのことで学生生活をしておりまして、大学院に進んで、いろいろ美術史やなんかの講義をあちこちの学校に頼まれて、非常勤講師ではありましたけれどやっておったようであります。外国へ留学しておりますが、それも自分の学問の実践のために絵を学ぶんだと。バロック絵画とかそういうものが専攻だったようでありますから、それでスペインに行っております。ふつうは日本人は大体フランスに行くんだそうですが、父親の場合スペインに行っております。それも、そんなようなことがあったからだろうと思います。



須田寛氏

それで、画家として認められましたのは、昭和七年に東京の資生堂での個展がきっかけでした。この個展も本人は実はあまり乗り気ではなかったと聞きます。どうしてもやれとお勧めいただいた方がいらつしやいます。京都に神坂松濤先生という日本画の先生がいらつしやいますが、父の兄、私から言うとは伯父になります、その方の友人でありまして、「あんなことをしておったのではないつまでたつても絵描きになれない。しかもあのままでは学者としても中途半端になる。どうしても個展をやっ

て世に問うべきだ」というふうに言われまして、昭和七年に東京の資生堂で個展をしたのであります。その前に、さつき原田先生のスライドにございました『発掘』という絵がありますが、あれを日展に出して、落選しているんですね。したがって、非常に自信をなくしていたんだろうと思いますので、個展も非常に嫌だった。むしろやらされたというくらい感じでやったわけです。初日はわずかな人しか見に来なかったそうであります。

それでまあ、しおしおと帰ろうとしたが、その時に二、三の画家の方が見に来られた。里見勝蔵という先生と川口軌外という先生、いずれも独立美術協会の先生です。特に里見先生は京都のご出身だったものですから、まあご関心があったんでしょう。で、「これは面白いじゃないか。独立美術協会の会員に推薦しよう」ということになって、まだ創立もない頃の独立美術協会、これは文展といいますが当時の官展に対応する在野派の会ですね。今の言葉で言いますと、「野党」の美術団体、そんなような政府にどちらかという対抗して作った民間派の展です。その独立美術協会に招聘されて、会員にいただいたのが昭和九年だったと聞いております。

あとでこれも有名になられる先生ですが、小林和作先生という方がいらつしやいますが、あの方も父親よりも四、五歳先輩ですが、たしか同じ時期に招聘されたというふうに聞いております。画家として認められるのはそういう中央美術団体の会員になるというのがひとつの条件でございました。それは昭和九年で、その頃にいろんな美術史や美学の先生をやめておりますので、自分ではここからは画家として立つんだというふうに決意した年が昭和九年だったんだろうと思います。それから、昭和三十二年に病気で倒れておりまして、三十二年以後の制作はほとんど既存の絵に手をいれる程度のことしかやっております。画家としての寿命が非常に短

いわけでありまして、二十三、四年しかありません。絵の数が少ないというのはいくつかのことがございます。父親の絵は非常に高いという人がございますが、これは絵が少ないからでございますから(笑)、当然、需要供給の原則ではこれは高くなるのかもしれませんが。



記念講演会 会場風景

学者的な方法と能のデッサン

ただ、そこで私が注目したいなと思っておりますのは、父親はそういうふうな学者と画家の道を揺れ動いた人でありますから、絵でも学者のやるようなやりかたをするんですね。学者というのはいろいろなことを研究する。特に科学者なんかの場合は非常に多くの事例を研究して、たいへんなデータを分析して、その中から一定の理論なり、あるいは学問の道に到着するわけですね。非常に基礎的な勉強というか、データ集めというか、そういうふうなものが学者には大事なことだろうと思うのです。父親はそのやりかたです。したがって、徹底的に自分でですね、研究するというか勉強して、その中から自分の画風を見つけていうようなやり方をとっております。正規の美術教育を受けておりませんから、普通の大学を出ているだけです。画家としてはまあ亜流なわけですね。したがって自分で勉強しなきゃいけないというので、その意味の基礎勉強は自分の手で独学でやりました。それが特色だったと思います。非常にスケッチが多いというのは私はそれだったと思います。

この能楽のスケッチでも約五千点から六千点くらい残っておりますけれども、これもそのひとつの例でございます。もうひとつ多いのは動物の絵であります。これは京都の動物園の近くに住んでましたものですから、ほとんど毎日のように時間があると動物園に行つて、小禽舎という小さい小鳥の入っている檻がありますが、あの前に立つて、大変な数の鳥の写生をしております。それから生物学や動物学、そういう書物が非常にたくさんございまして、そういう鳥の生態、動物の生態、解剖図ですね、それを研究して、細かく写し取つたりしております。それから写真週刊誌をたくさん取つておりました。当時の『朝日グラフ』だとか、そういうふう

なものがありましたけれども、その中から自分で必要なものはみんな切り抜くんですね。特にそれは動物の生息を写真に撮ったもの、そういうものを非常にたくさん自分で切り抜いてファイルを作っておりました。いつのまにかどこかへ散逸してしまいましたけれども、なんでそういうことをしているのかと聞いたら、これは絵の材料だと、絵の勉強材料だと言ってうんですね。

能画についても私はそうだったと思います。で、何で能を選んだかということなんですが、自分が謡曲を三十年くらい稽古しておりましたから非常に興味があつたということです。したがって能を見たりする機会も多かったと思うのですが、能に行くかどうかという動作がこれから演じられるかということが自分である程度分かっているんですね。そうすると、それを予期して写生することができるといことがあつたのだと思います。したがって、見所というのは分かっておつた。あの能画のスケッチを見ておりますと、演者の動きを非常に細かくとらえるように努力しております。それはどういうふうに動きが入るか前もって分かっておりますから、あらかじめ心の中で準備をしていて、それをばあつと自分で描くというか、もう本当に目にもとらぬ早業で描いているような絵が多いんです。スケッチブック一冊を演能一番で全部使い切るくらいですから、それはささっと動いているだけのようなものを連続写真みたいに十枚くらいページをめくりながら描いているんですね、やわらかい鉛筆で。驚くほどのスピードで描いておりましたけれども、それは見所が分かっていたからだと思います。そういう意味で、見所が分かっているものなかで、実際の動きというものを正確に描写をして、それをスケッチの上に残すということをやるには能は一番彼にとつてはおそらくやりやすい対象ではなかったのかなと、こんなふうに思います。それが能のスケッチの非常に多かった理由でござい

ます。

金剛能楽堂の思い出

私は中学に入るようになりましてから、一緒に見に行かないかと能に連れてもらったことがあります。最初見にいきましたのは昭和二十年の一月二十八日の金剛流の《羽衣》でございました。確かこのリストの中にはいつていると思います。なぜ覚えてるかという、私の誕生日だから覚えてるんです(笑)。それから、昭和二十年というと、空襲がそろそろ日常化したところで、今日は空襲がないといいがなあと思いつつ行ったので覚えてるんです。その時に脇正面のかぶりつき、一番最前列のところで描くんです。いつもそこだつて言うんです。当時の京都の金剛能楽堂の正面には一人の常連がいるんです。これは村田五兵衛さんといまして、京都でかなり有名な商売をなさっている方です。この方は写生ではありません、能を見るのが好きなんです。その能楽堂での能は必ず正面の階級がありまして、あの真ん前のところで座って見るんですね。これはもう指定席だということです。で、うちの父親はなぜ脇正面かというと脇正面のほうが動作を見るには便利だと言っていました。しかし、もう正面に先客がいるから(笑)、あそこに座れないから(笑)、しょうがないから脇正面に座ってそう言っているんだろうと僕は思いましたけれども、それくらいの常連が正面におられましてですね、私の父親は脇正面にいる。いつ行ってもその二人がいるんですね。村田さんというかたは戦後も相当に長いこと、いつも同じところにおられました。そして、こちらの私の父の近くには時々上村松園先生なんかが来て描いておられたという話ですが、私はそれは存じません。

武智鉄二のこと

能面で特に私が印象に残っておりますのは、戦時中のそんな時期でもまだ能が行われていたということですね。金剛流だけは能楽堂が残っておりますので、終戦に近いうちまで能を続けております。ここにまいっておりますスケッチの中にもありますが、昭和二十年の三月、四月、五月、六月、七月、もう終戦直前まで毎月何回かの能が金剛能楽堂で演じられております。これは日本の能楽史上特筆すべきことだと思います。私はそれを見る機会があったので非常に印象に残っているんですけども、武智鉄二という方がおられました。これは鉄工所を経営していた家の方だと聞いておりますけれども、演劇評論家としてむしろ有名になられた。大変能のお好きな方です。その方が私財をなげうって、能の火を消してはならないというので、ほとんどあらゆる定期能など能楽が出来なくなった戦争の真っ最中に、空襲警報が鳴るような時期に、自分の私財をなげうって金剛能楽堂で能の会をつくられました。

あんまり特定の会になっちゃいけないというので、毎回名前を変えていたと思います。假会とか断絃会とか。能を開くたびにつける会の名前です。断絃会というのは長く使っておったようです。それで無料ですね、自分で私財をなげうってるわけです。で、能を見に来る常連を招待してくれる。うちの父親も招待されて、私もついてまいりました。前の日に大阪が空襲で焼けて空が真っ黒になって、京都でも、そういうときでも能が行われて、夜帰るときに夕日がもう実に気持ちの悪いような、コ罗纳みたいに見えていたのをはつきり覚えておりますけれども、そんな日にでも能がおこなわれました。なぜ行われたかという点、年配の役者は兵隊に取られませんから。能の有名な金剛殿こんがうだまさんとか、金春光太郎こんはるひさたろうさんというのは当時

七十近い年齢のかたでしたから、兵隊に行かれないとおられたということですね。もうひとつは、そういった年配の囃子方の方や演者の方々が疎開をして、東京や大阪で戦禍をうけて京都に来ておられたもんですから、京都に有名な方が集まったんだらうと思います。大変有名な方々の能をたくさん見る機会がありました。

狂言も同じでした。ただし、当時もうすでに今の茂山千作さんとか千之丞さんは兵隊に取られましたから、おられませんでしたが、相当な有名な方々の能を見ることができた。囃子方でも、当時の目録を見ますと大変な人が出ておりました。それを毎月とにかくやったわけです。武智鉄二さんには毀誉褒貶がありますが、あの能楽の火を消さずに終戦の月まで、毎月とにかく私財をなげうってやったということは、私はやっぱり日本の文化史上で、特筆すべきことだと思います。そういった記録も私の父親の絵の中に入っております。

デッサンにそえられた貴重な番組

父は比較的几帳面な人でしたから、もちろん全部ではございませんが、スケッチブックの表紙に必ず当日の能の番組が添えてあるんですね。みんなに配られるいわゆる番組です。プログラムですね、今の言葉で言うところ、その中に、戦争中のものは謄写版で刷ったガリ版刷りの、きわめて汚い紙の、ぼろぼろになったような紙のものが中に入っております。それが昭和三、四年からずっと後まで、ないのもありますけれども残っております。誰かに聞きましたらむしろそっちのほうが貴重だっていうんですね。絵よりも(笑)。誰がどういう能をいつやって、どういうふうな囃子方がついたかというのとはなかなか記録にないそうです。うちの父親のものはそれがついている。したがってそれをむしろ集めたほうがですね、能の研究

にも役立つんじゃないかと思うんですけども、それくらい描っており
ました。大変な人が戦争中あるいはその後京都で能を演じたんだなあ
ということが分かります。まあ、そんなところもひとつの見所かなあ
と思うのであります。私は、あくまでやっぱり父親は自分の、そういうた
能の動きを描写することによって、そういう大きな人の動きあるいは人
の流れ、そういうものを自分で絵の上に写すためにはどういうポイント
があるのかということをも自分で学びたかったんじゃないかというふうに
思います。そんな感じをもちながら私はずっと、そうですね大学に入る
くらいまでですから昭和二十四、五年くらいまで、ずっとその金剛能楽
堂の脇正面に行ってつきあっておりました。

私は臨曲をやりませんし、能の知識はございませんが、今でも能を見る
と非常に懐かしい。ほとんどの能を見ることができましたので、本当に当
時のことを考えると感無量なものがございます。さつき原田先生が父親が
能の油絵をかいたのは少ないとおっしゃいましたけれども、私は自分の勉
強、資料、研究のためにスケッチをしたという感じが強いので、必ずしも
能の絵をかこうとは思ったのではなかったんじゃないかと思えます。それ
から、さつきも言われましたけれども、驚の絵の中で、狂言師の足のしつ
かりした動きのところを描写している能画が出ていますとおっしゃいた
けれども、たとえばああいふふうなものにヒントを得て、動物園にも行っ
てですね、鳥の生態を見ながら狂言師の足とくつつけてですね、描いたん
じやないかなあというようにも思います(笑)。要するに、何でも実証的な
データの分析の上に立った上でものをやるということについてはどちらか
というと学者の手法に近かったんじゃないかなと、こんなふうに思いなが
ら能の絵を今改めて見ているような次第でございます。

大阪大学への寄贈のこと

この絵が私の家に大量にあることに気がつきましたのは、父親が死んだ
あとであります。父親が死んだときに私はもう就職しておりましてので、
京都の奥家にはおりませんでした。私は兄弟がおりませんので母親だけが
残ったわけですが、母親と母親の妹の叔母が京都の家に住んでおり
ました。それで、とてもじゃないがそういうものの整理ができないもので
すから、当時京都大学をご卒業になってまもないころだったと思いますけ
れども、原田平作先生がたまたま美術館にお勤めになっておられるとい
うので、原田先生が私どもの家へお通いいただくようなことで、私の母親や
叔母と一緒にその遺作をいろいろの整理をして、分類整理をしていただい
たということ聞いております。

原田先生にはお世話になって、あれを保存できたのは原田先生のおかげ
かもしれません。そして、それを梱包にしたものが約二十包みくらいござ
いまして、京都の私の家の土蔵の二階にあげてありました。土蔵と申しま
しても温気が多い、それと非常に保存状態が悪いわけです。それからねず
みがいるわけありますから、土蔵の中はもうほこりだらけのようなもの
です。したがって、このままでおいたのではどうにもならないなという感
じがいたしましたことと、たまたま母親が死に、そして叔母が死んだもの
ですから京都の家を守る人がおりません。したがって、私が時々風入れに
行くだけでありますから、保存がいよいよ悪くなる。このままであれば
万一何かあったら大変だということで、何とかしなきゃいけない。父親は
絵というものは自分の私財として、売ったり買ったりするべきものでは
ないと、生活の糧として最小限度のものはそうせざるを得ないが、あと
はこれは公的機関ないしは美術館等に寄付すべきものであると言ってお

りました。それを口癖のように言っておりましたので、ああこれは公的機関に寄付すべきものなんだなあと私は思っておりました。叔母が亡くなって京都の家を守る人がいなくなったのが三年程前でございまして、いよいよなんとかしなければいけない。それで、さっきご紹介いただきましたよう植藤芳一君と中学校同級生で、ご懇意にしていたいておりました。彼が高名な能楽ないしは演劇評論家になられたことを知っておりましたので、彼にどうしたものだろうかと相談をいたしました。

私は最初は、各流派の家元、ないしはその流派の有名な能楽師のかたがたの演能が全部入っておりますから、能の家元にあげたらどうかと思っていたんです。しかし、そうなりますと、あれをバラバラにばらすことになりますので大変難しい。二流とか三流の流派の演能がある場合、一冊になっていますけれども、これをいちいち引つ張り出してこれは誰のだということ进行分类するというのも實際上できないということが分かりましてですね、これらをまとめてどこかに持つて行ったほうがいいというのが植藤君の助言でございました。どこにするか考えてほしいといくつか考えてもらった中で、いろいろありましたけれども、結果的に彼がアドバイスをしてくれましたのは、彼が本学の講師をして、本学にご縁があった。ここには演劇と能の研究室があつて、これは全国でも高いレベルのものだろうというふうに聞きました。ここならば、これが研究資料として十分役に立つことができるんじゃないかと。それからまたま新しい建物も出来ていて、収蔵する収蔵庫ですね、そういうものも完備しているから大阪大学がいいんじゃないかなということをお言ってくれました。たまたま大阪大学でずっと頭に浮かびましたのが、このコレクションを整理していただきました、原田先生が大阪大学の教授をなさっていて、当時はもう名誉教授になっておられましたけれども、大阪大学にたいへんご縁のある先生だと。そうす

ると、いろいろ先生に整理していただいたご恩に報いることにも若干なるのかなあとという感じもいたしましたので、それではひとつ大阪大学にお願いしたいということで、天野先生をご紹介いただきました。

ところがこれまた、ねずみの糞がいっぱいついたですね(笑)、黒い塊みたいなものを持ってきたら大変ですから、何とかもういっぺん梱包をはずして、どんなものがあるのか整理する必要があるということになりました。おとしだったと思いますけれども、天野先生をご紹介いただいて、天野先生と植藤君と、それから大学院の学生さん二人くらい来ていただきました。そして私どものうちで整理を半日かかってやつていただいて、リストを作つて、そして天野先生のご子息の運転する車でですね、この大阪大学へ搬送していただいたわけでありました。こちらへ持つてきてからまたいろいろ分類整理をしていただいて、収蔵庫におさめていただいたというのが経緯でございまして。たまたまその時に、大学院の学生さんで、あの中にも出てくる狂言の先代茂山忠三郎先生のお孫さんがいらつしやるということをお聞きましてですね、いろいろご縁があるもんだなあと感心したわけでございます。そんなこともありまして、ここに収蔵していただくことになった次第でございまして。

したがって、もちろんこれは研究資料として寄贈申し上げたわけでございますから、どのようにお使いいただいてもいいし、先程お話がございましたように今度博物館がおできになるようでありますので、そこでもご展示いただければ結構でございますが、出来るだけ多くの人の目に触れるように、また多くの方々のお役に立つようにお使いいただければ父親もたいへん喜んでいらっしゃると思います。

画家としての須田国太郎

私が見る父親の須田国太郎という人間は画家としてどんな人間であったのだろうかということを一言で紹介しておきたいと思えます。私は二つのものの中を揺れ動いた人だと思えます。それには三つの面があると思えます。一つは、学者になろうか画家、芸術家になろうかということに非常に悩んでその二つの間を揺れ動く心境の中にいたということがまずあると思えます。二番目に、今度は西洋の画風、それから東洋の画風、そのふたつがなぜ違った方向に発展してきているんだらうか、今どうしてそういうふうな流れがあるんだらうかと。どうもその東洋の絵と日本の絵というものを自分の頭の中に描きながら、その東洋風の画風と西洋風の画風の間を揺れ動きながら、何かその接点のようなものを自分でつかみたいなというふうに思った画家ではなかったかというのが二点目であります。三点目に、これは先程もお話でございましたが、明かるいものと暗いもの、明と暗ですね、そういういろいろなもののコントラストの上に絵というのは成り立っているんだと言います。したがってその明と暗のコントラストのなかに、どこに一致点、調和点を見つけてそこに自分の精神が集中できるか、それを自分が見つけ出す、それが自分の画風を作るんだということを私に言っていた記憶がございます。ただ、彼はそれを追い求めて、一所懸命それを努力して、ある程度のところまで行っただけでありましょうけれど、結局自分で完成できなかったと私は思います。しかし、その両者の揺れ動くものの中から、自分のスタンスをはっきり持とうという努力をする中から、彼の芸術作品に対するひとつのエネルギーのようなものが出てきていたんだではないか、今思うとそんな感じがいたします。

若干敷衍して申し上げますと、学者になろうか絵描きになろうかほんと

に迷ったそうであります。先程もお話がありましたけれども、油絵の絵描きというのはですね、西洋かぶれの非常にキザなものだっというふうに明治時代の日本の古い商家では思われていたそうであります。父親の家は古い近江商人の、まあ没落せる近江商人ですけれども、没落せる近江商人の末裔でございますから、古いきたりの中にある古い家の出身であります。したがって、そういう西洋画の絵描きになるということに対してはなんとなく家庭での抵抗とかあったんだらうと思えます。したがって、普通の大学にいく能力は持っておりましたから、第三高等学校から、京都大学へ入りましてですね、哲学科を選んでいるということは、学者になろうとしたからだと思えます。そこで美学美術史の専攻に入って、それも大学院まで進んでおりますから、やっぱりこれも学者になろうとしたのだと思うのです。ある時期はほとんど、彼の気持ちは学者に向いていた時期があると思えます。

今思いますと、彼はそういうことは一言も言いませんでしたが、いろいろなことをそこで考えたんだらうと思うのです。あの大学は講座制というのがありましてですね、美学美術史の講座というのは教授が一人しかいないのです。その下に助教授がおられる。そして定員が教授一、助教授一人です。雖か一人教授になれば、いくらまわりに優秀な人がいてもその教授が定年になるまでは教授になれないのですね。だから、自分は駄目だとたぶん思ったんだと思います。彼の前後に彼より優秀な人がたぶんいたと思います。だからその某が教授になれば俺は教授になれないということは大学にいれば分かるはずですよ。したがって、どうもこれは飯は食えないなあと思っただらうと思えます。教えに行っておりましたのも京都大学ではなくて、はじめのうちは和歌山高等商業学校とかに行っておりました、あとで京都大学で非常勤の講師でございすが美学美術史の講師をしてお

りましたけれども、まあ専任の助教・教授の道には行けなかったんだろうと思います。もう席がふさがっていたのだらうと思います。そこではかすべきやということになって、小さいときから趣味で絵をかくていると、その絵もまあ割合に比較的うまいと言われているというふうに自分で思っていたんだと思います。

ただおかしなものでありまして、小学校の成績は絵の成績が一番悪いんですけれども(笑)、とにかく自分では絵に自信があつて、余技であつたものがいつのまにか次第に本業に移っていく。その迷う過程が大学から大学院にいたつて、あつたんだろうと思うのです。それでスペインに行きました。これも彼は学問の実践のために行つたと言つておられますけれども、もうその時に自分は絵描きにならうということを決めて、行つたんだろうと思います。現にスペインに行つて何をしたかというと、大学へ勉強に行つたのではなくて、毎日マドリードのプラド美術館に行つて、はしこを借りて、ゴヤとか、グレコとかベラスケスとかそういう人々の画の模写ばかりしていたのですから。したがつてそういうふうな意味あいではもう完全に絵の勉強に彼は行つたんだろうと思います。ただ、どこかにまだ学者からふつ切れないものがあつたんだろうとは思いますが、帰つてきて文展に出して、落選したわけですね。それで自信がなくなつてまた迷つたんだと思います。

そのころの彼の画風というのは真つ赤な絵をかいいたりですね、異様な振れがあります。これは精神的にやつぱり葛藤していたんだろうと思います。それで個展の勧めがあつて、やむを得ずその個展の勧めに応じて、独立美術協会への道が開けます。そしたら彼は一萬千里にここで絵描きにならうとするわけがあります。それから先の彼のコースは全部絵描きのコースです。ただ悲しいことには、正規の美術教育を受けておりません。しかも在

野派の団体です。したがつて、日本の絵画界というのは、洋画でもやはり官展中心型、しかも年功序列型。しかも東京の美術学校。特に日本画では一部京都の絵専、絵画専門学校、こういうところを出た人が関を作つておりましてですね、在野の美術協会しか入れてもらえない。そこでもやはりそういった専門教育を受けた人が幅を利かせておりますから、あくまでアウトサイダーで、まあ父親は年も取つておりましたから、自分ではたいへん悩みながら絵の道を進んだのだらうと思います。

しかし、そのかわりに彼は時間がかかつて悩んでいるだけに、いろいろな修行をそこでしたと思います。画家になる基礎はやはり学問的なものも大事です。美学美術史の基礎があつたということは彼の画業にはプラスだったと思いますが、そういう迷いの中でやつぱり彼のエネルギーがそこにひとつ蓄積されたんじゃないかと思ひます。

東洋と西洋、明と暗

二番目でございますけれども、先程の西洋と東洋であります。自分はその東洋の絵も勉強したいということ、彼は日本画を勉強いたしました。小林和作先生——自分よりちよつと先輩なんです——について日本画を教へていただいたり、京都の神坂松涛先生に日本画を教へていただいたりしておりました。これも学校教育ではありませんが、そういうふうに個人的に習つておりました。先程、原田先生が墨絵をたくさん描いていたとおつしやられましたけれども、それもその実践だったと思います。もつとも、絵の具がもう不足していたのと、絵の具を買うお金がなかったのも原因だったんじゃないかと思ひます。墨絵は安くかけますから(笑)。それもあつたようですが、少なくともそういう日本画の素養というのは相当自分で身につけていたようでありまして、中国の南画を勉強しております。

南面のコレクション等を相当持っておりました。そういうふうな東洋の絵を自分で勉強する。それから、西洋に行く前に一番最初に行ったところは実はインドなんです。シルクロードなんです。それは西洋美術が日本に来るその過程に関心があったのだらうと思います。インドに相当長く滞在しておりますから。したがって、そういう日本画の素養があったで、東洋、西洋画を自分で学んで来た。それを自分の頭のなかで何か接点を見つけようとしたんだと思います。

日本の油絵というのはともすれば西洋の油絵の模倣になっていると、自分はそれだけではやりたくない、何か自分の油絵を作りたいんだということを書いておりました。それが西洋と東洋の接点を求めて彼が悩んだ、ひとつの作家としての悩みだと思えます。この悩みは彼は最後まで解決し得なかったと思いますけれども、あちらに振れこちらに振れしながら、何か独自の画境のようなものを作り出そうとしたところで倒れたのです。

もうひとつ、明と暗であります。絵というのはあくまでそういういろいろなもののコントラストの上にあるんだと、したがって明るいものをばあつと際立たせる、先程の『鶴』の絵の背景のように、あの絵のように際立たせる、あるいは大の赤い目のように、そして前景なり背景なり黒いものを今度は描写してその明暗のコントラストの中に絵を組み立てるというのが、『鶴』でも『犬』でもいろんな絵の中に出てくる共通の手法でございます。これもやはりその明と暗というふたつのものの対立の中から自分で接点を見つける、接点を見つける中でのいろいろな画境が出来る、そういうものが彼の自分の道ではなかったかなと思っております。そのいずれも画家としても学者としても、まあおそらく彼は中途半端だと思っていたでありましょう。それから東洋と西洋についても、東洋と西洋の画風的一致なんてそう簡単にできるわけありませんから、それに近づいたかもしれない

いけれども、完成は出来なかった。明と暗のコントラストも、彼にとつては永遠の課題だったと思います。したがって、彼はそういうふうな気持ちで病に倒れたわけでありました。

最後まで言っておりますのは、自分はスペインにもう一度行きたいと。画家として修行をするためにスペインに行きたい。今度は学者としてではなく画家としていきたいということを最後まで言っております。結局、それは果たし得なかったわけでございますけれども、やっぱりそのへんに彼の心境が出ています。したがって、そういう揺れ動く画境、彼が追求して近くまでは行っただけでも到達し得なかったもの、それを私は父親の絵を見て下さる皆様の中に完結していただければなあと、念ずること切なるものがあります。私は東海道新幹線でございすから(笑)、いくらやってもそれはできないわけでございますので、ぜひ皆様のように絵画にご関心のあるかたにそれをお願いしたい。またここにおられる諸先生方にそういうことをお願いしながら、私は父親の画業を皆様の心の中で完結していただければ、父親は喜ぶと思います。

自由な画風への願い

父親は昭和三十六年の十二月に亡くなっております。したがって、もう四十年経過しておりますが、父親が死にましてから、むしろ逆に評価をしていただいているというふうにも私は思います。もっと生きていううちに評価していただければ、私どもはもったいない暮らしができたのでありますけれども(笑)、ちよつと遅かったわけで残念でございますけれども、亡くなって四十年、大勢の皆様にごうやっとお集まりをいただいて、父親の絵を偲んでいただく、あるいは父親の画業を偲んでいただけることができることは本当に光栄でございます。どうかひとつ、先ほど申し上げましたよ

うに、これからもそのようなことについてさらにご関心をもっていただいて、ご支援をいただけますように。

それからもうひとつお願いしたいのは、これから画家を志す後進の方がたくさんいらつしやると思います。そういう方々に対して、やはり皆様方が温かい目を持って見ていただくということであろうかと思います。そして画家に派閥とか学閥とかそういうものは私は一切無用だと思っています。うちの父親は派閥や学閥からいけば、日曜画家か大家の書生くらいにしかない人だったのです。それが何とか画家として認められるようになったのは、先ほどのいろいろな揺れ動く努力もあったと思いますけれども、世の中が幸いしたんです。戦後いろいろな秩序がひっくり返りましてね、かつてないことが美術界にも起こりました。そういう偶然に幸いされてここまでこれたんだらうと思います。今はまた秩序が安定しておりますからまだ絵の世界にも学閥とか画塾閥とか、いろいろなものが残っているように思います。そういうふうなことがなくなるように、自由な画風というものが自由に生かされるような、そんな世の中が来ることを期待したいと思っております。口はばつたいことを東海道新幹線が申し上げて恐縮でございますけれども(笑)、以上で私の父親の思い出をかねまして、また皆様のご支援へのお礼を申し上げて、私のお話を終わりたいと思います。ありがとうございます。

(J R東海会長)

対談 ■ 須田 寛
ごんどうよしやす
榎藤芳一

榎藤 ありがとうございます。大変いい話だったものですから、これ以上蛇足を付け加えることはないんですけど、ちょっとしゃべれということなので。結局、僕がお聞きしたかったことはすでに全部ですね、天野先生や原田先生やご本人がおっしゃったと思いますが、ひとつ聞きたかったのは、なぜ能を選ばれたかということなんです。かなり早い時期から謡は習っておられた。

須田 学生時代から習っていたそうですね。大正時代ですね、高等学校へ入るか入らないかくらいから。

榎藤 はじめ誰に習ったか聞こうと思っていたのですが、それはすでにおっしゃられましたね。

須田 高岡鶴三郎先生。

榎藤 そのあと金剛先生に習っておられた。それは謡だけですね。立つほうは、習ってなかったの。

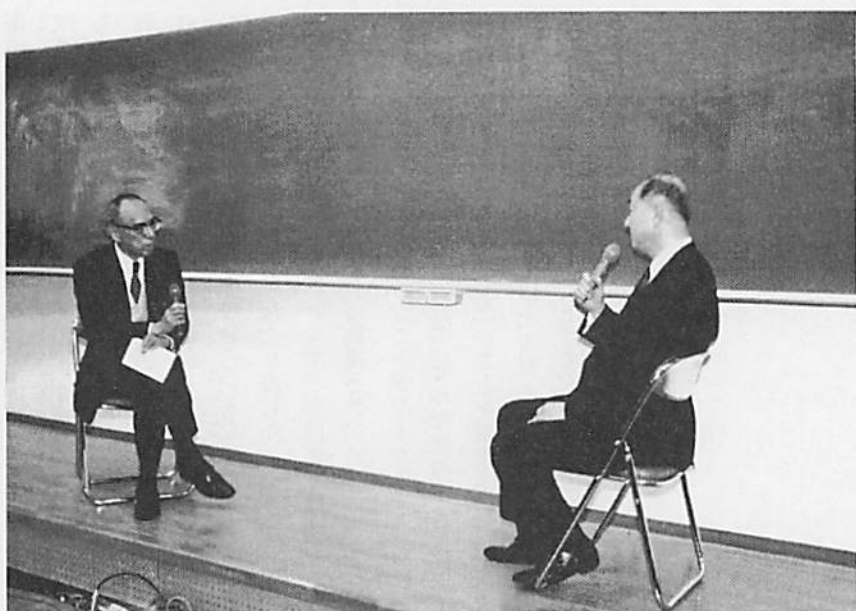
須田 それはやってませぬね。素謡だけです。さっきの写真も素謡のときのもんです。あんまり体操の得意な人やなかった。教練の成績も悪い(笑)。

榎藤 お母さんも謡を習っておられたんやね。

須田 母は鼓もやっていました。謡は親世流です。片山博通先生についてやってみましたけれど。

榎藤 あなたにはおすすめにならなかった。

須田 すすめはしませんでした。能力がないと思ったんでしょな(笑)。



権藤芳一氏との対談

権藤 それからもうひとつお聞きしようと思ったのは、なぜ脇正面を選ばれたかということですね。これはやっぱり、動きを見る、勉強する、まさに分析というか研究というか、能をただ鑑賞するんじゃないに、スケッチするには脇のほうがいいという。

須田 ぼくらに言っていたのはね、「脇のほうが脇がみえる」というか、「正面はよそ行きの姿しか見えん」と。「したがって、動きを描写するには脇のほうがいい」と、こう言っていましたけれど、正面に先客がいるわけだから(笑)、そこに行けないことはわかってるから、そういつて照れかくしてたんじやないのかなあ。

権藤 それからいわゆる伝統芸能の歌舞伎とか文楽にはあんまり興味はなかったの。

須田 歌舞伎には関心ありましたね。歌舞伎は見に行っていたようですよ。わりあい役者さんの名前も知っていたしね。

権藤 非常に早いスピードでスケッチをなさるわけなんだけれども、それには特別な鉛筆とか。

須田 鉛筆はね、ドイツに行ったところ、買ってきたっていう妙な繰り出し鉛筆があるんですよ。天秤みたいなマークのついた鉛筆です。今もありますよ、ドイツには。独特のこの太い芯でね、6Bくらいの鉛筆ですね、日本で言うところ。外国でそれを大量に買ってきてたんだけど、戦争中ではなくなったでしょ。それから4Bの鉛筆使っていました。鉛筆は柔らかい鉛筆で、汚い紙ではすぐ鉛筆がだめになるって言うて怒ってましたけどね。ただね、能の絵は描くのは早いけれども、油絵を描くのはものすごく遅い。油絵はね、月に一枚できるかどうかですよ。やっぱり苦闘してるんですよ、油絵かくときには、能はそこにあるものを写す。しかし油絵はね、自分の絵作するために、キャンバスと苦闘しているわけです。時々描いている最中に、息遣いが荒くなつて、肩で息している。しゃべつたつて返事しない。僕は後ろにいましたからずっと。親父の背中を見て育っているから、きいても返事しない、一切。それで時々つかれたように、パンパン

パンパンとキャンパスに絵の具ぶついたりね、黒い布で消しよるわけですよ。それでまた最初からかき起こすわけですよ。だからなんぼでも時間かかるのよ。気に入らん絵があるとそうなるし、画想が湧くまでね、なんぼでも消して繰り返し、消して繰り返すでしょ。ひとつの油絵作るのにひと月からふた月かかる。あれでは採算取れんわね(笑)。だけど、能はスケッチですから、ばばあーっと、これはもう一冊一時間くらいでかいていましたね。

榎藤 能役者では誰がお好きだったのですか。

須田 金剛の家の蔵先生、それと金春光太郎さん、それからね桜間金太郎さん、野口兼資さん。それは尊敬していました。これは名人じやと。声のよくない人が多いですわな(笑)。だから、声のない人のほうが技が綺麗に見えるのかなあと僕は思っていましたけどね。そのような人々でしたね、尊敬していたのは。絶えずその人々の能は見に行っていましたね。

榎藤 能を見に行つて、家へ帰つてから能の話とかはなさっていましたか。

須田 そんな話はしまへんね。絵をかいている時はしゃべつても何しても知らん顔ですよ。もう画面に集中しておるわけですな。それで帰つてからぜんぜん違う話しますよ。うなぎ飯がうまいとかね、そんな話ですわ、帰つたら。普通の話ですよ。

榎藤 能の話は。

須田 能の話もしない。

榎藤 それはさつきあなたがおっしゃったように研究とかそういうような。須田 僕は、勉強のためにかいておつたんだと思います。だから能の絵を描こうというよりも勉強のために描いておつた。あの能の油絵も、誰かに頼まれたんやなかったかな、と思います。

榎藤 「大原御幸」。

須田 ええ、そう思います。

榎藤 それから日記がありましたね。

須田 はい。

榎藤 あれは一部分だけが発表されていますが、ずっと書いておられるの。須田 全部くわしく書いてある。一部分にしてくれんと困るわけですよ。

私が病氣したとか、そんなことばかり書いてあるですから。私を叱つたとか、家内と画室のことで喧嘩とか書いてあるんですから。

榎藤 お亡くなりになるまで書いてましたね。こんなにありましたよ。

須田 病氣になるまで書いてましたね。こんなにありましたよ。

榎藤 はあ。

須田 京都の美術館に岡部三郎という先生がいたんですよ。その先生がそれを持ち帰つて分析をしましてね、日記から親父の画業を振り返るような著書があるんです。その時も私はお願いして、あまり変なところは書かないようにしてくださいと頼みました。

榎藤 たとえば片山博太郎のですね結婚式の日に配る扇の絵をかいたとか、そういうのは。

須田 そういうことも毎日書いてある。はっきりおぼえてはいませんが。

榎藤 能楽の資料とか武智さんの断絃会の話とかですね、いっぱいぜひ。

須田 あつたらお目にかけます。ただまあ公表ははばかりる点がたくさんあるんですよ。

榎藤 そうでしようなあ。

須田 プライバシーですからね。だけど画業を調べるにはいいんでしょうね。

榎藤 そういふところに戦争にたいする考え方とか。

須田 それはありますね。それと自分が戦争の終わり頃からずっと健康を害してましたのでね、自分の体の不調を訴えるところが非常にたくさんあります。あれ見てると、年取るとどういうふうに健康状態を自分で感じるのかよく分かりますね。だが必ずしも戦争反対ではなかったね。国策に協力せなあかんと言ったから。戦争中にね、従軍画家ていうのがありますな。藤田嗣治先生なんかみなそれで戦争画を描いてるわけでしょ。それに行かんかっていう話が二回くらい来たことがあります。断ってます。それは戦争反対でなしに、従軍画家と言うても前線に出るわけやないでしょ。われわれは後方において話を聞くくらいがせいぜいで、あるいは戦場の景色くらい写生して帰ってあとは写真をもとにして描く。藤田さんが飛行機に乗るとるわけやないから、ハワイ・マレー沖海戦といったって、写真を見て描いているわけですよ。それでは自分は絵は描けんと。自分は写真では絵は描けんのじやと。したがって、私はそういう絵を描くことは能力的には出来ないから、行ってもお役に立たないと。それ以外のことならお役に立つけれど、これはだめですと言って。その代わり、戦争で戦死した人の遺族、遺族の生活状態を絵にして展覧会をしようという、軍事保護院というのがありましてね、そういう催しには積極的に参加して、石川県だか山の奥まで、そういう戦死者の遺族のところの絵を描きにいったりしておりました。自分で写真を見て描くしかないような絵は自分は絶対描けないというふうに言っていましたね。ただ、戦争に関連して描いた絵がひとつあります。「学徒出陣壮行の図」っていう、京都大学の学生が学徒出陣で行く壮行式の分列行進の絵がありますね。これが唯一の戦争画です。あともうひとつはね、町内会長をやっていたものでね、戦争

中に戦意高揚の漫画を描けって言われたんですよ(笑)。それを、防火用の倉庫に貼り付ける。それを水彩画でかきましてね。ルーズベルトとチャーチルが苦い顔をしているような漫画を描きましたよ。これは二度と描きたくない絵だって言って描いてましたけど。それどころかへ消えちゃったですなあ。誰か持ってたっちゃったんですよ(笑)。そのふたつが唯一の例外ですね。そういう理由で描かなかった。しかし戦争反対とか賛成とかという次元ではなかったと思います。

榎藤 あくまでも、絵描きとしての良心。

須田 そういう写真で写すようなのは自分は出来ないということは言っていましたね。

榎藤 もっとおうかがいしたいことはいっぱいあるわけなんです、だいぶ時間がおしておりますのでこのへんで。

展示室を飛び出した「懷徳堂」——大阪大学懷徳堂センターの活動——

湯 浅 邦 弘

はじめに

平成十四年（二〇〇二）三月、懷徳堂センターは本格的な活動を開始した。文学研究科本館四階、（財）懷徳堂記念会事務局に隣接する約三十㎡の展示室において、懷徳堂や文学研究科関係資料の「展示室」情報資産管理センター」としての役割を果たしている。

主な活動の第一は、懷徳堂文庫資料を中心とする常設展示である。総点数五万点に及ぶ懷徳堂文庫資料は、現在、大阪大学附属図書館新館の貴重図書室に収蔵されているが、本センターでは、これら貴重資料のパネル、タペストリー、レプリカを展示するほか、「バーチャル懷徳堂」「懷徳堂文庫電子図書目録」「電子懷徳堂考」などの電子展示を行っている。この内、現在保有している貴重資料パネル（縦×横各七十㎝）は、次の二十四枚である（口絵参照）。

「懷徳堂幅」

「中井竹山肖像画」

「宋六君子図（邵子・周子・張子・程伯子・程叔子・司馬子）」

「入徳門聯」

「懷徳堂瓦当拓本」

「紙製深衣」

「旧懷徳堂平面図」

「中井履軒肖像画」

「天図（木製・紙製）」

「潮図」

「方図」

「越俎弄筆」

「聖賢廟」

「北極至赤道圖中分一半見界總星図（履軒「天体図解」のうち）」

「南極至赤道圖中分一半見界總星図（履軒「天体図解」のうち）」

「華胥国門額」

「華胥国物語版本」

「華胥国物語」

本センターは、水曜日を除く平日に開放しており、これまで、学内の教職員・学生はもとより、オープンキャンパス・文学部見学会の際に訪れた高校生、国内の研究者、図書館・資料館関係者、海外（中国・韓国）の研究者、

教育評価・学位授与機構委員などの見学や視察があり、センターの専門委員や非常勤職員がその都度説明を行っている。また、平成十四年(二〇〇二)三月には、特別展「須田国太郎 能・狂言デッサン展」が行われた(この詳細については、本誌掲載の関係論考参照)。

さらに、本センターの活動の特色としては、学内外へのイベントへの参加や出張展示・解説が挙げられよう。平成十四年(二〇〇二)三月以降での、そうした活動としては、SE MBA博(船場博)(平成十四年三月)、大阪大学いちろう祭(平成十四年四月、平成十五年四月)、大阪大学総合芸術博物館設立記念展(平成十四年十月)、扇町総合高等学校での授業(同十一月)、懷徳堂秋季講座(同十一月)、大阪大学文学部・文学研究科同窓会(平成十五年五月)、大阪大学総合芸術博物館第二回企画展(平成十五年十月)、懷徳堂アーカイブ講座(平成十五年十一月)などへの出展がある。

これらの概要については、本センターHP(<http://www.let.osaka-u.ac.jp/kaiteku/>)でも簡単な紹介をしているが、本稿では、この内の船場博、扇町総合高等学校での授業、大阪大学総合芸術博物館設立記念展について詳細な報告を行いたい。

一、SE MBA博2002

平成十四年(二〇〇二)三月十六日、大阪船場の街おこしイベント「SE MBA博2002」(船場博実行委員会主催)が開催された。「船場と人とビジネスの新しい出会い」「船場を知る。船場を考える。船場で交流する」と題し、大阪市中央区本町の大阪産業会館を会場に関係機関・団体・企業などが様々な工夫を凝らした展示を行った。

大阪大学大学院文学研究科では、(財)懷徳堂記念会との共同出展として、

「適塾・懷徳堂ブース」を設営し、懷徳堂について次のような展示を行った。

・貴重資料パネル「懷徳堂幅」「中井竹山像」「木製天図」「旧懷徳堂平面図」の計四枚

・懷徳堂CGタペストリー「玄関部」「講堂内部」の計二枚

・三十二インチ大型液晶モニタによる「バーチャル懷徳堂(懷徳堂CG)」「懷徳堂データベース」

・二十一インチモニタによる「懷徳堂文庫電子図書目録」

この展示を担当したのは、懷徳堂センターの専門委員である筆者、および(財)懷徳堂記念会事務局主事田辺敏子氏である。また、展示解説の協力をお願いしたのは、懷徳堂デジタルコンテンツの制作に御協力いただいている凸版印刷株式会社の高橋孝輔・森田教子の両氏、大阪大学関係者の佐野大介氏、大村由紀子氏の両名である。

これは、懷徳堂デジタルコンテンツが懷徳堂センターを飛び出した最初のケースとなった。当日の来場者は、非公式ではあるが、主催者側の概算では、千七百名とのことであった。

この展示については、後日、担当者および協力者による反省会が行われ、それを取りまとめた自己評価は次の通りである。

(一)事前準備段階

〈よかったと思われた点〉

・主催者側から提供された会場図面に基づき、ブースのレイアウト図面を予め作成した。これにより、ある程度ブーシイメージを持つことができた。

〈改善すべきと思われた点〉

- ・ 設営や展示の担当者による現場の事前確認がやはり必要であった。コンセントの位置・数、パネルを掲げるフックの状況など、詳細情報等については事前に会場で確認しておく方が良かった。

(二) イベント当日

〈よかったと思われた点〉

- ・ 「懷徳堂」を目的としない来場者に対しても、興味・関心を喚起することができた。

- ・ 他のブースと比較しても、視覚的な演出効果が大きかった。

- ・ 「バーチャル懷徳堂」による体験コーナーを設けるなど、参加型の展示を実現できた。

- ・ 「懷徳堂物語」(バーチャル懷徳堂に登載されている影絵と音声による懷徳堂創立の物語)をプレゼンテーションすることによって、効果的な導入となった。映像・音声系コンテンツはインパクトが大きい。

- ・ 落ち着いた知的な雰囲気となごやかさが同居したブースの印象であった。

- ・ イベントそのものの「アーカイブ活動(ビデオ・デジカメによる記録)」ができた。

- ・ 大阪大学出版会の書籍販売との連動ができた。

- ・ 懷徳堂記念会「懷徳堂絵葉書」プレゼントによって、コミュニケーションのきっかけ作りができた。

〈改善すべきと思われた点〉

- ・ パンフレットなど各種ツールの配置や設置方法の工夫。もう少し目に付きやすく取りやすい方法を検討すべきであった。

- ・ ブースへの来場者の意見、感想を吸い上げる仕組みが必要。アンケートの実施、感想ノートなどの準備によって、そこから得られた情報をもとに、来場者を次のステップへつなげることができる。

- ・ 「懷徳堂」と「適塾」における展示バランスをとる。今回は、適塾の担当者に参加せず、懷徳堂ブースが適塾関係パネルも併設するという内容であったが、今後は「適塾」との関係にも留意すべきである。

- ・ 現状の「懷徳堂データベース」には必ず説明員が必要であるが、「興味がある」という程度の来場者には少しハードルが高いため、「懷徳堂物語」などの他にも、入門者向けツールを開発する必要がある。

- ・ 現状の「懷徳堂データベース」においても、研究者のみではなく、一般の「生活や関心事に密接に関連した項目からの検索」を実現するユーザインタフェースの工夫ができると思われる。この点については、コンテンツのインターネット公開時にも再検討を要する。

- ・ 「過去の懷徳堂」を振り返るばかりではなく、現在の活動状況や運営の窮状などを訴えることも必要である。

(三) 来場者との対応で知り得た情報

- ・ 「重建懷徳堂」関係者との新たな出会いと発見があった。

- ・ 扇町総合高等学校教諭から、「懷徳堂関連講義」の依頼があった。展示からそのような内容を感じていただくことができた。この授業の詳細については本稿の次章参照。

- ・ 近接ブースで展示されていた「心学明誠舎」など、大阪の学塾との連携、ネットワーク化によるアピールの可能性を感じることができた。将来、大阪学塾シンポジウム・フォーラムなどが実現できれば、新たな可能性が広がるかもしれない。

(四)その他の感想など

- ・適塾と懷徳堂の名前だけは知っていても、それらと大阪大学あるいは大阪大学文学研究科との関係について充分認識されていないことが分かった。
- ・適塾記念会・懷徳堂記念会は、時には、共催の形で事業を展開し、大阪大学との関係をアピールする必要がある。
- ・その際には、大阪大学創立七十周年記念事業で制作したデジタルコンテンツが有効に活用できる。
- ・年配の方は昔を懐かしみ、若い層は感心し、子どもたちは「バーチャル懷徳堂」で楽しんでいたように感じられた。
- ・六十代以上の方々は第二次世界大戦時の思い出と共に懷徳堂について語られていた。大阪空襲の話を変えながら適塾・懷徳堂について語られた方もおられた。
- ・今回のイベントの成果を、できるだけ早く内外に媒体を通じてアピールすべきだと感じた。
- ・広報活動に活用できるような安価な懷徳堂GOODSを制作する必要があると感じた。

二、扇町総合高等学校での授業

右の船場博の当日、ある方との出会いがあった。大阪市立扇町総合高等学校の渾野紀代子教諭である。渾野先生は、懷徳堂の展示資料の内、特にデジタルコンテンツに興味を示され、これらを使用した授業を扇町総合高校で実践していただけないかと遠慮がちに話された。高校生を対象とする授業については、あまり経験がなく、こちらのためらいがちであっ

たが、お引受けする旨お伝えした。

その後、同校との打ち合わせを経て、平成十四年(二〇〇二)十一月一日、大阪市立扇町総合高等学校において、懷徳堂データベース、懷徳堂関係ホームページを活用した授業「大阪学・懷徳堂」を行うこととなった。総合科目「大阪文化系列」の一環として開講されたもので、二コマ連続の授業を二年生三十八名(男子十二名、女子二十六名)が受講した。以下、その概要について報告する。

授業目的

①大阪学術の源流「適塾」「懷徳堂」成立の社会背景、特色などの概要を講義する。

②大坂町人と懷徳堂との関係などに見られる、大阪文化と教育との関係について解説する。

③マルチメディア技術による適塾・懷徳堂の顕彰について紹介する。

④インターネットを活用した懷徳堂情報収集の方法について実習する。

時間

一時間目…十三時十五分～十四時五分

二時間目…十四時十五分～十五時五分

内容

一時間目(普通教室)

①自己紹介と授業概要の説明

②適塾……緒方洪庵の号「適齋」の意味についての説明

③懷徳堂……堂名「懷徳」の意味についての説明、および懷徳堂成立の背景と特色についての説明

④懷徳堂デジタルコンテンツの紹介……大阪大学創立七十周年記念「知の光彩」(DVD版)の上映。

二時間目(情報教室)

①各端末からインターネットにより「懷徳堂」を検索。

②「懷徳堂記念会HP」により、懷徳堂の歴史・重要人物の確認

③大阪大学附属図書館HPの「電子展示で見る懷徳堂」により、「懷徳堂幅」「入徳門聯」「宝暦八年定」「旧懷徳堂平面図」「木製天図」「越俎弄筆」

「重建懷徳堂」を解説。

右のように、一時間目は、筆者(授業者)が懷徳堂の歴史や意義について、適塾や現在の大阪大学との関係にも触れながら概説し、また、大阪大学創立七十周年記念事業として公開された「知の光彩・未来へ」を上映した。

休憩を挟んで二時間目は同校の情報教室に場所を移し、インターネットを活用した授業を試みた。この教室は、全員に端末が配備された優れた環境にあり、まずは、サーチエンジンによって「懷徳堂」をキーワードとして検索、トップに表示された「懷徳堂記念会」のホームページにアクセスさせた。このページによって、懷徳堂の歴史や重要人物の解説を閲覧した後、懷徳堂記念会による現在の活動状況についても確認させた。

次に、大阪大学附属図書館ホームページの「電子展示」のコーナーに移り、懷徳堂の貴重資料、『論孟首章講義』『天図』『越俎弄筆』などを閲覧させた。これらの資料は一時間目に概説したもので、それをホームページの画像によって確認させることで、一層の興味を持たせることができ

た。

この授業に関しては、大学の通常の講義とは異なる授業形態のため、筆者(授業者)にとっても収穫が多かった反面、いくつかの課題も残った。以下にそれらをまとめる。

・一時間目の授業では、同校のDVDプレーヤーとこちらが用意したDVD-ROMとの相性が悪く、投影に手間取った。機器の操作については、同校の情報担当の先生と何度も電話で打ち合わせをしたが、やはり、授業前に機器の確認をする必要があった。

・二時間目の授業では、パソコンの習熟度の違いにより、操作に遅速が生じた。そのため、全員が同一画面を展開するまでに少し時間を要し、操作の早い生徒は、解説を聞く前に次の画面へと操作を進めてしまうという問題があった。この点については、授業中、同校の先生二名の協力を得て、机間巡視を行い、操作に手間取る生徒を支援したが、なお不十分であった。こうした授業については、いわゆるTAの活用が不可欠であると感じられた。

・画面を閲覧しつつ、要点をノートしている生徒もいたが、ほとんどの生徒は、画像を閲覧することに興味が集中し、記録をとることをしていなかった。この点については、予め「書き込みシート」などを授業者側が準備し、適宜、要点を書き取らせるような工夫が必要であると感じた。

・懷徳堂記念会HPの「お問い合わせ」意見・感想の「送信フォーム」を使って、授業の感想をEメール送信してもらう計画を立てていたが、同校のセキュリティの問題から、送信は認めていないとのことである。しなかった。インターネット環境についても、予め充分確認をしておく必要を感じた。

三、大阪大学総合学術博物館設立記念展

前記の船場博では、かつて懷徳堂が位置した「船場」での開催であったため、来場者の懷徳堂の認知度は比較的高いと感じられた。しかし一方では、先の反省点にある通り、その懷徳堂と適塾、あるいは懷徳堂と大阪大学との関係については、ほとんど理解が及んでいないという実感を得た。適塾と懷徳堂とを二つの源流と位置づける大阪大学にとって、これは重大な問題である。しかし、そうした観点から高く評価できる試みが開催された。大阪大学総合学術博物館設立記念展がそれである。

平成十四年(二〇〇二)十月十二日(二十日)、大阪大学総合学術博物館の設立記念展が大阪歴史博物館・NHK大阪アトリウムで開催された。

この記念展では、学内公募による研究成果を大阪放送会館一階アトリウムに特設した各ブースで公開したが、懷徳堂は大阪大学の源流として特に重視され、大阪放送会館一階アトリウムと大阪歴史博物館二階展示室において、同時に懷徳堂関係の展示解説が行われることとなったのである。

「バーチャル懷徳堂」(大阪放送会館一階アトリウム)

まずアトリウムでは、「いま阪大で何が?—人間・地球・物質」と題した特別展の中央ブースに、「バーチャル懷徳堂」を出展した。

これは、平成十三年(二〇〇一)に創立七十周年を迎えた大阪大学が、阪大の源流としての懷徳堂を最新のマルチメディア技術によって顕彰したデジタルコンテンツである。江戸時代の学舎をコンピュータグラフィックスによってバーチャル空間に再現した「バーチャル懷徳堂」、貴重資料約百点を解説した「懷徳堂データベース」、高精細ハイビジョン作品「知

の光彩・未来へ」などがマルチメディアコンテンツ実行委員会によって制作され、平成十三年五月の記念式典で公開された。アトリウムではこれらを展示し、大阪大学文学研究科および懷徳堂センターのスタッフが実演解説を行った。

なお、懷徳堂関係デジタルコンテンツについては、その後も拡充作業が継続されており、平成十四年(二〇〇二)六月には懷徳堂文庫電子図書目録 <http://kaitokdo.jp/> が公開され、翌年には懷徳堂研究の基礎資料西村天因の『懷徳堂考』を電子化した「電子懷徳堂考」が制作された。また、「懷徳堂データベース」がその内容を大幅に拡充して、平成十五年末にインターネットで公開された。

「懷徳堂資料展」(大阪歴史博物館二階展示室)

歴史博物館二階展示室では、懷徳堂の一次資料三十点および貴重資料パネル十点が展示された。ここでは、文学研究科および(財)懷徳堂記念会関係者の協力を得て、展示解説を行った。

この資料展では、懷徳堂精神の魅力を三つの角度から紹介することとした。第一は、懷徳堂の学者を描いた人物像、あるいは学者が遺した書画などである。「中井竹山像」「中井履軒像」のほか、懷徳堂初代学主三宅石庵の「多言書幅」、初期懷徳堂の助教を務め、懷徳堂の学術的基礎を築いた五井蘭洲の「列庵先生書幅」、第二代学主中井梵庵の「墨菊図」、中井藍江筆、中井蕉園賛の「騎馬武者図」などがこれに該当する。

第二は、懷徳堂の運営に関わる資料。懷徳堂は大坂の有力町人によって運営された異色の学問所であった。現在の学則にあたる定書や定約、義金簿、建立記録などからは、懷徳堂の経営の実態が明らかになる。懷徳堂の

創建から幕府官許を得るまでの経緯を中井竹山が記した「学問所建立記録」、安永九年（一七八〇）から天明四年（一七八四）に至る五年間の義金積立と使途、貸付や利息などを記録した「懷徳堂義金簿」、貴賤・貧富を問わず学生は同輩であると規定した「宝暦八年定」などがこれに当たる。

第三は、懷徳堂の学者たちによる研究成果。当時の主な学問であった経学（中国の儒教文献に関する研究）を中心に、文学、歴史、天文学、医学など、合理的な実証主義にもとづくさまざまな業績が光彩を放つ。享保十一年（一七二六）の三宅石庵の記念講義（『論語』『孟子』の各首）を筆記した『論孟首章講義』、萩生徂徠の『論語微』を批判した中井竹山の『非微』、中井竹山が時の老中松平定信に呈上した経世策『草茅危言』、中井履軒の医学書『越俎弄筆』ならびに木製天体模型「天図」などである。

この内、履軒の『越俎弄筆』は杉田玄白らによる『解体新書』完成の前年（安永二年、一七七三）に成書されたものであり、日本の医学史という観点からも注目される。また天図は、天動説と地動説とを折衷する宇宙観を表しており、その門下から地動説を唱えた山片蟠桃が出ていることも首肯できる。いずれも、いわゆる「漢学」の枠を遙かに越えるもので、懷徳堂の豊かな知的世界を示すものとして注目される。

なお、この展示には、総合学術博物館によって、ブースを解説した大型パネル四枚、および展示資料ごとの解説パネルが作製されることになり、筆者はその画像を準備し、文面を執筆した。その際、懷徳堂センター井上了氏、元懷徳堂記念会囑託研究員竹腰礼子氏の協力を得た。各パネルの文面（原文はいずれも横書き）は次の通りである。

大型パネル一「バーチャル適塾・懷徳堂」

（画像……適塾塾生データベース、懷徳堂CG玄関部）

昭和六年（一九三一）に開学した大阪大学には、二つの源流があります。享保九年（一七二四）に大坂の有力町人によって設立された学問所・懷徳堂、そして、天保九年（一八三八）に蘭学者・緒方洪庵によって創設された適塾です。いずれも、大阪文化や日本の歴史に大きな役割を果たしました。平成十三年（二〇〇二）に創立七十周年を迎えた大阪大学では、この二つの源流を最新のマルチメディア技術によって顕彰する事業を行いました。それが、「バーチャル適塾・懷徳堂」です。それぞれの学舎をコンピュータグラフィックスによってバーチャル空間に再現し、塾生や貴重資料のデータベースを作成するとともに、高精細ハイビジョン作品「知の光彩 未来へ」を公開しました。「バーチャル適塾・懷徳堂」は、情報ネットワークの拠点であった両学舎の精神を継承し、世界に向けて積極的な情報発信を行い、知の交流拠点としての役割を果たして行きます。

大型パネル二「懷徳堂——浪華の学問所——」

（写真……懷徳堂旧址碑、文久三年大坂地図）

「懷徳堂」は、三宅石庵（一六六五—一七三〇）の学徳を慕う大坂の有力商人たち（五同志）によって、享保九年（一七二四）に設立された学問所です。享保十一年（一七二六）には幕府から「大坂学問所」として官許を受け、明治二年（一八六九）年の廃校まで約百四十年間、大坂における学問の中心として機能し続けました。懷徳堂は、幕府より官許を受け、租税免除などの特権も享受しましたが、基本的には「五同志」の出資および資産運用に依拠し、いわば「半官半民」の学問所として運営されました。

懷徳堂においては、学生は貴賤貧富を問わず同輩であるとされ、またその学問は朱子学を中心としつつも諸学の長所をも取り入れる柔軟なものでした。富永仲基・山片蟠桃・草間直方など、特徴ある町人学者が懷徳堂門下より輩出したことも注目されます。

大型パネル三「懷徳堂資料展の御案内」

懷徳堂は、江戸時代の後半、約百四十年にわたって、近世日本の学術史と商道徳の育成に大きな影響を与えてきました。その知的遺産は、(財)懷徳堂記念会を経て、現在、大阪大学の「懷徳堂文庫」に継承されています。この資料展では、自由で批判精神に充ちた懷徳堂の魅力を御紹介します。資料は、三つの性格に大別されます。第一は、懷徳堂の学者を描いた人物像、あるいは学者が遺した書画など。ここでは、書や画といったリアルな資料から懷徳堂のイメージを体感することができます。第二は、懷徳堂の運営に関わる資料。懷徳堂は大坂の有力町人によって運営された異色の学問所でした。現在の学則にあたる定書や定約、義金簿、建立記録などからは、懷徳堂の経営の実態が明らかになります。第三は、懷徳堂の学者たちによる研究成果。当時の主な学問であった經学(中国の儒教文献に関する研究)を中心に、文学、歴史、天文学、医学など、合理的な実証主義にもとづくさまざまな業績が光彩を放っています。

大型パネル四「(財)懷徳堂記念会のあゆみ」

(写真……重建懷徳堂)

懷徳堂が閉校して四十年を経たころ、大阪の文化遺産としての懷徳堂を再評価する気運が高まりました。このなかから生まれたのが、明治四三年

(一九一〇)に設立された懷徳堂記念会です。その発起人は西村天四ら著名な文化人や住友吉左右衛門ほか有力な経済人など、当時の大阪を代表する名士たちでした。記念会は大正五年(一九一六)に大阪府立博物館内(現在の中央区本町橋)に学校を建設し、一流の講師陣を招いて多彩な講義や講演を行うようになります。これらは誰でもがほとんど無料で聴講することができ、戦災で焼失するまでの三十年間、「市民の大学」として大阪の人びとに親しまれました。その運営経費は財界からの寄附に拠っており、今日のメセナ活動の先駆けといえます。記念会は第二次大戦後も大阪大学との協力の下、各種の講座や見学会などを催しており、現在も懷徳堂顕彰事業の中心的な役割を担っています。記念会の活動は、市民の自立性と学問の開放性という懷徳堂精神を近代に受け継いだものといえます。

展示資料解説パネル

各展示資料の解説パネルは次の通りである。

懷徳堂記願

中井竹山筆

中井竹山(懷徳堂第四代学主)が、懷徳堂の創建から焼失・再建に至るまでの経緯を漢文で記したもの。懷徳堂は、寛政四年(一七九二)の大火により焼失し、寛政八年(一七九六)に再建された。この再建に際して竹山は「懷徳堂記」を撰し、自ら木額に書き付けて講堂南側の壁面に掲げた。

懷徳堂幅

三宅石庵筆

三宅石庵が「懷徳堂」三字を大書した書幅。石庵は懷徳堂の初代学主。

彼の弟子たちが師の講場として設立したのが懷徳堂である。石庵は能書家としても世評が高かったが、本幅でも雄渾な筆致を見せている。この書は、初め額に仕立て、懷徳堂の講堂に掲げてあったという。

宋六君子図

薛閔月・中井藍江筆、頼春水賛

周敦頤・程頤・程頤・張載・司馬光・邵雍の六人の宋学者を描いた絵。賛は、朱子の賛を頼春水(頼山陽の父)が写したものの。賛は寛政九年(一七九七)に書かれており、おそらくは前年の懷徳堂再建を祝って作成され、中井竹山(懷徳堂第四代学主)に贈られたものと思われる。

多言書幅

三宅石庵筆

三宅石庵の書幅。「黙坐して神(精神)を澄ます」とは、朱子学でいうところの静坐(厳肅な身体姿勢を保ち高度な意識集中に入る修養法)を指すと思われる。道教の坐忘や仏教の座禪から影響を受けたとせられがちなので、石庵はわざわざ「玄(道教)」や「禪」ではないと断っている。

列庵先生書幅

五井蘭州筆

列庵先生双幅と呼ばれる書軸のうち一。それぞれに六言詩が書かれている。列庵とは五井蘭州(懷徳堂助教)の別号。「岫雲の出るは意有るに非ず、機を忘るる鳥も亦た帰るを知る。話す莫かれ城中の旧事を、君と同じく是れ荷衣なり。」とある。

墨菊図

泉治筆、中井覺庵賛

菊を描いた墨絵。享保三年(一七一八)に泉治なる者が醉余に描いたものであるというが、筆者の泉治については不詳。泉治の没後、この絵が虫損によって失われるのを恐れた中井覺庵(懷徳堂第二代学主)が、寛保四年(一七四四)に軸装し、賛を書き入れたものである。

中井竹山像

中井藍江筆、中井竹山賛

中井竹山(懷徳堂第四代学主)の講義姿を描いた肖像画。寛政十年(一七九八)正月に懷徳堂内で書画の競作が催された際、中井藍江が描いたもの。竹山六十九歳の晩年の姿である。藍江は薛閔月の門人。竹山はかなりの肥満体であったと伝えられており、この肖像画もふつくと丸みを帯びて描かれている。

中井履軒像

筆者未詳

中井履軒(竹山の弟)の肖像画。描線の状況から、下絵段階のものと考えられる。履軒の容貌は魁秀で、両眼も大きかったと伝えられているが、この肖像画はその特徴によく合致する。なお、本資料の上部には、履軒の墓誌銘(履軒の高弟であった三村崑山の撰)が貼付されている。

鴻池稻荷碑拓本

中井履軒筆

中井履軒(竹山の弟)が撰した碑文の拓本。履軒の弟子にあたる鴻池宗家の山中氏から、鴻池稻荷再建に際して碑文作成の依頼があり、天明四年(一

七八四)に作成された。鴻池家の発祥の地が伊丹であること、酒造業によつて家業の隆盛に至つた経緯などが詳細に記されている。

騎馬武者圖

中井藍江筆、中井蕉園賛

源義家が、後三年の役に際し、飛雁の乱を見て伏兵を察知したという故事を描いたもの。義家は、大江匡房に兵学を学んだ。中井蕉園(竹山の子)の賛は、文武ともに通じた義家を賛賛するとともに、武技のみを偏重して兵学をおろそかにする当今の武士を嘆くものである。

出徳徳堂歌

並河寒泉筆

明治二年(一八六九)、並河寒泉(懷徳堂最後の教授)が廃校となつた懷徳堂を去る際、門に貼り付けた和歌。「百余り四十路四とせのふみの宿けふを限りと見かへりていづ(百四十四年間続いた学舎も今日限りだと見返りながら出る)」。原本は門から剥がされて現存せず、後に同文を書いたものが軸装され伝えられている。

解師伐袁圖

岩崎象外筆、中井履軒賛

母親を猿(袁侯)に殺された蟹(解)が、臼(麻石)や牛糞(牛糞)など率いて仇討ちを行う場面を描いたもの。中井履軒(竹山の弟)による賛は、『春秋左氏伝』を模倣した格調高い文体で記されており、それがかえつて物語の滑稽味を増している。

学問所建立記録

中井竹山筆

懷徳堂の創建から幕府より官許を受けるまでの経緯を中井竹山が記録した文書。宝暦八年(一七五八)、中井寛庵(懷徳堂第二代学主)が死去し、三宅春楼が学主に、竹山が学校預り人に就任した際に作成された。末尾には、創設以来の支援メンバーやその後継者らが証人として署名している。

懷徳堂定約付記

三宅春楼筆

宝暦八年(一七五八)に三宅春楼が学主に就任した際、従来の定約に付加された規約。内容としては、従来どおり「四書五経道義の書のみ」を購すべきとしつつ、新たに「医術」「詩賦文章」を非公式に購することを認めるなどしており、懷徳堂における教授内容がやや柔軟となっていることがわかる。

懷徳堂義金簿

筆者不明、中井竹山書き入れ

安永九年(一七八〇)から天明四年(一七八四)に至る五年間の義金積立と使途、貸付や利息などを記録したもの。懷徳堂は、官許学問所として、敷地は幕府から提供されていたが、校舎の普請や運営については、支援者である商人たちが拠出する義金や、その運用利益によって経費を捻出していた。

宝暦八年定 全三条

中井竹山筆

懷徳堂の学則にあたる「定書」は数点が現存するが、なかでも本資料は、

懷徳堂教育のありかたを示す代表的な規定である。第一条には「書生の交わりは、貴賤・貧富を論ぜず同輩たるべきこと」と明記してあり、身分や財力を越えた学問の場での平等が謳われている。

安永七年六月定 全八条

中井竹山筆

懷徳堂内における書生の生活態度に関する規定。だらしない立ち居振る舞いや、無益な雑談・昼寝などは禁じられている。書生は話題や行儀に気を配り、学業に励むことが求められた。懷徳堂内の謹厳な空気をよく伝えており、書生たちはなかなか厳しい学生生活を送っていたように見える。

摂津名所図会(伊藤東涯講義圖)

秋里離島編、竹原春朝斎ほか画

摂津国の名所旧跡を図入りで解説した書物。寛政十年(一七九八)から翌年にかけて刊行された。その第一巻には、含翠堂における伊藤東涯の講義の様子が描かれている。東涯は、伊藤仁斎の子で、懷徳堂の中井笠庵とも交友があった。おそらく懷徳堂でも、このような講義風景が繰り広げられたであろう。

論孟首章講義

三宅石庵口述

懷徳堂が官許を得たことを記念して、享保十一年(一七二六)十月五日に行われた記念講義の筆記録。『論語』『孟子』各々の冒頭章について講じたので、この名がある。過度の「利」を追求せんとする欲望を戒めつつ、仁義の結果として得られる「利」を肯定するなど、町人の学問所にふさわし

い内容である。

非微

中井竹山手稿本

中井竹山の主著。荻生徂徠の『論語徴』を批判する著作。五井蘭州『非物篇』の続編として執筆され、天明四年(一七八四)には『非物篇』とあわせて懷徳堂から刊行された。本書は、『論語徴』の説を引用し、一つ一つ論駁している。既存の権威に屈することのない批判精神が見られるといえよう。

草茅危言

中井竹山手稿本

中井竹山の経世論。天明八年(一七八八)、大坂滞在中であつた松平定信は、竹山を召見し、政務について諮問した。これに応じて献上された意見が『草茅危言』であり、本資料はその草稿本と思われる。老中が市井の儒者に直接諮問するのは異例のことである。『草茅危言』は、後の「寛政の改革」にも多大な影響を与えたとされる。

史記題題

履軒自筆書入本

中井履軒の『史記』注釈書。履軒は、多数の漢籍について精密な注釈を著したが、その大半は、本資料のように、和刻本の余白に自説などを書き入れ、訓点を改めるなどしたものである。本資料は、日本における『史記』注釈の最高峰として高く評価され、滝川亀太郎『史記会注考証』の藍本としても使用された。

中庸錯簡説

中井竹山筆

従来の『中庸』(朱子学の基本文献のひとつ)に錯簡(文章が間違つて前後していること)があるという、懷徳堂独自の学説を述べたもの。三宅石庵が提唱した説を中井竹山が補完した。その基本的な考えは、現代の中国思想研究においても承認され、受け継がれている。

越俎弄筆

中井履軒手稿本

中井履軒の著した医書。全十五葉にわたって人体解剖図が彩色筆写されている。履軒は自然科学にも強い関心を示し、友人の麻田剛立が獣体解剖および人体との対照確認を行おうとするのに立ち会ったという。本資料の成書は安永二年(一七七三)であり、杉田玄白らによる『解体新書』完成の前年であった。

天図(木製)

中井履軒手製

中井履軒が作成した回転式の天体模型。太陽を中心に水星・金星・地球・火星・木星・土星二十八宿(恒星系)が配置されており、太陽を中心とする太陽系の概念が導入されている。しかし回転板の支点は地球にあり、月および太陽は地球を中心に回転するようになっている。天動説と地動説との折衷的なものといえよう。

方図

中井履軒手製

中井履軒手製の宇宙構造図。地球の周囲に「月胞」「日胞」「星胞」「天」が

配置されている。注目されるのは、「天」の外に「是ヨリ外ハ我イマタ往タル事ナキ故シラズ」と記されている点である。「天」の外部を観測によって確認できない以上、安易に結論を出さず未詳のままとする誠実な学問的態度を窺える。

出定後語

富永仲基撰、延享二年(一七四五)刊本

仏教思想の歴史的展開を、「加上説」という仲基独自の理論(後発の学説は先行説より古い起源を自称するという説)によって批判したもの。仲基は三宅石庵の門人。仏教や神道を、信仰の対象ではなく客観的研究の対象とした点は、近世日本における独創的思想であるとして内藤湖南により顕彰された。

「大阪府学教授」印

中井竹山の印章。竹山は懷徳堂を名実ともに幕府公認の官学とすべく尽力した。その志向がよく窺われる印章である。篆刻は前川虚舟による。

「水説」印

中井履軒の印章。玻璃製。「水説」は『孟子』から採った言葉で、履軒の私塾の名でもある。

(上記二印のキャプションで1枚のパネル)

古今通

書写者未詳

五井蘭州による『古今和歌集』注釈。宝暦二(一七五二)四年(一七五二)頃成立。文芸は政治教化に役立つものだ、という儒教的な文学観から、従来は男女の恋歌だと解されてきた歌についても、これは恋愛に仮託したも

のにすぎないとして、その中から人倫や教戒の「真情」を読み取るなどの特徴がある。

『伊勢物語』

五井蘭州手稿本

五井蘭州による『伊勢物語』注釈。宝暦元年（一七五一）成立。『伊勢物語』を、在原業平の手に出る史実と、後人の手に出る虚構とに大別する。また自序には、これを我家の『伊勢物語』として一人娘に読ませるとあり、教育に有益な独自の『伊勢物語』を志向している。単なる注釈をこえた著作だといえよう。

かはしまものかたり

加藤景範著、中井履軒序、中井竹山跋、岩崎象外画

山城国葛野郡川島村の人、儀兵衛の行状を和文で記したもの。明和八年（一七七二）懷徳堂蔵版。儀兵衛は養母に孝養を尽くしたことにより「孝子」として幕府より表彰された。川島村は、竹山の妻の実家（革嶋家）の所在地で、竹山は『孝子儀兵衛記録』を著すなど、積極的な顕彰運動を展開した。

木司令

中井蕉園筆

懷徳堂にて用いられていた桎梏の柄（ひょうしぎ）。授業の開始時刻を告げる合図として用いられた。裏面には「一令で悟り、再令で顧み、三令で聚まり、簡を執つて馳せよ」と記されており、三度に分けて打ち鳴らして、学生たちに徐々に準備を促したものらしい。表面には木槌の痕が残る。

展示状況

これらの資料の展示状況は次頁の通りである。

なお、一階アトリウム、二階展示室において運営・解説を担当したのは、筆者の他、次の方々である。田辺敏子（懷徳堂記念会事務局主事）・竹腰礼子（懷徳堂記念会元囑託研究員）・豊田二郎（大阪大学総合学術博物館助教授）・井上了（文学研究科懷徳堂センター職員）・佐野大介（文学研究科中国哲学研究室助手）・池田光子・前川正名・黒田秀教・上野洋子・志村安智・松田祐樹（以上、中国哲学研究室学生）・大村由紀子（文学研究科中国文学研究室修了生）

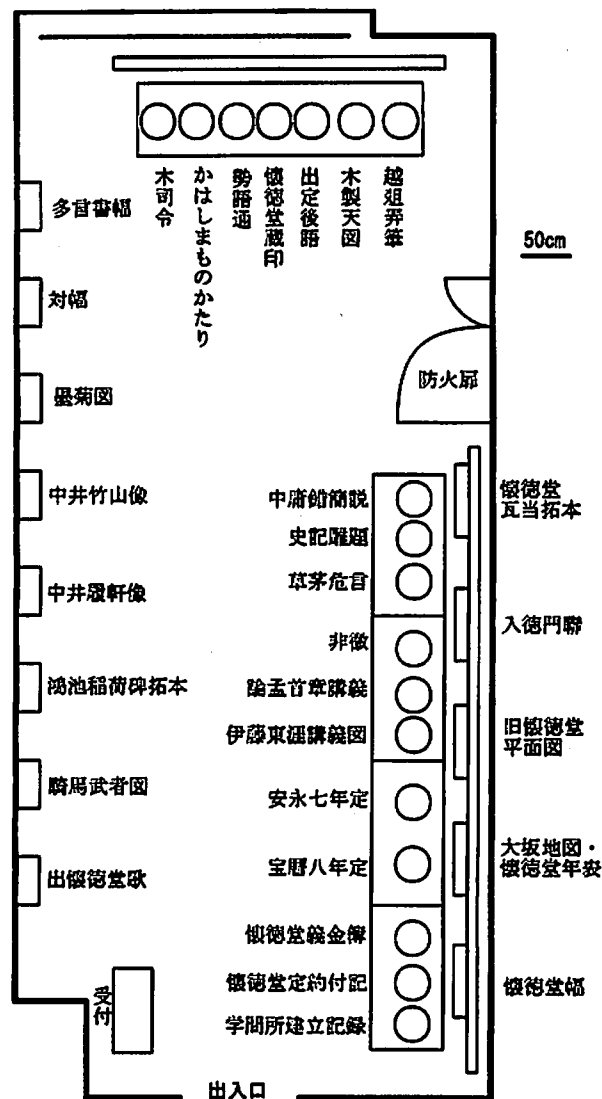
九日間の展示を終えて、スタッフによる反省会が開かれた。同時に二箇所での展示解説を並行して進めるということで当初から様々な課題が懸念されたが、期間中の混乱は特になかった。しかし、改めて次のような問題点・反省点も指摘された。これらの諸点については、今後、同様の展示の際には留意し、改善に努めていきたい。

設備・環境

・一階アトリウムは、基本的にはオープンスペースである。そのため、「バーチャル懷徳堂」の音量の不足が感じられた。午前中のテスト（周囲の人数が少ない時間帯）では良くても、午後に来場者が増え周囲の雑音が増えると、後ろの席までスピーカーの音が届かなかった。音声デバイスプレイとは別系統にし、アンプ&スピーカーシステムを設置すべきであった。

・また、DVDプレイヤーが受付裏の箱の中に収納されていたため、赤外線リモコンによる操作が困難であった。

大阪大学総合学術博物館設立記念展 展示状況 (大阪歴史博物館二階展示室)



・二階展示室は、本来、大阪歴史博物館の会議室とのことであった。そのため、展示室にしては天井が低く、「中井竹山像」など長い軸物の展示という点では、視覚的にやや閉塞感があった。また、空調や遮光の設備が不十分であった。

・計画当初は、本展示室(会議室)防火扉の前にパーテーションを配置できるという説明であったが、後から、防災担当者から配置できないとの指示があり、展示物を減らさざるを得なかった。

・また、貴重資料パネルを直接部屋の壁面に掲示できなかったため、業者

がパーテーション(レンタル)を準備したが、そこに汚れが目立ち、貴重資料パネルを掲示する背景としては極めて劣悪であった。

設営・撤収

・運送業者による徳徳堂資料の扱いが、意外に手荒だった。

・また、最終日の撤収では、展示終了十六時、十七時までに梱包終了の予定であったが、定刻を大幅に遅れて業者が到着(十七時に現地着、梱包開始)したため、撤収作業に手間取り、大阪歴史博物館側に御迷惑をか

けた。

・なお、資料の搬入・設営・撤収等の日程は次の通りであった。十月十日、大阪大学より資料・機材を搬出（業者による移送）、十一日、現地へ搬入（スタッフによる設営）。展示会最終日の二十日、展示終了後に直ちに現地で梱包・搬出（業者による移送）、二十一日に大阪大学で荷開き。

担当者（他ブースの関係）

・一階アトリウムでは計二十二のブースが展示解説を行ったが、他ブースの説明担当者が常駐していない場合があり、懷徳堂担当者が他ブースの説明を求められるという混乱があった。これは、懷徳堂ブースが会場中央に大きなスペースで配置されていたことにもよると思われるが、ブース担当者の管理意識、および担当者同士の連絡を明確にしておく必要がある。

解説・対応

・二階の展示場所が一階のアトリウムと離れていたため、歴博見学のついでに「懷徳堂資料展」を閲覧した来場者には展覧会の趣旨が伝わりにくかった。

・展示解説は、来場者からの質問があれば答えるという方針であったが、入室後、短時間で退室する見学者も多く、定期的に簡単な解説または講演をするなどの方法を取り入れても良かった。

資料の劣化

・今回久々に「懷徳堂幅」を学外展示したが、その表装の劣化が著しいこ

とが判明した。懷徳堂資料の中には、修復しないと今後の展示に耐えないものがある。

・最終日の撤収の際、「安永七年定」の表装（金箔貼の部分）に見慣れない小さな破れが発見された。梱包・運送によるものか、展示中に生じたものか、未詳である。これらを含め、改めて調査を進めたところ、緊急に修復を必要とするものは次の通りである。

・目安として緊急度をA・B・Cの三ランクに区分した。Aは、このままでは資料の劣化が加速する恐れがあるので至急修復を要し、また修復をしなければ今後公開はできないもの。Bは、このままでは公開にやや支障があり、また、木箱に入れるなどの保管状態を改善しなければ今後資料の劣化が進むもの。Cは、現時点では公開自体は可能であるものの、額装する、または木箱に入れるなどの保管状態を改善しなければ今後資料の劣化が進むと懸念されるもの。

【緊急度A】

- ①懷徳堂幅 一幅 表装の劣化による裂け目
- ②中井竹山画像 一幅 紙折れ
- ③入徳門聯 一對 乾燥によるひび割れ、補修時のガムテープ付着
- ④螺鈿算盤 一挺 軸・駒の脱離
- ⑤白鹿洞書院揭示（捲り）一枚 乾燥によるひび割れ、要額装
- ⑥加藤竹里書簡集 二帖 虫損甚大
- ⑦懷徳堂記念会設立趣意書 一面 用紙劣化による剥落甚大
- ⑧蘭洲先生真跡 一帖 折り目裂け、要書帙
- ⑨懷徳堂印（大阪府学教授印）一顆 印柄脱離

- ⑩ 李斯釋山碑 一帖 折り目裂け、虫損甚大、要書帙
- ⑪ 背貝印匣 一匣 乾燥による漆のひび割れ、貝の剥落
- ⑫ 萬年先生緩歩帖 一帖 折り目裂け、要書帙
- ⑬ 襄陽帖 一帖 表紙脱離、要書帙
- ⑭ 道澄寺鐘銘 一帖 表紙脱離、折れ目裂け、虫損甚大、要書帙
- ⑮ 文甯先生碑 一帖 表紙布剥離、折れ目裂け、虫損甚大、要書帙

【緊急度B】

- ⑯ 朱文公大字行書四訓版 四面 湿度変化による反り・歪み、要木箱
- ⑰ 伝中井履軒書屏風 半双 本紙の劣化による裂け目・剥離、要木箱

【緊急度C】

- ⑱ 竹山先生背誦(捲り) 四十八枚 要額装
- ⑲ 石庵・蘭洲二先生張交屏風 四曲一双 要木箱
- ⑳ 竹山履軒諸先生張交屏風 二曲半双 要木箱

なお、ここには具体的書名を逐一列挙はしないが、貴重書籍の内、無帙のものについては、当然「要書帙」「緊急度C」となる。大阪大学全体の取り組みとして、計画的にこれらの修復が進められることを要望したい。

おわりに

以上、本稿では、展示室を飛び出した懷徳堂センターの活動について報告してきた。これらの活動を通じて改めて痛感されたのは、「公開」「体験」を前提とした「調査・研究」「保存・整理」の重要性である。

これまで、大学の附属図書館や資料室は、情報を提供したいが資料はできるだけ良好に保存しておきたい、という矛盾に悩んでいたと言える。その結果、貴重資料については、どちらかと言えば「保存」の方に重点が置かれ、「公開」については、あまり積極的に取り組んでこなかった。

この二律背反を解消する切り札として登場したのが、「電子図書館化」構想であり、その優れた成果の一つが懷徳堂デジタルコンテンツである。大阪大学の場合は、偶然にも、電子化事業が本格化した平成十二年(二〇〇〇)に附属図書館新館が竣工し、翌年、旧館書庫から新館貴重図書室へと懷徳堂文庫の総合移転が行われた。また、平成十三年(二〇〇一)には、大阪大学創立七十周年記念事業の一環として「バーチャル懷徳堂」が制作され、さらに、平成十四年(二〇〇二)には、文学研究科懷徳堂センターにおいて関係コンテンツの常設展示が始まった。

そして、こうした電子化事業を推進する中で、一次資料自体の保存・整理がいかに重要であるかが再認識されたのである。電子情報としての「公開」を前提として、懷徳堂文庫の「調査・研究」「保存・整理」は急速に進展した。そしてまた、その調査・研究の成果が新たな電子情報として整備され、さらに拡充されたコンテンツとして公開されたのである。

平成十五年末には、これまでの懷徳堂デジタルコンテンツを集大成した「WEB懷徳堂」(<http://kaitokudo.jp/>)がインターネットで公開された。懷徳堂センターの活動も、次なる飛躍の段階に入ったと言える。

(本学文学研究科教授、懷徳堂センター専門委員)

『洛汭奚囊』 らくぜいけいのう

—— 中井履軒の京都行

湯城 吉信

はじめに

中井履軒は幽人（世捨て人）と称し自適の生活を送り、後世に歴大な著作を残した。兄竹山とは違い直接懷徳堂の校務に携わることもなく、また仕官の招聘にも応じることがなかったという。その履軒が一度だけ官仕えをしたことがある。明和三年（一七六六）、三十五歳の時から一年間の京都滞在がそれである。

履軒は公家の高辻世長の補佐役として京都に招かれた。高辻世長（後胤長と改名）は、菅原道真の末裔で、代々文章博士を司る家系であった。履軒が招かれたのは、中井家と縁のある京都の革嶋家が高辻家に仕えていた関係によると考えられる。

だが、すでに幽人としての生き方を宣言していた履軒が、どうして京都へ行ったのだろうか。また京都ではどのような一年を過ごしたのだろうか。『懷徳堂考』『中井竹山・中井履軒』など従来の研究からは、この二つの問いに対する十分な答えを見つけ出すことはできない。

一つ目の疑問「どうして京都へ行ったのか」については、私は一言で言えば、履軒がまだ不惑の年に達していなかったからだと考える。その根拠は、『履軒古風』巻二に見える、京都行に先立つ時にある。その紹介は稿を改めたい。本稿では、二つ目の疑問「京都での一年はどのようなだったのか」

を採る資料として、履軒著『洛汭奚囊』の内容を紹介したい。

『洛汭奚囊』の洛汭とは京都の中の意で、奚囊とは詩文を入れる袋の意である。京都行の出発から帰阪までの詩を製作順に並べている。詩であるため、履軒の客観的状況を説明する材料には乏しいが、履軒の心情は如実に表れている。本稿では、百聞は一見に如かずとの謬に基づき、論じるよりも作品をそのまま紹介する形態を取る。ただし、私に解説できない箇所は疑問符（？）をつけている。博雅の士の御教示を仰ぐ。

テキストは、懷徳堂文庫所蔵の履軒手稿本を底本とし、適宜他本を参照した。履軒の詩集『履軒古風』巻二にほぼそのまま収録されているので、それも参照した。

注

- (一) 西村時彦『懷徳堂考』下八四頁。
- (二) 加地伸行編『中井竹山・中井履軒』一九四頁。
- (三) 履軒が幽人と称し、自適の生活を目指したのは、京都行に先立つ。『懷徳堂考』『中井竹山・中井履軒』一八六頁を参照のこと。

『洛納奚囊』全詩

一、丙戌仲冬、將北入京、飲別諸友(丙戌仲冬、將に北のかた京に入らんとし、諸友と飲別す)

*丙戌は、明和三年(一七六六)。送別会での作。参加者の詩は『懷徳堂會餞詩卷』にまとめられている。別れを惜しみながらも、履軒の出世を祝う詩が多い。拙稿『懷徳堂會餞詩卷』訳注―中井履軒京都行の送別詩(『中国研究集刊』陽(三四)号、大阪大学中国学会、二〇〇三年)を参照。

此別非遠別

此の別れ 遠き別れに非ざるに

何事意惆々

何事か意惆々

雪裏若相思

雪の裏に若し相思わば

長江一夜棹

長江に一夜棹ささん

(注)*雪裏若相思……王子猷が戴安道に会いたいと思い、雪の夜に船を出し彼の家の前まで来たが、興が尽きたので会わずに帰ったという故事が『世説新語』任誕篇に見える。履軒の和文書『華寄嚮語』所収の「独ふね(京都革嶋家への訪問を題材にした紀行)の中でも「みやこ(都)のかたのゆかしきおりおりは雪にも花にも剡溪の棹^{せんげい}をわたくしもの(私物)にしたる」との文句が見える(剡溪は戴安道が住んでいた場所)。転句、結句はこの故事を前提として作られたものであろう。

(訳)遠くに行くわけではないのに、どうしてこんなにつらいのか。でも、

もし会いたくなったら一晩舟を漕げばいいだけのこと。

二、離席、奉答伯兄(席を離れ、奉みて伯兄に答う)

*離席は送別会のこと(『昔の旅』に同様の用例あり)。

世事可長歎

世事 長歎すべし

臨別心緒乱

別れに臨んで 心緒 乱る

分離能幾歳

分離 能く 幾歳

豊城一双劍

豊城 一双の劍

(訳)世の中つらいものです。別れに臨んで心が乱れます。どれだけ離れ離れでいられるでしょう。我々はあの豊城の一对の劍なのに。

(注)*豊城一双劍……『晋書』張華伝に、「太阿」「龍泉」の二つの名劍がいつしよに埋まり、光を放っていたとある。この劍は張華が偉くなつてから得るべき劍。自分たちが名臣に仕えるべきことを示唆するか。

*「豊城一双の劍」の喩えは、不可分を表すのだから、名劍に喩えるのは当然自負もある。西村時彦の「互に文運を興さんとの誓いもありけん(『懷徳堂考』下六二頁)」という文句はここによるか。

三、既上舟、奉寄伯兄

(既に舟に上り、奉みて伯兄に寄す)(三首)

*京都に行く途中の作。当時、大阪から京都へは舟で淀川を遡ることが多かった。自嘲しつつも期待を秘めているようだ(山中浩之も同感。『中

井竹山・中井履軒』一九四頁。

行李書半船 行李書船に半ばす

乗月遡澗水 月に乗じて 澗水を遡る

自笑閉戸生 自ら笑う 閉戸生

多事從茲始 多事 茲より始まらんと

(注)*行李書半船……『履軒小乘』という雜記帳にこの京都行の荷物が記されており、おびただしい数の書物と器物を持参したことがわかる。

(訳)荷物は書物が船半艘、月夜の中、淀川を上ります。ああ、世間知らずの書物の虫の厄介事はこれから始まるのだな、と自嘲します。

(参考)竹山『箕陰集(詩集)』卷三「答弟処叔之京却寄三首」では「来詩曰、自笑閉戸生、多事從茲始」に対し、「平安山水富、卜築懷幽情、祇恐花開日、依然閉戸生」(花が咲いても書物の虫では困るぞ)と返している。

其二

遺業分一經 遺業 一經を分かち

浮遊向京洛 浮遊し 京洛に向かう

休憂阿徳貧 憂うるなかれ 阿徳は貧しく

自無塵繩縛 自ら塵の繩縛するなし

(訳)(これまでいっしょに継承してきた)父祖の業を分かち、私はふらふらと京都へと向かいます。でも心配しないで下さい。貧乏人の私は、世俗の塵に縛られることはありませんから。

*私は俗世に縛られることはありませんとは、出世などせずに帰ってき

ますということか。

(参考)竹山『箕陰集(詩集)』卷三「弟処叔之京却寄三首」では「来詩曰、休愁阿徳貧、貧時即是福」とある(異同注意)。それに対し竹山は「雖作朱門客、敝袍無顔色、自後京師信、飽聞好消息」(相変わらずだな、いい知らせを待っているよ)と返している。

其三

生来一双手 生来 一双手の身

今始辞広被 今 始めて広被を辞す

縦有濁醪酌 縦い濁醪の酌む有れども

恐不敵雪威 恐らくは雪威に敵わず

(訳)これまでずっといっしょだったのに、今私は初めてあなたの温かい庇護の下を去ります。たとえ濁り酒を飲んでも、向こうの寒さ(*心の寒さもあるだろう)を凌ぐことはできないでしょう。

(参考)竹山『箕陰集(詩集)』卷三「答弟処叔之京却寄三首」では「来詩曰、生来一双手、広被今始辞」とある。それに対し竹山は「同室如讐敵、悠々天下是、分異無多憾、乾坤一広被」(渡る世間に鬼はなし)と返している。

四、至京、奉寄伯兄

(京に至り、奉みて伯兄に寄す)(二首)

形影今分離 形影 今分離し

両地長凄酸 両地にて 長く凄酸す

夜々各挑灯 夜々各々灯を挑げ
応照往来魂 応に往来の魂を照らすべし

(訳) (一心同体であった)形と影とが今別れ、二つの地で嘆き合う。夜毎にお互い灯りを掻くと、魂を映し出すことができるでしょう。

其二

夜々魂飛去 夜々魂は飛び去り
在君残灯辺 君が残灯の辺りに在り
諸君睡覺時 看るを諸う睡覺する時
君影是我身 君が影は是れ我が身なるを

(訳) 夜毎に魂は飛び、あなたの燃え残る灯の辺りに行きます。お休みにする時にどうぞご覧になって下さい。あなたの影は私自身なのです。

(参考) 竹山『真陰集(詩集)』巻三「予喪女布美日適得処叔憶予時攬淚和之二首」とし、上記二首に対し「爾寫還鄉夢、字字極悲酸、豈知屋梁外、別有不帰魂(悲慘なのはお前だけではない)」「女死猶在褥、举室啼枕辺、新詩床下落、擬為阿弟身(お前も思ってくれているのか)と返している。布美は十一月二十七日に一歳にならずしてなくなった(以下「親家書有感」詩参照)。

五、雪朝奉皇曾公(雪の朝、奉みて曾公に呈す)

*曾公は高辻胤長卿のこと。菅原道真の末裔なのでこのように言う。

宵聴白雪調 宵に白雪の調べを聴き
魂遊瑤台辺 魂は瑤台の辺りに遊ぶ

曉來推窓戸 曉來窓の戸を推せば
宛然夢中看 宛然として夢中に看しことし

公有白雪什。昨夜朗誦使積徳聰焉。

(公に白雪の什有り。昨夜朗誦し、積徳をして焉を聴かしむ。)

(訳) 宵に白雪の調べを朗誦していただき、魂は玉の台(雪の積もった台)に飛遊しました。朝になって窓を開けてみるとあたかも夢の中でのような景色が広がっていました。

六、親家書有感(家書を観て感有り)

*十一月二十七日以降の作。(注)参照。

孤身在他郷 孤身他郷に在り
家書備發緘 家書緘を發くに備し
小姪聞天折 小姪天折するを聞く
恐有哀懇言 恐らくは哀懇の言有らん

(注) *小姪聞天折……竹山の娘布美は十一月二十七日に一歳にならずしてなくなった『中井竹山・中井履軒』(二八五頁)。前掲「至京、奉寄伯兄」詩(参考)を参照。

(訳) 独り異郷にあり、家書を開くのもめんどろくさい。幼い姪が亡くなったと聞いたが、その嘆きが述べられているだろうから。

*履軒の心も閉じているか。「それだけでなく私も私はつらいのに」という気持ちか。

七、聞槐庵兄落新居、有此寄

(槐庵兄の新居を落するを聞き、此の寄有り)

*明和四年(一七六七)春の作。槐庵は古林相如、字正民、槐庵はその号。
『懷徳堂会儀詩卷』に見える。竹山『箕陰集(文集)』巻九に墳誌がある。

輪奐開盛宴 輪奐として盛宴を開き

春生醉舞中 春は生ず 醉舞の中

孰知孤館雨 孰か知らん 孤館の雨に

裂袋竈壁孔 袋を裂きて壁の孔を竄ぐを

(注)*輪奐……建物の壮大美麗な様。

(訳)盛大に宴を開き、酔い舞う中に春は生じる。(一方)誰が知ろう、独り暮らしの私が、端切れを裂いて雨漏りを防いでいるのを。

*転句結句は大げさで、新居祝いに不吉過ぎる。ただ、それぐらい滅入っていたということだろう。

八、永輔義佐寄酒鷄子来、題簡背謝之(永輔・義佐 酒と鷄

子とを寄せ来たり、簡背に題して之を謝す)

*永輔とは早野仰斎(名辨之、字士蒼)。履軒より十四歳年少だが履軒と親しかったらしく、この詩以外に「述客中況、答早士蒼」「憶旧遊寄早士蒼」「答早士蒼」(三首)にその名が見える。義佐とは原氏(校勘参照)。簡背とは書翰の裏。

破愁莫若酒 愁いを破るは酒に若くは莫し

飲酒須肴美 酒を飲むは須く肴美かるべし

故人並相贈 故人並びに相い贈る

深知加餐意 深く知る加餐の意を

(校勘)『履軒古風』では「永輔義佐」を「早原」に作る。

(注)*加餐……栄養を取り、養生すること。また、人の健康を祝す書翰語。

(訳)愁いを解くには酒が一番。酒を飲むには肴が大事。その両方を贈ってくれた友に、私を思ってくれる情の深さを知った。

九、述客中況、答早士蒼

(客中の況を述べ、早士蒼に答う)

*早士蒼は早野仰斎(名辨之、字士蒼)。「永輔義佐寄酒鷄子来、題簡背謝之」詩参照。

隠淪不挾地 隠淪地を挾ばず

孰知方朔賢 孰か知らん方朔の賢を。

五斗無折腰 五斗に腰を折る無きも

未裁婦去篇 未だ婦去の篇を裁せず。

器々耽吟哦 器々として吟哦に耽り

飽看雪裏山 雪の裏の山を飽くまで看る。

依然旧阿蒙 依然として旧の阿蒙

鵲毛又一年 鵲毛又一年。

(注) *方朔……東方朔。漢の武帝の時代の人。後世、朝隠(朝廷に仕えながら隠者の心を守る人)として有名。『文選』に「答客難」(卷四五)と「非有先生論」(卷五一)とがある。「答客難」はうだつが上がらないことを人に咎められ、それに答える形式の文章。東方朔は、時代が悪いからだと言ひ訳しつつ、それでも我が身を修めるべきだと説く。「非有先生論」では、才能がありながら發揮しないのは不忠だと咎められた非有先生(架空)が、今は謫(た)う者が昇進する世の中だと批判する。履軒は自分の境遇、生き方を東方朔と重ね合わせたのであろう。『文選』には他に、夏侯湛作の「東方朔圖贊」がある(卷四七)。東方朔がその才能を十分發揮できず不遇をかこちながらも、世俗に対して一定の距離を保ち、よく自己を持したことを称える。「朝隠」の語が見える。

*五斗無折腰……陶淵明は、五斗の米のためにべこべこしない(官仕えない)と言つて、「帰去来(の辞)」を書いて故郷に帰り、隠遁生活を送つた。「陶淵明伝」に「淵明歎曰、我豈能爲五斗米折腰向鄉里小兒。即日解綬去職、賦歸去来」とある。履軒が陶淵明に傾倒していたことは『履軒古風』序に述べられている(「酷愛彭沢之辞」*彭沢とは陶淵明のこと)。「履軒小乘」の京都への携帶した本のリストにも『彭沢集』が見える。

(歌) 隠遁するには場所は関係ない。誰が朝廷に仕えながら隠者の心を持った東方朔の賢を知ろう。五斗の米のために腰を曲げないが、まだ陶淵明のように『帰去来(の辞)』は著していない(隠遁はしていない)。ひたすら詩を吟じ、見飽きるほど雪の山を見る。私は相変わらず、ただ賢が一年分伸びただけ。

*心は隠逸。私は無為に一年を過(すご)してしまつたと言ふ。「飽看雪裏山」は「南帰途中口号」其二に「胸襟飽烟霞」の表現があるのを参照。

一〇、羈鳥辞、上菅公(羈鳥の辞、菅公に上る)

*羈鳥は陶淵明「帰園田居(其二)」に「羈鳥恋旧林」の句あり。

有鳥有鳥 鳥有り 鳥有り
離々其音 離々たり 其の音
紛群飛而棲止兮 紛として群飛し棲止し
于海之漕 海の漕にあり
朝飲朝陽之清露兮 朝に朝陽の清露を飲み
暮啄沙水之琅玕 暮に沙水の琅玕を啄む
毛羽皓其修潔兮 毛羽は皓として其れ修潔たり
浴乎月中之醴泉 月中の醴泉を浴びる

(注) *離々……雍に同じ。和らぐこと。

(歌) 鳥あり、鳥あり、その声は和やか。紛然と群れ飛び、海辺に憩う。朝には朝露を飲み、夕べには夕べの露を含む。羽は真白く清潔で、月の甘露を浴びる。

世不与我周兮 世 我と周わす
時續紛其嘉鳩 時 續紛として 其れ鳩を嘉みす
悲素秋之將尽兮 素秋の將に尽きんとするを悲しみ
兼腹黃而其零 兼腹黄ばみ 其れ零む
景翳々其西傾兮 景 翳々として 其れ西に傾き
氣凜々以凄然 氣 凜々として 以て凄然たり
海風忽飄兮揚海 海風 忽ち飄り 海を揚げ
獨駭飛兮失乎群 獨い駭き飛びて 群を失う

(注) *世不与我周……「離騷」に「雖不周於今之人兮」という文句がある。
*時續紛其嘉鳩……「離騷」に「時續紛其變易兮」という文句がある。
*鳩……毒鳥。「離騷」にも見える。

(訳) 世は私と合わず、時流は乱れて悪者を嘉みする、秋の暮れんとするを悲しみ、葦は色褪せ凋む。影は黒々と西に傾き、気は張りつめ寒々しい。海風が急に起り波を立て、慌てふためき、群れを失う。

冲碧雲而追紫電兮 碧雲に冲りて紫電を追ひ
汨蕩々以冉々 汨蕩々として以て冉々とす

蔽長江以北征兮 長江を蔽いて以て北征し

歴交野与鳩岑 交野と鳩岑とを歴る *鳩岑は九岑か。

瞻下土而回翔兮 下土を瞻て回翔すれば

維荆棘之騷雜 維れ荆棘の騷雜たりて

其胡可止 其れ胡ぞ止まるべき

(注) *汨蕩々、冉々……ともに行く様。

(訳) 雲にぶつかり、雷を追ひ、行きまた行く。長江を下に北征し、交野と鳩岑とを過ぎる。地上を見て旋回すると、いばらが生い茂り、留まる

ことができない。

乃奮翮而増逝 乃ち翮を奮いて増逝し

望叡嶽兮下垂 叡嶽を望みて下垂し

臨于鴨水之清潯兮 鴨水の清潯たるに臨み

集乎秋桂之瑤枝 秋桂の瑤枝に集まる

水冷々其激激兮 水冷々として其れ激激し

樹琅々以芬菲 樹琅々として以て芬菲たり
薄斂我翼 薄か我が翼を斂め
薄休我趾 薄か我が趾を休む

(注) *増逝……飛び去る。*叡嶽……比叡山を懸けるか。*鴨水……鴨川のことか。*懷旧林……陶淵明「帰園田居(其一)」に「羈鳥恋旧林」とある。

(訳) そこで、羽ばたき舞い上がり、叡嶽を望んで下降し、鴨水の清流に臨み、玉のような桂の枝に憩う(止まる)。水は冷ややかに澄み渡り、木はさざめき芳しい。いささか我が翼を収め、足を休める。

懷旧林而悲鳴兮 旧林を懷いて悲鳴すれば

雲幕々其曾々 雲幕々として其れ曾々たり

邈修遠而無道兮 邈として修遠にして道なく

聊倚南枝而制檜 聊か南枝に倚りて檜を制る

結蕙蔭而為屋兮 蕙蔭を結びて屋と為し

藉江離以為褥 江離を藉きて以て褥と為す

樹翳鬱而多雨露兮 樹翳鬱として雨露多く

溜我衣之埃塵 我が衣の埃塵を溜う

(注) *曾々……重なる(「離騷」)。*修遠……はるかに遠い。*倚南枝……

「巢南枝(南枝に巢くう)」で、故郷を慕う喩え。古詩の「行行重行行」に「胡馬依北風、越鳥巢南枝」の句がある。*蕙蔭……香草(「離騷」)。*江離……香草(「離騷」)。

(訳) 故郷の林を想い悲しく鳴けば、雲は黒々と重なり合う。はるか遠

くして道もなく(*無道に懸けるのであろう)、しばらく南の枝に倚つて
巢を作る。香草を束ねて屋根とし、別の香草を敷いて布団にする。木
の蔭は鬱蒼として雨露を多く含み、私の衣の塵を洗ってくれる。

吸花藥而為飲兮 花の藥を吸いて飲と為し
披秋爽以為餐 秋の爽を披いて以て餐と為せば
維馥郁以馨香兮 維れ馥郁として以て馨香あり
言發我好音 言に我が好音を發すれば
音玲瓏以清越兮 音玲瓏として以て清越たりて
樹珞々以和 樹珞々として以て和す
月正午而天暈兮 月正午にして天暈く
星辰衆而漠斜 星辰衆として漠斜めなり

(注)*好音……『詩經』に見える。

(訳)花の藥を吸って飲み物とし、秋の爽を拾って食事とすると、馥郁と
香りがよい。ここに我が麗しき声を發すれば、玲瓏として澄み渡り、木
はさらさらと和す。月は南中し天近く、星はきらめき、天の川は斜めに
横たわる。

窺閨闥以彷徨兮 閨闥を窺いて以て彷徨し
弗寤於永夜之將央 永夜の將に央きんとするを寤らず
於戲修潔而芬芳兮 於戲修潔にして芬芳たり
実得我所 實に我が所を得
聊逍遙以延佇 聊か逍遙して以て延佇す

(注)*閨闥……天上界の門(「離騷」)。*延佇……「離騷」に「延佇乎

吾將反」とある。

(訳)天上の門を窺って彷徨し、長い夜が尽きるのにも気づかない。ああ、
清らかで香りも豊か。本当に我が所を得たと感じ、しばらく逍遙し佇む。

(参考)『箕陰集(詩集)』卷二「謁式部曹公隨賦呈」(弟処叔之遊昔公門下
也、予作孤雁歌送之。弟辱礼遇、乃謝以鵲鳥辭。故及之云。)

*繫がれた鳥とは自分のことか。

*展開・語彙ともに「離騷」に類似する。履軒が『楚辭』に傾倒していたこ
とは『履軒古風』序に見える(「有倣于楚之騷」*楚とは『楚辭』、騷とは
「離騷」)。『履軒小乘』中の京都への携帯した本の一覧にも『楚辭』の名
が見える。

一一、丁亥早春自帰省浪華至、題所携梅花、上菅公

(丁亥早春 浪華に帰省するより至り、携うる所の

梅花に題し、菅公に上る)

*丁亥は明和四年(一七六七)。早春、大阪に帰省して京都に戻ってきて
からの作。

南国旧京梅	南国旧京の梅
擔頭一枝馨	頭に擔げば一枝の馨
帰来把似君	帰来たり把れば君に似
風韻至今清	風韻今に至るまで清し

(訳)南国難波京の梅、頭に挿せば一枝分の香り。帰って来て取ってみ

るとあなたに似て、その香りは今も清らか。

*梅の風韻を蒼公に喩える。

一二、偶成

*春の作。

有客立我門

客有り 我が門に立ち

剥啄驚孤眠

剥啄と孤眠を驚かす。

推枕起延之

枕を推して起きて之を延き

相看両欣然

相い見て 両に欣然たり。

坐来無寒温

坐し来たれば 寒温無く

談笑在簡篇

談笑 簡篇に在り。

春花当窓発

春花 窓に当たりて発き

好鳥隔墙聞

好鳥 牆を隔てて聞こゆ。

遙園乞隣蔬

園を遙て 隣蔬を乞い

沽酒釀客錢

酒を沽うは客錢に釀る。

対酌無賓主

対酌 賓主無く

陶然倒青樽

陶然として青樽を倒く。

興尽君宜去

興尽きれば 君宜しく去るべし

莫厭我廬貧

我が廬の貧しきを厭う莫かれ。

百年只如此

百年 只だ此くの如し

庶無役我心

我が心を役する無きを庶う。

(注) *剥啄……毘顔。コツコツ。 *相看両欣然……李白「独坐敬亭山」相看兩不厭。 *談笑在簡篇……陶淵明「答龐參軍」に「談諧無俗調、

所說聖人篇」とあるのを参照。 *興尽君宜去……「陶淵明伝」に「淵明若先醉、便語客、我醉欲眠、卿可去。其真率如此」とあるのを参照。

(訳)客が門の所に立ち、コツコツと独り寝を驚かす。起きあがつて招き入れると、二人共喜び合う。

挨拶は抜きた、話は書物のこと。春の花が窓辺に開き、鳥のさえずりが塀の向こうに聞こえる。

庭を越えて隣の野菜をもらいに行き、酒を買うのは客の金に頼る。賓主の別なく酒を酌み交わし、陶然として樽を傾く。

興が尽きれば帰ってくれ、私の庵の粗末さを心配なさるな。百年経ってもこのままだ、私が望むのはただ心を労するものがないことだけ。

一三、憶旧遊寄早士營(旧遊を憶い、早士營に寄す)

*早士營は早野仰斎(名辨之、字士營)。「永輔義佐寄酒鶏子来、題簡背謝之」詩を参照。春の作。

春遊今如何 春遊今如何

臨風憶昔年 風に臨みて昔年を懐う。

散步城西路 「散步す城西の路

芳洲其未遠 芳洲 其れ未だ遠からず。

茅屋唯三間 茅屋 唯だ三間

炊麦待上賓 麦を炊きて上賓を待す。

賓多坐不容 賓多くして坐容れず

命席統堂廡 席をして堂廡に統かしむ。

行厨各闕奇 行厨 各々奇を闕い

春醪如涌泉　春醪しゅんろう涌泉の如し。

(注)*茅屋唯三間……陶淵明「帰園田居(其一)」に「草屋八九間」とあるのを参照。*命席めいせき統堂とうどう……『儀礼』『郷飲酒礼』に「設席于堂廡」とある。

(訳)春の遊びは今どうだろう、風に臨んで昔を思う。——当時、町の西の道を散歩すると、洲は近くにあり、茅屋はただ三間の広さしかなく、炭を炊いて客をもてなした。客が多くて座りきれず、家の外まではみ出した。破り子(弁当箱)はおのおの趣向を競い、濁酒は湧き出る泉のようだ。

高陽在何処　高陽何処に在りても

詩酒自不慚　詩酒自ら慚じず。

折花或簪頭　花を折り、或いは頭に簪し

摘蔬旋入盤　蔬を摘みて旋ち盤に入る。

氍毹屢移坐　氍毹くゑ屢々坐を移し

水厓又樹陰　水の厓し又た樹の陰かげ。

醉歌互相属　醉歌互いに相い属つづなり

樽尽興未足　樽尽くると興未だ尽きず。

沽酒水西村　酒を水西の村に沽かううも

扁舟帰来遅　扁舟帰来たること遅し。

(注)*高陽……酒飲み。

(訳)酒徒はどこにいても、詩と酒だけは人に負けない。花を折って髪に挿し、野草を摘んで、すぐに皿に並べる。水の岸、木の陰と、數物を

あちこち移す。酔いまた酔い、酒樽が尽きても興は尽きない。川の西の村に酒を買いに行ったが、小舟はなかなか帰ってこない。

疑向桃花岸　疑うらくは、桃花の岸に向かい

殷懃問秦代　殷懃に秦代を問うかと。

又恐愛朴俗　又恐る朴俗を愛し

其中長孫兒　其の中に孫兒を長おさてるかと。

倏然斜陽裏　倏然しゅぜんとして斜陽の裏

波揺一棹回　波を揺らし一棹し回まわる。

欲呼相勞問　欲呼して相い勞問し

洗觴更侑醉　觴を洗すすいで更に酔うを侑すすむ。

不覺白日没　覺えず白日没し

夕露下我衣　夕露我が衣に下る。

(注)*問秦代……陶淵明「桃花源記」では、桃源郷の民は秦時の難を避けこの村に來たということになっている。*洗觴……「洗盞」は「前赤壁賦」にある。

(訳)桃花源に行つて、懇ろに秦代のことを尋ねているのかと疑う。また、素朴な風俗を愛し、そこで子孫を育てようとしている(そこに定住してしまふ)のではないかと心配になる。

急に日暮に近づき、棹挿しながら波を揺らして帰る、大声で声を掛け、杯を洗いさらに酔うよう勧める。気が付くと、太陽は没し、夜露が衣を潤していた。

初月出林端　初月林端に出で

皎々照花枝　皎々として花枝を照らす。」

此興君何日 此の興君 何れの日ぞ
索居我不再 索居して 我再びせず。
尊前会相思 尊前 会ま相い思わば
帰鴻寄一詩 帰鴻に 一詩を寄せよ。

(注)*尊前会相思……「長恨歌」に「天上人間会相見」とあるのを参照。
*帰鴻……帰雁は春、北に帰る雁。

(訳)月は林の端に出て、皎々と花の枝を照らす。——このような興を
君はまた楽しんでゐるのだろうか。私は寂しく暮らし、二度と味わつて
はいない。酒樽を前にもし思い出すことがあれば、北に帰る雁に詩を託
してくれ。

*大阪での遊び(自由な生活)を懐かしむ。

一四、寒泉寄題。此君泉也、泉在筑紫竹中郷、柳川属邑

(「寒泉」寄題。此れ君泉なり、泉筑紫竹中郷に在
り、柳川が属邑なり)(三章)

*寄題とは他の土地で題詠すること。詩体は『詩経』に倣っていると
思われる(『履軒古風』序に「有倣于三百篇(三百篇とは『詩経』のこと)」
と言う)。末尾に「寒泉三章、二章八句、一章十二句」とある。

(第一章)

冽彼寒泉 冽たり彼の寒泉
柳城之南 柳城の南
孔潔且芳 孔だ深く且つ芳し

其流渌々 其の流れ 渌々たり

(訳)清い彼の寒泉は、柳川の南にある。極めて清潔で芳しく、その流れ
は渌々としている。

可以汲兮 以て汲むべく

僻在幽陰 僻りて幽陰に在り

鳥嘯々兮 鳥 嘯々たり

除其垢塵 其の垢塵を除く

(注)*可以汲兮……『易経』井卦、九三「可用汲、王明並受其福」
とあり、「九五」に「井冽、寒泉食」とある。

(訳)汲むに値し、静かな蔭にある。鳥が楽しげに鳴き、その塵を洗い除く。

(第二章)

冽彼寒泉 冽たり彼の寒泉

在竹之郷 竹の郷に在り

其流渌々 其の流れ 渌々たり

孔潔且芳 孔だ深く 且つ芳し

(訳)清い彼の寒泉は、竹中郷にある。その流れは渌々として、極めて清
潔で芳しい。

于以酌之 于に以て之を酌め

于彼公堂 彼の公堂に于いてす

豈弟君子 豈弟たる君子

錫以嘉名 錫うるに嘉名を以てす

(注) *豈弟君子……『詩經』「大雅」『洞酌』に「凱弟(II)悌君子、民之父母」とある。*錫以嘉名……『離騷』に「肇錫余以嘉名」とある。

(訳)ここに、お上に薦め、和らげる君子はよき名を与える(高く評価する)。

(第三章)

嘉名伊何 嘉名伊れ何

此君之比 此れ君の比

孔潔且芳 孔だ潔く且つ芳し

四時弗改 四時改めず

(訳)よき名とは何か。それは君の輩ということ。極めて清潔で芳しく、何時も変わらない。

君子攸則 君子の則る攸

我其靡愧 我其れ愧ずる靡し

此君之榮 此れ君の榮

歌之詩之 歌い詩にせん

(訳)君子が則とする所に、私は羞じる点がない(きちんとしている)。これは君の誉れだ。歌にし詩にしよう。

一物之懿 一物の懿

君子弗遺 君子遺さず

矧伊人矣 矧んや伊の人をや

庶無逸才 庶くば才を逸す無きを

(訳)すばらしい物は、君子は見逃さない。この人ももちろんそうだ。この人の才能を見落とすことがありませんように。

一五、宿居易館(居易館に宿る)

*居易館は、履軒の弟子の竹島實山の居所。春の作。

凄々雨余天 凄々たり雨余の天

梅柳澹暮色 梅柳暮色に澹し。

杖履偶經過 杖履偶ま經過す

西門隱士宅 西門隱士の宅。

庭靜草芊々 庭は靜かに草芊々たり

烏啼春寂々 烏啼き春寂々たり。

杯盤隨有無 杯盤は有無に隨せ

微醉情自適 微さか酔えば情自ら適う。

經史諱方澹 經史の諱方に澹に

茶鼎海漸瀝 茶鼎の海漸瀝たり。

憂病恐君医 憂病は君が医に恐り

留連として興未だ索きず。

借問夜如何 「借問す夜は如何

且つ恐る塗昏黒たるを」と。

主人援我止 主人我を援きて止め

相對双肱曲 相對して双り肱を曲ぐ。

欲眠聞鐘音 眠らんと欲して鐘音を聞き

膠疑禪房宿 膠ちて禪房の宿かと疑う。

(注) * 肱曲……『論語』述而篇に「飯疏食、飲水肱曲而枕之、樂亦在其中矣」とある。

(訳) 凄々たる雨の日、梅と柳は暮色に霞む。杖つき履穿き、たまたま西門の隠者の宅を通り過ぎる。

庭は静かに草は茂り、鳥は啼き春は寂々。食器はあるに任せ、ほろ酔い気分が心地よい。

経史の話も聞に、茶釜が静かに沸き立つ。鬱病をあなたに癒され、興はまだ尽きない。

「ちよっとお尋ねします、今夜はどうされますか、道も真つ暗ですよ」と、主人は私を引き留め、相対して肱を曲げ枕にする。眠ろうとして鐘の音を聞き、禅房に宿っているかと疑う。

* 隠者(竹島實山か)と語らう。今の言葉で言うとかウンセリングか。学問の話に飢えていた様子がわかる(「偶成」を参照)。

一六、東山口号

* 口号は口を衝いて出る即興の作。春の作。

乘暗訪花信 晴るるに乘じ 花の信りを訪えば

天寒春色遅 天寒くして 春色遅し。

擬伴少同調 伴を擬るに 同調少なく

ト遊多屈指 遊びをトすれば 屈指多し。

東山自有妓 東山 自ら妓有り

謝公不醉帰 謝公 酔わずして帰る。

(注) * 謝公……晋人謝安は会稽の東山に隠遁し、芸妓を伴って遊んだ。

李白「示金陵子」時に「謝公正要東山妓、携手林泉処処行」、李白「携妓登梁王樓霞山孟氏桃園中」時に「謝公自有東山妓」の句がある。* 東山……東山には料亭も多く、遊山の客はよく娼妓を連れて訪れたらしい。

有名な花街祇園も近い。中島棕隠『鴨東四時雜咏抄』(一八二六)に「瑞竜山南禪寺、……寺前酒店亦有声価、遊客每携娼妓、嬉娛于其間」とある。『葛子琴・中島棕隠』江戸詩人選集六、岩波書店、一九九三。

(訳) 暗れに乘じて花の便りを問えば、天候が寒く春はまだまだだ。伴を募っても同調する人は少ないのに、遊びに誘うと賛成する人が多い。東山にはもとより芸妓が多いが、謝公は酔わずに帰った(から見つからない)のだ。

一七、古意

* 古意とは懐旧の念。詩題の名。春の作。

誰瀧相思涙 誰か相思の涙を瀧ぎ

寄之大江流 之を大江の流れに寄せん。

江流再不復 江流は再び復らず

南去日悠々 南に去りて日々悠々たり。

誰題加餐字 誰か加餐の字を題し

繫之北帰雁 之を北に帰る雁に繫がん。

帰雁声々度 帰雁 声々と度り

天高不可攀 天高くして攀すべからず。

孤客勞夢魂 孤客 夢魂を勞す

南国春応残 南国春^{まさ}応に残すべし、と。

(注) *日悠々……『履軒古風』卷三「長楽卜居答人(又)」「(帰阪後の作)に、京都市について「朱門雖良楽、客思日悠悠」との表現が見える。

(歌) 誰が相思の涙を流し、それを大河に寄せるだろう。だが、川は流れて戻らず、南に去り、日々悶々とする。

誰が私を思い手紙を書き、それを北に帰る雁に結ぶだろう。だが、帰雁は鳴きながら渡るも、天は高く、上ることができない。

孤独な旅人はただ空しく、南国の春が終わろうとしているのを夢見る。

*大阪への思いを綴々として訴える。

一八、奉酬伯兄及諸友見懷諸作

(奉^{つたし}みて伯兄及び諸友に懷^{おも}わる諸作に酬^むゆ)

*梅雨の作。

濛々黄梅雨 濛々たる黄梅の雨

寂々孤客館 寂々たる孤客の館。

故園南望目 故園南に望み目

親朋隔水雲 親朋水雲を隔つ。

閑中俯懷旧 閑中俯して旧きを懐い

不知客入門 客の門に入るを知らず。

忽擲金玉声 忽ち金玉の声を擲げ

驚起龍蛇之 驚き起きて跳きて之を脱む。

累々瓊瑤光 累々たる瓊瑤の光

照我草堂裏

我が草堂の裏を照らす。

群英滴堂酒

群英と滴堂の酒と

吾魂便欲飛

吾が魂便ち飛ばんと欲す。

胡料彩毫下

胡ぞ料らん彩毫の下

輒及朽腐姿

輒ち朽腐の姿に及ぶを。

漸汗泚然流

漸汗泚然として流れ

沾衣与淚俱

衣を沾らす涙と俱に。

睽離如昨日

睽離すること昨日の如し

倏已離寒暑

倏として已に寒暑離る。

豈無詩酒伴

豈に詩酒の伴無きや

況有泉石美

況んや泉石の美有るをや。

新交欲未洽

新交の欲び未だ洽ねからず

衷情向誰裁

衷情誰に向かいて裁へん。

篇什半述旧

篇什半は旧を述べ

飲來悲即生

飲來たれども悲しみ即ち生ず。

多謝有声画

多謝す声画有るを

須臾接龍光

須臾にして龍光に接す。

更知脊令原

更に知る脊令の原の

草色描不成

草色は描けども成らざるを。

(注) *脊令原……『詩經』「小雅」「常棣」に見える。兄弟が互いに難を救う喻え。

(歌) しとしと梅雨の雨が降り、孤客の館は寂しげだ。南に故郷を望んでも、親朋は水や雲の彼方にいる。

閑中、伏して昔を懐い、客が来たのにも気づかない。急に声を掛けら

れ、驚き起きて手紙を拝読する。

数多の玉の光が、私の草堂を照らす。並み居る秀才に数多の酒。ああ、今すぐ飛んで帰りたい。

なんと美しき筆跡はすべて朽ちた私を思うもの。慚愧の汗がしとど流れ、涙とともに衣を濡らす。

別れたのは昨日のようなのに、すでに季節は一巡り。京都にも詩酒の友はいる、まして風景は美しい。

だが、新しい付き合いはいまだ打ち解けず、この気持ちを訴える相手がない。文章を書いても半分は昔のこと、歎びを感じてもすぐに悲しくなる。

このように生き生きとした知らせをいただいたのはうれしいが、脊令の原の草色は描こうと思っても描けないことを思い知らされた(弟思いの兄も自分の窮状を救うことはできないのだと思ひ知らされた)。

*自分を思ってくれている大阪の人々に感激し、涙している。自分を「朽廃姿」、自分の住まいを「孤客館」と表現。

一九、碧山楼陪菅公、賦奉酬

(碧山楼にて菅公に陪し、賦して奉みて酬ゆ)

*碧山楼とは宴会の間か。夏の作。

把酒上高樓 酒を把りて高樓に上り

凭檻繙黄卷 檻に凭りて黄卷を繙く。

皎月辨秋毫 皎月 秋毫を辨じ

薰風滴衣襟 薰風 衣襟に滴つ。

酷吏喪氣焰 酷吏も氣焰を喪い

燭奴就棄捐 燭奴も棄捐に就く。

札數覓野人 札數は野人に覓く

促席劇談論 席を促くして劇しく談論す。

慚懷散木質 慚ず、散木の質を懷き

空懸燕台金 空しく燕台の金に懸かるを。

(注) *酷吏……大暑の擬人的表現。 *燭奴……蠟燭の擬人的表現。 *燕台……「隗より始めよ」の故事で有名な燕の昭王が、台を築いてその上に黄金を置き賢者を招いた故事『蒙求』『燕昭築台』、鮑照『放歌行』文選』卷二八。他『史記』『燕召公世家』を参照。君主に優待されること。

(訳) 酒を取って高樓に登り、欄干に倚って書物を繙く。明月は物をくつきり浮かび上がらせ、薰風は衣に滴ちる。

酷暑も退散し、蠟燭もお払い箱。野人には礼儀もゆるくされ、膝を突き合わせて談論する。

生来の役立たずが、無駄に重用されていることを恥ずかしく思う。

*菅公と親しく語らいあつた様子が表現されている(跋文を参照)。ただ、結びで自らの無能を嘆く。あまりアピールできなかったか。学問について議論したようだが、履軒の知的興味を満たす話ではなかったというのが実情か。

*『懷徳堂考』下六三頁に「昔家の碧山楼に在ること一年」とあり、碧山楼を履軒の居所のように言う『中井竹山・中井履軒』も同様が疑わしい。『履軒古風』卷三「奉酬吏部菅公三首」中にも「空懷碧山楼、山色今何如、黄葉已搖落、白雪正婆娑、詩賦君所獨、樽酒我嘗侍」とある。眺めのい

い、宴を催す場所であろう。

二〇、鴨林納涼

*鴨川の川床であろう。おそらく夏の作。

溪林不盈尺 溪林 尺に盈たず

醉倚水中牀 酔いて倚る 水中の牀

喬樹漏星月 喬樹 星月を漏らし

露氣滴衣袂 露氣 衣袂に滴つ

(訳)川辺の林は一尺に満たず、酔って川床に寄りかかる。

高木から月が漏れ出で、露の気が衣に滴ちる。

*美しい情景を詠む時ほどどこか悲し気。大阪を詠う時生き生きしているの(「憶旧遊寄早土替」とは対照的である)。

二一、九歎 節二

*九つあった中の二つ(以下の「歎毀」「歎拘」だと言うが、『楚辭』に倣って題名だけであろう)。

歎毀(右 毀りを歎く)

*原文では末尾に「右歎毀」とあるのを冒頭に移した。

何浮雲之塵日兮 何ぞ浮雲の日を塵ぐ

当中天而喪光 中天に当たりて光を喪う

白日胡瑕兮

鬱蒙々以冥々

我陟喬山兮

遶出平雲霧之上

天晴朗而無翳兮

日赫々以炫々

俯瞰浮雲之態兮

憫乎下土之人

白日 胡ぞ瑕あらん

鬱蒙々として以て冥々たり

我 喬き山に陟り

遶かに雲霧の上に出づれば

天 晴朗たりて翳無し

日 赫々として以て炫々たり

浮雲の態を俯瞰し

下土の人を憫む

(訳)どうして浮雲が日を遮り、空を覆って光を奪うのか。太陽は完璧なのに、濛々とまた黒々としている。

私は高山に登り、遙かに雲の上に出れば、天は晴れわたり翳りなく、日は燦々と輝く。

浮雲の様子を俯瞰し、地上の人を憐れむ。

夫子思之明哲兮

悼道路之荒蕪

發憤著書兮

坦履祖武

何小人之無憚兮

指為回邪之塗

夫子與之抗言兮

聞仁義之充塞

何衆人之嫉妬兮

擠為從橫之学

夫れ子思の明哲たる

道路の荒蕪するを悼み

発憤して書を著し

坦として祖武を履むも

何ぞ小人の仰り無き

指して回邪の塗と為す

夫れ子與の言を抗うや

仁義の充塞するを聞くも

何ぞ衆人の嫉妬する

擠いて從横の学と為す

(注) * 発憤著書……もと司馬遷が『史記』を書いたことについて言う。子思は『中庸』などを著したとされる。* 子輿……孟子のこと。* 縦横之学……縦横に同じ。諸子百家の一つに縦横家があった。ここでは権謀術数のこと。

(訳) 子思は聡明で、世の道が荒れるのを痛み、発憤して書を著し、坦々と先人の後を継いだ。だが、何と小人物の恥知らずなことか。よしまたな道だと決めつけた。

孟子は激しく議論して、仁義の閉塞を開いた。だが、何と衆人の嫉妬深いことか。権謀術数だと蔑んだ。

蒼蠅之晒黄鵠兮

蒼蠅の黄鵠を晒うに

以弗食乎蹷徑之遺穀

蹷徑の遺穀を食らわざるを以てす

蚯蚓之哈龍蛇兮

蚯蚓の龍蛇を哈うに

以弗飲乎洗旁之弃水

洗旁の弃水を飲まざるを以てす

以險隘之鄙心兮

險隘の鄙心を以て

量乎睿知之盛府

睿知の盛府を量るも

夫胡相容兮

夫れ胡ぞ相い容れんや

所以紛乎毀譽

毀譽に紛れる所以なり

(注) * 蹷徑……『礼記』『月令篇』では「蹷蹷」に作る。

(訳) 蠅は、大鳥が蹷の周りの残飯を食べないことを嘲り、蚯蚓は、龍が洗い場の廃水を飲まないことを嘲る。このように、狭く険しく卑しい心で英知の心ばえを判断しようとしても、どうして可能だろうか。毀譽褒貶に終始するだけだ。

孰生平今之世兮

孰か今の世に生まれ

能避乎黜点之汚

能く黜点の汚れを避けん

辨毀譽之蕪々兮

毀譽の蕪々たるを辨じ

徒作斯煩言

徒らに斯の煩言を作す

維守心之直諒兮

維れ心の直諒たるを守り

死至矢無還

死至りても還る無きを矢う

衆人之言兮胡足恤

衆人の言胡ぞ恤うるに足らん

与昔人期兮其無慚

昔人と期す其れ慚する無きを

(訳) 今の世に生まれて、誰が讒言の汚れを避けることができよう。毀譽の煩いを弁じ、空しくこの繰り言をする。ここに、正直な心を守り、死んでも節を曲げないことを誓う。衆人の言など気にする必要はない。古人に恥じないことを約束する。

* 非りを嘆く賦。高みに登り、世界を俯瞰するのが「羈鳥辞」と共通する。俗世で非りを免れることはできない、その中で、私は良心に恥じないことだけを行い、昔の賢人に恥じないことだけを行いたいと言う。「垣履祖武」に、履軒という名の含意を説みとることができる。ここに述べられた内容は、その後の履軒の生き方を暗示するかのようだ。履軒の生き方宣言と言えようか。

* 「幽憤賦」「履軒吟」(ともに『履軒古風』巻一所収)でも、古人に恥じることなき人生を誓う。

歎拘(右 拘みを歎く)

* 原文では末尾に「右歎拘」とあるのを冒頭に移した。

日月之繫乎天兮

沛旦夜而周旋

無始而無終兮

若無端之環

孰上而孰下兮

若黃白之卵

赫煌々無改其度兮

胡中虧之可言

日月の天に繋り

沛として旦夜 周旋し

始め無く終り無し

無端の環の若くんば

孰れが上にして孰れが下ならん

黃白の卵の若く

赫煌々として其の度を改むる無くんば

胡ぞ中虧の言うべき

(注)*無端之環……太陽や月の軌道を言うのだから。 *若黃白之卵……渾天説か。

(訳)日月は天に懸かり、朝も夜も盛んに巡り、始めもなく終わりもない。もし、端のない輪のようならば、どちらが上でどちらが下になるのだから。

もし、卵の黃身と白身のように廻いて不動ならば、満ち欠けをどう説明するのか。

維中之与辰兮

自人之国

盈之与食兮

自人之目

夫以人目之眇兮

与人国之藪

以規乎大之日兮

維れ中ると戻くと

人の国よりす

盈ちると食すると

人の目よりす

夫れ人目の眇と

人国の藪さきとを以て

以て大なる日を規り

梁平臣之月

欲其無我違兮

何為計之惑且拙

臣の月を梁り

其の我と違ふ無きを欲するは

何為れぞ計の惑かにして且つ拙き

(校勘)中之島図書館本は「人之国」を「人云国」に誤る。

(訳)日が昇り沈むのは、人の国から言ったものだ。

月の満ち欠けも、人の目から見たものだ。

そもそも、人の小さな目と人の国の小ささでもって、大いなる太陽を測り、家来である月を測り、自分に合うよう求めるのは、何と愚かで拙い考えはないか。

仰食而修徳兮

何有不可

弗食而不修兮

云如之何

貶饌而賁兮

擊鼓而救

日月其解顔兮

驟然而笑

歷失而慶兮

瞻雲而賀

日月其含愠兮

咄爾而呵

食を仰ぎて徳を修むるは

何ぞ可ならざる有らん

食せざれば修めざるは

之を如何せんと云う *云にか(?)

饌を貶めて賁め

鼓を撃ちて救うも

日月 其れ解顔し

驟然として笑う

失を歴て慶し

雲に瞻れて賀するも *天を無批判に敬つても

日月 其れ愠りを含み

咄爾として呵る

(訳)日食や月食を仰いで徳を修めるのは、結構なことだ。

だが、日食や月食がなければ徳を修めないのは、どうしたことか。

お供え物を乏しくして天を賁めたり(普通は天を怒らせるような行為)、攻撃の合図である太鼓を援護する場合に打つても(世の道理に反するような行為)(?)、日月は(おかまいなしに)相を崩し、にっこりと笑う(こともある)。

過失を犯して祝つたり、黒雲垂れ込めて祝つたりしても(両者とも本来反省すべき事態)(?)、日月は(おかまいなしに)腹を立て、こらつと怒る(こともある)。

夫上古神聖之知兮

固未偏

豈有意平開設兮

故立庸主之鑒

後人之知兮

亦有所届

飛籥布教兮

植表而推秋

毫弗遁兮

千載可致

孰牽於先習兮

病於後知

孰岐數与理兮

乘腦而左右

夫れ上古の神聖の知すら
固より未だ偏からざる有り

豈に開設に意有りて

故に庸主の鑒を立てんや

後人の知も

亦た届る所有り

飛籥し布教し

植表し推秋し

毫も遁わざれば

千載も致すべし

孰か先習に牽かれ

病後知を病まん

孰か数と理とを岐り

腦に乗りて左右せん

(校勘) 腦……原文では片偏。

(注) * 飛籥布教……籥は竹の棒。飛籥も布教も占いすることであろう。

引いて、籥も数もはかりごとの意がある。 * 植表……目標を立てる。

(歌) 古代の聖人の知にも至らないところがあった。どうして、わざわざ意図的に凡庸な君主の規範を立てるだろう。

後世の人の知でも優れたところがある。

十分に推し量り目標を立て、時を見極め、少しも過失がなければ、千年先のこともわかる。

誰が昔の知恵に引きずられて、後世の知恵を損なうだろう。
誰が定めと道理とを区別できずに、両者の間で迷うだろう。

夫れ地之小兮

万国某着

為君徳食兮

万君齊淑慝耶

万国之俗兮

有微有惡

従日月而観兮

何曾有疏戚

夫れ地の小さきや

万国 某着し

君徳の為に食せば

万君 淑慝を齊しくせんや

万国の俗は

微しき有り 悪しき有るも

日月より観れば

何ぞ曾て疎戚有らん

(訳) そもそも、地は小さくて、万国が密集している。君主の徳のために日食月食があるなら、万国の君主は徳を同じくするのか。

万国の風俗は卑しいのも良くないものもあるが、日月から観れば、どうしても親疎の別があらう。

太虚為室兮

日月為目

若鋼者地也

太虚を室と為し

日月を目と為し

鋼の若きは地なり

如肉与菜者国也

滴之停者海也

沫之浮者島嶼也

氛埃之棲者人也

日月雖至明兮

烏能別乎氛埃之小大与橢圓哉

肉と菜との如きは国なり

滴の停まるは海なり

沫の浮くは島嶼なり

氛埃の棲まるは人なり

日月 至明なりと雖も

烏んぞ能く氛埃の

小大と橢圓とを別たんや

(注)*『履軒古風』会虞 観天地第一、『天経或問雕題』共に、地・人の
小ささを強調する。

(歌)天空は部屋で、日月は目で、鍋のようなのが地、(その中の)肉と野菜が国であり、汁の留まっているのは海である。泡の浮いているのは島で、塵のじつとしているのが人である。

日月は極めて聡明でも、どうして塵の大きさと形とを区別できようか。

*高みに立ち、世界を俯瞰するという点が先の賦と共通する。世間の人が成見に囚われて、天人相関を信じているのを喝破する。履軒は、伝統に囚われない科学的な宇宙観を持っていたとされる。その精神的根拠をここに見ることが出来る。

*題からして『楚辞』を意識している。あるいは日本版「天問」と言えようか。

(参考)『箕陰集(文集)』巻五「与弟处叔」に「郷也見示九嘆之二、切中異旨之病、深得聖字之要、屈宋之時、豈有是識也哉。至於其字琢句磨、古色鬱然、所謂奴僕命騷者、非邪。愚兄夷欲焚筆研。」とある。

*奴僕命騷(奴僕もて騷に命ず)……杜牧「李長吉歌詩叙」で李賀を称える言葉。李賀をもう少し生かしておけば「離騷」も奴隸とするような大家となったであろう、の意。

二二、遊高台寺(高台寺に遊ぶ)

*高台寺は東山にある、秀吉の北の政所ゆかりの寺。春の桜と秋の萩が有名であった『都名所図会』安永九年(一七八〇)、『日本名所風俗図会』8京都の巻II「角川書店、一九八一」による。寛政元年(一七八九)を始め、三回の火事を経て今では建物の多くは消失したが、履軒が訪れた当時は堂々たる伽藍が存在した。秋の作。

金碧梵王殿 金碧の梵王殿

豪華在当年 豪華 当年に在り

滴地秋草露 滴地 秋草の露

唧唧聴虫音 唧唧として虫音を聴く

(歌)光り輝く大伽藍、当時は豪華だった。

今は地面いつばい秋草の露、チツチと虫が鳴く。

*往年の栄華と今(秋)の静けさとを対照する。「鴨林納涼」と同じく寂しげに詠う。

(参考)『箕陰集(詩集)』巻二「弟处叔与諸子高台寺賞萩花書報日花不適詩料因有此寄」(弟处叔 諸子と高台寺に萩花を賞し、書もて報じて「花 詩料に適わず」と曰う。因りて此の寄有り)と題する詩がある。

そこで、竹山は、萩の花を詠まなかつた履軒に「花は咲いているのに酒ばかり飲んで時を作れなかつただけだろう」と揶揄している。ちなみに、寛政十一年（一七九九）刊の『都林泉名勝図会』には、「秋高台寺に過（こ）して芳宜（よし）の花を見る」と題する竜公美作の七絶がある。

二三、答早土誓（早土誓に答う）（三首）

*早土誓は早野仰斎（名辨之、字土誓）。「永輔義佐寄酒鶏子来、題簡背謝之」時参照。仰斎から宋達を祝う内容の書が届いたのだろう。

野人弊衣裳 野人弊れし衣裳もて
日接黻冕光 日々黻冕の光に接す。
浮游与时俱 浮游は時と俱に
豈是貧寵榮 豈に是れ貧寵榮せん。

（訳）粗末な衣を着て、日々礼服のお偉い方と接す。ただ時任せにぶらぶらする。貧乏人がどうして恩寵に浴しよう。

其二

君作南郷遊 君は南郷の遊びを作し
吾為北京羈 吾は北京の羈と為る
旧飲若相思 旧飲若し相い思わば
恐在垂綸時 恐らくは垂綸の時に在り

（訳）君は南の郷に遊び、私は北の京都で旅人となる。昔のことを思い出すとすれば、きっと共に釣りした時のことだろう。

其三

門無五株柳 門に五株の柳無く
又無黃花園 又た黃花の園無し
閑却淵明廬 閑は却つて淵明の廬
空望白衣人 空しく白衣の人を望む

（注）*陶淵明は家の前に五株の柳を植え、「五柳先生伝」を著した。また閑逸の境地を詠った「飲酒（其五）」中の「採菊東籬下」は有名。

（訳）門に五株の柳もなく、菊の花園もない。だが酔けただけは陶淵明の庵と同じ。空しく世捨て人に憧れる。

*心は既に陶淵明になっている。「白衣の人」（以下「南帰途中口号」の「未化旧素衣」を参照）に対するあこがれを表現。

二四、懷魚膽戲賦（魚膽を懷い戯れに賦す）

*魚膽は刺身。鯛の刺身を懷かしむ。秋の作。

洛城一夜秋風動	洛城一夜秋風動く
江南魚膽今如何	江南の魚膽今如何。
氷盤盛來白銀片	氷盤に盛り來たる白銀の片
菊絲裏花顔色無	菊絲裏花顔色無し。
芥漿澆下著一攪	芥漿に澆し下し著けて一攪すれば
甘脆芳潔絕比喻	甘脆芳潔比喩を絶す。
海中鱗物豈可數	海中の鱗物豈に數うべけんや
至味却風至少者	至味却つて至りて少なき者に風す。

譚名車喚魚旁弱
姓名皆逸神農書

譚名車えに喚ぶ魚旁に弱
姓名皆て逸す神農の書。

張翰元來不相識

張翰元來相い識らず

所以偏懷江中鱸

所以に偏えに江中の鱸を懷う。

試把鱸膾相陪侍

試みに鱸の膾を把りて相い陪侍すれば

厨下只好飼婢奴

厨下只だ婢奴を飼うに好きのみ。

惻心今日在此物

惻心今日此物に在り

口頭一占吊餓肚

口頭一たび占れば餓肚を吊る。

〔校勘〕著一攪……『洛陽叢書』手稿本、中之島図書館本、『履軒古風』手稿本は「著」に作るが、『履軒古風』北山鈔本は「箸」に作る。

〔注〕*張翰……張翰が故郷の鱸を思い、官を辞して故郷に帰った故事
『蒙求』「張翰適意」。「陶潛歸去」と対で述べられる。

〔訳〕京都である夜、秋風が吹いた。ああ、大阪の刺身は今どうだろう。透き通った皿に盛りつければ、大根の妻も茗荷も顔色を失う（たじたじ）。山葵醬油に浸けて一掻きすれば、甘く齒融りよく香り豊かで滑らかなことは言語を絶する。海の生き物は数え切れないが、美味しい物は多くない。譚名は魚偏に弱い。姓名は神農の書『本草』から漏れている。張翰はこれを知らなかったので、ただ川の鱸を思ったのだ。試みに鱸の刺身を持参し相伴させると、台所でもべに食べさせるしかないだろう。私が帰りたいのはこのため。一言口に出すだけで腹が鳴る。

*大阪の刺身を絶賛。大阪を詠う時はなんと生き生きしていることか。

〔参考〕『箕陰集（詩集）』巻二に「得弟処叔思弱魚膾長句和一絶」があ

り、秋の陽射しが強すぎて味噌漬けにしないと送れないと返している。

二五、閑歩偶成

*秋の作。

起来曳短笻

起き来たり短笻を曳き

散步出郭門

散歩し郭門を出づ。

日出東岑上

日は東の岑の上に

爽氣鳥雀喧

爽氣に鳥雀喧し。

輕霧籠竹樹

輕霧竹樹を籠み

山色鬱不辨

山色鬱として辨ぜず。

川水雨余多

川の水は雨余に多く

滔々流我前

滔々として我が前を流る。

板橋追隨者

板橋に追隨する者は

芋栗裝其擔

芋栗を其の擔に装う。

秋景今已晚

秋景は今已に晚く

感焉感我心

感焉として我が心に感ぜしむ。

徘徊忘朝餓

徘徊して朝の餓えを忘れ

又過水東村

又た水東の村を過ぐ。

〔訳〕朝起きて短い杖を突き、散歩して町の門を出る。太陽は東の峰の上に出て、爽氣の中、鳥が騒ぐ。薄い霧が竹林に立ちこめ、山はおぼろにかすんで見える。川の水は雨後に増して、滔々と私の前を流れる。後ろから板橋にさしかかった人は、芋や栗を背負っている。秋の終わりを感じ取り、しみりとした気分になる。徘徊して、空腹も覚えずに、また

川の東の村を過ぎる。

*秋の郊外への散歩を詠う。「秋景今已晚、戚焉感我心」は跋文の「戚焉有感于懷」という文句を参照。

二六、九月十三夜

*秋の作。

晩秋十三夕 晩秋の十三夕

消賞比中秋 消賞中秋に比す

深知古人意 深く知る古人の意を

満盈不再来 満盈再びは来ず

(注)*九月十三夜……日本では、陰暦九月十三夜の月は「のちの月」として、八月十五夜に次いでもてはやされた。履軒は「もろこしの今にも人はしら菊の露の葉末の秋の夜の月」『越吟』第三という和歌も詠んでいる。

(訳)晩秋十三夜、その美しさは中秋の明月に匹敵する。古人が親しんだのもよく理解できる。(これが終われば)満月は二度と来ないから。

*「満盈不再来」はあるいは自分の境遇になぞらえるか。

二七、月下独酌、懷川上習之、此寄十三日

(月下に独酌し、川上習之を懷い、此れを寄す)

*川上習之は『履軒古風』卷三に「答習之」がある。また竹山『箕陰集(詩集)』にも頻出する。例えば、卷二に「予近因貧斷酒習之有詩見寄依韻和答」と題し「虚名噪世偽青蓮、多債難裁独酌篇、但教交友相邀飲、一斗依然旧酒仙」と詠む。酒飲み同士ならではの詩か。秋の作。

独对鳳城月 独り鳳城の月に対すれば

逝事萃我心 逝きし事我が心に萃まる。

独酌不成醉 独酌し酔いを成さず

惘然懷故人 惘然として故人を懷う。

同社多才子 同社才子多きも

詩酒偏思君 詩酒は偏えに君を思う。

与君浣水舟 君と浣水の舟で

幾載共金樽 幾載か金樽を共にす。

今我如別鶴 今我は別鶴の如く

哀鳴慕旧林 哀鳴し旧林を慕う。

一声遙相贈 一声遙かに相い贈るも

情急不抚音 情急にして音を扱はず。

借問浣水月 借問す浣水の月

一斗詩幾篇 一斗詩幾篇。

秋老江魚肥 秋老いて江魚肥ゆ

对酌復誰人 对酌するに復た誰人かあらん。

偏憐山頭月 偏えに憐む山頭の月の

照君詩酒船 君が詩酒の船を照らすを。

(校勘)『履軒古風』には「川上」がない。

(注)*別鶴……陶淵明「擬古」に見える。*暮旧林……陶淵明「帰園田居(其一)」に「羈鳥恋旧林」とある。陶淵明には「帰鳥」と題する詩もある。

(訳)独り都の月に向かうと、過ぎ去ったことが次々と心に浮かぶ。独酌して酔うこともできず、気が滅入り旧友を懐かしむ。懷徳堂には才子が多かった。でも、詩と酒とで思い出すのは君。君と淀川で舟に乗り、何年酒樽を共にしたことか。今私は独りぼっちの鶴のように、哀れに鳴いて、故郷の林を慕う。一声 声を届けようとするが、情が極まってともに鳴けない。お尋ねする、淀川の月よ。一斗の酒で幾篇詩が作れるか。秋が深まって川魚も太ったことだろう。共に酌をする人はいるか。ひたすら不憫に思うのは、山の上に出ている月が君の詩と酒の船を照らすこと。

二八、丁亥仲冬辞京南帰、席上賦上菅公(丁亥仲冬京を辞

して南に帰る、席上賦して菅公に上る)(二首)

*丁亥仲冬は明和四年(一七六七)十一月。

長缺欲帰去 長缺よ帰り去らんと欲するも
難裁別離心 別離の心 裁し難し
慚無鶏鳴效 鶏鳴の效 無く
辜負孟管恩 孟管の恩に辜負するを慚す

(注)*長缺……『戦国策』「斉策」に、孟管君に仕えた馮驩が、薄遇を嘆いて「長缺帰来」の歌を歌い、厚遇を得た故事がある。竹山『貧陰集(詩集)』巻二「擬送友人下第還郷」にも「馮缺向誰彈」とあり、挫折して帰郷する人の無念の表現に、この故事を使っている。

(訳)長剣よ、私はこれから帰るが、別離の心は表現しがたい。ろくな才能もなく、賢君のお役に立てなかったことを申し訳なく思う。

(参考)下二句は『懷徳堂考』下六三頁に引かれている。

其二

誰憐窮巷士 誰か憐む窮巷の士を
曾為知己伸 曾て知己のために伸ぶるも
帰去兼葭岸 兼葭の岸に帰り去り
引領朔鴈天 領を引く朔鴈の天

(訳)誰がこの貧乏な士を憐れもう。かつては知己を得て意を伸ばすことができたが、今、葦の繁る岸辺へと帰り、首を伸ばして雁の帰る北の空を望むのだ。

*自らを「窮巷士」と表現。

二九、菅公賜綈襦為贖、賦此奉謝

(菅公綈襦を賜り贖と為し、此を賦して奉みて謝す)

縹々神女機 縹々たる神女の機もて
剪破嶺頭雲 嶺頭の雲を剪破し、

裁作遊仙服
霞彩帶波文
霞の彩に波文を帯ぶ。

離披春洞裏
春洞の裏に離披すれば

石床不覺寒
石の床にも寒さを感じず。

豈料雲外物
豈に料らんや雲外の物

落在野人身
落ちて野人の身に在るを。

再拝感何極
再拝し感何ぞ極まらん

別淚俱潺々
別淚俱に潺々たり。

帰去充斑衣
帰り去りて斑衣に充つれば

膝下即昼錦
膝下即ち昼錦。

裁ちて遊仙の服を作れば

霞の彩に波文を帯ぶ。

春洞の裏に離披すれば

石の床にも寒さを感じず。

豈に料らんや雲外の物

落ちて野人の身に在るを。

再拝し感何ぞ極まらん

別淚俱に潺々たり。

帰り去りて斑衣に充つれば

膝下即ち昼錦。

(注)*春洞……『和漢朗詠集』『仙家』菅原文時「山中有仙家」時「石床留洞風空私」をふまえるか。そうすれば、自らを出家して洞穴で暮らす仙人に喩えていることになる。*膝下即昼錦……昼錦は錦の衣を着て昼行くこと。出世して故郷に帰る喩え。『蒙求』下「老萊斑衣」に、老萊子が歳七十にして、父母の前で模様のある派手な服を着て、赤ん坊のまねをし、孝養を尽くした話がある。

(訳)飄々とした神女の織り機で、峰に懸かる雲をちぎって、仙人の服を裁つと、霞の模様は波文を帯びています。春の洞で広げれば、石の床にも寒さを感じません。どうして予想し得ましょう。天上の物が、私のような野人の身に落ちてくることを。再拝して感極まり、(感激の涙が)別れの涙とともに流れます。帰って斑衣にあてれば、父母の膝元で故郷に錦を飾ることができます(孝養も尽くせるし、故郷に錦を飾ることに)なり、一挙兩得であることを言うか。

*履軒の父中井覺庵は一七五八年に既に亡くなっている。この場合、膝下というのは母であらう。

*佐野大介「中井履軒の「孝」観」『懷徳堂文庫の研究 共同研究報告書』湯浅邦弘編、二〇〇三から推察すると、履軒は「老萊斑衣」のような話は好きでないし、信じてないタイプのはず。

三〇、南帰途中口号(二首)

*口号は口を衝いて出る即興の作。

長缺已彈尽 長缺已に弾じ尽くし

扁舟今帰来 扁舟今 帰り来たる

一掛京洛塵 一たび京洛の塵を掛えば

未化旧素衣 未だ旧の素衣を化せず

(注)*長缺已彈尽……「丁亥仲冬辭京南帰、席上賦上蒼公」注参照。
*未化旧素衣……晋陸機「為顧彦先贈婦」(『文選』卷二四)に「京洛風塵多、素衣化為緇」とある。また、『論語』陽貨篇に「不曰白乎、涅而不緇(孔子が自分が世の中の悪い風潮に染められないことを言った言葉)」とある。

(訳)すでに長剣を鳴らし尽くし、今私は扁舟に乗って帰り来る。一度京都の塵を払うと、白い衣は元のままだ。

其二

周歲京洛遊 周歲京洛に遊び
胸襟飽烟霞 胸襟 烟霞に飽く

綿装何長物 綿装何ぞ長物

惟有奚囊富 惟だ奚囊の富める有るのみ

(歌) 京都で一年を過し、胸の内は京都の景色でいっぱい。帰りの荷物はなんと無駄なものだろう、ただ詩が増えたただだ。

*その増えた時の内容が「寂しさ」であることからすると、私の京都行は「虚しい思い」を味わったただだと表明していることになる。

(参考) 履軒の手録『履軒小乗』中に京都行の携帶品目があるが、その末尾にこの詩が置かれている。『履軒小乗』には、おびたらしい物品と書物名が記されており、西村、山中浩之ともに一時の仮寓の装いではなかったと言う『懷徳堂考』および『中井竹山・中井履軒』。竹山「孤雁歌送処叔弟之京」(孤雁の歌。処叔弟の京に之くを送る)『箕陰集(詩集)』巻二もこの京都行を履軒の独立と考えているようだ。『懷徳堂会餞詩巻』でも、参加者は京都行を履軒の出世ととらえている。『洛納奚囊』に見える早野仰斎らの便りも出世を祝う内容が多かったと推測できる(『答早士蒼』三首)。そうであれば、なおさら履軒の挫折感は強まったであろう。

(跋)

丙戌之冬、余北游于京、客於吏部督公門下。公神明之裔也。好學愛士、能忘其貴而為布衣之交。期年余辭而南還、則廬于長渠之上。拮据既竣、探囊得詩數十篇、皆京中之稿及往還途上之作。稍々披覽之、感焉有感于懷、弗忍毀也。取而次第之、命曰洛納奚囊、以供異日之觀云。嗟夫、余自京師至未數月也。然其動感既如斯、則異日髮種々而回顧少壯之遊于數十年之前、

恐有不耐說者。

明和四年季冬朔

履軒幽人書 印(積二徳)

丙戌の冬、余北のかた京に遊び、吏部督公の門下に客たり。公神明の裔なり。學を好み士を愛し、能く其の貴きを忘れて布衣の交りを為す。期年にして余辭して南還し、則ち長渠の上に廬す。拮据 既に竣わり、囊を探れば詩數十篇を得。皆 京中の稿 及び往還途上の作なり。稍々之を披覽すれば、感焉として懷に感有り、毀つに忍びざるなり。取りて之を次第し、命じて洛納奚囊と曰い、以て異日の觀に供せんとしか云う。嗟夫、余京師より至りていまだ數月ならざるなり。然れども其の動感 既に斯くの如くんば、則ち異日 髮種々として少壯の數十年の前に遊ぶを回顧せば、恐らくは說むに耐えざる者有らん。

(注) *吏部……式部の唐名。高辻卿は一七六五年に式部大輔になつてゐる『公卿人名大事典』日外アソシエーツ、一九九四。*長渠……長堀のこと。履軒は帰阪後、懷徳堂へは戻らず、長堀に居を構えた。*拮据……滞ること。*種々……髪が薄くなつた様。

(歌) 丙戌(一七六六)の冬、私は北の京都に遊學し、式部高辻卿の門下に客となつた。卿は由緒正しき家柄で、學を好み士を愛し、身分の違いを忘れて私と付き合つてくださった。一年で私は辭して南に帰り、長堀の畔に庵を結んだ。ようやく落ち着き、詩の袋を探してみると詩が數十篇見つかった。すべて、京都での作もしくは往還途上の作である。いささか目を通してみると、しんみりと心に感じるものがあり、捨てるには忍びない。そこでそれらを整理し、『洛納奚囊』と名付け、將來の思い出として残すことにした。ああ、私は京都から帰つてまだ數ヶ月に過ぎな

いのにこのように感じるところがあるということは、将来髪が薄くなつて数十年の前の少壮の遊学を回顧すれば、恐らくは読むに耐えないものがあるだろう。

おわりに

『洛汭奚囊』が表現しているのは京都での寂しさである。寂しさというのは、故郷への思いが一番大きいようだが、冷遇を示唆する表現もある（「聞槐庵兄落新居」「答早土著」。また、履軒は忌憚なく学問の話をすることを望んでいたが、それもままならなかったことが推測できる（「偶成」「宿居易館」「奉酬伯兄及諸友見懷諸作」「碧山樓陪管公、賦奉酬」。『洛汭奚囊』を見る限り、履軒にとって京都での生活は決して楽しいものではなかったようだ。歎びを感じさせるものは、旧友の訪問、手紙、大阪の自由な生活の想い出だけだったらしい（「永輔義佐寄酒鶏子來題簡背附之」「偶成」「憶旧遊寄早土著」「答早土著」「懷魚胎戲賦」「月下独酌懷川上習之此寄」。そして、結局は高辻卿に重用されることなく、大阪に帰ることになった。あの大阪に帰れるという喜びもあるが、やはり無念と挫折感とは免れない（「丁亥仲冬辭京南帰、席上賦上管公」「南帰途中口号」。だが、この経験が私の生き方を再認識させてくれた。私はもう決して官仕えしようなどとは思わない。……履軒の気持ちはこのようであったのではなからうか。

履軒は、京都行以前にすでに隠逸の傾向と高みから物事を眺める視点とを有していた（はじめに「注三参照」。そして、その傾向、視点は京都にいる時に一層はつきりとした（隠逸傾向・「述客中況、答早土著」「宿居易館」、高み・「鵜島辭」「九歎」。履軒にとって京都行は自らの生き方を再認識する経験であったと言えるかもしれない。履軒はその後、幽人として自らの精

神的王国華胥国に遊ぶが、その人生を決定づけたのがこの京都での一年だったと言えるのではなからうか。孔子が諸国遍歴の挫折を経た後に學問に専念し歴史に名を残し、子思孟子が発憤著書した（歎毀）ように、履軒はこの経験により、迷いなく學問に全精力を傾け得たのかもしれない。それが履軒にとって幸せだったかどうかは知らないが。

*履軒が一年で帰阪したことにについて、西村時彦は、履軒が京都で皇室の衰微と公家の無氣力とを見、幕府の盛んな中、王道の行うことのできないのを悲しみ、仕官の念を断つたと推測する（『懷徳堂考』下六三頁）。だが、『洛汭奚囊』にはその推測の裏付けは見つからない。西村は、明治の時代思潮（あるいは自らの思想）を反映して、竹山・履軒を尊皇の志士に祭り上げようとする傾向があるので注意が必要である。

一方、帰阪後の私塾水説館設立について、山中浩之は、京都での生活で自信を得て独立を決意したものとする（『中井竹山・中井履軒』一九六頁）。だが、京都行自体すでに自他ともに独立と認識したと考えられる（竹山・「孤雁歌、送処叔弟之京」「箕陰集（詩集）」卷二、拙稿『懷徳堂會餞詩卷』訳注―中井履軒京都行の送別詩―附録を参照。履軒・「既上舟、奉寄伯兄（其二）」また、自信を得たというのも『洛汭奚囊』の内容からは的を射たものとは言い難い。

帰阪後の履軒についても、本稿同様に、履軒の詩文から探ることができ。それについては、稿を改めたい。

〈附録〉

「はじめに」で述べたように、履軒の漢詩集『履軒古風』の巻二は『洛
納奚囊』と重なるが、作品に出入がある。以下、その異同を記し、履軒の
心情をよく表している作品として「離恨」を載せる。

・『履軒古風』にあつて『洛納奚囊』にないもの……「離恨」「詠王祥伝」。
・『洛納奚囊』にあつて『履軒古風』にないもの……「離席」「奉答伯兄」「既
上舟」「奉寄伯兄三首」「雪朝奉呈昔公」「丁亥早春自帰省浪華至、題所携
梅花、上昔公」「碧山樓陪昔公賦奉酬」「遊高台寺」「答士蒼 其二、其三」
「九月十三夜」「南帰途中口号 其二」。

離恨

瞻彼北山	彼の北山を瞻 ^み
發我南音	我が南音を發す。
清商入徵	清商 ^{しやう} 徵 ^{ちやう} に入り
凄惋動人	凄惋 ^{しやう} 人を動 ^{うご} かす。
有客問我	客 ^{きやく} 有り我に問 ^と う
何為乎然	何 ^{なん} 為 ^{なり} れぞ然 ^{しか} るや、と。
人鮮兄弟	人兄弟 ^{なん} 鮮 ^{すく} なく
他鄉離散	他郷に離散 ^り す。
素秋將央	素秋 ^{すしゅう} 將 ^{まさ} に央 ^{おと} きんとし
草木且變	草木 ^{さうぼく} 且 ^{また} に變 ^{かは} ぜんとす。
霧露侵体	霧露 ^{きよ} 體 ^み を侵 ^し し
思夢煩襟	思夢 ^{しむ} 襟 ^{きん} を煩 ^{わづ} す。
匪飢匪渴	飢えず渴 ^{かつ} せざるも
伏枕輾轉	枕 ^{まくら} に伏 ^ふ して輾轉 ^{てんてん} す。

何日斂翼 何れの日か翼を斂^{しぢ}むること
于彼旧林 彼の旧林^{きうりん}においてせん。

(注) *南音……南の音楽。 *清商入徵……商徵ともに古代中国の音階。
*匪飢匪渴……『詩經』『小雅』『甫田之什』『車牽』に見える。

(訳) あの北山を見て、我が南の音楽を奏でる。

調べは短調へと変わり、その凄まじさは人を動かす。

ある人が私に尋ねた。「どうしてこのようなのですか」と。

(私は答える)「兄弟が少ない上に、他郷に離散しているのです」と。

秋はまさに尽きようとし、草木はまさに色褪せようとしている。

露が体を侵し、悩ましき夢が心を苦しめる。

飢えも渴しもしていないが、枕に伏せて寝返りを繰り返す。

いつになったら、あの故郷の林で翼を休めることができるのだろう。

(大阪府立工業高等専門学校助教教授)

大阪府立中之島図書館蔵『毛詩品物図攷雕題』について

井上 了

はじめに

『毛詩品物図攷』とは、岡元鳳の本草書である。天明五年刊本として広く流布しており、綿葉山房石印本（宣統二年）や台湾影印本も存在する。二〇〇二年には山東画報出版社から王承略氏による簡体字点校本が発行され、容易に閲覧できるようになった（ただし点校本の底本は宣統石印本）。紙幅の關係上、該書の詳細については校点本の「整理本序」に譲りたい。

さて、中井桐園『天楽樓書籍遺蔵書目』（懷徳堂文庫蔵、天保五年抄本）五番ホに「先生頭書」として「毛詩品物 合卷 一冊」とあり、中井天生『水哉館遺編目録』には『履軒先生雕題 毛詩品物攷 一卷 未刊』が掲げられている。俗に『毛詩品物図攷雕題』と呼ばれるものだが、従来、その内容はもとより、原本の所在すら未詳とされていた。

筆者は大阪府が所蔵する履軒の著作について基礎的調査を行なった際、府立中之島図書館蔵の天明刊本『毛詩品物図攷』の欄外に大量の書入を確認した。該館の図書カードはこれを「中井碩果書入本」とするが、その筆跡は碩果のものに似ず、筆者の見るところでは履軒の手に酷似する。またこの書入には塗抹訂正の跡が幾重にも残されており、既に完成していた雕題を他者が転写したものとは思われない。さらに、この書入の内容は、履軒『左九羅帖』『画鑑』に示された説と部分的にせよ一致する。筆者は、こ

れが履軒自筆の『毛詩品物攷雕題』か、すくなくともその極めて忠実な抄本であろうと推断する者である。

いま当該資料を紹介し、翻字を試みる。菲才ゆえの謬は諒されたい。

凡例

底本は、大阪府立図書館蔵『毛詩品物図攷』（天明五年杏林軒五車堂刊本）。昭和十三年六月七日受入。請求番号「一八三・三／六四」。資料番号「二九二二八」。旧蔵者を示す識語や印記などは認められない。版心の状態から合綴本と思われる。

底本に施された書入のみを摘録する。本文への朱線引や塗抹などは、悉く之を略した。

書入に対応する本文の箇所については、巻数と表題のみを示す。ただし、特に本文（対応箇所）を示す必要がある場合のみ、本文を「」内に引用した。

いわゆる正字や俗字の類は、原則として当用漢字に改めた。また変体仮名等も現在一般に用いられている仮名表記に改めた。

虫損などにより判読不能な箇所は「□」とし、同定に至らなかった文字は「〃」とした。また適宜、句読点等やルビを補った。なお、片仮名のルビは原文にあるもの、平仮名のルビは井上が補ったものである。

毛詩品物圖攷卷一 雜題

參差荇菜 アサ、

或曰、古之荇菜、今之蓴菜矣、本草諸書並不當據、今之行不中食菜、字無所當、采之亦不可筍、昔人云、「江東人食荇、」蓋謂蓴也、非後世之荇。

凡荇蓴根著于水底者、其莖甚長、隨水之淺口、此圖無長莖、且沒銀股形、又不見葉浮水面之勢口失之。

根生長莖而花葉著于莖也、水底之根不得徑生花葉矣、若此圖、與蓴無弁。

于以采蘋 カハラハ、コ

按、以繁衍易生得名、是也、然其得名在漢地也、今以蟾蜍州難生、疑佐渡產者、則誤矣、夫風氣各國夙別、豈可一概以名求之哉、是圖恐舛、當以佐渡產者為真。

此圖是常之ハ、コ矣、未覩カハラ之狀、

名物解云、「佐渡產者、莖葉似艾、葉向背皆白、蟠然。」

于以采蘋 ドウガメノカ、ミ

朱伝據陸疏混大小而言、其葉非誤認也、仍是大辨之意矣、但欠詳耳。

陸疏云、「蘋、今水上浮萍是也、其大者謂之蘋、小者曰萍。」

蘋浮于水面、葉與水平、此圖失其象。

于以采藻 モ

按蓴衣十二章、藻居其一、古制雖不可考、而今錦文染色多作藻文、皆長莖宛轉旁生葉、蓋十二章之遺也、今川水中往々見此物、即古所謂藻也、世俗

未知何稱謂非如蓬蒿細絲魚鰓者、又非馬藻、但宜以形狀求焉已。

海藻和名ナノリン、形狀略与宛轉旁生葉者相類、似可相徵。

陸璣云、「茅之白者、古用包裹礼物、以充祭祀、縮酒用、」今按所謂白者、指葉也、茅中有此一穗、非指花穗。

彼茁者葭 ヨシ アシ

俗說、葭蘆葦為一物、邦名与之、蓋以其大為良材也。

葭蘆葦葦為一物、邦名安之、蓋以其小為不材也、唯葭中實別為一種、別有陸生者、較堅實、邦名遠伎、未得漢名、俗以葭充之、非也。

ヨシアシノ名ハ右ノ如クニテ、サテ専ニアシヲ大名ト云ヘシ、和歌ニヨシアシヲ連テ詠スレトモ、トリハナチテハアシト詠ナリ、ヨシトバカリハ詠コトナシ、然ヨシアシハ元草名ニアラズ、縁語ナリ。

匏有苦瓠 ヒサゴ

甘可食如瓜者為瓠、不可食唯可包裹收蔵物者為匏、制字自有意。匏未嘗有不苦者也、不苦即非匏。

采芣采芣 葍スカンパウ 葍未詳

有俗名「唐菜」者、又唐菜ノ中ニ有高菜有賤菜、是即葍葍云。

唐菜ハ菰トモ云、然ハ古名葍葍、今名菰ナルニヤ。

加茂之淹菜有名、蓋菰云。

誰謂荼苦 ノヂサ

此圖說皆謬、朱伝「荼苦菜、」非以「苦菜」為草名也、是論荼之味耳、正与

「薺甘菜」作对也、猶謂櫻為惡木、蓬蒿為惡菜也、朱伝又云「薺屬」与良
相「茶蓼」之茶同、在是時、不可易者。

〔經有三茶〕 惟有二茶而已。

是園全是薺矣、薺之無刺者可食、豈苦菜耶、果然宜臥以ヒメアザミ也、又
月令称「苦菜秀」、若薺花不得称秀、是皆可疑。

其甘如薺 ナツナ

朱伝「甘菜」、非以為草名也、脱詳于前、此謬耳。

自牧帰夷

〔伝薺茅之始生也〕 伝「茅」下疑脱「秀」字。
所謂「茅針」、是茅秀之初生者、非茅也。

爰采唐矣 ネナシカツラ

〔爾雅唐蒙女蘿云々〕 当直以爾雅為誤、不必回護。

綠竹猗猗 タケ

本或作「葦」、故有王弼解耳、今註疏本亦然、未嘗以葦為王弼也、今集伝本
作「綠」、蓋古來有兩本也。

藋莪揭揭 フキヨシ

前見。

芄蘭之支 ガ、イモ

芄蘭、ユフカホ。

邦名「夕顔」、華葉略如牽牛、花白而紫、細而四出、結実円長如丁香、故
俗名「丁子茄」、其一頭円、一頭銳、円頭帶萎花之莖久不値、正類平腦之形、
又三五累、者類平腦、蓋詩所謂「芄蘭」是也、若「蘿摩」、朱子不視觸繇之
状、蓋失之。

今人往々謂匏瓠諸花為夕顔、亦謬、此謬亦旧矣、如国詩「夕顔棚下納涼」、
蓋指匏瓠也、失古義。

一葦杭之 見藋

一葦、謂小舟、非物産。

焉得證草 ワスレクサ

集伝誤以合飲為草名以解也、不必回護。

藋花美、親之可以忘憂、故名焉、非食之、本草諸説、亦皆謬。

彼黍離離彼稷之穗 黍モチキヒ 穂ウルキヒ

大倉州志云、朱伝「似蘆高丈余」、是蘆粟、^{トウモロコシ}非黍。

或曰「粟也」、是謬説。

曲礼有「飯黍」語、黍亦非不以為飯。

中谷有蓷 メハジキ

〔離〕、疑当作「蓷」、字似佳、与「蓷葦」之「蓷」異。
爾雅、「蓷、蓷。」也。

彼采蕭兮 カハラマツハ

集伝從陸疏也、其旨「蕭荻也」、蓋有脫誤耳、「牛尾蒿」亦見于陸疏。所圖是蒿類、非蕭也。

彼采艾兮 ヨモギ

艾独不明其莖葉、何也。

丘中有麻 アサ

麻之為穀、是今之胡麻、非可統之麻、子雖可食、不可以為飯粥。

方秉蘭兮 フチバカマ

湖之王子濱有沢草綠樹而生高四五尺、每枝五葉、夏發白花、狀似今之蘭、花白而小、或曰、「此乃古之蘭矣」、是說似得當、旧解蓋失之。

是草和名無邊、為貢獻之品、鄉人呼為「郁子」者蓋無稽。

据湊消之時、是芍藥開花之時、春末夏初、乃古之蘭今之蘭皆未有花也、遊人若采、無花之草、其何為。

不能執稻粱 稲イネ 粱アハ

古曰「粱」、今日「粟」、不得相解也、朱伝謬。

俚言訛謬、粟萁粱名、非「粱隠」。

粱黃穀、故稱「黃粱」、亦有白粱、故以分焉、又曰、黃粱俗間蓋以「黃粟」為定名、而後遂去「黃」、單呼「粟」也、名稱之轉移、多此類已。

蔽蔓于野 ヤブカラシ

今和ノ「サンキラヒ」ト云モノ、厥ニ似タリ。

采苦采苦 見茶

采苓之「苦」、与谷風茶苦之「茶」不同、宜別出圖也。宜移前茶苦圖入于此。

葭葉簾蒼 葭ヒメヨシ

「葭」：「簾」古蓋同音矣、可以為簾之艸、故曰「葭」也、「」之有無、不足論已、猶「耶」之与「第」也、用草為「葭」為「葭」、用竹為「第」為「簾」。

可以漚菅 カヤ

「カヤ」スゲ

菅一物而有陸生有水生、陸生者一名「莖」、此亦有「山菅」之名。

或云、「菅」ニ名、「スゲ」地名、「菅原」非水沢也、古以菅為簾、今以為笠為簾者、無水陸之別。又按、「スゲ」是大名、陸生者為主、而水生者亦同稱焉、彼有「菅莖」之名、而此不異名、不必古今之異也、莖稱「山菅」可也、唯東門之時、則無水陸之別、是古人亦混用耳。

「秋花」モ茅ナリ、是ハ花白カラズ、一種中ノ別ナリ、別ニ菅名ヲ「叵」モ同類ナレドモ別ニ名アリ混ス「菅」ハ茅ヨリ低小ナル物也、詩云「面爾于茅」、冬ニナリテ茅ヲ刈ニ夏花ノ者ヲ扱ヘキヤウナシ、此ニテ皆茅ナルヲ知ヘシ。

浸彼苞根

陸說非。

浸彼苞著 ハコロモ

或云、ハギ漢名未明、或以為胡枝花、或以為天竺花、未詳當否、蓋此即古之著草矣、形狀略與圖經合、惟「花形如菊」一句為未合而已、姑錄備考。

四月秀莢 ヒメハギ

通雅云、莢、狗尾草也。是蒔族。

〔謝安乃云……〕是郝隆嘲謝安之語、非謝安之言。

六月食鬱及藟 ノブダウ 鬱見木部

〔ノブダウ〕イヌエビ

七月烹葵及菽 葵カンアフヒ 菽マメ

圖說皆謬。

古之葵、是今之蒔矣。

葵與欸冬、二物相類、本草諸書以葵混乎欸冬、而葵失其名、乃更指他物為葵、如錦葵蜀葵是也、雖帶葵名、而非真物、庖厨本草詳弁之、允當。

和名抄引、「崔禹錫食經云、蒔、和名布々木、葉似葵而円広、其莖可煮噉。」所謂葵、蓋指蜀葵耳。

通雅謂、葵為欸冬、雖未詳密、而其差不差。

「菽」雖總名、而單舉之、必是大豆、以大豆為之主、而用尤広也。

七月食瓜 ウリ

瓜、ナウリ。

可漬可烹、又可生食、似甜瓜而大、俗名「菜瓜」、「菜」謂鯉也、蓋可用為食鯉之瓜、云芳甜瓜、唯可生食矣、不可烹漬、焉得當常食。

臠似瓜而小、同類而別種、非近本之謂。

毛詩品物圖攷卷二 雕題

草野之萃 ウキクサ

既云野之萃、必非水物、宜以毛伝為謬。

朱伝亦從爾雅耳、所謂「蘋蘩」、蓋蘩蒿之屬耳、不必深求、若不得其詳者、勿圖可也。

食野之萃 ヒシワ

圖不見銀股蔓生之狀、何也。豈邦名未當耶。

甘瓠果之

瓠甘而匏苦、既在前条、呂說未密。

南山有臺 スゲ

有水生、有陸生、皆是菅矣、陸生者一名臺。若生水中者、不得「南山有臺」之語。

北山有菜 アカザ

葉、シバ。

俗用「芝」字者是也。若葵園圃或湿地沢辺生者、北山恐無之。

薄目采芭 アサギキク

弁解云「チサ」、此宜附其是非。

下莞上簟 ツクモ

莞園者、今園有偏勢者、可憾。

薦与女蘿 サガリコケ

薦、寄生也、但寄生有二類、若桑寄生是木本。其木本、称寄生木可也、其草本、固称寄生草也。後世詩賦所称、並草本耳、無木本。

薦在木部故也、「女蘿松蘿也」、不須曉。

薦、古賦「古計」、与「苔」同曉、蓋以其根不着于地、故為一類已。即寄生之意。

李德裕邪正口弁有言、「松栢之為木、孤生勁特無所因倚、蘿薦則不然、弱不能立、必附他木」、以見薦蘿之為一類甚明。

又楊收伝曰、「蘿薦附灌木」、亦可徵。

蘿実寄生矣、薦元非寄生、其根在土、然延蔓之後、蔓自生根着樹上、放木根、雖有断絶而不死、若寄生草、称準寄生可也、施字根在土在樹皆可用。

木部薦園解宜併于此、故先辨焉。

終朝采綠 カリヤス 見前

王芻、恐非可食之菜。

綠菖蒲。

白華菅兮 見前

白華菅、謂菅有白華也、菅草名、不問濕否、朱伝亦襲注疏之謬、舍之可也。

露彼菅茅、茅菅。

薺茶如飴 ツボスミレ

薺、「スミレ」ト訓ハ謬也、別物ナリ。

ツボスミレノ花ハ藍色ナリ、紫ト云カタシ。

「茶苦菜」、当作「茶」。薺風所謂苦菜、亦非謂草名也、称其辛辣之物也。

薺之荏菹 エンドウ

荏与菹是二物、伝以為一物、蓋誤。郭璞・李巡釈荏為胡豆、即豌豆矣。菹風有荏、乃合称荏菹亦可然、是詩与麻麦瓜瓞等相連、似非一物。

維靡維芭 梁在前

時珍曰、「赤黍曰薺、白黍曰芭、」似長。

集伝同「粟」字、当削。

維筍及蒲 タケノコ

蒲根可食者、宜図于此。

貽我來牟 來ムギ 牟コムギ

「麥」字從「來」、是「來」者「麥」之本字、音莫獲反、不當作別音、「來牟」即是「麥麴」矣、孟子所謂「麴麥」正与此同。

「麥」者大名也、但与「麴」作對、則為小麥耳、語意與「麴」、「鹿」相類。

以麥茶糲

爾雅「茶」作「蔎」、註引是詩亦作「蔎」。

薄采其芣 ジュンサイ

今草菜、色不赤。

或云、今世人所食草菜葉無缺、蓋無缺為草、有缺為芣、大同而小異。

毛詩品物圖攷卷三 雜題

標有梅 ムメ

梅以為遷寒、尚矣。此以其大名解可也、何必分別小名、且如杭樹、似梅者、焉得用猗毛詩之梅哉。

林有檇楸 クヌキ

檇木名、檇猶澁也、非木名、木之檇、猶草之澁、文書可徵。

唐棣之花 ザイフリ

唐棣解詩甚易、凡有花之木、皆無所妨、唯論語唐棣言「偏其反、」必如梨花海棠花者而後可、恐是與常棣一類、古來解者皆誤。

通雅以為常唐音近、是一物。

凡彼栢舟 ヒノキ

栢、カシハ、マキ、俗名ヒノキ。

扁栢、ヒノキ。

側栢、仏手栢、コノテカシハ。

吹彼棘心 コナツメ

「難長養者」、詩解之泥者、不可從。

此是荊棘之棘而滋生者、又棘之短小者曰棘。所謂圖棘食實者、與荊棘自別。棘棘是二物。

山有櫟 ハシバミ

今山徑荒野及沙岸、與荊棘雜生結子如栗者、即古之櫟也。和名サ、グリ、俗名シバグリ、有刺喜遷延路、所謂「櫟蕪」是也、陸疏云、「華栗叢生、大如杼子、中仁皮子、形色與栗無異也、但差小耳、」豈古之櫟、與諸家所說樹較高大、子形如櫟、不得言似栗、而小且不睹櫟蕪之義。

此邦所謂「ハシバミ」者、與諸家說合、而味短不中食、恐不足充遷延饑饉、必非古之櫟、諸書所載「芋栗」、「栢栗」、蓋亦櫟類云。

櫟中亦必有大小數種、「樹之櫟栗」、是其差大而美美者與徑路櫟蕪者、蓋有不同。

樹之櫟栗 クリ

見栗有大小、座又有異而可知矣。

椅桐梓漆 椅イ、キリ

陸疏云、「梓夷桐皮曰椅、今人云椅桐也。」鄭夾際說同此。

梧几也、元非木名、宜梧之木、故配桐為名也、古不單呼梧矣。

桐キリ

不得更以「梧」釈桐。

漆ウルシ

漆於琴瑟、亦不可欠者、其首尾之銘、豈有須梓者耶、不可言無用於琴瑟。

椅楫松舟 椅イブキ 松マツ

弁解、椅ビヤクシン、非也。ホコカシハナルベシ。

不流東藩 カハヤナギ

草亦無不可。

無折我樹杞 コブヤナギ

詩之三杞、疑竟是謬說、即合為一物、於詩意無所妨、唯孟子「杞柳」有取於木性不可移、然以帶柳為名、則是柳之一種、與單呼「杞」者不同、宜別論焉。

三杞即合為一、何為不宜、蓋時於杞取義、唯食料之枸櫞而已矣、其他亦皆無妨礙、則當悉以枸櫞解。

或云、「古人以其山生野生及食料等分別之耳、不當生疑」、是長者之言、而實舛理、今一二弁之、山采杞、旧以為枸櫞而南山有杞、則以為狗骨、夫北

山既已有枸櫞、南山無折我樹杞、是鄉村所樹、若食料之枸櫞、尤為相宜、何故更作杞柳之解、湛、露在杞棘、必以為狗骨、則枸櫞獨不蒙而露者耶、餘可推而知焉。

顏如舜華 ムクゲ

舜華、同、文字集略曰、葬地蓮花、朝生夕落者。和名木波知須、据此地蓮、即木芙蓉矣、可備一說。

隱有柎 ネズミモチ

柎、カシ。

柎可以為三木者、故械亦謂之柎、邦名加志、械亦訓加志、或加世、一也、器名転為木名也。

集于苞栩 ハハツ

〔ハハツ〕イチ。

櫟ノ実ナキモノヲ栩トス、櫟同。

万葉ニ「イチノ木」ト詠ス、是ナルベシ、ソノ実ヲ「イチヒ」ト云。

隱有楊 タチヤナギ

「タチ」ノ姓ハツケヌガヨシ。

有桑有梅

桑之桑、梅杏之梅、足矣、何必穿鑿焉、凡古人取近于目者起興、而後人必搜窮僻以作解、宜乎其不合。

隔有六駁 ムク

〔駁駁音同〕「駁」・「駁」同字。

山有苞棣

「棣」、大名也、何必論常唐。

隔有樹榧 アリノミ

有無表名、是反語、恐是一物。

蟻喜食梨、故呼梨子為「蟻実」、〔蟻〕說為「有」、有之反為無、故亦呼為「無実」也、並是梨子矣、不宜別呼榧為「有実」、且「有実」・「無実」皆果名、非木名也、縱令如圖說、梨木既呼為「無」、則榧木當呼為「有」矣、不得拊実字為木名、不然、宜稱「アリノミノキ」、亦太冗長。

六月食鬱及藟 ニハムメ

毛伝似長。

常棣之華 ニハサクラ

今世俗所謂海棠、即是棣矣。

何玄子曰、「如垂絲海棠一般」。

凡明諸儒、多言常棣花兩三相麗、此圖殊不相肖、疑是和名未当者。
ニハウメ、以果実為稱也、恐非同類。

楊柳依依

「楊柳依依」、与「櫟栢濟濟」、語意相類。

「楊柳」、謂楊与楊也、「蒲柳」解頤。

南山有杞 ヒイラギ

南山亦枸杞耳。

薦与女蘿 ヤドリギ

「薦」字從「艸」、必是草本、宜収于草部、本邦旧說為「都多」、即是蘿藦之屬、雖未知所本、恐実得本義也、時与女蘿同施于松上、必是係蔓矣、若夫葉寄生、是木本安得施哉。

今按、薦蘿屬秋後葉紅者、漢画中往、觀施于松上者是也。

按、陶弘景云、「薦是桑上寄生、如蘿松上寄生」、鄭樵曰、「寄生有二種、大曰薦、小曰女蘿」、是諸說未得當、然据此等語可知草本係蔓、亦通稱「寄生」焉、已以其根著于樹上也、然則古人稱「薦」為寄生、非訛謬也、但後人硬執木本說、遂致大差耳。

維柞之枝 イヌツケ

詩詠柞者五、並同柞櫟耳、是篇唯以采菽、車葵為「鑿子木」、不可曉於詩義、亦無所據。

柞櫟拔矣

櫟櫟同、クヌギ。

其檀其榘 ギヨリウ

爾雅釈「檀」作「河柳」、元是謬說、不可從。

櫻、今有大木、枝似柳、而葉似茵陳者、是也。古人多言「如松」・「似栢」、殊不相類、又其生不必河邊。

盤寿杖、以扶老製者、則口竹也、非栢。

其藥其栢 ヤマクハ

今諸州往、出野蜜繭布、其所食恐是藥或栢、但未有所考。

梧桐生矣 アヲキリ

「アヲキリ」アヲニヨロリ

此宜合于椅桐条、在前。

毛詩品物圖攷卷四 離騷

閔閔離騷 ミサゴ

「有定偶——有別、」竟是謬解、說詩者之臆度耳。

狀類于鷹鵄、故有「魚鷹」之名、又是山禽、非水鳥、集伝未得其真、所謂

「百聞不如一見」者也。

陸疏云、「離騷大小如鵄深目、目上骨露出、」

嘴毛鷹ノ如ク鉤曲ス、面目並ニ象ヲ失。

黃鳥于飛 カウライウグヒス

或云、此圖是圓眉鳥、非黃鸝也。

格物論云、「鶯大勝鸝鵒黑眉、嘴尖紅、脚背、遍身黃色、羽及尾有黑毛相間、三四月間鳴聲音円滑、」形状与本圖不合、鶯豈亦有數種、与据金衣黃袍ハ語、

格物論似長。

維鳩居之 ハト

「此鳩不指一種、」是也、但鳩多種類、大抵亦当分二色、曰野鳩、曰家鳩、家鳩鴿也、人家為營巢而棲之、則無事鴿巢矣、居鴿巢者、必是野鳩矣、在野鳩、則不當更論其種。

或曰、鳩無家野之分、其色蒼灰、其声囁々者俗名塔鳩、是為本色、巢于人家者、居于鴿巢者、唯是為多、其他數種皆其文別不當舉論、譬之、家猫毛色肖虎者為本色、而黑白赤斑、亦皆無非猫、人亦不為其黑白而別製名也、犬亦然、故鳩唯一種、毛色分本末可也。
或云、鴿字元取合音而製焉、非別有一。

離騷鳴雁 カリ

「畏寒、」未得物理。

流離之子 フクロウ

「流離之為鳥不可改也」亦可改也。

莫黑飛鳥 カラス

「皆不祥之物」「皆」字元帶狐而言也、此摘出一物、宜省「皆」字。
鳥鴿元同物、若慈鳥小形者別是鳥鴿中之一種、勿以此乱大名、可也。
是圖、蓋欲面慈鳥小形者也、故失於形象、与說不合。

于嗟鳩兮無食桑葚 コバト

此鳩宜合于前鳩条、是鳩之惡声者、俗云タウバト、豈是与則灰色者也、如鴿鳩、蓋因鷹化為鳩語而製名者、舍之可也。

鳴鳩之鳴、与鳴倉庚之鳴、同非鳥名。

タウバト又称ドバト、豈是^二与、而鳩亦他種類。

〔集伝似山雀而小〕或云、「山雀」当作「山鳩」。

弋鬼与雁 カモ

鬼亦多類、大抵当分大小二色、其大鬼、青首而已矣、其他諸種皆小鬼矣。是詩所指無大小之弁、但云「主大鬼」則可矣、以大鬼、味尤美也。

〔其躍企、〕謂步時躍不着地也、飛時伸其脚者、特鶴鷺之類長脚者耳、如鬼雁短脚、皆屈脚在腹下。

〔如鴝青色〕所謂「青色、」特其頸頭而已、故有「青首」之称。

鸛鷺鷺羽 ノガン トウガン

〔無後趾〕、宜言「無後指」也、是四指皆前指也、圖少一指。

有鴝萃止 見流離条

フクロフ。

諸家紛紜難弁、今定分三物、

鴝、鳥同、フクロフ、

鴝、ヨタカ、

鴝、ミ、ツク、頭目如貓毛角兩耳ハミ、ツク也。

歛彼晨風 サシバ

晨風、非鳥名、旧解皆謬。

鴝鳩在桑 ツ、ドリ

鴝鳩是鳩中之一種、亦宜合于前鳩条。

〔粘糊〕、「鴝鷺」未詳文義、然恐是鷺鷥之義矣、鷺鷥与鴝鳩不同、頭毛如菊花者是也。

按月令季春「鳴鳩私其羽、鷺鷥降于桑」、蓋即鴝鳩分明、与鷺鷥二物而並為侯鳥、註家絜辭混雜、遂成後人之謬耳。

布穀、ツ、ドリ。

布穀、一名郭公、以為杜鵑之異名者誤、今俗称カツコウトリ、豈是与其音云。

鴝鷺鷺鴝 ミ、ツク ヨタカ

鴝鷺也、見于前条、是与鴝二物矣、鴝亦与鴝鷺不同、三物同類而不当相混。

鴝鳴于埵 コウツル

〔コウツル〕クバビ。

〔コウツル〕是俗稱之紕繆、非和名也、昔人不識鴝、以「鴝」字充、此故称其字音如名、今不当循用。

有鳴倉黃

宜合于前黃鳥条。

翻翻者雛 トシヨリコヒ

〔雛〕元詁文、当作「𪗇」、即「隼」之煩文。

按、今本說文、「雛、祝鳩也、从鳥隹声、思允切、」二雛、或从隹一、作「𪗇」。若單从「隹」、必不得「思允切」也、唐本說文則从隹、作「𪗇」也。說文一

訛、諸儒不之察、遂用入伝註、永為律令、可歎矣。

脊令在原 セキレイ

「セキレイ」ニハコナブリ、ニハタ、キ。

詩緝云、脊令非水鳥。朱伝襲註疏之謬。

鶴鳴九皋 ツル

「灰蒼色」、恐混鶴鷄也。

別有玄鶴。

如鸞斯飛 シマキジ

此図恐未愜、宜白其頭腹。

宛彼鳴鳩

此鳴鳩、亦宜合于前鳩条。

「鳴」其事也、与「有鳴倉庚」之「鳴」同、非鳥名、且此鳩何必問其種別。

交交桑扈 マメマハシ

マメマハシ得菽粒、則膏中輟之、然後能破之、故得是名耳、焉得不食粟。其嘴黃臘色、故有「窃脂」之名、伝「青膏」恐謬、或是蠟膏之訛。

弁彼鸛斯 ゼンジャウカラス

此図不見腹下白、何也。

匪鸛匪鷩 鶉ワシ

鶉、説文作「鷩」、「从鳥敦声」、与鶉鷩之鶉不同。

一説、「鶉」是「鶉」之訛、説文即「鶉」之省。

鶉トビ

宜面翔翔自得処。

鶉鶉于飛

爾雅翼云、「頭戴白長毛、垂之至尾」。此図無頭毛、何也。

是図雌雄無別、恐失当、凡鳥雄美者、雌必不美、鶉鷩鷩雉孔雀皆然。

鸛鷩在涇 カモメ

コノ図、頭ノアタリ千鳥ニ似タリ、鷩ニ似ズ、改ベシ。

鳳凰于飛

鳳為鳥中之皇王、故称「鳳皇」耳、後字加「凡」、無別義、非雌雄之説。

鳳之形狀無可徵、今所存皆識緯家之言、無足采。

按、隸統古碑鸛鳳、全如孔雀。

振鷩于飛 サギ

此図殊不得白鷩狀、但肖五位^{ゴイ}而已、何也。

肇允彼桃虫 サソイ

桃虫、非鳥也、旧解皆謬。

易林是比喻、猶俗言「爲生厲」之類、不当用解物理。

毛詩品物圖攷卷五 離題

野有死麕 ノロ

〔ノロ〕クジカ

ノロ是韓名、非和名。

今諸州有獐、有小角、未知与此圖同異。

集伝、「獐、一歳豕、」・「獐、三歳豕、」未詳孰是。

無使楮也吠 ムクイヌ

伝宜言「楮綿犬也。」

豨豨五豨 豨豨五豨 フタ

野猪曰「イ」、家猪曰「フタ」、但古並用「豕」字也、故「イ」通于家猪、而「フタ」則不通于野猪。

于嗟乎騶虞

其騶尚矣。

象之掃也

キサ。

並驅從兩狼兮 オホカミ

雖有白狼、而茶褐其正色矣、制圖宜從正色。

狼後低、此圖失之。

一之日于貉 ムジナ

謂取狐貉、而單曰貉也。

取彼狐狸 タヌキ

唯狸後足有跟、跟蓋所謂蹠也、貓貉皆無跟。

呦呦鹿鳴 シカ

鹿宜在前麕之次。

象弭魚服 トノ

魚謂鮫魚也、旧説不可從。

維熊維羆 クマ

今竊以有獸如熊而大、能人立而趨、猛於熊、蓋即羆矣。羆是有跟如猴。

匪兕匪虎

凡鳥獸踏圖、嬰以火焰者、其本起於龍、而凡不可的知者、以此神之也。兕非不可知之類、又非神奇、當削去火焰。

有貓有虎

礼記称「其食田鼠、」則貓小於虎、可知矣。

赤豹黃熊

豹似虎、且坊間有全皮、毛色形狀可知矣、何不可圖之有。

毛詩品物圖攷卷六 離騷

蠡斯羽說詁說今 キリトス ウリクヒムシ

〔キリトス〕是今俗之訛稱、不得以作訓。

陸璣曰、「蠡、蚣蝰也、楊雄云、容黍也、幽州人謂之容箕、」即容黍蝰類也、長而青、長角長股、青色黑斑、其股似飛珣文、五月中以兩股相撻作声、聞數十步。」

鄭夾際云、蠡蝰即一種大青蚱蜢股長而鳴甚響。今按、鄭夾際之說非、蠡蝰宜以論蠡蝰。

此圖與陸鄭合。

通雅云、「凡似蠡不為災歲時恒有者、通得蠡名」。又春秋以蠡為災虫、即蠡也、非詩所謂蠡。

邢昺又云斯語辭當以爾雅作「蠡」字作謬。

此解宜添一句、曰「非古詞所詠吉里吉里斯矣。」

趨蠡早蝰 ハタ

早大也、是大蠡之義矣、解者動以生早陵為言、皆非。

傾如蠡蝰 スクモムシ

〔生腐木中〕今生木亦自生虫、不特腐木。

蠡蝰據諸解並說蠡虫耳、果然耶、今按、後世多論蠡蝰是生糞土中、或生果

夷、其形狀與蠡虫不相遠、時之蠡蝰恐或是蠡蝰、未可以蠡虫作定說、但其生糞土中者似別一種、非蠡蝰、宜以果夷中為蠡蝰耳。或云、蠡蝰一類二物、糞土曰蠡、果夷曰蠡、或蠡蝰也、印大蠡、故蠡之大者為蠡、蠡同早蝰。

蒼蠅之聲 ハヘ

詩原是「蠅」字矣、後譌作「蠅」。

蠅、ハイ也。蓋灰義、云「ハヘ」者、蛇也。中古誤為「蠅」。

蟋蟀在堂 古名キリトス

〔古名キリトス〕イト。

豊国有虫、首如蜻蜓黑色、翼如金鈴子、善鳴好闘、自野入牀下、正如爾詩之候、鄉名「キナツバ」、其鳴闘者皆雌云、蓋此真蟋蟀矣。

大和州亦有此種、俗名「ヤマコロギ」、即古詞所詠「キリトス」之真物云。

今俗所謂「キリトス」、即是促織矣、然青色無黑、上所圖蠡與促織合。

蟋蟀之羽 アサカホ

所在有虫狀如白露虫、匪必水上、邑居庭中皆有之、蓋蟋蟀云豈原水虫所化、故水上特多邪。

罔白露虫、宜脚着水上、不然不応「群浮」文。

五月鳴蠅 如蠅如蠅 セミ

蠅、クマセミ。

蟪、ヒクラシ。

六月莎鷄振羽 クダマキ

「故名梭鷄」、義不通。

蝓蝓者蝓 クハノムシ

「クハノムシ」イモムシ。

蝓不必桑、諸木皆有之、諸草亦有之、是詩下有「桑野」句、故解作桑虫耳、乃註家之拘泥。

是図大不愜。

蝓卷葉為巢而居其中、以喻軍士之獨寢也。此宜図圈葉為巢者。

蝓尾有刺、故人畏憎之耳、図説並没尾刺、何也。

伊威在室 ラMEMシ セキダムシ

ワラジムシ。

ネコムシ。

フヤジムシ。

「ワラジ」之名、尤得形象、遠勝セキダ、且似古名。

蟪蛄在戸 アシタカクモ

サハガニ。

ジヨウロクモ。

燭燭宵行 ホタル

ツチホタル。

張華之外傳多、然魏晉人之詩、豈足以為証哉。

維虺維蛇

蝮長廬尺余、末太如割斷者、此図未愜。

伝「七八尺」、蓋訛文耳。

胡為虺蜥 トカケ

蜥蜴、トカゲ。

蟪蛄、イモリ。

守宮、ヤモリ。

蟪蛄、即守宮。

蟪蛄有子蟪蛄負之 ジガハチ

ナムシ。

クワムシ。

蟪蛄亦宜為製図。

蟪蛄不必桑、諸樹諸草蔬皆有之。

為鬼為蟪

疫病中有痧、蓋瘧疾之類云、古人不之察、以為蟪毒也。蟪之受冤久矣哉。

去其螟螣及其蠹賊

螟クキムシ 螣ハムシ

蠹ネムシ 賊フシムシ

四圖恐皆未慚。

蠹賊是一虫、正是合三虫矣。

食根者、蓋螻蛄之小者、所謂蠹也、食桑葉者、即螟蛉屬、亦名螟也。

此邦別有ウンカ、細小而黒、与集豆苗菊苗之虫相肖、是大為害也、虫既長大、生翅而飛去、豈所謂蠹邪。

毛詩品物圖攷卷七 雕題

魴魚頰尾 ヲシキウヲ

此圖鱗大、恐失之。

鱣鮪發發 フカ

此圖鼻似太短。

「似龍」、蓋謬。

大魚之說在詩為謬。

江海皆有之、亦有大小、小者二二尺、別種而一類、凡詩所詠、特其小者耳、衛風取其可罟、周頌稱其入于潛、大雅美其可食、非小者而何。

其魚魴鱣

毛亦謬耳、不當為回護。

河魚有一物、鄉名志久智鰐、肖鱣而頭頂更扁、味劣於鱣、而形大、其子小弱者塩漬而食、其色如銀、腹中之卵味絶美、此咸鰐耳、所謂「大魚」魚

子」頗有緣由。

其魚魴鱣 タナゴ

鰐、未詳。

魚麗于醫鯉鯢 鰐シヤジ 鯢ハゼ

〔陸氏以為狹小非也〕小謂其全形、非謬也。

魚麗于醫魴鱣

コノ圖鰐ナルコト不分明、本草ノ形長体圖トモアハズ。何ニヨリテ此ヲ鰐トハ名付シヤ。

魚麗于醫鯉鯢 ナマヅ

頭較小、無鰓形、喙較尖、口較収、凡鰐所以異於常魚者、此圖皆失之。

鰐鰕達達 カアイマン

文從「鰐」、「鰐」是魚類之大名、鰐非魚類而何、古說皆謬。

長崎聞見錄二載「ラガル」、形狀此ト同シ、曰、「ラガル、夜ニ海中ニ居ル、長二丈許、猛惡、諸魚ヲ食ヒ、人獸ヲ害ス、ハ大涎沫大毒アリ。」

コノ圖ト大小ノ異アリト雖、同物ニ似タリ、是龍類ナリ、必鰐ニハ非。

南海有鰐鰕、同長尾利齒害人、有以尾取物、如象用鼻之說、略与此圖合。

「ワニ」ノ訓ハ當否イカン。

イツレニモコノ圖ハ此ニ入ベキモノニ非。

龍旂陽陽

龍唯宜倭在河海者、不当図鑑中者。

鱖鱖鱖 ヤナギハエ

鱖ヲ年魚也ト説イカン。

おわりに

今回紹介した資料は、儒教の經典である『毛詩』に関わる注釈書である。しかし現在ではその内容から、むしろ博物学や国語学の専門家によって研究されるべき資料であると言えよう。このような性質の資料については、資料を発見・紹介し得る者と、紹介・翻字された資料を利用し研究を推進し得る者との協力が必要とされるのである。

このようないわば学際的協力の体制は、懷徳堂や適塾などを研究する際には不可欠とさえ言える。国文学者や漢学者のみによつては懷徳堂の医学を理解することはできず、また医学者や薬学者のみによつて懷徳堂の医書を疏解することはできない。懷徳堂文庫にはたとえば、二百年前の水銀温度計や顕微鏡に関する報告が残されているが、古典文で書かれたこのような資料を現代の科学史研究者は正確に読み解けるだろうか。また、そこに記されている内容の科学史的意義を古文や漢文の専門家は充分に理解できるだろうか。懷徳堂という「学問領域」を総合的に理解するためには、文系・理系の枠を超えた研究機能・研究体制が不可欠であり、このような研究機能を提供し得る機関として大阪大学は重要な鍵を五十年間以上も握り続けてきたのである。

懷徳堂は、日本の歴史上きわめて特異な存在である。その営為を伝える懷徳堂文庫は、本学の持つ、非常に大きな知的資産である。本研究科はこれを最も活用できる位置にあるのだが、しかし研究科内における懷徳堂への評価は充分なものではない。

残念ながら、「解体新書以前のわが国の解剖学として、たしかに最も高い水準」(小川鼎蔵氏)の報告が本学に架蔵されていることを知る者は、本学の学生や教職員の間にも少ない。また「顕微鏡についてのわが国最初の文献」(中野操氏)が本学に残されていることを知る者は、さらに少ないであろう。懷徳堂に関する周知・広報は、まず内部(学内および研究科内)に対するそれから為されねばならないのである。(なお近年、韓国・台湾・アメリカなど国外の研究者による懷徳堂文庫資料の利用が盛んとなりつつあることは付記しておきたい。)

さて、大阪府立中之島図書館には、今回紹介した資料以外にも、履軒の自筆本や短冊、帖など多数が架蔵されている。明治末に数次にわたり収蔵された資料群であるが、これらの中にはたとえば「懷徳堂」印記を有する中井拙園抄本『履軒弊帚』や、伝中井履軒自筆本『東遊紀行』など、注目すべき資料が多数含まれている。伝来状況の調査も含めた今後の研究の進展を期待したい。

(本センター非常勤事務補佐員)

並河寒泉『辨怪』翻刻(一)

佐野大介

『辨怪』は、並河寒泉が妖怪変化・益狐憑などの存在を否定することを目的として記した書物である。全体は「辨怪」・「破怪」・「吾庵先哲遺文」の三部より成り、さらに「辨怪」は「辨狐怪」・「辨談怪」・「辨僧怪」の三篇、「破怪」は「詰破篇」・「窮破篇」・「自破篇」の三篇より成っている。本稿は、このうち「辨怪」部を翻刻したものである。

「辨狐怪」には、世間が「狐狸妖怪の事、懷徳堂之を辨ずる、明哲遺す無(し)。」と評していたことが記されており、また、寒泉自身も「吾(が)懷徳書堂の學、狐狸雜怪(に)於(て)、寸歩(も)迷(ふ)弗(く)、片言(も)容(る)弗(し)。」としているように、「無鬼論」は、自他共に認める懷徳堂を特徴づける思想の一つであった。『辨怪』は、懷徳堂最末期の教授である寒泉が、その無鬼論をまとめた形で記したものであり、懷徳堂無鬼論の構造や性質をよく示している。また、五井蘭洲・中井竹山・中井履軒・中井蕉園・中井碩果の無鬼論に関する言説や事績も収録していることから、懷徳堂無鬼論の系譜を示した資料としても高い価値を有する。さらに、本稿で底本として用いた大阪大学附属図書館蔵本は、寒泉の自筆本であり、墨にて訓朱にて点が付されていることから、訓点資料としての価値も有する。

なお、『辨怪』の説明・書誌学的解説としては、矢野野隆男氏「並河寒泉関係資料」(『大阪大学大学院文学研究科紀要 モノグラフ編』第四二巻一二、

湯浅邦弘編、二〇〇二年)及び『懷徳堂事典』(湯浅邦弘編、大阪大学出版会、二〇〇一年)の「辨怪」の項があり、内容について論じたものとして、陶徳民氏「並河寒泉の社会政治観——『弁怪』と『居諸錄』を中心に——」(『日本思想史学』第二〇号、一九八八年、後に『懷徳堂朱子学の研究』(大阪大学出版会、一九九四年)に収録)がある。

凡例

- ・ 本稿は、並河寒泉『辨怪』のうち「辨怪(辨狐怪)・辨談怪・辨僧怪」の翻刻である。
- ・ 底本には並河寒泉の自筆本(大阪大学附属図書館蔵)を用いた。
- ・ 底本にはかなりの俗字・或字が使用されているが、印刷の都合上、原則として全て正字に改めた。
- ・ 底本の訓点資料としての価値に鑑み、訓点も翻刻した。
- ・ 訓点は底本の形にできるかぎり忠実に従った。なお、上下点のうち下点のみが付されており対応する上点を欠くなど、点を脱することが明らかな箇所も底本のままとした。送りがないの、「子(木)・」・「く(おどり字)・」(して・しめ)についても底本の表記に従った。
- ・ 底本には、挿入の印として字間に朱で「〇」を附加し、上部欄外に文字を記した箇所があるが、その文字は文字囲いにより示した。

・空格は「□」で示した。

・底本では分節していないが、通説の便のため一文を幾つかの節に分けた。
・一部語句には、注として出典と思われる箇所を示した。

※なお、訓点の特徴として、

・「、」は二音の繰り返しを示す(例:「此、」||「ここに」など)。

・「く」(おとり字)は漢字もしくは二音の繰り返しを示す(例:「唯、」
||「ただだ」など)。

・「焉」が目的語となる場合は、かりがね点を省略する(例:「見焉」
||「焉を見る」など)。
などが見られる。

辨怪

大坂府學教授並河朋來亨先甫 撰

辨狐怪

泉州界府、商翁、有祀稻祠於家者、翁疾、一日
會親戚、曰、身是家祠靈狐也、主翁崇奉之厚、神
爲來報也、神聞汝等於翁、交誼太疏、主翁今
日之疾、職此之由、汝等自今賑卹以睦、則翁
疾可瘥矣、乃令連署以誓焉、府衛曹某聞之、

佛然攘臂曰、何等愚老、妖誕敢爾、我其發摘
服之、弗服、則身首萬段、擇取銳刀、奮然而
往、翁見某、則卽指其佩刀曰、拙矣吏也、何擇
於刀、此欲以武屈予也、與、某愕眙儼然而去、
翁又嘗言、不識字者、不足與語、唯讀書之人、
可與語、已、有、一學醫往、叩、和漢史上事、翁
應答如響、或指言其紙數、醫驚服而去、一學士
以斯話語森孟宜、且曰、狐狸妖怪之事、懷德堂
辨之、明晰無遺、我亦學程朱者、則不敢惑
也、然聽之於忠直之口、其惑有未釋然者、
今也斯話、親聽諸界府某、某也忠直不敢惑
者、而面視談之、是吾惑之所未釋然也、
請質諸並河教授、孟宜以告、予危坐正襟曰、
夫爲學之務、以解惑爲要、況師於人者
乎、己之惑且不解、何以解人惑、書不云乎、
人是萬物之靈、既是萬物之靈、狐狸微獸何爲、

爲學^ル者、苟存^ニ心^ヲ於此^ニ、雖有^ニ百怪談^一、復奚^レ惑^シ、夫何^ソ信^ニ於忠直^ニ乎、豈唯^ク忠直、雖^ニ君子者^一、予則不信也、程子辨^{スル}怪^ヲ之言^ニ曰、於^ニ事上^ニ一々理會^{セバ}、則有^ニ甚^シ盡期^一、須只^ク於^ニ學上^ニ理會^ス、今也斯^ノ談、妄誕不經^ニ足辨^{スルニ}、固也、然^ニ言^ハ欲^ク質^{サント}之^ヲ、則予不必律^{スルニ}以^セ程子之言^ヲ也、能言^ク辨^{スル}妖怪^一者、亦聖之徒與、予何辭^{セン}、請備^{サニ}辨^{セン}之^ヲ、

※書不云乎 「惟天地、萬物父母。惟人、萬物之靈。」(『尚書』泰誓)

※程子辨怪之言 「今日雜信鬼怪異說者、只是不先燭理。若於事上

一一理會、則有甚盡期、須只於學上理會。」(『河南程氏外書』「附東

見錄後」)

以予觀^レ之^ヲ、斯翁姦黠可^キ憎^ム之甚^キ者、阿紫何^ソ知^シ、蓋始^{ルニ}之以^シ妖謀^ヲ、終^{ルニ}之以^シ愚弄^ヲ、而一窮病實^ニ爲^リ其^ノ欄柄、翁之窮病、欲^{スル}仰^{ント}給^ヲ于親戚^ニ者久、而計無^キ所^レ出也、幸^ニ族人皆俗徒、狐妖^ノ詐謀^ノ、於^ニ是^ニ乎出、乃知^ル非^ニ狐附^{クニ}翁^ニ、是^レ翁附^レ狐^ニ矣、是非^ニ始^{ルニ}

之^ヲ以^{スルニ}妖謀^ヲ乎、族人既^ニ受^レ誓^ヲ、狐之能事畢^ル、妖謀無^キ復所^レ用也、會有^ニ不^ル招之客二人來、翁黠墮一注、卽謂^フ此^ノ徒亦易^キ與^{ミシ}耳、妖謀餘焰、可^ニ以薰灼^一矣、於是^ニ乎或指^レ刀^ヲ、或論^シ史^ヲ、準的皆得^ル、二客茫乎心醉、猶鯽魚之於^ニ灰汁^ニ也、其妖謀足^ニ益^ク取^レ信^ヲ矣、是非^ニ終^{ルニ}之以^{スルニ}愚弄^ヲ乎、嗚呼一時^ノ妖謀、始終圓備、其姦詐周^{チシ}矣、可^キ憎^ム之甚^キ、是假^リ鬼神^ヲ惑^ス人^ヲ之徒也、罪不^レ容^レ誅^ニ、夫某氏、忠直其性也、不^ニ敢惑^一者、恐^{クハ}此^レ客氣、而其中心^ハ則信疑相半^{ハスル}者也、以其忠直客氣^ヲ、與^ニ彼^レ姦黠妖謀^一、相比^シ以^テ鬪、其強弱胡^ソ止、一着、彼乘^{スルニ}以^シ狐妖之詐謀^ヲ、此挾^{ムニ}以^ス信疑之客氣^ヲ、一場^ノ對戰、片言未^ク接^セ、遽然遇^ニ指^レ刀^ヲ之一喝^ニ、頓^ニ挫^キ其^ノ鋒^ヲ、客氣忽摧敗^ス、疑鋒鈍^{フリ}而信鋒磨^シ、卒^ニ爲^ス城下之盟^ヲ矣、於是^ニ一團^ノ客氣、既^ニ已^ニ消沮^ス、滿腹所^レ存^{スル}、只^ク是^レ一條^ノ忠直而已矣、宜^キ其信^{スル}之^ヲ之益^ク固^キ、何^ソ不^ニ敢惑^一之有^シ、(因^フ天

指刀論史之事、細察其情與言、則可知已、某氏、衛曹之武人也、武人而奮然攘臂往者、豈徒哉、擇刀之情、益々乎面目呈露者、可想見已、況翁之姦黠矐彩、爛然注射者乎、其論史也、翁素有此伎倆、而常深蔽藏也、商人嗜書者、往々有然者也、今也欲鼓狐術、却露其尾、乃曰、讀書之人、可與語、是翁所自言、伎倆有素、昭々可徵矣、復奚異、抑斯二者、適足以鼓舞其妖謀也、則斯二客者、不知不識、入其殼中也、豈翅二客、斯學士亦殆乎、將入其殼中也與、予則鳴鏑一注、欲以厭勝妖翁之狐魅也、

※城下之盟 敗戦後に結ばれる屈辱的な講和。「大敗之、爲城下之盟而還。」(『春秋左氏傳』桓公十二年)、「城下盟、諸侯所深恥者也。」(同杜注)

辨談怪

既爲學士、著狐怪之辨、而餘意猶欲然、覺癢處手未及也、乃轉舵溯源、辨世人談怪信怪、兩弊有由來、分爲二篇、以付其後、庶幾有補於提醒世之惑夢云、吾嘗聞之、見怪不怪、怪自壞、蓋見焉而怪者、十之九、見焉亦不怪者、厯々居其一、是談怪之頑弊、所由來也、夫怯夫之矐、怪則頽然長和尚矣、不怪則圓首長燈耳、凡世之談怪者、靡如親見之然、叩之則皆得諸傳聞者也、詰其所由來、則虛誕已、或有言親見之者、窮之則亦猶圓首長燈也、程子所謂目病、是已、此見焉而怪者也、其怪之者、既目怪之、又心信之、而又口鼓之、以吐之於衆人之耳、是談怪之弊所由起也、其聞之者、左聲尙在耳、既口吐之

右一、一左一右之間、談脉漸浮大、寸而尺、尺而文、緣飾簸弄、終至說箸爲棒也、於是談怪之弊、頽然而成、無他由聞焉而怪也、然則見焉而談者、既已自惑、又惑人、其罪有餘、聞焉而談者、緣飾簸弄、其罪殆有甚焉者、可不慎乎、若夫見焉亦不怪者、目且不怪、矧心口乎、要在見聞兩不怪耳、不怪則已、既怪則宜窮而破之矣、既破之、談亦有所辨焉、何言談怪、人而如此、怪談或可默消焉、

※程氏所謂目病「假使實所聞見、亦未足信、或是心病、或是目病。」
《河南程氏外書》「附東見錄後」

或曰、見焉而怪者、如何而怪、曰迎之也、曰見焉亦不怪者、如何而不怪、曰不迎也、曰迎與不迎之形、何以言之、曰其迎之也、猶痴僧之蹂蟻也、其不迎也、猶舜水之遇刃客也、有

僧夜歩庭、暗中踐物、履底軟潰、以爲蹂殺蟻也、恨悔弗措、已寢、蟻來訴冤、憤恨說盡、僧懇謝不已、夢覺、汗透衣背、待明往弔、則腐茄也、朱舜水之在江都也、昏夜雨行、有物、突擊其傘、舜水歛傘而視、不見、從容擎傘行、又擊、亦如初、再三而後止、還家閱之、傘有劍迹者三、蓋遇刃者於衢也、癡僧、滿腹唯怪、腐茄則爲蟻、舜水、滿腹無怪、刃亦不怖、嗚呼見焉亦不怪、聞焉亦不怪、斷然自破之者、天下能幾人、

辨信怪

天地之道唯至誠矣、無可容妖怪虛誕也、戴其天一履其地、以成其誠者、人之道也、其方寸間復奚容妖怪虛誕哉、人之爲誠、雖有淺深厚薄之不同也、天下億兆之衆、其孰不由斯、

道ニ、孝弟忠信之事フル人ニ、稼穡販粥之治ムル業ヲ、饑
之思ヒ食ヲ、渴ク之呼ビ飲ヲ、熱シ而葛シ、寒ク而袍シ、喜ヘハ
笑ヒ、憂レハ則悲ム、莫ニ適キ而非ル誠ニ也、然リ而其方寸
間、信ニ妖怪虛誕者、獨何ヲ與、是レ無キ他也、誠失ニ
其養一、而腐敗以出ル也、性之善也、失ニ其養一則腐
德矣、仁之腐也貪、義之腐也戾、禮之腐也奢、智之
腐也姦、程子所謂、惡亦不可不謂性ト、是
也、誠之腐敗、亦猶是也、然、則誠之腐敗、何ニ者
使ニ之ニ然、曰妄也、凡、養誠之要、用ニ之幼稚ノ日、
其功大多、但、妄以養レ之、則腐壞、衆庶億兆之信
怪、亦是、妄曰、蓋厭レ正ヲ喜フ奇、世之頑習、先入
爲主ト、人之常情、當ニ其稚心蒙昧之日、既進ニ之
以ニ狐狸雜怪之妄、喜、則戲レ之、以ニ狐狸一、啼、則
威レ之、以ニ狐狸一、笑、亦狐狸、怒、亦狐狸、起臥行
住、莫非狐狸ニ也、銘ニ之、以ニ喜奇之習、錮
之、以ニ先入之情、於是、平癡嬌腸內、既胎棲一

狐狸一焉、幽室昏庭、怯臆所炤、其赤、匪狐、其
黑、匪狸、怯膽稚子、得レ不ニ信、且怖平、信怖之
腐誠、於此、平熟、是、謂ニ妄以養一也、宜乎幼稚
之日、而眞誠卒ニ腐敗ス矣、及其長一也、煽ニ之、
以ニ厲鬼夜叉之妄、鼓レ之、以ニ天狗飛頭之誕、則
夫、喜奇之習、先入之情、與ニ信怖之腐誠、又滋、
熟、至リ老、竟爲ニ沈痼、不可ニ復救藥ス矣、嗚呼
哀哉、衆庶億兆之信怪、其本源實在ニ于此一矣、
自非、拔ニ其本一清、其源、斯、病何ソ瘥、

※方寸間 「既而曰、噫、吾見子之心矣。方寸之地虛矣。」《列子》仲尼

※程子所謂 「有自幼而善、有自幼而惡。是氣質有然也。善固性也、然

惡亦不可不謂之性也。」《河南程氏遺書》「端伯傳師說」

衆庶億兆、少長、于怪誕之間者、姑、舍、旃、夫、以
儒、命、家者、其所、學則鄒魯正經、其所、由則洛閩
宗學、日夕所求、莫非養誠之事ニ也、則拔、本、
清、源之要、將、於此、乎在、然、至、於信、怪、

則亦猶不異^{ナラ}於衆庶億兆^ニ矣、是可^レ怪^ム之甚^キ者、其諷^{スル}書^ヲ也、魯經^ハ則有^ニ四十不惑^ニ、及不^ル語怪^ヲ焉、鄒經^ハ則有^ニ不^ル動^レ心^ニ、與^レ養氣^ヲ焉、是皆養誠^ヲ之教也、則延^キ徒^ヲ聚^メ生^ヲ、稠人廣坐、說^ニ與^シ之^ヲ、而及^ニ其燕居談笑^ニ、則語^リ狐狸雜怪^ヲ、喜意得^ル然、覲^ト不^レ揺^レ鼻端^ヲ、鼓^シ舌^ヲ詡談^シ、又從^ヒ而怖^ル之^ヲ、自旁觀^レ之^ヲ、其顏容蚩^カ、不^レ異^{ナラ}於癡人說^ニ夢^ヲ、與平素說^レ經^ヲ、判^ト若^ニ兩人^ノ、其矛盾支吾、何^ソ一^ニ至此^ニ、是知^ル其日夕養誠^ヲ之學、亦從^ヒ而腐敗^{スル}也已、凡^ソ讀書之人、自衆庶億兆^ニ觀^レ之^ヲ、則瞻仰以爲賢^ト、爲^ニ斗山^ト、片言隻辭^モ、亦皆信^ス之^ヲ、況^ヤ老師宿儒^ヲ乎、然^リ而其人若^レ此、是播^{コス}腐誠^ヲ於衆庶億兆^ニ也、妄^モ亦大^ニ甚^シ、拔^キ本^ヲ清^{スル}源^ヲ之要、其安^{クニ}在^ル哉、嗟夫、九原可^レ起^ス、鄒魯^ノ兩夫子、其謂^ニ之^ヲ何^ト、可^レ不^ル慚^ヂ且懼^レ乎哉、

※四十不惑 「四十而不惑」(『論語』爲政)

※不語怪 「子不語、怪力亂神。」(『論語』述而)

※不動心 「孟子曰、否、我四十不動心。」(『孟子』公孫丑上)

※養氣 「我善養吾浩然之氣。」(『孟子』公孫丑上) など。

※九原可起 死者を起こすこと。「九原」は墓地の意。「晉卿大夫之墓

地在九原」(『禮記』檀弓下)「以從先大夫於九京也」鄭注

然^ラ、則拔^キ本^ヲ清^{スル}源^ヲ之要、卒^ニ不^ル可^レ得^ル與、曰、否^カ、先^ツ自^レ隗始^{メシ}、吾懷德書堂之學、於^ニ狐狸雜怪^ニ、寸步弗^レ迷、片言弗^レ容、衆楚人咻^{フス}之^ヲ、褻^ト如^ニ充耳^ノ、觀^ニ世之信^{スル}怪^ヲ者^ヲ、實^ニ不^レ勝^ヘ恨嘆^ニ、吾^カ庠^ノ先修發^ニ憤^ヲ乎此^ニ、勃然曰、童牛可^ニ以^ス信^ス矣、文王之政、且自^ニ寡妻兄弟^ニ、乃恆^ニ戒^テ家人^ヲ曰、爲^ニ予兒者^ノ、啼笑喜怒、勿^レ乘^{スル}以^ニ狐狸雜怪^ヲ、必欲^{スル}懲^ニ艾^{セント}其啼怒^ヲ、宜言^ニ父母其^レ呵責^{スト}、亦足^ニ以^ス誨^ル兒^ヲ矣、汝等其戒^ヨ之^ヲ、是^ヲ以^ニ闔閭之内^ニ、老少婦女、羞^ヂ談^{スル}狐狸^ヲ、少角童孺、嗤^{ケル}說^ク厲鬼天狗^ヲ、矧^ヤ巫覡符章絕^ツ於言議^ニ乎、顏之推先^ツ獲^ニ我^カ心^ヲ者也、內庭且然^リ、況^ヤ外舍問^レ業者^ヲ乎、庠之内外靡然成^ニ斯^ノ風^ヲ、百^ニ有^一餘^一

年于今一矣、則拔^キ本^ヲ清^{スル}源^ヲ之要、庶^イ乎弗^レ畔^カ矣、
本源已^ニ拔^ス清^ス、養^レ誠^ヲ之教、隱然存^ス焉、斯^ノ風業^一已^ニ
試^ニ之^ヲ家^ニ、兆^一可^ニ以行^一、舉^ケ而錯^レ之^ヲ、家^ニ倣^ヒ戶^ノ慣^レ、
推^シ而國^ニ、而天下、衆庶億兆、豈不^ニ靡^レ然成^レ風^ヲ乎、
斯^ノ民也、礪^ス盧^一已^ニ降^一、所^ニ以直道而行^一也、斯^ノ風也、
果^レ遍^シ布^シ乎、普^ク天^ノ率^ス土^ヲ、雖^モ復^シ欲^シ容^シ妖^ノ怪^ノ虛誕^ヲ、得^レ
乎、則衆庶億兆、方寸間一塊^ノ腐^レ誠^ヲ、化^シ而爲^ル眞^ト、所^ニ
謂^フ自^レ明^カ而誠^{ナル}者有^リ焉、抑^ク家^ニ倣^ヒ戶^ノ慣^レ之教、誰^カ
其^レ尸^ト之^ヲ、豈有^シ他^ノ哉、以^レ儒^ヲ命^{スル}家^ニ者、在^ニ先^ニ自^ラ
爲^ル之^ヲ也、今也國家文教之治、以^レ儒^ヲ命^{スル}家^ニ者、府^ニ
下比屋相接^ス、經史之業、日出^テ而作^シ、日入^リ而息^フ、是^レ
誰^ノ之澤^ヲ與、微^レ衷^ニ當^キ欲^ス以添^シ涓^ニ滴^ヲ於河海^ニ耳、何^ゾ止^ク
餽^ク口^一、一路而然^{ラシ}哉、然^{ラハ}則晨^ニ諷^シ夕^ニ誦^シ、何^ゾ爲^ス也、修^{ムル}
己^ヲ也、治^ム人^ヲ也、所^ニ以養^レ誠^ヲ也、所^ニ以裨^ニ補^{スル}文^一
教^ヲ也、於是^ニ儒^ノ名^ヲ始^テ可^ニ以命^ス家^ニ矣、衆庶億兆、可^ニ
以矜^ス式^一矣、然後其教以成^ル、吾^カ庠^ノ之設、最^ニ可^キ以裨^ニ

補^ス口^一國家^ノ文教^ニ者、是^ヲ、以^テ吾^カ先^ニ修^シ奉^シ其德意^ヲ、欲^{スル}
揭^ニ正^ケ學^ヲ以養^シ斯^ノ誠^ヲ也、今也鳳^ノ來^ニ、淺^ニ學^ヲ固陋不^ニ自^ラ
揣^{カラ}、策^ニ乏^キ教授^ニ、狗^ニ續^{スレハ}其緒^ヲ、則不^ニ敢^シ失^レ墜^セ
先志^ヲ、欲^{スル}以自^ラ修^メ治^シ人^ヲ也、若^キ此^ノ篇^ノ、不^ニ厭^ニ
嗽^リ紙^ノ盡^キ而筆不^レ休^セ者、亦唯^ク冀^フ有^リ裨^ニ補^{スル}於^ニ口^一
國家^ノ文教^ニ耳、若^シ夫^ノ鄒魯洛閩之學、豈敢言^シ得^ト焉、
但^ク既^ニ已^ニ以^レ儒^ヲ命^{スレハ}家^ニ、則辨^ニ怪^ノ一事、雖^レ不^レ足^レ
使^ル衆^ニ庶^ニ億兆^ニ倣^セ、所^ノ異^{ナル}於衆^ニ庶^ニ億兆^ニ者、則^レ
髣髴^ニ乎有^ト得^フ云^フ爾^ニ、

※衆楚人咻之 環境の影響が大きいことのとえ。「一齊人傳之、衆楚人咻之、雖日繼而求其齊也、不可得矣。」(『孟子』滕文公下)

※褒如充耳 「褒如充耳」(『毛詩』鄘風、旌丘)「箋云、充耳塞耳也。言衛之諸臣顔色、褒然如見塞耳無聞知也。人之耳雖恒多笑而已。」(同鄭箋)、「褒多笑貌。充耳塞耳也。」(同『詩集傳』)

※文王之政 「刑于寡妻、至于兄弟、以御于家邦。」(『毛詩』大雅、思齊)※山角 男の子の髪型。「山」とは左。三月之末、擇日前髪爲髻、男角女髻、否則男左女右(傍点引用者)。(『禮記』内則)

※顔之推云云 『顔氏家訓』教子第二や、「吾家巫覡禱祠、絕於言議、符書章醮亦無所爲、並汝曹所見也。勿爲妖妄之費。」(『顔氏家訓』治

家第五)などを指したものか。

※瓊廬 「瓊取廬島」の略。「其矛盾滴瀝之潮、凝成一嶋、名之曰瓊取廬島。」(『日本書紀』卷一、神代上)

※一箇所「國家」の上の空格を欠くところがあるのは、底本では行頭に当たっていたため。

※狗續 つまらぬものが立派なものに続くことのとえ。「時人爲之諺曰、貂不足、狗尾續。」(『晉書』趙王倫傳)

(本研究科助手)

龍野文庫蔵懷徳堂関係文献簡介(一)

「龍野文庫」とは、龍野市立歴史文化資料館(兵庫県龍野市)に架蔵されている五千冊以上の貴重資料等の総称である。

同文庫の蔵書目録としては『龍野文庫図書目録』(龍野市教育委員会編、龍野市立歴史文化資料館発行、一九九四年。以下『目録』と称す)が刊行されているが、同『目録』の記載はきわめて簡潔であり、多くの誤りも認められる。同文庫は閉架式で、閲覧に際しては事前に希望資料を明記した書面にて許可を申請せねばならないのだが、『目録』のみによつて必要な資料を選定することは困難であろう。たとえば『目録』には、『逸史』の明和七年刊本や寛政十一年刊本が著録されており、また抄本『七経離題略』も著録されているが、前者は抄本の誤りであり、後者は七経すべてではなく論孟・庸のみが抄本である。『目録』によつてはこれらの資料の詳細を知り得ないことから、結果的に無意味な閲覧請求が行われることが予想され、ひいては資料の劣化も懸念される。

いま、同文庫が架蔵する懷徳堂関係の文献から若干を選び、その概略や、必要であれば内容についてごく簡単に紹介して研究者の参考に供したい。本報告を手がかりとして、これらの資料に関する研究が進展すれば幸いである。

なお龍野市歴史文化資料館には、資料の閲覧に際して格別の配慮を頂いた。記して感謝する次第である。

井 上 了

『中井履軒 履軒幣帑』 目録一〇〇頁(Ⅺ) 12

和中本。四冊。無格無野九行二十字抄本。ただし第一冊のみ十行二十字。中井袖圖抄本。三木家旧蔵一二号。

『目録』は外題に従い「履軒幣帑」四冊とするが、内題に従うならば「幣帑(前編)」二冊「幣帑続編」・「幣帑季編」各一冊となる。

第一冊の外題は「履軒幣帑」元。内題は「履軒幣帑」。末尾に「幣帑畢」の記。その篇目は下記の通り。「自序」・「射説」・「雜説」・「續斎説」・「仰斎説」・「寓言」・「祭食河豚死者文」・「問目二道」・「擬問韓客」・「跋奇石圖」・「題鍾植園」(子之)・「題獼猴圖」・「題桃源圖」・「小園記」・「小園序」・「送水守節婦赤穂序」・「贈石原有文序」・「記釣遊」・「記阿王事」・「神武記」・「粥菰類考」・「伯夷伝」・「程婆伝」・「忠孝両全論」・「高帝選定三奏論」・「明太祖論」。

第二冊の外題は「履軒幣帑」亨。内題は「幣帑前編」。内題の下に「出于統編省十四編」の注記。末尾に「幣帑続編 有写本者今不煩書七十一編」の記。その篇目は下記の通り。「幣帑前編目録」(射説より独知劍記まで)・「幣帑続編目録」(文帝論より擬符堅喻江南檄まで)・「幣帑季編」(目録、姓氏断より漢讖まで)・「送寿安還郷序」・「舟工招鬼表」・「龍海寺鐘銘并序」・「秦二世烏有詔」・「入江円了翁稿」・「題鍾植園」(陰間)・「題画」(鶴)・「題墨竹」・「黒弱論」・「贈無頼子」・「黒弱余論」・「伐刑論」・「国計論」・「独知劍記」。

第三冊の外題は「履軒幣帑」利。内題は「幣帑続編」。末尾に「文政庚寅夏

六月朔中井環敬書」の記。その篇目は下記の通り。「弊帚統編序」・「文帝論」・「讓國論」・「嵇叔夜論」・「義貞論」・「甲越論」・「過秦論駁議」・「東周記」・「唐氏廟議」・「復讐議」・「浚河茅議」・「万鍾弁」・「原祭」・「晏茗説」・「無求説」・「不達軒記」・「埋飲器記」・「永正刀記」・「華胥國記」・「顯微鏡記」・「樂暉記」・「天樂樓記」・「像語欄戒約」・「大畜堂記」・「烏有園記」・「扶桑匣記」・「委奴印記」・「錫類記」・「孝三伝」・「卯谷伝」・「贈夢大夫序」・「送源教授序」・「送司馬皮虎入闕序」・「琵琶清音序」・「卜居詩卷序」・「書流水詩稿序」・「書象外佐軸後」・「題楠公訓子序圖」・「題敬器圖」・「題倒載圖」・「題訪戴圖」・「題南極老人圖」・「題龔駟圖」・「題甘棠圖」・「題仙像」・「題夢蝶圖」・「周之夢爲」・「題面裝軸」・「題面虎」・「天樂道人」・「題三顧圖」・「題千窟戰圖」・「題夢蝶圖」・「周之覺之」・「題面蝶」・「題神農像」・「象外面像贊」・「題釋扇」・「鴻池稻荷祠碑」・「祭葉兒文」・「專問對」・「簡筵」・「問書面令」・「戲簡藍水処士」・「雜筆」・「擬弁」・「擬策」・「擬与留学生阿倍仲麻呂書」・「録此書簡友人」・「得友人報再簡」・「擬疏」・「擬符堅喻江南檄」。

第四冊の外題は「履軒弊帚貞」。内題は「弊帚季編」。末尾に「文政十二年己丑二月春分中井環書」の記。その篇目は下記の通り。「姓氏断」・「混一論」・「封建論」・「封建後議」・「封建余論」・「美政論」・「閩人論」・「擬刑議」・「梁武論」・「興議」・「漢議」。

本資料は、第一冊の末尾に「弊帚畢」とあり、第二冊の冒頭に目録を有するなどの混乱がある。特に第二冊の内容は他の「弊帚」諸本に対して特徴的であり、今後、懷徳堂本や新田文庫本などとの対照・研究が進められるべきであろう。

なお袖圖は文政十三年にも『履軒弊帚』を抄写しており、こちらは現在大阪府立中之島図書館に架蔵されている(和中抄本三冊、『履軒弊帚』「弊帚

統篇」・「弊帚季篇」、請求記号「甲和一四八」、受入番号「二四一四八」。「大阪府立図書館蔵稀書解題目録和漢書の部」一九九頁。中之島図書館本には目録位置に関する上記の混乱は認められず、また「贈無頼子」・「録此書簡友人」・「得友人報再簡」を欠く。これらの相違は、袖圖による「弊帚」整理の経過を示すものと考えられよう。また中之島図書館蔵「弊帚季編」は、『日本儒林叢書』排印本「弊帚季編」が底本に用いたという「無窮会所蔵本」の底本と考えられる(文政十三年庚寅中秋寒露節中井環謹書)の識語と「環」・「君玉」の印記。ただし中之島本は「奎運堂」印記を増す。

『弊帚』 目録四七頁(8) 29

和中本。四冊。抄本。抄者未詳。

外題は三木家旧蔵一二号本(上述)と異なり、各々「弊帚」・「弊帚前篇」・「弊帚統篇」・「弊帚季篇」とする。

内容はほぼ三木本に一致しており、三木本と同系統のテキストと思われるが、三木本に見えない若干の校正が施されている。

『目録』は抄写時期を「享和」文化とするが、自序に誤られたものか。抄写時期が三木本より遅れるものであれば、文政以降の抄本となる。

『履軒古韻』 目録四九頁(8) 66

和小本。一冊。無格無路八行二〇字抄本。抄者・時期とも未詳。小西文庫(龍野藩の脱書指南などを務めた小西家の旧蔵書)。

内題「履軒古韻」。外題なし。抄写年は不明。目録は「明和六年」抄本とするが、これは序文の年代である。

なお『履軒古韻』の自筆本は懷徳堂文庫に架蔵されており、本資料は自筆本に対して若干の異同を有すが、おおむね誤写と見なせる範囲内に収まる。

本資料は収抄本であり、実用的な目的で作成されたものであろう。

『逸史』 目録四二頁(3) 72

和大本。十三冊。精抄本。抄者・時期とも未詳。本間文庫旧蔵。ただし『目録』は小西文庫本とする。なお『逸史』については『大阪大学大学院文学研究科紀要』四二(二)(平成一四年)の解題を参照。

『逸史』の献上本(正本)は現在内閣文庫に架蔵されており、懷徳堂文庫に架蔵されている竹山自筆本『逸史』は献上本と同時に作成された副本とされる。この他にも懷徳堂文庫には複数の『逸史』が伝えられており、うち竹山副本に最も近いのは受入番号九九三九の抄本であるが、これと本間文庫本(本資料)とは酷似しており、同手の抄に出るかと思われる葉も少なくない。本間文庫本は、懷徳堂文庫九九三九抄本と同様に、懷徳堂にて印刷された『逸史』専用の野紙を用いる。すなわちこれらは懷徳堂の内部か、すくなくとも懷徳堂ときわめて近い環境において作成された抄本であることは間違いない。しかし、竹山副本・本間文庫本とも懷徳堂にて印刷された題箋を用いているのに対し、九九三九抄本は書き題箋を用いる。またこれら三者の間には細部の相違が見られるが、おおむね本間文庫本のほうが竹山副本に近く、これらと九九三九抄本との間にはやや大きな開きがある。要するに、懷徳堂文庫九九三九抄本よりも本間文庫本のほうが、竹山副本に近い位置を占めているように思われるのである。

九九三九抄本は一般に蕉園抄本とされているが、九九三九抄本・本間文庫本とも、抄写年や抄者を示す記載を持っておらず、これらの先後関係は未詳である。むしろ本間文庫本のほうが九九三九抄本に先行する可能性も指摘されよう。しかしむしろ、本間文庫本と九九三九抄本との間に親子関係想定すべき必然性はなく、むしろこれらが同一の元資料(竹山副本か)か

ら抄写された兄弟関係にある可能性も高いと考えられる。

なお、目録四二頁(3)73の『逸史』は寛政十一年刊本ではなく不明抄本(好古文庫旧蔵、小西文庫)、同じく74の『逸史』は天保十三年刊本(『目録』によると股野家旧蔵。「契空普明勝山滴翠所蔵印を有す」)である。

『竹山書説』 目録三九頁(2) 7

和中本。一冊。無格無野一一行二字抄本。仮綴。小西文庫。

内題なし。『目録』の書名は外題「竹山書説」によると思われるが、丁間に挟み込まれている旧題箋には「竹山先生書説下」とある。

本資料は『尚書』に対する詳細な注釈であり、まず該当する『尚書』の条を示し、続けて自説を示すという体裁をとる。ただし塗抹・訂正の跡や補紙などが認められ、未定稿の段階のものと思われる。

竹山の『尚書』注釈としては、懷徳堂文庫に自筆本『尚書管見』が架蔵されている。本資料は『尚書管見』のそれと一致する説も多く見られるが、量的に『尚書管見』に対して数倍しており、竹山の経説を考えるうえで、きわめて重要な資料である。

なお本資料の旧題箋には「竹山先生書説下」とあり、内容としても案管上より案管すなわち「周書」部分にとどまる。龍野文庫『蔵書目録』には「二冊」とあり、上冊が明治以降に失われたものであろう。

『詩経集註』 目録二頁(1) 39

和中本。八冊。享保九年今村八兵衛刊本。小西文庫。

内題は「詩経集伝」だが、外題は「詩経集註」とする。

中井竹山「詩断」の説を欄外などに抄写しており、資料名はむしろ「詩断」とすべきか。なお「詩断」については『大阪大学大学院文学研究科紀要』四二

一(二平成一四年)の解題を参照。

懷徳堂文庫蔵の竹山自筆本『詩断』と対照すると、本資料の抄写は比較的忠実であるが、独自の判断による省略や改変も若干認められる。下記の『竹山詩経解』とともに、龍野における竹山説の受容を示す資料である。

『竹山詩経解 上中下』 目録三九頁(2) 1

和中本。三冊。無格無罫一一行二二字抄本。仮綴。抄者未詳。小西文庫。
『目録』の書名は外題による。内題はなし。

竹山『詩断』の説を摘録したもの。

『竹山詩経解 上下』 目録三九頁(2) 2

和中本。二冊。左右双辺九行二〇字抄本。抄者未詳。小西文庫。

『目録』の書名は外題による。内題はなし。

竹山『詩断』の説を摘録したもの。ただし上掲の三冊本『竹山詩経解』とは基本的に重複しないようである。『詩断』から本資料を摘録した際に採用されなかった竹山説を別にまとめたものが上掲三冊本であろうか。

『中庸定本』 目録三頁(1) 100

和中本。一冊。抄本。仮綴。抄者未詳。小西文庫。

目録の書名は外題による。内題は「懷徳堂校定中庸」「中庸錯簡説」。

「懷徳堂校定中庸」は『中庸懷徳堂定本』と同内容。なお『中庸懷徳堂定本』『中庸錯簡説』については『大阪大学大学院文学研究科紀要』四二(二平成一四年)の解題を参照。

『中井蕉園 雕蟲篇 同後篇』 目録一〇〇頁(XI) 8

『目録』は一点とするが、『雕蟲篇』『雕蟲後篇』の二点とすべきか。おそらく懷徳堂において三木通深が抄写したものであろう。

(1) 『雕蟲篇』

養中堂用紙抄本。一冊。三木家旧蔵八号。

内題「彫虫篇」、外題「雕虫篇 一宵十賦」。

「一宵十賦」の抄本。「播州三木深図書之記」の印記と「弘化三年丙午六月下流膳 三木深」の記を有す。

(2) 『雕虫後篇』

養中堂用紙抄本。一冊。三木家旧蔵八号。

内題「彫虫後篇」、外題「雕虫後篇 後一宵十賦 完」。

「後一宵十賦」の抄本。「与鴈子善書」「再答鴈子善書」「答尾藤学士書」を付す。「播州三木深図書之記」の印記と「弘化三年丙午七月膳 三木深」の記を有す。

『懷徳堂上棟文』 目録一〇〇頁(XI) 11

和中本。一冊。左右双辺一〇行二〇字抄本。三木家旧蔵一一号。

外題に「懷徳堂上梁文」とあり、『目録』の書名はこれ採ったものであろう。しかしその内容は蕉園の文集であり、外題は単に首篇の名を録したものの。印記「播州三木深図書之記」を有すが、抄者は未詳。

およそ四十五篇。その篇目は下記の通り。「懷徳堂上梁文」・「留鶴賦(辛亥十二月朔)」・「羅池帖序(寛政乙卯春)」・「滑稽紀聞序(寛政戊午)」・「書中庸定

本後(寛政庚申十二月朔)・「蘭室集序」・「送白木有常序」・「送津田士文序」・「送巖童子序」・「送林強骨序」・「送文晁序」・「送伴季玄序」・「送石川成父序」・「夢遊湖記」・「寒澗樓記」・「觀螺杯記」・「陶然亭集記(限寸燭光)」・「抱月樓記」・「散亭記」・「益齋記」・「蒼齋記」・「來蘇亭記(寛政三年)」・「黃裳齋記」・「弁髦齋記」・「陶館記」・「山壽堂記」・「宝刀記」・「古刀記」・「吊楠公文」・「祭人麻呂文(庚戌秋)」・「祭竹里翁文」・「祭洪井子德文(天明七年)」・「吉田鴻儀墓誌銘(寛政十二年)」・「出師表并序」・「二源論」・「原跨」・「答岩有礼」・「軀不軀義」・「題伯牙破琴圖」・「吐握圖」・「汝陽王圖」・「擬源義經与大江広元書」・「復尾藤博士書」(答尾藤學士書に同じ)・「与脇子善書」・「答中川生書」。

『通語』 目錄四二頁(3) 76

和中本。三冊。九行二十字抄本。本文は左右双辺、序文は無界無野。小西文庫。

内題・外題とも『通語』。

本文は江戸末期(天保二年か)の抄。序のみ明治三十五年に刊本から抄。『通語』の抄本は多くが現存するが、いったん本文を抄写した後に刊本『通後』の序を補抄したという本は稀であり興味深い。明治以降にも龍野において懷徳堂に關する學問が繼承されていたことを示す、好個の資料と言えよう。

『老子經』 目錄七頁(3) 35

二冊。延宝二年上村二郎右衛門刊本。小西文庫。

内題「老子騰齋口義」。外題「增補首書老子經(乾・坤)」。

林注本であるが『目錄』が「老子經」とするのは、外題に誤られたものか。

一般的な和刻本であり、書き入れの類は認められない。とくに懷徳堂に

關わる資料ではないが、『目錄』からは欄外書込の有無などを判別できないため、欄外注の類がないことを特に記す。

なお履軒『老子雕題』については、北山文庫抄本や新田文庫抄本などが最近「発見」されつつあるが、依然として原本の所在は不明であり、抄本の分布状況も充分には明らかとされていない。

(本センター非常勤事務補佐員)

兼報(二〇〇二年四月～二〇〇三年三月)

「人事」

五月 一日 センター非常勤職員として、井上丁(本学サイバーメディ

アセンター研究員、元・本研究科助手)が着任。

三月三〇日 任期満了に伴い、井上非常勤職員が退職。

なお、二〇〇二年度中に運営委員等の交代はなかった。

同年度の委員等は、下記の通り。

懷徳堂センター室長 奥平俊六 (本研究科教授、美術史学)

運営委員 鷺田清一 (本研究科教授、臨床哲学)

江川 温 (本研究科教授、西洋史学)

伊井春樹 (本研究科教授、日本文学)

柏木隆雄 (本研究科教授、フランス文学)

天野文雄 (本研究科教授、音楽学・演劇学)

中村生雄 (本研究科教授、日本学)

出原隆俊 (本研究科教授、日本文学)

専門委員 湯浅邦弘 (本研究科教授、中国哲学)

村田路人 (本研究科教授、日本史学)

飯倉洋一 (本研究科助教授、日本文学)

三谷研爾 (本研究科助教授、ドイツ文学)

藤田治彦 (本研究科教授、美学・文芸学)

小林 茂 (本研究科教授、人文地理学)

「資料蒐集」

九月二〇日 履軒賛『象図』および抄本『姓氏断』を購入。

三月三〇日 『紙製天図』『木製天図』『方図』『潮図』レプリカを作成。

「出版広報」

五月 七日 センターのwebページを作成・公開。

(<http://www.let.osaka-u.ac.jp/kaitoku-c/>)

三月三一日 センターのパンフレット(全八頁)を発行。

「展示等」

四月二九日 大阪大学附属図書館にて「いちよう祭」開催。センターからは「懷徳堂CGタペストリー」「貴重資料パネル」「懷徳堂デジタルコンテンツ(バーチャル懷徳堂・懷徳堂データベース)」「懷徳堂文庫電子図書目録」を出展。(～四月三〇日)

「文学部説明会」の一環として「研究室開放」を実施。見学のため来校の高校生に対してセンター室を開放し、「バーチャル懷徳堂」操作体験などを実施。

七月二四日

大阪歴史博物館およびNHK大阪文化ホールにて、本学総合学術博物館の設立記念展を開催。懷徳堂関係資料および「バーチャル懷徳堂」などを出展。(～一〇月二〇日)

一〇月二二日

(井上記)

編集後記

・平成十四年から本格的な活動を開始した懷徳堂センターは、学内外において精力的な活動を続けています。本誌『懷徳堂センター報』は、その活動報告と関係論考を掲載するもので、本号が創刊号です。

・懷徳堂センターの概要や活動については、センターHP (<http://www.let.osaka-u.ac.jp/kaitoku-c/index.html>) もご覧下さい。

・懷徳堂センターには、専任スタッフは配置されていません。見学・視察等を御希望の場合には、予め御連絡いただければ幸いです。

(懷徳堂センター専門委員 湯浅邦弘)

二〇〇四年二月二十九日発行

懷徳堂センター報 二〇〇四

編集・発行

大阪大学大学院文学研究科・文学部懷徳堂センター

〒五六〇―八五三二 豊中市待兼山町一―五

電話 〇六―六八五〇―五〇八八

印刷・装丁

阪東印刷紙器工業所

〒五五三―〇〇〇四 大阪市福島区玉川三―六―四

電話 〇六―六四四三―〇九三六

『懷徳堂センター報』2004 目次

巻頭言	奥平俊六 (2)
「須田国太郎 能・狂言デッサン」と昭和前期の能楽界	天野文雄 (3)
「須田国太郎 能・狂言デッサン」と父須田国太郎の思い出	須田 寛 (19)
展示室を飛び出した「懷徳堂」 —— 大阪大学懷徳堂センターの活動 ——	湯浅邦弘 (33)
洛訥奚囊 —— 中井履軒の京都行	湯城吉信 (49)
大阪府立中之島図書館蔵『毛詩品物図攷雕題』について	井 上 了 (77)
並河寒泉『弁怪』翻刻 (一)	佐野大介 (95)
龍野文庫蔵懷徳堂関係文献簡介 (一)	井 上 了 (105)
彙報(二〇〇二年四月～二〇〇三年三月)	(111)

第一次新田文庫暫定目録	池田光子 (3)
大阪大学附属図書館蔵「北山文庫統」暫定目録	井 上 了 (61)

大阪大学大学院文学研究科・文学部懷徳堂センター

2004年2月29日発行

第一次新田文庫暫定目録

池 田 光 子

「新田文庫」とは、新田氏より大阪大学付属図書館へ寄贈された、新田家および中井家に伝来の遺物・書籍等の総称である。これは中井木菟麻呂^{うさまろ}の旧蔵であった。

中井木菟麻呂はかつて重建懷徳堂に懷徳堂関係の資料を寄付したことがあった。寄付に関する事情は中井木菟麻呂「懷徳堂遺物寄進の記」(『懷徳』11号 懷徳堂堂友会1933年10月)、吉田鋭雄「懷徳堂水哉館遺書遺物目録」(『懷徳』17号 懷徳堂堂友会1939年10月)、同「懷徳堂所蔵懷徳堂先賢著述書目」(『懷徳』19号 懷徳堂堂友会1941年10月)、『懷徳堂文庫図書目録』(大阪大学文学部1976年3月)^(註1)に詳しいのでここでは省略するが、木菟麻呂はその所有資料の全てを寄付したわけではない。寄付されなかった資料は妹で養子ともなった中井終子に伝えられ、更に終子の養子となった新田和子へ伝えられた。これら資料の存在は従来知られていなかったが、大阪大学へ新田氏からの寄付申し込みがあり、昭和54年(1979)春、寄付が実現された。これが「第一次新田文庫」である。その後、昭和58年(1983)にも寄付が行われ、この時寄付された資料は「第二次新田文庫」と称される。新田文庫の寄付に至る経緯等に関しては木村英一「懷徳堂先賢の業績と遺品との蒐集・整理・保存に関する近況について」(『懷徳』50号 懷徳堂堂友会1980年10月)、竹腰礼子「大阪大学懷徳堂文庫のなりたちと蒐集の経緯」(『懷徳』70号 懷徳堂記念会2002年3月)に詳しい。

新田文庫は以下の二種の資料によって構成されている。一つは旧懷徳堂に関連する資料である。これを細分すると、懷徳堂先賢の自筆稿本、自筆草稿本、関係器物、となる。そしてもう一つは中井木菟麻呂・終子^(註2)兄妹、に関連する資料である。これを細分すると、兄妹が入信していたロシア正教会に関するもの、日記、懷徳堂復興運動に関する資料や草稿、書簡類、器物、に分けられる。

この二種の内、研究が進められているのは前者の旧懷徳堂に関連する資料である。これまでの研究を挙げると、前掲竹越論文では、『履軒弊帚』『弊帚続編』『弊帚季編』『履軒古韻』『古詩得所編』『越俎載筆』について触れられており(E323、E330が該当資料)中井履軒の自筆本として、その重要性が指摘されている。寺門日出男「懷徳堂文庫蔵『萬年先生遺稿』をめぐって」(『中国研究集刊』調号(第32号)大阪大学中国学会2003年6月)は『観瀾先生詩稿』(E214)を扱い、資料の重要性を紹介するのみならず、後人が付けた資料名の誤りを指摘するものであり、今後の保存や整理に関して注意を促す論考である。また竹田健二「『懷徳堂紀年』とその成立過程」(『中国研究集刊』調号(第32号)大阪大学中国学会2003年6月)は『懷徳堂紀年』(E128)を扱い、『懷徳堂考』の著者である西村天因と中井木菟麻呂との交友関係を明らかにし、重建懷徳堂の歴史を考察する上で貴重な指摘を行っている。

今後、こうした新田文庫を用いた研究の進展が期待されるが、そのためには基礎的研究として新田文庫の目録が不可欠になることが予想される。しかし遺憾ながらこれまでのところ、新田文庫の目録は編纂されておらず、その内容は明らかとされてはいない。本稿はその欠を埋めるために編纂された「第一次新田文庫」の暫定目録である。

編纂方針に関して説明しておく以下の通りである。

まず資料番号について。第一次新田文庫は寄贈の際、受け入れ印以外、異なる独自の番号を附されている。それがEから始まる通称「E番号」である（第二次は「F番号」）。本稿が対象としたのはこの「E番号」の資料である。この番号の並びに関しては、何かしら明確な意図があるように思われるが、便宜上、書名を列挙するに際してその番号の順序に従い配列することとした。

「第一次新田文庫」所蔵器物類について。前掲竹越論考が述べているように、平成12年(2000)の図書館への資料移動の際、配架の乱れが修正され、現在「新田文庫」は一部例外はあるにせよ、書架・器物棚中に整理して配架されている。しかしながら、本稿ではこれら器物は収録していない。本稿では書架に配架されている第一次新田文庫についてその書名を記しているのみである。

資料名の修正と確定について。これらの問題は該当書物を詳しく調査する必要があるため、今回はそうした指摘にまでは及ばなかった。今回の目録中、懷徳堂の先賢、その中でも著名な中井竹山・履軒兄弟の自筆かと思われる書物について以下数点を挙げる。これらの資料が、懷徳堂先賢の自筆であるか否かの判断についても、真贋はさておき、管見の限りで疑わしいものについて挙げた。「暫定」と題する所以である。

【履軒】

E145『属事連珠』

E147『履軒古風』(履軒の印記有り。)

E156『履軒先生編 語句出典』

E158『諸韻瑚璉』

E174『典膜接』

E181『尚書雕題附言』(履軒の印記有り。)

E185『簡牘篇』

E187『述龍篇』

E196『経界図』(2冊の内、大きい外形の方が履軒筆かと思われる。紙片も履軒であろう。)

E198『履軒先生遺稿雜集』

E301『世説新語補』(首書が多く、履軒筆であれば雕題のような性質の書であろう。)

E318『履軒先生仮名手本』

【竹山^(註4)】

E105『遊芳山記』

E110『束稽』

E316『竹山先生祝枝山之筆ヲ学ブ』

E339『竹山先生雜著合巻』

E340『竹山先生雜集』

注

注1： 第一次北山文庫、木間瀬文庫、岡田文庫を含む。

注2： 江戸期懷徳堂において学主・教授・預かり人等をつとめた中井家の末裔。寄贈した新田和子は終子の養子である。

注3： 既に自筆として指摘されている『左九羅帖』（E313）、『弊帚統編 弊帚季編 髦宮未定稿 弊帚旧稿拾遺 履軒古韻 古詩說書篇 後聖空議』（E323）、『履軒弊帚』（E330）については列挙しない。

注4： 竹山の自筆ではないが、竹山の『国字牘』に関して興味深い書が新田文庫に存在する。それは、竹山の高弟とされた瀧家の名前が書かれている『竹山先生国字牘』（E159以下①）と『竹山先生 国字牘遺稿 副本』（E337以下②）とである。①を懷徳堂文庫所蔵の竹山直筆と弟子の写したものが混在しているとされる『国字牘』（以下③）に比較すると①は③の関を補っている章のあることが分かる。②はおそらく数人の手によって書写されたものであろう。また、③と比較された形跡がある。

以上の三書は『国字牘』の流通を考える際に参考とすべきであろう。こうした研究も今後の課題と言えよう。

【凡例】

E番号 『資料名』（主として内題。旧字体は新字体に変える。） （受入番号）

(1) 数量・冊数（帙の有無も記す。必要に応じて装丁について記す。）

(2) 外形寸法（cm）縦×横（小数点第2位以下切り捨て。）

(3) 内訳（この項目については、一帙の中身が数種の書籍で成立している場合のみ記す。）

(4) 備考

※『資料名』と〔受入番号〕は体裁上前後する場合がある。

●E57『歌道人物志』 [79CL00707]

(1) 1帙7冊・刊本

(2) 15.8×11.0

(4)

●E58 『平家物語講義』 一～四 [79CL00687]

- (1) 1帙4冊・刊本
- (2) 22.2×14.9
- (4)

●E59 『漢土諸家人物誌』 上中下 [79CL00710]

- (1) 1帙2冊・刊本
- (2) 15.7×11.2
- (4)

●E60 『太史公助字法』 [79CL00711]

- (1) 1帙2冊・刊本
- (2) 17.7×12.2
- (4)

●E61 『文選字彙』 [79CL00702]

- (1) 1帙2冊・刊本
- (2) 15.5×11.0
- (4) 毎日新聞の切り抜き (31.0×20.3)

●E62 『保元物語講義』 上下 [79CL00698]

- (1) 1帙2冊・刊本
- (2) 22.3×15.3
- (4)

●E63 『官職通解』 [79CL00712]

- (1) 1帙1冊・刊本
- (2) 22.6×15.1
- (4)

●E64 『平治物語講義』 [79CL00697]

- (1) 1帙2冊・刊本
- (2) 22.1×14.9
- (4)

●E65 『中興鑑言』 [79CL00713]

- (1) 1帙1冊・刊本
- (2) 25.0×18.0
- (4)

●E66 『職原抄』 [79CL00708]

- (1) 1帙1冊・刊本
- (2) 14.7×10.6
- (4)

●E67 『贈答百人一首』 [79CL00700]

- (1) 1帙1冊・刊本
- (2) 18.0×11.8
- (4)

●E68 『小野小町歌集』 上 [79CL00704]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 24.6×16.5
- (4) 付「小町業平歌問答下」

●E69 『赤染衛門家集抄』 [79CL00702]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 24.6×16.4
- (4)

●E70 『月溪句集』 [79CL00705]

- (1) 1帙1冊・刊本
- (2) 24.2×16.6
- (4) 手紙1通 (24.3×17.0)

●E71 『書学大概執筆』 [79CL00714]

- (1) 1帙1冊・刊本
- (2) 26.0×17.7
- (4)

●E72 『太田垣蓮月』 [79CL00701]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 24.6×16.5
- (4)

●E73 『紫式部』 [79CL00703]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 24.7×16.6

(4)

●E74 『雑字類編』 [79CL00717]

(1) 1帙2冊・刊本

(2) 23.9×16.1

(4)

●E75 『住吉物語通釈』 [79CL00694]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 24.0×14.9

(4)

●E76 『草書淵海』 [79CL00716]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 28.1×18.1

(4)

●E77 『増鏡詳解』 [79CL00696]

(1) 1帙4冊（内1冊は付録）・刊本

(2) 22.5×14.9

(4)

●E78 『列女百人一首』 [79CL00700]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 18.0×12.1

(4)

●E79 『画筌』 [79CL00715]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 25.5×18.3

(4)

●E80 『広益秘事大全』 [79CL00725]

(1) 1帙5冊・刊本

(2) 24.6×17.5

(4)

●E81 『ひらめき』 [79CL00706]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 23.4×16.0

(4)

●E82 『訂正増補枕草子春曙抄』 上中下 [79CL00697]

(1) 1帙3冊・刊本

(2) 23.0×15.3

(4)

●E83 『曹大家女誡』 [79CL00726]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 24.6×17.5

(4)

●E84 『女諸礼綾錦』 上下『女諸通用文章』 [79CL00724]

(1) 1帙3冊・刊本

(2) 22.3×15.7

(4)

●E85 『包結記』 [79CL00722]

(1) 1帙2冊・刊本

(2) 26.2×18.5

(4)

●E86 『葬祭式』 [79CL00720]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 25.5×17.4

(4)

●E87 『画本千字文』 [79CL00718]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 22.8×15.9

(4)

●E88 『大和本草諸品図』 [79CL00719]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 22.7×15.9

(4)

●E89 『柿本人麿歌集』 [79CL00699]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 22.5×14.8

(4)

●E90 『千代茂登草』 [79CL00727]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 26.6×18.2

(4)

●E91 『詩律兆』 [79CL00544]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 28.0×18.9

(4)

●E92 『逸史自序進牋』 [79CL00560]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 27.1×19.4

(4)

●E93 『字音仮字用格』 [79CL00721]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 25.7×18.0

(4)

●E94 『逸史自序進牋』 [79CL00560]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 28.5×18.3

(4)

●E95(1) 『逸史』 [79CL00560]

(1) 1帙6冊(首、子～辰)・刊本

(2) 25.8×18.5

(4)

●E95(2) 『逸史』 [79CL00560]

(1) 1帙7冊(巳～亥)・刊本

(2) 25.8×18.5

(4)

●E96 『草茅危言』 [79CL00562]

- (1) 1帙5冊(宮、商、角、徵、羽)・刊本
- (2) 24.2×16.3
- (4) 紙片2枚(19.4×13.4、21.0×10.3)

●E97 『草茅危言』 [79CL00561]

- (1) 1帙5冊・抄本
- (2) 27.5×18.2
- (4)

●E98/天生関係67/380 『国楽式』 [79CL00541]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 22.6×15.3
- (4)

●E99 『河図洛書弁』 [79CL00545]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 29.7×18.9
- (4) 版心に「逸史」と入った用紙を使用

●E100 『閑距余筆』 [79CL00546]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 26.8×18.6
- (4)

●E101 『志可らみ』 [79CL00543]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 25.2×17.5
- (4)

●E102 『鬻築教授譜』 [79CL00541]

- (1) 1帙
- (2) (3) 参照
- (3) 紙片5枚(「平調 五常楽急」(32.9×46.0)「慶徳」(24.5×34.4)「平調 五常楽譜・越天楽」(24.5×34.4)「楽器図」(18.2×20.1)「東儀俊慰の住所」(15.5×7.5))
- (4) 包紙(24.5×33.6)

●E103/天生関係64/377 『楽譜』 [79CL00541]

- (1) 1帙

(2) (4) 参照

(4) 紙片2枚 (29.1×19.6、19.8×13.6)

●E104 『中庸断』 [79CL00549]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 23.1×22.0

(4)

●E105 『遊芳山記』 [79CL00551]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 24.0×16.5

(4)

●E106 『西上記』 [79CL00553]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 19.0×12.2.0

(4)

●E107 『和歌新題百首詩』 [79CL00554]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 23.8×16.0

(4)

●E108 『東征稿』 [79CL00552]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 27.0×17.5

(4)

●E110 『束稽』 [79CL00558]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 22.5×15.5

(4)

●E111 『杜倉私議』 [79CL00555]

(1) 無帙1冊・刊本

(2) 25.8×17.9

(4)

●E112 『大学断』 [79CL00548]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 23.1×22.0
- (4)

●E113 /天生関係26～33/353～360 [79CL00526]

『黄裳甲戌稿 癸酉稿 丙子稿 丁丑稿 戊寅稿 己卯稿 庚辰稿 辛巳稿』

- (1) 1帙10冊・抄本
- (2) (3) 参照
- (3) 甲戌稿 (1冊目23.0×15.3 2冊目24.3×16.0)
癸酉稿 (23.8×16.1)
丙子稿 (25.2×17.2)
丁丑稿 (2冊25.2×17.5)
戊寅稿 (25.2×17.2)
己卯稿 (23.2×14.5)
庚辰稿 (23.1×14.6)
辛巳稿 (23.1×15.0)
- (4)

●E114/天生関係19～25/346～352

『朝きよめのうた 千語雑吟并朝きよめのうた』 [79CL00527/528]

- (1) 1帙7冊・抄本
- (2) (3) 参照
- (3) 天生関係19/346 [79CL00527] 『朝きよめの歌』 (23.8×16.0)
天生関係20/347 [79CL00527] 『朝きよめのうた』 (23.2～25×15.0～15.9)
天生関係21/348 [79CL00528] 『千語雑吟』 (25.2×17.0)
天生関係22/349 [79CL00528] 『千語雑吟』 (25.2×17.0)
天生関係23/350 [79CL00528] 『千語雑吟并朝きよめの歌』 (25.2×17.2)
天生関係24/351 [79CL00528] 『千語雑吟并朝きよめの歌』 (25.0×17.0)
天生関係25/352 [79CL00528] 『千語雑吟并朝きよめの歌』 (25.0×17.0)
- (4)

●E115/記録62/318 『重建懷徳堂意見』 [79CL00536]

- (1) 1帙2冊・刊本
- (2) 23.2×15.6
- (4)

●E117 『並河天民事略』 [79CL00539]

- (1) 1帙4冊 (4冊とも中身同じ)・刊本
- (2) 24.4×16.8
- (4) 紙片1枚 (25.7×9.3~9.7)

●E118 『洛訥五子遺集』 [79CL00535]

- (1) 1帙1冊・刊本
- (2) 25.0×14.9
- (4)

●E119/記録64/320 『重建水哉館意見』 [79CL00537]

- (1) 1帙3冊・刊本
- (2) 23.0×15.6
- (4)

●E121/天生関係59/373 『仰止録』 [79CL00540]

- (1) 1帙1冊・刊本
- (2) 22.2×15.2
- (4)

●E122/天生関係58/372 『仰止録』 [79CL00540]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 25.1×16.9
- (4) 『仰止録(「並河誠所」を消してタイトルを変更)』の草稿

●E123/天生関係60/374 『時雨亭集』 [79CL00530]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 23.2×15.9
- (4)

●E124/天生関係61/375 『小倉日記』 [79CL00531]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 23.0×15.8
- (4)

●E125 『水哉子』 [79CL00585]

- (1) 1帙1冊・抄本

(2) 26.2×18.9

(4)

●E126 『天民遺言』 [79CL00538]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 26.2×18.3

(4)

●E127/天生関係63/376 『鳳笙譜』 [79CL00541]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 13.2×19.2

(4) 紙片2枚(「盤渉調」(24.2×32.6)、「平調感恩多」 「盤渉調 五常楽急」(24.2×32.6))

●E128/ 記録6/304 『懷徳堂紀年』 [79CL00534]

(1) 無帙1冊・抄本

(2) 27.0×19.6

(4)

●E128/記録7 『懷徳堂纂録』 [79CL00534]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 27.2×19.5

(4)

●E128/記録8/306 『懷徳堂記録拾遺』 [79CL00534]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 27.1×19.6

(4)

●E129 『竹山先生語録』 [79CL00550]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 28.0×19.9

(4)

●E130/中井終子関係4/388 『楓帷の独かたり』 [79CL00532]

(1) 1帙2冊・抄本

(2) 23.0×15.9

(4)

●E131/天生関係65/378 『躰築譜』 [79CL00541]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 13.0×19.5
- (4) 紙片2枚 (13.5×20.1)

●E132 /天生関係37/364 『蓬萊』 [79CL00539/79CL00542]

- (1) 1帙
- (2) (4) 参照
- (4) 539の受入番号→半紙12枚(23.7×34.1) (表に周易逢原、裏に木菟麻呂筆らしきメモ)
542→「蓬萊」と印刷された包み紙(37.9×52.5)の中に紙片2枚(1枚は「博山炉考」
(木菟麻呂の書いた印刷物(38×53.1))、もう1枚は履軒の書いた蓬萊山(『左九羅帖』所
収)を印刷(38.0×52.1))

●E133 『詩断』 [79CL00547]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 25.0×17~17.7
- (4)

●E134 『通語』 [79CL00579]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 24.1×16.5
- (4)

●E135 『中庸逢原』『大学雑議』 [79CL00577]

- (1) 1帙2冊・刊本
- (2) 23.4×15.7
- (4) 紙片1枚 (21.0×13.1)

●E136 『中庸逢原』 [79CL00576]

- (1) 1帙1冊・刊本
- (2) 23.4×15.7
- (4)

●E137 『周易逢原』 [79CL00575]

- (1) 1帙3冊・刊本
- (2) 23.4×15.7
- (4) 紙片1枚 (21.0×7.2)

●E138 『履軒古風』 [79CL00583]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 26.2×18.9
- (4)

●E139 『履軒髦言』 [79CL00584]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 26.3×18.8
- (4)

●E140 『水哉子』 [79CL00578]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 22.5×15.5
- (4)

●E141 『後聖空議』 [79CL00587]

- (1) 無帙1冊・抄本
- (2) 26.3×19.0
- (4)

●E142 『枕上雜題』 [79CL00586]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 26.3×19.0
- (4)

●E143 『履軒古韻』 [79CL00582]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 22.5×15.5
- (4)

●E144 『履軒古韻』 [79CL00582]

- (1) 1帙5冊・刊本
- (2) 27.3×11.8
- (4)

●E145 『屬事連珠』 [79CL00592]

- (1) 1帙1冊・抄本

(2) 25.5×18.0

(4)

●E146/天生78/385 [79CL00529]

『中井木菟麻呂懷徳堂関係資料(懷徳堂再建記録他)』

(1) 1帙

(2) (3) 参照

(3) (雑多なため冊数や紙片等については、その数量のみを記す)

抄本4冊 (内1冊は『懷徳堂年譜』の草稿、内1冊は紙片1枚と仮綴じの抄本が挟まっている)

『懷徳堂再建記録』と書かれた包紙の中身 (紙片11枚、刊本1冊「重建懷徳堂意見」、抄本仮綴じ2冊)

包紙に「懷徳堂出門の歌 懷徳堂再建の歌」と書かれた中身 (紙片3枚)

その他紙片8枚

(4)

●E147『履軒古風』第二 [79CL00583]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 24.8×16.0

(4)

●E149/天生関係38/365『中井木菟麻呂キリスト教関係草稿類』 [79CL00529]

(1) 1帙7冊・抄本

(2) 24.5～26.0×16.5～18.0

(4)

●E150/中井終子関係3/387『ちるもみちはの記』 [79CL00533]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 23.1×15.9

(4)

●E151『伝疑小史』 [79CL00588]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 27.0×18.2

(4)

●E152 『通語』 [79CL00580]

- (1) 1帙3冊（上中下）・刊本
- (2) 25.5×17.9
- (4)

●E153 『伝疑小史』 [79CL00588]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 24.0×16.6
- (4)

●E154 『稻垣子華孝状』 [79CL00559]

- (1) 1帙1冊・刊本
- (2) 26.6×18.8
- (4) 表紙には『磯の藻屑 一』と書き付け

●E155/天生関係52/366 『雑草集録』 [79CL00529]

- (1) 1帙7冊・抄本
- (2) 22.9～24.8×15.5～17.5
- (4) 紙片4枚、切り抜き4枚

●E156 『履軒先生編 語句出典』 [79CL00581]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 24.9×17.3
- (4)

●E157 『洛汭奚囊』 [79CL00591]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 19.1×13.0
- (4)

●E158 『諧韻瑚璉』 [79CL00581]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 27.5×19.7
- (4)

●E159 『竹山先生国字牘』 [79CL00564]

- (1) 1帙3冊（一、五、六）・抄本

(2) 22.7×16.0

(4) 端本。貴重図書としてロッカーに収められている『国字韻』は関になっている章がある。
しかしこの書では関になっている章も書かれている。

●E160 『諧韻瑚璉』 [79CL00581]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 24.7×17.2

(4) 表紙に「写本別に1冊あり」の書き付け

●E161 『孟子逢原』 [79CL00573]

(1) 1帙7冊・抄本

(2) 23.5×16.1

(4)

●E162 『雕蟲後篇 後一宵十賦』 [79CL00623]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 24.0×13.15

(4)

●E163 『奠陰集』 [79CL00563]

(1) 1帙3冊（巻之四～六）・抄本

(2) 23.0×15.9

(4)

●E164 『津問』 [79CL00624]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 23.1×16.1

(4)

●E165 『春秋左伝雕題略』 [79CL00569]

(1) 1帙5冊・刊本

(2) 22.3×15.0

(4)

●E166 『和爾雅』 [79CL00646]

(1) 1帙5冊（巻一～八）・刊本

(2) 22.3×15.8

(4)

●E167 『新刊校正用字格』 [79CL00641]

- (1) 1帙4冊 (一～四)・刊本
- (2) 22.3×16.0
- (4)

●E168 『經史摘語』 [79CL00645]

- (1) 1帙2冊・刊本
- (2) 22.6×15.2
- (4)

●E169 『故事成語考』 [79CL00643]

- (1) 1帙1冊・刊本
- (2) 22.4×14.8
- (4)

●E170 『周易逢原』 [79CL00574]

- (1) 1帙3冊・抄本
- (2) 23.0×25.8
- (4) 大正15年版刊本の原稿

●E171 『論語逢原』 [79CL00572]

- (1) 1帙4冊・刊本
- (2) 23.0×15.8
- (4)

●E172 『經義問答』 [79CL00644]

- (1) 1帙1冊・刊本
- (2) 22.0×14.8
- (4)

●E173 『周易逢原』 [79CL00574]

- (1) 1帙3冊・刊本
- (2) 23.5×15.7
- (4)

●E174 『典謨接』 [79CL00571]

- (1) 1帙1冊・抄本

(2) 24.8×17.4

(4)

●E176 『質疑篇瑣語合刻』 [79CL00630]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 25.8×18.3

(4) 『質疑篇』のみ

●E176 『典謨接』 [79CL00571]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 22.8×16.2

(4)

●E178 『老子雕題』 [79CL00566]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 23.6×15.5

(4) 端本

●E179 『炎窓代睡』 [79CL00625]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 26.5×19.0

(4)

●E180 『古文雕題』 [79CL00565]

(1) 1帙2冊・抄本

(2) 24.7×16.7

(4)

●E181 『尚書雕題附言』 [79CL00567]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 27.5×20.0

(4)

●E182 『史記雕題序』 [79CL00568]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 24.5×17.0

(4) 早野橘隠の序のみを書写

●E183 『絶句逢原』 [79CL00570]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 22.8×16.2
- (4)

●E184 『論語』 [79CL00635]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 22.8×10.1
- (4) 菴庵の跋あり

●E185 『簡諒篇』 [79CL00598]

- (1) 1帙2冊・抄本
- (2) 大25×17.5、小23.2×14.4
- (4)

●E186 『周易卦變考』 [79CL00638]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 23.9×16.2
- (4)

●E187 『述龍篇』 [79CL00599]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 24.2×16.5
- (4)

●E188 『読易図例』 [79CL00639]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 23.5×16.0
- (4)

●E189 『昔昔春秋』 [79CL00614]

- (1) 1帙1冊・刊本
- (2) 18.0×11.9
- (4)

●E190 『葬祭私説』 [79CL00634]

- (1) 1帙1冊・抄本

(2) 23.7×14.7

(4) 紙片2枚 (18.7×24.4)

●E191 『作文真訣 作文初門』 [79CL00640]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 24.0×15.4

(4)

●E192 『読易私説』 [79CL00637]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 23.0×15.6

(4)

●E194 『姓氏断』 [79CL00595]

(1) 1帙2冊 (内1冊は仮綴じ)・抄本

(2) 22.5×15.4 (仮綴じ21.6×14.5)

(4)

●E195 『騶囊 騶碧囊』 [79CL00622]

(1) 1帙3冊・抄本

(2) 『騶囊』は24.5×16.8、1冊目の序は17.6×11、2冊目23.2×16.2

(4)

●E196 『経界図』 [79CL00593]

(1) 1帙2冊・抄本

(2) 大24.2×17.4、小22.8×16.2

(4) 紙片1枚 (「禹貢五服図」27.7×40.6)

●E197(1) 『礼記集説』 [79CL00678]

(1) 1帙6冊 (序～十二)・刊本

(2) 26.5×18.8

(4)

●E197(2) 『礼記集説』 [79CL00678]

(1) 1帙9冊 (十三～三十)・刊本

(2) 26.6×18.7

(4) 紙片1枚 (13.6×38.3)

●E198 『履軒先生遺稿雜集』 [受入番号は (3) 参照]

(1) 1帙19冊・抄本

(2) (3) 参照

- (3) 1…『履軒先生故紙稿拾』 [79CL00594] 25.2×17.5
2…『帚拾弁』 [79CL00596] 25.2×17.3
3…『履軒先生遺稿草本』 [79CL00600] 25.3~27.1×18~19
4…『履軒隨筆集』 [79CL00600] 24.0×17.8
5…『履軒先生遺稿雜集』 [79CL00601] 24.3~25.6×17.2~18.4
6…『履軒外集(月可録附年成録目錄)』 [79CL00601] 24.0×16.4
7…『月可録』 [79CL00601] 25.2×17.5
8…『葵』 [79CL00602] 24.5~25.3×17.0~17.5
9…『葵』 [79CL00602] 24.0×15.5
10…『復讐譚』 [79CL00603] 25.1×17.8
11…『履軒論文集附明經道点』 [79CL00604] 27.9~29.8×20.0
12…『東西周弁』 [79CL00605] 30.4×21.4
13…『深衣図解』 [79CL00606] 28.2×20.0
14…『越俎載筆』 [79CL00607] 27.2×19.8
15…『履軒先生編魯年表』 [79CL00608] 25.2~28.7×18.1~19.7
16…『刀弁』 [79CL00609] 25.4×17.7
17…『旅の無かしかたり』 [79CL00610] 24.8×16.8
18…『古都多飛』 [79CL00611] 27.9×20.2
19…『履軒先生編古歌評釈』 [79CL00612] 25.4×17.5

(4)

●E199 『唐宋八大家文説本』 [79CL00683]

(1) 1帙5冊・刊本

(2) 22.8×14.3

(4) 紙片2枚 (24.3×33.4)

●E200 『国語定本』 [79CL00680]

(1) 1帙6冊・刊本

(2) 25.0×17.9

(4)

●E201 『蘭洲茗話』『勢語通』『箕陰集』『竹山国字牘』 [79CL00618/19/20/21]

1)

(1) 1帙7冊・刊本

(2) 22.3×15.0

(4)

●E202(1)『懷徳』〔受入番号無し〕

(1) 1帙7冊・刊本

(2) 22.2×15.0

(4) 第6号～12号 (6号は『永田理事長・松山教授追悼録』)

●E202(2)『懷徳』〔受入番号無し〕

(1) 1帙10冊・刊本

(2) E202(1)に同じ。19号から21.0×14.8

(4) 第13～21と28号

●E203『楚辞』〔79CL00679〕

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 28.1×19.3

(4)

●E204 /掛け軸61/259『柚園先生寿詞一束』〔79CL00628〕

(1) 1帙

(2) (4) 参照

(4) 包紙1枚 (31.3×23.3)

紙片3枚 (28.3×73 (柚園の門下生藤本直筆)、29.3×42.1 (柚園の結婚式にて橋爪健が手書)、30.1×40.6 (佐藤逸筆))

●E205『柚園小話』〔79CL00628〕

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 16.2×11.1

(4)

●E206〔受入番号無し〕

『日本の菓子』『かてもの集』『槐記の茶料理』『凡兆句集』

(1) 1帙4冊・刊本

(2) 18.2×12.8

(4)

●E207『源語梯弁』〔79CL00632〕

(1) 1帙3冊・刊本

(2) 15.6×11.1

(4)

●E208 『懷徳堂諸種報告十種』 [受入番号無し]

(1) 1帙10冊・刊本

(2) (3) 参照

(3) 『懷徳堂旧記』 (22.1×15.2)

『懷徳堂旧記』 (『懷徳』 12の抜き刷り) (22.4×15.1)

『懷徳堂水哉館遺書遺物出品目録』 (21.3×15.2)

『財団法人懷徳堂記念会趣旨』 (22.4×15.0)

『懷徳堂記念会会務報告』 (22.4×15.0)

『懷徳堂要覧』 (22.3×15.2)

『荃菴先生貽範家君行状』 (『懷徳』 19の抜き刷り) (22.3×15.2)

『荃菴先生遺稿』 (20.9×14.8)

『懷徳堂水哉館遺書遺品寄進目録』 (21.1×15.4)

『懷徳堂水哉館遺書遺物目録』 (22×15.0)

紙片4枚 (22.3×16.6、22.3×16.4、13.9×4.9、21.9×35.5)

(4)

●E210 『爾雅演』 [79CL00629]

(1) 1帙3冊・抄本

(2) 23.4×16.3

(4)

●E210 『百首贅々』 [79CL00613]

(1) 1帙2冊・抄本と刊本

(2) 抄本29.5×19.5、刊本22.7×15.3

(4)

●E211 『東涯先生遺稿』 [79CL00642]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 30.0×20.0

(4)

●E212 『蒙養編』 [79CL00597]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 21.0×14.2

(4)

●E213 『千字文』 [79CL00627]

(1) 1帙6冊・抄本

(2) 第一・二(24.3×17.0)、第三(24.9×17.3)、第四・五・六(25.0×16.5)

(4)

●E214 『観瀾先生詩稿』 [79CL00636]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 25.2×17.4

(4)

●E215 『碩果先生遺稿』 [79CL00626]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 30.5×16.1

(4)

●E216 『華胥国物かた理』 [79CL00615]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 22.7×16.0

(4)

●E216 『天民遺言』 [79CL00538]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 26.0×18.3

(4)

●E217 『月明』 [受入番号無し]

(1) 1帙27冊(含合本)・刊本

(2) 21.0×15.0

(4)

●E218 『古文真宝』後集 [79CL00882]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 25.4×18.0

(4) 履軒雕題と袖圖増註の書き込み有り

●E219 『和漢朗詠集』 [79CL00685]

- (1) 1帙2冊・刊本
- (2) 22.7×16.2
- (4)

●E220 『大和巡』 [79CL00745]

- (1) 1帙1冊・刊本
- (2) 18.7×12.2
- (4) 紙片1枚 (地図(38.7×26.7~27.6))

●E221 『冠辞考』 上下 [79CL00689]

- (1) 1帙2冊・刊本
- (2) 18.5×12.6
- (4)

●E222 『近世教育史』 [79CL00738]

- (1) 1帙1冊・刊本
- (2) 22.2×14.8
- (4) 書き込み、付箋が多数有り。他、「欧州中世期ノ教育」と題されたメモ29枚(19.7×13.0)

●E223 『神楽催馬楽通解』 [79CL00690]

- (1) 1帙1冊・刊本
- (2) 22.2×14.7
- (4)

●E224 『大鏡註釈総目録』 [79CL00692]

- (1) 1帙3冊・刊本
- (2) 22.5×15.1
- (4)

●E224 『大鏡註釈』 [79CL00692]

- (1) 1帙3冊・刊本
- (2) 22.6×15.2
- (4) 紙片3枚 (藤原氏の系図等)

●E225 『吉野拾遺』 [79CL00691]

- (1) 1帙1冊・刊本
- (2) 22.5×14.8
- (4)

●E226 『朗詠譜』 [79CL00686]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 26.3×18.6

(4)

●E227 『催馬楽』 [79CL00686]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 26.4×18.6

(4)

●E228 『中歌物語集』 [79CL00687]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 26.2×18.6

(4)

●E229(1) 『箋註十八史略校本』 [79CL00684]

(1) 1帙3冊・刊本

(2) 26.2×18.3

(4)

●E229(2) 『箋註十八史略校本』 [79CL00684]

(1) 1帙4冊・刊本

(2) 26.2×18.3

(4)

●E230 『新語辞典』 [79CL00731]

(1) 無帙1冊・刊本

(2) 15.0×8.7

(4)

●E231 『言海』 [79CL00730]

(1) 無帙1冊・刊本

(2) 15.1×11.2

(4)

●E232 『家礼図』 [79CL00671]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 25.9×18.6

(4)

●E233 『思風和歌集』 [79CL00688]

(1) 1帙3冊・抄本

(2) 26.7×18.9

(4) 数人の手により手書

●E234 『天合四教儀講義』 [79CL00742]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 21.6×14.3

(4)

●E235 『大乘佛教百話』 [79CL00743]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 22.0×14.8

(4)

●E236 『小学日本歴史』 [79CL00732]

(1) 1帙3冊・刊本

(2) 22.6×15.2

(4)

●E237 『支那史要附図』 [79CL00734]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 23.0×15.6

(4)

●E238 『赤穂四十七義士碑訳文 烈士喜剣碑訳文』 [79CL00576]

(1) 1帙2冊・刊本

(2) 21.0×14.8

(4)

●E239 『皇国二千六百年史』 [79CL00744]

(1) 無帙1冊・刊本

(2) 19.1×12.7

(4)

●E240 『細川侯爵家の祖先忠興夫人の信仰美談』 [79CL00751]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 19.8×13.5

(4)

●E241 『大阪市民博物館報第8号贈位郷賢事績展覧会記念誌』 [79CL00753]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 18.6×13.0

(4)

●E242 『足利学校遺蹟考』 [79CL00754]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 18.7×12.8

(4)

●E243 『絶海国師小伝』 [79CL00755]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 22.6×13.5

(4)

●E244 『女童子訓翁草』 上下 [79CL00723]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 22.2×15.8

(4)

●E245 『西岡孝子儀兵衛行状聞書』 [79CL00752]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 18.7×13.0

(4)

●E246 『萱野三平』 [79CL00757]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 19.1×13.2

(4)

●E247 『萱野三平重宝』 [79CL00758]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 21.2×14.9

(4) 紙片1枚 (「赤穂義士快挙要録」 21.0×45.5)

●E248 『萱野三平とその一族の俳諧』 [79CL00759]

(1) 1帙2冊・刊本

(2) 21.0×14.9

(4)

●E248 『中庸章句』 [79CL00675]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 26.5×18.8

(4) 紙片1枚 (25.7×35.7)

●E249 『萱野家と室谷家』 [79CL00760]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 22.9×15.1

(4)

●E250/天生関係4/331 『秋霧記』 [79CL00516]

(1) 1帙6冊・抄本

(2) 24.9×17.4

(3) 1冊目 明治34年7月

2冊目 明治35年1月

3冊目 明治35年7月

4冊目 明治36年1月

5冊目 明治36年7月 (但し、7月25日～11月25日は別録)

6冊目 明治37年1月

(4) 包紙1枚 (24.8×75.0)

●E250/天生関係5/332 『秋霧記』 [79CL00516]

(1) 1帙9冊・抄本

(2) (3) 参照

(3) 7冊目 明治37年4月 (24.9×17.8)

8冊目 明治37年8月 (24.9×17.8)

9冊目 明治38年1月 (24.9×17.8)

10冊目 明治38年7月 (25.3×18.0)

11冊目 明治39年1月 (23.8×16.3)

- 12冊目 明治39年7月 (25.0×17.5)
13冊目 明治40年1月 (24.8×17.5)
14冊目 明治40年7月 (25.3×17.4)
15冊目 明治41年1月 (24.9×17.4)
(4) 包紙1枚 (24.7×74.9)

●E250/天生關係6/333 『秋霧記』 [79CL00516]

- (1) 1帙12冊・抄本
(2) (3) 参照
(3) 16冊目 明治41年1月 (24.7×17.5)
17冊目 明治42年1月 (24.7×17.5)
18冊目 明治42年7月 (24.7×17.5)
19冊目 明治43年1月 (24.7~24.9×17.5)
20冊目 明治43年7月 (24.9×17.5)
21冊目 明治44年1月 (24.4×16.4)
22冊目 明治44年7月 (24.9×17.6)
23冊目 明治45年3月 (24.9×17.6)
24冊目 大正2年1月 (24.9×17.6)
25冊目 大正2年7月 (24.9×17.6)
26冊目 大正3年2月 (24.9×17.6)
27冊目 大正3年7月 (24.9×17.6)
(4) 包紙1枚 (24.6×75.2)

●E251 『結婚』 [79CL00749]

- (1) 無帙1冊・刊本
(2) 19.9×14.0
(4)

●E252 『国史紀要』 上中下 [79CL00733]

- (1) 1帙3冊・刊本
(2) 22.3×15.2
(4)

●E253 『紫堇歌集』 [79CL00748]

- (1) 1帙1冊・刊本
(2) 19.0×12.6
(4)

●E254 『支那哲学史引用語類』 [79CL00735]

- (1) 1帙1冊・刊本
- (2) 22.8×16.0
- (4)

●E256 『鎌倉大観』 [79CL00747]

- (1) 1帙1冊・刊本
- (2) 18.8×12.9
- (4)

●E257 『漢和中辞典』 [79CL00729]

- (1) 無帙1冊・刊本
- (2) 15.9×11.0
- (4)

●E258 『都のいぬみ』 [79CL00746]

- (1) 1帙1冊・刊本
- (2) 18.8×12.5
- (4) 紙片1枚 (24.2×44.2)

●E259 『山陵考略』 [79CL00741]

- (1) 1帙1冊・刊本
- (2) 21.8×14.7
- (4)

●E260 『日本文学史教科書』 [79CL00736]

- (1) 1帙1冊・刊本
- (2) 22.6×15.1
- (4)

●E261 『竹取物語考』 [79CL00693]

- (1) 1帙1冊・刊本
- (2) 23.2×15.9
- (4)

●E262 『摂州崇禅寺馬場敵討縁起』 [79CL00762]

- (1) 1帙1冊・刊本

(2) 23.0×15.6

(4)

●E263 『城の慈雲尊者』 [79CL00761]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 22.7×15.1

(4)

●E264 『居東集』 [79CL00740]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 26.1×15.3

(4)

●E265 『日本風土記』 [79CL00739]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 23.0×15.6

(4)

●E266 『国語学習便覧』 [79CL00737]

(1) 1帙2冊（発行年の異なるものが各1冊）・刊本

(2) 22.3×15.0

(4)

●E267 『普通術語辞彙』 [79CL00728]

(1) 無帙1冊・刊本

(2) 22.2×15.3

(4) 紙片1枚（17.9×11.5）

●E268 『孟子集註』 [79CL00675]

(1) 1帙4冊・刊本

(2) 26.4×19.0

(4)

●E269 『論語集註』 [79CL00674]

(1) 1帙4冊・刊本

(2) 26.3×18.5

(4)

●E270 『書經集伝』 [79CL00677]

- (1) 1帙6冊・刊本
- (2) 26.3×18.7
- (4)

●E271 『詩經集註』 [79CL00676]

- (1) 1帙8冊・刊本
- (2) 26.3×18.5
- (4)

●E272 『古文孝經』 [79CL00669]

- (1) 1帙1冊・刊本
- (2) 22.1×14.7
- (4) 中井終子の昭和23年9月10日のメモ有り

●E273 『易』 [79CL00670]

- (1) 1帙1冊・刊本
- (2) 25.0×17.5
- (4)

●E274 『大学章句』 [79CL00672]

- (1) 1帙1冊・刊本
- (2) 26.5×18.8
- (4)

●E275 『中庸章句』 [79CL00673]

- (1) 1帙1冊・刊本
- (2) 26.5×18.9
- (4) 紙片1枚 (25.7×35.8)

●E277 『続近世先哲叢談』 [79CL00666]

- (1) 1帙2冊・刊本
- (2) 22.2×14.9
- (4)

●E278 『近世先哲叢談』 [79CL00665]

- (1) 1帙2冊・刊本

(2) 22.2×14.9

(4)

●E279/天生関係1/328 『居諸録 天楽楼置』 [79CL00572]

(1) 1帙2冊・抄本

(2)

「千八百八十一年八月一日権輿」 21.7×14.5、「千八百八十一年十月一日権輿」 25.3×18.0

(4)

●E280/天生関係2/329 『居諸録 天楽楼置』 [79CL00522]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 25.0×18.1

(4)

●E281 『天楽楼居諸録』 [79CL00523]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 27.5×19.0

(4) 「明治十七年二月一日権輿」の書き付け

●E282/天生関係3/330 『黄裳斎日記』 [79CL00515]

(1) 1帙11冊・抄本

(2) 25.0×16.7 (11冊目のみ28.0×19.9)

(4) 日記の期間は明治28年1月～明治33年1月

●E283/天生関係8/335 『鶴室記』(第一) [79CL00517]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 27.2×19.0

(4) 大正4年1月～7月21日まで

●E284/天生関係9(2)/336 『鶴室記』 [79CL00517]

(1) 1帙4冊・抄本

(2) 24.0×16.7

(3) 第三(大正5年7月～12月)

第四(大正6年1月～6月)

第五(大正6年7月～12月)

第六(大正7年1月～6月)

(4)

●E284/天生関係9/336 『鶴室記』 [79CL00517]

- (1) 1帙2冊・抄本
- (2) 24.3×16.9
- (3) 一巻（大正4年7月～12月）二巻（大正5年1月～6月）
- (4)

●E285/天生関係12/339 『吳江日録』 [79CL00518]

- (1) 1帙8冊・抄本
- (2) 24.8×17.5
- (3) 1冊目（大正10年9月～）
2冊目（大正11年1月～）
3冊目（大正11年7月～）
4冊目（大正12年1月～）
5冊目（大正12年7月～）
6冊目（大正13年1月～）
7冊目（大正13年7月～）
8冊目（大正14年1月～）
- (4) 包紙1枚（25.0×72.2）

●E286/天生関係14/341 『桜陵記』 [79CL00520]

- (1) 1帙13冊・抄本
- (2) 25.3×17.5
- (3) 1冊目（大正15年7月～）
2冊目（昭和2年1月～）
3冊目（昭和2年7月～）
4冊目（昭和3年1月～）
5冊目（昭和3年7月～）
6冊目（昭和4年1月～）
7冊目（昭和4年7月～）
8冊目（昭和5年1月～）
9冊目（昭和5年7月～）
10冊目（昭和6年1月～）
11冊目（昭和6年7月～）
12冊目（昭和7年1月～）
13冊目（昭和7年7月～）
- (4) 包紙1枚（25.0×71.6）

●E287/天生関係10/337 『鶴室記』 [79CL00517]

- (1) 1帙5冊・抄本
- (2) 25.0×17.6
- (3) 第七 (大正7年7月～)
第八 (大正8年1月～)
第九 (大正8年7月～)
第十 (大正9年1月～)
第十一 (大正9年7月～)
- (4)

●E288/天生関係13/340 『彌中記』 [79CL00519]

- (1) 1帙3冊・抄本
- (2) 24.9×17.6
- (3) 1冊目 (大正14年4月1日～)
2冊目 (大正14年7月1日～)
3冊目 (大正15年1月1日～)
- (4) 包紙1枚 (25×72.3)

●E289/天生関係15/342 『桜谷記』 [79CL00521]

- (1) 1帙10冊・抄本
- (2) 25.0×17.5
- (3) 1冊目 (昭和7年10月～)
2冊目 (昭和8年1月～)
3冊目 (昭和8年7月～)
4冊目 (昭和9年1月～)
5冊目 (昭和9年7月～)
6冊目 (昭和10年1月～)
7冊目 (昭和10年7月～)
8冊目 (昭和11年1月～)
9冊目 (昭和11年7月～)
10冊目 (昭和12年1月～)
- (4) 包紙1枚 (24.9×71.9)

●E290/天生関係16/343 『薜荔窩記』 [79CL00525]

- (1) 1帙4冊・抄本
- (2) 25～25.7×17.5～18

- (3) 第一 (昭和12年6月～)
- 第二 (昭和13年1月～)
- 第三 (昭和13年7月～)
- 第四 (昭和14年1月～)

(4)

●E291/天生関係17/344 『後水哉館記』 [79CL00524]

- (1) 1帙9冊・抄本
- (2) 23.2×16.6
- (3) 1冊目 (昭和14年4月～)
- 2冊目 (昭和14年7月～)
- 3冊目 (昭和15年1月～)
- 4冊目 (昭和15年7月～)
- 5冊目 (昭和16年1月～)
- 6冊目 (昭和16年7月～)
- 7冊目 (昭和17年1月～)
- 8冊目 (昭和17年7月～)
- 9冊目 (昭和18年1月～)

(4) 附箋多数有り

●E292/天生関係36/363 『鶴室雜纂』 [79CL00517]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 23.2×14.4

(4)

●E293/天生関係11/338 『鶴室雜記』 [79CL00517]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 25.5×17.7
- (4) 紙片1枚 (24×32.2)

●E294/天生関係35/362 『鶴室手録』 [79CL00517]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 25.2×17.2

(4)

●E295 『房総游乘』 [79CL00656]

- (1) 1帙1冊・刊本

(2) 22.7×15.0

(4)

●E296 『早春余筆』 [79CL00657]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 15.3×10.3

(4)

●E297(1) 『池田人物誌』上 [79CL00663]

(1) 無帙1冊・刊本

(2) 19.3×13.3

(4)

●E297(2) 『池田人物誌』下 [79CL00663]

(1) 無帙1冊・刊本

(2) 19.3×13.3

(4)

●E298 『稻束香山遺稿増追悼録』 [79CL00662]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 22.1×15.1

(4) 紙片1枚(「香山先生追悼会展観書画目録」18.1×47.3)

●E299 『毛詩品物図考』 [79CL00647]

(1) 1帙3冊・刊本

(2) 26.3×18.8

(4)

●E300 『先哲叢談』前後 [79CL00664]

(1) 1帙2冊・刊本

(2) 18.4×13.0

(4)

●E301 『世説新語補』 [79CL00681]

(1) 1帙10冊・刊本

(2) 26.4×18.0

(4)

●E302 『建官考』 [79CL00651]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 27.3×17.2

(4)

●E304 『廟堂祭器図』 [79CL00650]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 26.0×18.0

(4)

●E305 『作者不明能通事故』 [79CL00649]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 24.5×17.4

(4)

●E306 『客中雜詩三十首』 [79CL00652]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 22.5×14.8

(4)

●E307 『原文』 [79CL00648]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 21.0×13.4

(4)

●E308 『雜抄』 [79CL00653]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 23.5×16.0

(4)

●E309 『修辭通』 [79CL00654]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 25.0×17.0

(4)

●E310 『和歌新題百首詩』 [79CL00554]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 23.8×16.0
- (4)

●E311/帖33/272 『資治精要』 [79CL00655]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 24.5×17.2
- (4)

●E312/帖34/273 『蕉園先生草仮名本』 [79CL00765]

- (1) 1帙1帖・折本(抄)
- (2) 33.1×7.4
- (4)

●E313/帖38/275 『左九羅帖』 [79CL00658]

- (1) 1帙1帖・折本(抄)
- (2) 28.7×17.2
- (4) 紙片3枚、印刷物1枚

●E315/帖35/274 『蕉園先生楷書手本』 [79CL00765]

- (1) 1帙1帖・折本(抄)
- (2) 18.0×6.1
- (4) 包紙1枚 (17.0×11.9)

●E316/帖25/269 『竹山先生祝枝山之筆ヲ学ブ』 [79CL00765]

- (1) 1帙1帖・折本(抄)
- (2) 32.5×13.1
- (4)

●E317/帖26/270 『唐詩七言』首 [79CL00765]

- (1) 1帙1帖・折本(抄)
- (2) 34.1×12.1
- (4)

●E317/帖26(2)/270 『唐詩七言』 [79CL00765]

- (1) 1帙1帖・折本(抄)
- (2) 34.2×12.2
- (4)

●E318/帖30/271 『履軒先生仮名手本』 [79CL00765]

- (1) 1帙1帖・折本(抄)
- (2) 28.9×13.2
- (4)

●E320/帖44/276 『道澄寺鐘銘』 [79CL00767]

- (1) 1帙1帖・折本
- (2) 32.7×18.7
- (4)

●E322 『続拾葉帖』 [79CL00766]

- (1) 1帙1帖・折本(影印)
- (2) 29.7×7.7
- (4) 紙片1枚(目次(27.7×74.1))

●E323 『弊帚続編 弊帚季編 髦言未定稿 弊帚旧稿拾遺
履軒古韻 古詩說書篇 後聖空議』 [79CL00785]

- (1) 1箱7冊・抄本
- (2) (3) 参照
- (3) 1…『草本殘稿弊帚続編』24.5~25.2×16.6~17.7
2…『草本殘稿弊帚季編』24.4~25×16.6~17.5
3…『髦言未定稿』23.3~25.3×16.8~17.7
4…『弊帚旧稿拾遺』24.9×17.0
5…『履軒古韻』25.0×17.2
6…『古詩得所篇』24.8×17.6
7…『後聖空議』24.4~25.3×16.7~17.4
- (4)

●E325 『もみち葉』 [79CL20806]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 24.5×17.2
- (4)

●E330 『履軒弊帚』 [79CL00784]

- (1) 1箱6冊・抄本
- (2) 1冊目24.6×15.9、その他24.8×16.2
- (4)

●E331/記録45/310 『往来文書 記録類モ在中』 [79CL00779]

- (1) 1帙
- (2) (4) 参照
- (4) 包紙2枚(15.9×16.4、29.8×43) 紙片(手紙類)26枚

●E333 『遊湖自導』『遊芳自導』『自導拾遺』 [79CL00791]

- (1) 1帙3冊・抄本
- (2) (3) 参照
- (3) 『遊湖自導』 11.3×16.5 『遊芳自導』 11.0×21.7 『自導拾遺』 11.0×21.8
- (4)

●E334 『竹山先生俗牘』 [79CL00786]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 15.2×20.1
- (4)

●E335/記録39/308 『竹山先生建碑書信』 [79CL00786]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 41.2×19.2
- (4) ほとんど中井七郎宛の書簡

●E336/掛け軸7/253 『荳庵先生和歌四枚』 [79CL00788]

- (1) 1帙4枚
- (2) (3) 参照
- (3) 半紙4枚(28.0×19.9・26.1×19.1・26.2×19.0・16.1×19.0)
厚紙1枚(26.0×18.7)
包紙1枚(26.2×20.1)
- (4)

●E337 『竹山先生 国字牘遺稿 副本』 [79CL00786]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 25.0×18.2
- (4) 数人が書写、既に『国字牘』と比較した形跡有り

●E338 『竹山先生 箕陰消息 外数片』 [79CL00786]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 24.5×18.0

(4)

●E339 『竹山先生雜著合卷』 [79CL00786]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 23.8×18.4

(4) 「万葉仮音」「源語梯弁」「玉露叢」「人名録」「墓碑文」「自序進牋」等

●E340 『竹山先生雜集』 [79CL00736]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 27.8×20.7

(4) 「祠堂ノ議」「答服子安書」「元吉児墮誌」等

●E343 『龍野藩御館入文書 脇阪家借書音信』 [79CL00778]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 53.5×18.6

(4) 手紙類の束、ほとんど修二宛

●E344 『懷徳帖』 [79CL00778]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 18.5×9.0

(4)

●E345/記録5/303 『泉坊書名記』 [79CL00778]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 44.3×16.0

(4)

●E346/記録47/312 『逸史献上書類一束』 [79CL00778]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 41.8×18.6

(4)

●E347/記録59/315 『懷徳堂再興記念式収入支出扣』 [79CL00778]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 34.4×12.1

(4)

●E348 『華胥国物可当理』 [79CL00739]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 28.4×20.4
- (4)

●E349/天生関係66/379 『哀弾十八拍』 [79CL20798]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 25.0×17.7
- (4) 紙片1枚 (25.0×32.6)

●E350/天生関係55/369 『成文集草本』 [79CL20799]

- (1) 1帙1冊・抄本
- (2) 24.0×16.0
- (4)

●E351/天生関係56/370 『天生雜稿』 [79CL20802/803]

- (1) 1帙2冊・抄本
- (2) 23.2×17.1 (79CL20802) 23.2×17.4 (79CL20803)
- (4)

●E352/天生関係73/383 『尼港の花』 上下 [79CL20801]

- (1) 1帙2冊・抄本
- (2) 24.2～24.4×16.6
- (4) 紙片8枚を束ねたもの1冊有り (『尼港の花』 27.3×19.9)

●E353/天生関係53/367 『乱草随録』 一、二 [79CL20800]

- (1) 1帙2冊・抄本
- (2) 24.4×15.7
- (4)

●E357/マクリ43/292 『双鉤』 [79CL20804]

- (1) 1帙1冊・双鉤
- (2) 32.3×51.7
- (4)

●E368/記録46/311 『侯家使君贈答音信書文』 [79CL00777]

- (1) 1帙
- (2) (3) 参照

(3) 包紙1枚 (39.5×52.8)、更にその包み紙の中に以下のものあり。

「銀武枚」と書かれた包み紙。その中に「中井善太殿」と書かれた包み紙。その中に紙片5枚。

手紙類を束ねたもの3つ(善太宛をまとめたもの(23通)、善太宛をまとめたもの(14通)、七郎宛(16通)と善太(1通))

(4)

●E369 『碩果先生詩稿』一～四 [79CL00790]

(1) 1帙4冊・抄本

(2) 一(40.4×19.4) 二(36.3×26.1) 三(33.7×20.2) 四(33.2×25.6)

(4)

●E370 『碩果先生詩文集』一、二 [79CL00790]

(1) 1帙2冊・抄本

(2) 一(46.0×27.0)、二(46.7×34.4)

(4) 手紙類等の様々なものを集めてある。

●E371 『碩果先生文集』一、二 [79CL00790]

(1) 1帙2冊・抄本

(2) 一(24.5×18.2) 二(27.7×20.5)

(4)

●E372/記録41/309 『五井家畧系 蘭洲先生遺稿』 [79CL00750]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 28.1×20.5

(4) 包紙1枚 (27.3×39.5) 紙片2枚 (手紙 (24.8×100) 家譜 (26.5×37.4))

●E373/記録51/313 『逢原出版書状』 [79CL20797]

(1) 1帙

(2) (3) 参照

(3) 手紙類 (木菟麻呂宛15通)

『周易逢原』見積書 (1枚)

出版届け (大正15年のもの2枚・昭和2年のもの1枚)

『周易逢原』の附録草稿 (抄本1冊17葉)

紙片12枚 (印刷物 (『周易逢原』や『七経逢原』) その他紙片3枚)

(4)

●E376/天生関係34/361 [79CL00526]

『黄裳壬午稿 鶴室楚言成文集 割雞詩集国詩国文 合載』

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 23.2×14.8

(4)

●E377 『東藻会集』 [79CL00763]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 15.7×11.3

(4)

●E378 『西岡集』 [79CL00557]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 25.6×18.2

(4)

●E379/天生関係54/368 『嘉語雜纂』 [79CL00528]

(1) 1帙1冊・抄本

(2) 23.0×15.1

(4)

●E? (不明) 『不問語』 [79CL00633]

(1) 1帙1冊・刊本

(2) 23.3×15.9

(4)

●E? (不明) 『喩叢』 [79CL00631]

(1) 無帙1冊・抄本

(2) 23.4×16.8

(4)

五十音索引

■あ行

『哀弾十八拍』 E349

『赤穂四十七義士碑沢文』 E238

『赤染衛門家集抄』 E69

『朝きよめのうた 千語雑吟并朝きよめのうた』	E114
『足利学校遺蹟考』	E242
『池田人物誌』	E297(1)(2)
『逸史』	E95(1)(2)
『逸史献上書類一束』	E346
『逸史自序進牋』	E92/E94
『稲垣子華孝状』	E154
『稲束香山遺稿増追悼録』	E298
『易』	E273
『炎窓代睡』	E179
『桜谷記』	E289
『往来文書 記録類モ在中』	E331
『桜陵記』	E286
『大鏡註釈』	E224
『大鏡註釈総目録』	E224
『大阪市民博物館報第8号贈位郷賢事績展覧会記念誌』	E241
『太田垣蓮月』	E72
『小倉日記』	E124
『小野小町歌集』	E68
『女諸通用文章』	E84
『女諸礼綾錦』	E84
『女童子訓翁草』	E244

■か行

『諧韻珊瑚』	E160
『諧韻珊瑚』	E158
『槐記の茶料理』	E2206
『懷徳』	E202(1)(2)
『懷徳帖』	E344
『懷徳堂紀』	E128
『懷徳堂記録拾遺』	E128
『懷徳堂再興記念式収入支出扣』	E347
『懷徳堂纂録』	E128
『懷徳堂諸種報告十種』	E208

〔内訳〕 『懷徳堂旧記』

『懷徳堂水哉館遺書遺物出品目録』

『財団法人懷徳堂記念会趣旨』

『懷徳堂記念会会務報告』	
『懷徳堂要覧』	
『荳菴先生貽範家君行状』	
『荳菴先生遺稿』	
『懷徳堂水哉館遺書遺品寄進目録』	
『懷徳堂水哉館遺書遺物目録』	
『柿本人麿歌集』	E89
『客中雜詩三十首』	E306
『楽譜』	E103
『神楽催馬楽通解』	E223
『嘉語雜纂』	E379
『華胥国物語』	E348/E216
『面筌』	E79
『かてもの集』	E206
『歌道人物志』	E57
『河図洛書弁』	E99
『画本千字文』	E87
『鎌倉大観』	E256
『荳野家と室谷家』	E249
『荳野三平』	E246
『荳野三平重宝』	E247
『荳野三平とその一族の俳諧』	E248
『家礼図』	E232
『閑距余筆』	E100
『束稻』	E110
『冠辞考』	E221
『官職通解』	E63
『漢土諸家人物誌』	E59
『親瀾先生詩稿』	E214
『簡諒篇』	E185
『漢和中辞典』	E257
『仰止録』	E121
『居諸録 天楽楼置』	E279/E280
『仰止録』	E122
『居東集』	E264
『近世教育史』	E222
『近世先哲叢談』	E278

『經界圖』	E196
『經義問答』	E172
『經史摘語』	E168
『月溪句集』	E70
『結婚』	E251
『月明』	E217
『言海』	E231
『建官考』	E302
『源語梯弁』	E207
『原文』	E307
『五井家畧系 蘭洲先生遺稿』	E372
『広益秘事大全』	E80
『侯家使君贈答音信書文』	E368
『皇国二千六百年史』	E239
『黄裳甲戌稿 癸酉稿 丙子稿 丁丑稿 戊寅稿 己卯稿 庚辰稿 辛巳稿』	E113
『黄裳齋日記』	E282
『黄裳壬午稿 鶴室楚言成文集 割雞詩集国詩国文 合載』	E376
『後水哉館記』	E291
『後聖空齋』	E141
『国楽式』	E98
『国語学習便覧』	E266
『国語定本』	E200
『国史紀要』	E252
『呉江日録』	E285
『故事成語考』	E169
『古文孝経』	E272
『古文真宝』	E218
『古文雕題』	E180

■さ行

『西上記』	E106
『催馬楽』	E227
『作者不明能通事故』	E305
『作文真訣 作文初門』	E191
『左九羅帖』	E313
『雜抄』	E308
『雜字類編』	E74

『雜草集錄』	E155
『山陵考略』	E259
『字音仮字用格』	E93
『爾雅演』	E209
『志可らみ』	E101
『史記雕題序』	E182
『詩經集註』	E271
『紫莖歌集』	E253
『時雨亭集』	E123
『尼港の花』	E352
『資治精要』	E311
『詩断』	E133
『質疑篇瑣語合刻』	E176
『自導拾遺』	E333
『支那史要附図』	E237
『支那哲学史引用語類』	E254
『思風和歌集』	E233
『社會私讎』	E111
『整庵先生和歌四枚』	E336
『周易卦變考』	E186
『周易逢原』	E137/E170/E173
『重建懷徳堂意見』	E115
『重建水哉館意見』	E119
『修辭通』	E309
『秋霧記』	E250
『述龍篇』	E187
『春秋左伝雕題略』	E165
『蕉園先生楷書手本』	E315
『蕉園先生草仮名本』	E312
『小学日本歴史』	E236
『鶴室記』	E283/E284/E287
『鶴室雜記』	E293
『鶴室雜纂』	E292
『鶴室手録』	E294
『尚書雕題附言』	E181
『書学大概執筆』	E71
『書經集伝』	E270

『職原抄』	E66
『詩律兆』	E91
『城の慈雲尊者』	E263
『新刊校正用字格』	E167
『新語辞典』	E230
『津間』	E164
『水哉子』	E125/E140
『住吉物語通釈』	E75
『西岡集』	E378
『勢語通』	E201
『姓氏断』	E194
『成文集草本』	E350
『碩果先生遺稿』	E215
『碩果先生詩稿』	E369
『碩果先生詩文集』	E370
『碩果先生文集』	E371
『昔昔春秋』	E189
『絶海国師小伝』	E243
『絶句逢原』	E183
『摂州崇禅寺馬場敵討縁起』	E262
『世説新語補』	E301
『千字文』	E213
『箋註十八史略校本』	E229 (1) (2)
『先哲叢談』	E300
『泉坊書名記』	E345
『双鉤』	E357
『葬祭式』	E86
『葬祭私説』	E190
『早春余筆』	E296
『草書淵海』	E76
『曹大家女誡』	E83
『贈答百人一首』	E67
『草茅危言』	E96/E97
『続近世先哲叢談』	E277
『続拾葉帖』	E322
『属事連珠』	E145
『楚辞』	E203

■た行

『大学断』	E112
『大学雜議』	E135
『大学章句』	E274
『太史公助字法』	E60
『大乘佛教百話』	E235
『竹取物語考』	E261
『龍野藩御館入文書 脇版家借書音信』	E343
『竹山先生建碑書信』	E335
『竹山先生国字腹』	E159/E201
『竹山先生 国字腹遺稿 副本』	E337
『竹山先生語録』	E129
『竹山先生雜集』	E340
『竹山先生雜著合卷』	E339
『竹山先生祝枝山之筆ヲ学ブ』	E316
『竹山先生俗腹』	E334
『竹山先生 箕陰消息 外数片』	E338
『中興鑑言』	E65
『中古歌物語集』	E228
『中庸章句』	E248/E275
『中庸断』	E104
『中庸逢原』	E135/E136
『千代茂登草』	E90
『枕上雜題』	E142
『雕蟲後篇 後一宵十賦』	E162
『ちるもみちはの記』	E150
『通語』	E134/E152
『訂正増補枕草子春曙抄』	E82
『箕陰集』	E163/E201
『天楽楼居諸録』	E281
『伝疑小史』	E151/E153
『天合四教儀講義』	E234
『天生雜稿』	E351
『典讀接』	E174/E176
『天民遺言』	E126/E216
『東涯先生遺稿』	E211

『唐詩七言』	E317
『東征稿』	E108
『東藻会彙』	E377
『唐宋八大家文詠本』	E199
『道澄寺鑑銘』	E320
『說易私說』	E192
『說易図例』	E188
『不問語』	E? (不明)

■な行

『中井木菟麻呂懷徳堂関係資料(懷徳堂再建記録他)』	E146
『中井木菟麻呂キリスト教関係草稿類』	E149
『並河天民事略』	E117
『西岡孝子儀兵衛行状聞書』	E245
『日本の菓子』	E206
『日本風土記』	E265
『日本文学史教科書』	E260

■は行

『躰築教授譜』	E102
『躰築譜』	E131
『百首贅々』	E210
『廟堂祭器図』	E304
『ひらめき』	E81
『楓帷の独かたり』	E130
『普通術語辞彙』	E267
『平家物語講義』	E58
『弊帚統編 弊帚季編 髦言未定稿 弊帚旧稿拾遺 履軒古韻 古詩說書篇 後聖空議』	E323
〔内訳〕 1…『草本残稿弊帚統編』	
2…『草本残稿弊帚季編』	
3…『髦言未定稿』	
4…『弊帚旧稿拾遺』	
5…『履軒古韻』	
6…『古詩得所篇』	
7…『後聖空議』	
『平治物語講義』	E64

『蒨荔窩記』	E290
『包結記』	E85
『逢原出版書状』	E373
『鳳笙譜』	E127
『房総游乗』	E295
『彌中記』	E288
『蓬萊』	E132
『保元物語講義』	E62
『細川侯爵家の祖先忠興夫人の信仰美談』	E240
『凡兆句集』	E206

■ま行

『増鏡詳解』	E77
『都のいぬゐ』	E258
『紫式部』	E733
『孟子集註』	E268
『毛詩品物図考』	E299
『孟子逢原』	E161
『蒙養編』	E212
『もみち葉』	E325
『文選字彙』	E61

■や行

『大和本草諸品図』	E88
『大和巡』	E220
『遊湖自導』	E333
『遊芳自導』	E333
『遊芳山記』	E105
『袖園小話』	E205
『袖園先生寿詞一束』	E204
『喰噐』	E? (不明)
『吉野拾遺』	E225

■ら行

『礼記集説』	E197(1)(2)
『洛訥奚囊』	E157
『洛訥五子遺集』	E118

『蘭洲茗話』		E201
『乱草随録』		E353
『履軒古韻』		E143/E144
『履軒古風』		E138/E147
『履軒先生遺稿雜集』		E198
〔内訳〕 1…『履軒先生故紙稿拾』		
2…『袴袷弁』		
3…『履軒先生遺稿草本』		
4…『履軒随筆集』		
5…『履軒先生遺稿雜集』		
6…『履軒外集』		
7…『月可録』		
8…『葵』		
9…『葵』		
10…『復讐譏』		
11…『履軒論文集附明經道点』		
12…『東西周弁』		
13…『深衣図解』		
14…『越俎載筆』		
15…『履軒先生編魯年表』		
16…『刀弁』		
17…『旅の無かしかたり』		
18…『古都多飛』		
19…『履軒先生編古歌評釈』		
『履軒先生仮名手本』		E318
『履軒弊帯』		E330
『履軒先生編 語句出典』		E156
『履軒鬚言』		E139
『騶囊 腦碧囊』		E195
『烈士喜劍碑訳文』		E238
『列女百人一首』		E78
『朗詠辭』		E226
『老子雕題』		E178
『論語』		E184
『論語集註』		E269
『論語逢原』		E171

■わ行

『和歌新題百首詩』 E107/E310

『和漢朗詠集』 E219

『和爾雅』 E166

(本研究科博士後期課程)

大阪大学附属図書館蔵「北山文庫続」暫定目録

井 上 了

「北山文庫」とは、重建懷徳堂最後の教授であった吉田北山(鋭雄)の旧蔵書で、嗣子の吉田晋氏より大阪大学へ寄贈されたコレクションである。うち「北山文庫続」(「第二次北山文庫」)とは、昭和54(1979)年から翌55(1980)年にかけて大阪大学附属図書館へ受入された部分を指す。

北山文庫のうち『懷徳堂文庫図書目録』(大阪大学文学部, 昭和51年)に掲載されているのは、昭和31(1956)年に受入された部分のみである。このため「北山文庫」という呼称は従来、昭和31(1956)年受入分のみを指す意味で用いられることが多かった。「北山文庫続」は『懷徳堂文庫図書目録』刊行後に受入された資料であり、当然ながら同『目録』に掲載されていないため、従来は充分に認識・活用されてこなかったのである。

「北山文庫続」の総点数については、「受入れの際に作られた假目録によれば、約四百點に上っている」(木村英一「懷徳堂先賢の業績と遺品との蒐集・整理・保存に関する近況について」、『懷徳』50号, 昭和55年)、「約四〇〇点七〇〇冊」(竹腰礼子「大阪大学懷徳堂文庫のなりたちと蒐集の経緯」、『懷徳』70号, 平成14年)などといい、また図書館に備附されているカード上では総点数480となっている。しかしカードの分類には不適切なものも多く、実際の資料点数はさらに増加するであろう。

2003年5月現在、「北山文庫続」は附属図書館において「本館書庫別置」と分類され、新館六階の貴重書庫(通称「懷徳堂文庫」)に配架されている。ただし現物の所在が不明なものが若干あり、また若干の stray も認められる。今後も関連する調査を続けたい。

以下に、現時点で判明している「北山文庫続」の内容を列挙する。ただし実見に至っていない資料については、その旨を明記した上で、図書館カードによる情報を示す。

資料名の冒頭に付した9桁の英数字は、附属図書館が付した accession number である。ただし現在、「北山文庫続」について OPAC への遡及入力とはなされておらず、OPAC 登録が行われる際には改めて11桁の reference number が付与されると思われる。

80CL02941…竹山履軒雜著七篇(河図洛書弁・文官伝弁・易説附卦次説・服忌図・亥字説・簡筆・姓氏断)(抄本, 1冊)(無界無野, 10行20字)

80CL02942…枕上雜題(抄本, 昭和7年天生校識, 1冊)(北山舛堂用紙)

80CL02943…履軒古風(抄本, 1冊)(北山舛堂用紙)

80CL02944…履軒古風五絶抄(抄本, 1冊)

- 80CL02945…典讀接(精抄本, 1冊)(無界無野, 6行16字)
- 80CL02946…老子離騷(抄本, 1冊)
- 80CL02947…莊子離騷(北山抄本, 昭和9至10年抄, 2冊)(無界無野, 10行20字)
- 80CL02948…中庸離騷略(貞軒抄本, 1冊)(無界無野, 10行20字)
- 80CL02949…論語逢原(後天楽楼蔵刊本, 明治44至45年刊, 4冊)
- 80CL02950…孟子逢原(抄本, 2冊)(小天地閣叢書本より抄)(無界無野, 10行22字)
- 80CL02951…孟子離騷略(抄本, 2冊)(無界無野, 10行20字)
- 80CL02952…○塙集(並河寒泉抄本, 4冊)
- 塙集(抄本, 3冊)(北山舛堂用紙)
- 80CL02953…崑山文稿(抄本, 1冊)
- 80CL02954…花間笑語(抄本, 1冊)
- 80CL02955…弁怪(抄本, 昭和11年抄, 1冊)
- 80CL02956…寒泉詩稿(並河寒泉自筆抄本, 1冊)(續誌を付す)
- 80CL02957…江南詩祖(今西玄芳撰)(抄本, 大正乙卯抄, 1冊)(手稿本より抄)
- 80CL02958…雪溪詩文(井狩雪溪撰)(北山抄本, 乙卯三月抄, 1冊)
- 80CL02959…○碩果先生文稿(中井碩果手抄本, 1冊)
- 碩果先生文稿(北山補抄抄本, 1冊)
- 80CL02960…竹山評十國詩・碩果評醉美人國詩(北山抄本, 昭和12年抄, 1冊)
- 80CL02961…石庵蘭洲殘稿(抄本, 1冊)(北山舛堂用紙および懷徳堂用箋)
- 80CL02962…兩峰中村詩集(抄本, 1冊)(竹山旧蔵, 矢戸氏旧蔵)(四周双辺, 10行20字)
- 80CL02963…田中桐江伝稿本(北山抄本, 大正10年抄, 1冊)
- 80CL02964…愚問漫抄(田中桐江撰)(抄本, 1冊)(吉田松茵用箋)
- 80CL02965…○東海漫遊稿(上・下)(抄本, 2冊)
- 東海漫遊稿抄(抄本, 1冊)
- 80CL02966…東海漫遊詩抄(抄本, 1冊)(吉田松茵用箋)
- 80CL02967…○樵漁餘適(文鈔)(田中桐江撰)(北山抄本, 大正3年抄, 1冊)
- 樵漁餘適(詩)(田中桐江撰)(北山抄本, 大正3年抄, 1冊)
- 80CL02968…吳江水韻(抄本, 4冊)(大正6年北山抄本2冊を含む)
- 80CL02969…蘭陵先生遺稿(田中蘭陵撰, 荒木蘭阜輯)(北山抄本, 昭和7年抄, 1冊)(寛保元年刊本を底とするか)
- 80CL02970…鶴肋集(荒木蘭阜撰)(北山抄本, 大正7年抄, 2冊)
- 80CL02971…大東昭代詩紀(抄本4冊, ただし第1冊の前半のみ排印)(未刊『池田叢書』本)
- 80CL02972…李谿遺稿ほか関係資料(1束)
- 80CL02973…西山樵唱(抄本, 大正乙卯抄, 1冊)(享保19年刊本を底とす)
- 80CL02974…論語逢原(抄本, 4冊)
- 80CL02975…米菴吟稿抄(抄本, 1冊)

80CL02976…李翁先生遺稿・先子獲鯉大君詩稿・吳江風韻集(松茵抄本, 大正3年抄, 1冊)(池田森氏藏本を底とす)

80CL02977…花月集(抄本, 1冊)

80CL02978…尚書考(亀井昭陽撰)(抄本, 昭和10年抄, 1冊)

80CL02979…肆業餘稿(北村懋抄本, 明治10年抄, 1冊)(四周双辺, 12行20字)

80CL02980…草庵集(池田草庵撰)(抄本, 2冊)

80CL02981…說易錄(保衡抄本, 明治3年抄, 2冊)

80CL02982…尚書蔡伝贊說(池田草庵撰)(精抄本, 2冊)(嘉永5年序, 無界無罫, 12行24字)

80CL02983…左伝義法舉要(西村天因景印本, 大正7年刊, 1冊)

80CL02984…病床侍記(北山手抄本, 大正2年抄, 1冊)

80CL02985…遠遊日乗(北山抄本, 2冊)(天巻景星堂用箋・地巻文華閣製用箋)

80CL02986…懷德堂先賢文鈔(抄本, 6冊)(北山艸堂用紙)

80CL02987…懷德堂先賢文鈔(油印本, 2冊)

80CL02988…康斎先生行状・日録・日録注記(油印及抄本, 2冊)

80CL02989…岡田雲介先生大学説(「畿大学此謂知本二語」)(雲介手抄本, 1冊)

80CL02990…黄裳先生呉山社詩稿(天生手抄本, 1冊)(北山の和韻詩を付す)

80CL02991…蕉園殘藁附碩果詩(北山抄本, 1冊)

80CL02992…柚園先生遺文(抄本, 1冊)(呉山社稿本用箋)

80CL02993…貧陰略稿(抄本, 1冊)(大阪府用箋)

80CL02994…西岡集(景印本, 明治辛亥刊, 1冊)(竹山自筆本より影印)

80CL02995…花魁風什(抄本, 1冊)(北山艸堂用紙)

80CL02996…花月吟(北山抄本, 大正8年抄, 1冊)(混沌社同人作)

80CL02997…松陰餘事(撰西六家詩鈔卷四)(抄本, 1冊)

80CL02998…龜家詩集(抄本, 1冊)(無界無罫, 10行20字)

80CL02999…莊子瑣說(亀井昭陽述)(松雲堂油印本, 大正9年刊, 2冊)

80CL03000…吉田平陽著述(抄本, 1冊)(天保3年識)

80CL03001…日間瑣事殘稿(広瀬謙吉)(抄本, 1冊)

80CL03002…囊語(永井独嘯庵)(抄本, 1冊)(北山艸堂用紙)

80CL03003…懷德堂夜話(『懷德』抜刷, 1冊)

80CL03004…逸史糾繆(抄本, 1冊)

80CL03005…建官考(波井太室撰)(精抄本, 1冊)(無界無罫, 12行20字)

80CL03006…藍水詩草(横谷藍水撰)(抄本, 1冊)(無界無罫, 11行不定字)(天生旧蔵)

80CL03007…懷德堂印存(無刊記)(1冊)

80CL03008…大学欄外書(抄本, 1冊)

80CL03009…論語欄外書(佐藤一斎著)(精抄本, 4冊)(無界無罫, 10行20字)

80CL03010…玄宗御注孝經補義(抄本, 1冊)(有不為斎旧蔵本)

- 80CL03011…古文孝經(布施市教育会排印本, 昭和12年刊, 1冊)
- 80CL03012…礼記雕題略抄(抄本, 1冊)(懷德堂記念会用箋)
- 80CL03013…助語辞考録(穂積以貧著)(木鱗抄本, 明和6年抄, 1冊)
- 80CL03014…助語字弁(抄本, 2冊)(無界無野, 12行不定字)
- 80CL03015…懷德堂校定中庸(抄本, 明治43年抄, 1冊)
- 80CL03016…懷德堂印存(昭和14年序, 3冊)
- 80CL03017…懷德堂紀年(抄本, 1冊)(四周双辺, 9行不定字)(中井天生識)
- 80CL03018…蘭洲竹山中庸説(抄本, 1冊)(北山舛堂用紙)
- 80CL03019…鴻範懷德堂定本ほか(抄本, 大正乙卯抄, 1冊)
- 80CL03020…肆業餘稿(帆足万里著)(抄本, 1冊)(吉田松苗用箋・関西速記用達社用箋)
- 80CL03021…孝子彦大夫伝(山川正宜著)(抄本, 1冊)(北山舛堂用紙)
- 80CL03022…陰語端解(静斎先生著, 嵐山馬先生述)(抄本, 1冊)(無界無野, 12行16字)
- 80CL03023…康斎先生文集(巻1~6)(刊本)
- 80CL03024…康斎先生文集(巻7~12)(刊本)
- 80CL03025…近思録集解(稽古斎蔵版, 寛文8年石渠堂重刊, 2冊)(中井竹山書入)
- 80CL03026…呉康斎先生日録(河内屋等刊本, 明治3年刊, 1冊)
- 80CL03027…懷德堂夜話(抄本, 1冊)(北山校正用本)
- 80CL03028…康斎先生行状・康斎先生日録(油印本, 1冊)
- 80CL03029…呉聘君年譜・胡文敬公年譜(光緒4年刊本, 合1冊)『豫章先賢九家』のうち第八・第九を合綴したもの)
- 80CL03030…呉康斎并康斎文集(抄本, 1冊)(広島永井用箋)
- 80CL03031…明儒学案(呉康斎部分のみ)(抄本, 1冊)(北山舛堂用箋)
- 80CL03032…呉康斎年譜(ノート1冊)
- 80CL03033…重建懷德堂玄関等写真(3葉)
- 80CL03034…御注孝經(東京文求堂景宋本, 昭和6年, 1冊)
- 80CL03035…御注孝經(李光明莊刊本, 1冊)(北山四声符標)
- 80CL03036…(現物未見)田中桐江伝(『池田叢書』1)
- 80CL03037…鶴肋集(『池田叢書』2)(池田史談会排印本, 大正12年刊, 1冊)
- 80CL03038…蕉園先生詩文集巻之二(抄本, 1冊)(並河尚一旧蔵書)
- 80CL03039…中国文学史(上海文会堂排印本, 民国10年刊, 1冊)
- 80CL03040…山陵考略(山川正宜述)(池田史談会排印本, 大正13年再刊, 1冊)
- 80CL03041…大塩平八郎言行録(山口恒七排印本, 明治12年刊, 1冊)
- 80CL03042…増猷遺言(懷德堂隣本)(油印本, 1冊)
- 80CL03043…經学伝授攷(劉師培撰)(排印本, 民国刊カ, 1冊)(北山補紙書入)
- 80CL03044…孟子集注(和刻本, 2冊)(書入多数, 北山講義用本)
- 80CL03045…章太炎国学概論(油印本, 1冊)(北山隣本)

80CL03046…儒林宗派(万斯同撰)(抄本, 1冊)(懷徳堂用箋)

80CL03047…大学古義説(抄本, 大正10年抄, 1冊)(皇清經解統編を底とす)

80CL03048…茶經(抄本, 1冊)(北山艸堂用紙)

80CL03049…独嘯庵叢語五篇(安井嘉兵衛等刊本, 宝暦13年刊, 1冊)

80CL03050…山陰陸游詩下(油印本, 1冊)

80CL03051…宋名臣言行錄抄(松山直藏抄本, 3冊)(懷徳堂用箋)

80CL03052…曾子家語(碧梧山莊排印本, 4冊)(北山書入多し)

80CL03053…李谿遺稿(北山輯)(北山抄本, 1冊)(竹山輯間居雜興などを付す)

80CL03054…李谿昭代詩紀凡例・荒木梅岡詩文など(北山抄本, 1冊)

80CL03055…耕斎詠草(稻束耕斎撰, 宗什子批評)(抄本, 1冊)(淀屋橋井上印行用箋)

80CL03056…祝詞宣命抄(林森太郎手抄本, 1冊)

80CL03057…記紀歌抄(吉沢義則譌)(懷徳堂排印本, 1冊)

80CL03058…祝詞宣命抄(懷徳堂排印本, 1冊)

80CL03059…山陵考略(上)(山川正宣述)(池田史談会排印本, 大正9年刊, 1冊)

80CL03060…三愛記・宇津山記(松茵抄本, 大正甲寅抄, 1冊)

80CL03061…懷徳堂旧記・同補遺(『懷徳』抜刷, 合1冊)

80CL03062…説書樓漫録(北山未定稿本, 1冊)

80CL03063…曾子家語(北山講本)(油印本, 1冊)

80CL03064…尚書說本(抄本, 1冊)(懷徳堂用箋)

80CL03065…臥友録(中井履軒ほか著, 北山編)(北山抄本, 1冊)

80CL03066…子思内篇・外篇(意林逸子之第二種)(黄以周輯)(光緒頃カ刊本, 2冊)

80CL03067…小学集註(上海文瑞樓石印本, 合1冊)(北山補紙書入)

80CL03068…經典釈文序録(北山抄本, 1冊)

80CL03069…田中桐江関係資料(1袋6冊)

80CL03070…(現物未見)四書集注章句(刊本, 7冊)

80CL03071…北山千字雜吟(北山抄本, 1冊)(北山先生旧稿2葉を付す)

80CL03072…康熙字典(函入, 残38冊)(第17冊, 第40冊を欠く)(器物棚に配架)

80CL03073…北山鄙稿(北山抄本, 合1冊)

80CL03074…經解入門(石印本, 光緒14年刊, 3冊)(昭和6年北山補紙書入)

80CL03075…呉子(抄本, 1冊)

80CL03076…古文孝經孔伝(嵩山房刊本, 寛政6年刊, 1冊)(書入多し)

80CL03077…説書雜識(抄本, 1冊)(附紙多数)

80CL03078…(外題)助船(抄本, 1冊)

80CL03079…南海先生詩集(葛子琴校)(抄本, 1冊)

80CL03080…国学概論(章太炎講)(上海泰東圖書局排印本, 1冊)

80CL03081…大阪府贈位者小伝(抄本, 1冊)(大阪府立図書館用箋)

- 80CL03082…孝經大学中庸音詁(北山講本)(油印本, 1冊)
- 80CL03083…大学中庸章句(文久2年刊『四書集注』より抜綴, 2冊)(北山書入など多数)
- 80CL03084…唐詩絶句(北山編)(抄本, 5冊)(懷徳堂用箋)
- 80CL03085…唐詩絶句(卷一〜三)(油印本, 2冊)(「昭和二十年第一期懷徳堂講義講演」1枚を付す)
- 80CL03086…經子簡編(卷上)(西村天囚編)(懷徳堂排印本, 1冊)
- 80CL03087…大学中庸雜記ほか(合1冊)(?)
- 80CL03088…論語解(抛履軒説)(北山抄本, 1冊)(無界無罅, 行字数不定)
- 80CL03089…・懷徳堂考(大正14年重刊)(1冊)
- 80CL03089…・懷徳堂要覽(昭和17年刊)(1冊)
- 80CL03089…・東区史索引(昭和17年刊)(1冊)
- 80CL03090…經学伝授考(經学教科書)(劉師培著)(油印本, 1冊)(北山書入多数, 昭和19〜20年)
- 80CL03091…莊子雕句解(莊子因)(市村元貞講, 北山録)(抄本, 1冊)
- 80CL03092…北山雜抄(宋元学案ほか)(抄本, 1冊)
- 80CL03093…論語音詁白話解(郷党まで)(油印本, 1冊)
- 80CL03094…論語足徵記(崔適)(北京大学排印本, 民国10年刊, 1冊)
- 80CL03095…論語集註(北山講義用本)(和刻本, 2冊)(書入多し)
- 80CL03096…詩話叢鈔(北山抄本, 2冊)(懷徳堂用箋)
- 80CL03097…論語音詁(懷徳堂教科書, 北山講本カ)(油印本, 1冊)
- 80CL03098…大学章句(大学音詁)(油印本, 1冊)(昭和12年北山説了)
- 80CL03099…懷徳堂先賢遺稿(抄本, 1冊)(北山舛堂用紙)
- 80CL03100…古詩逢原(抄本, 1冊)(水哉館用箋)(校正用本カ)
- 80CL03101…古文孝經(活版カ, 9行12字, 1冊)(昭和丁丑懷徳堂講本, 北山署)
- 80CL03102…尾張敬公(西村天囚著)(新聞切抜, 1冊)
- 80CL03103…諸子概説(油印及抄本, 1冊)(北山講)
- 80CL03104…北山雜抄(東塾詁書記ほか)(北山抄本, 1冊)
- 80CL03105…北山雜抄(朱子家訓ほか)(北山抄本, 1冊)
- 80CL03106…北山雜抄(古書疑義举例ほか)(北山抄本, 1冊)
- 80CL03107…北山少年時代之文稿(抄本, 1冊)
- 80CL03108…息抱齋詩稿(岡田源六撰, 北山輯)(排印本, 1冊)
- 80CL03109…息抱齋詩稿(岡田源六撰)(北山カ抄本, 1冊)(北山舛堂用紙)(呉山社稿本用箋源六自筆稿本を含む)
- 80CL03110…唐詩等雜抄(北山手記, 1冊)
- 80CL03111…雜纂(北山手記, 1冊)
- 80CL03112…句林(抄本, 1冊)(文華閣用箋)(紙片多数を付す)
- 80CL03113…客中雜詩三十首(北山抄本, 大正12年抄, 1冊)(蕉園手稿本より抄)

- 80CL03114…華胥国曆(北山抄本, 大正5年抄, 1冊)(大阪図書館蔵本より写)
- 80CL03115…性理鄙説(塚本松之助抄本, 明治30年抄, 1冊)
- 80CL03116…泊園書院学会々報(第2冊)(泊園書院学会, 大正11年刊, 1冊)
- 80CL03117…石庵先生行状・遺稿『懷徳』抜刷, 1冊)
- 80CL03118…整庵先生行状・遺稿『懷徳』抜刷, 1冊)
- 80CL03119…安政以降の懷徳堂『懷徳』抜刷, 1冊)
- 80CL03120…蘭洲先生家譜(抄本, 14枚)(懷徳堂用箋)
- 80CL03121…孝治の話(吉川幸次郎述・藤塚誠二速記)(懷徳堂カ排印本, 1冊)
- 80CL03122…桐江語録(仮題)(抄本, 1冊)(懷徳堂用箋)
- 80CL03123…奚囊詩存(藤沢南岳録)(抄本, 1冊)
- 80CL03124…智蔵説(三宅尚斎著)(抄本, 1冊)
- 80CL03125…紫芝園国字書鈔(抄本, 1冊)
- 80CL03126…李選唐詩履軒先生訳解(七絶のみ)(抄本, 1冊)(懷徳堂遺書本『李選唐詩訳解抄』から抄カ)
- 80CL03127…若水東行吟(入江兼通著, 徂徠批点)(北山抄本, 大正7年抄, 1冊)(懷徳堂用箋)
- 80CL03128…百家説林日録・論衡校釈抄(北山抄本, 1冊)
- 80CL03129…臨池小解(朱和羹著)(咸豊2年刊, 1冊)
- 80CL03130…唐詩選(巻4〜5のみ残)(嵩山房刊, 残1冊)
- 80CL03131…北山雜抄(兪樾中庸平議ほか)(抄本, 1冊)
- 80CL03132…碩園文稿目錄(初稿本)(抄本, 1冊)(北山舛堂用紙)
- 80CL03133…雜議(抄本, 1冊)(懷徳堂記念会用箋)
- 80CL03134…白話文(懷徳堂講)(油印本, 1冊)
- 80CL03135…白話文(懷徳堂講)(油印本, 1冊)
- 80CL03136…孟子五回講本(油印及抄本, 1冊)
- 80CL03137…土曜講義資料(鈴木豹軒講)(油印本, 1冊)
- 80CL03138…北山雜抄(抄本, 1冊)
- 80CL03139…雜誌切抜(『民鐸』『東方雜誌』)(1冊)
- 80CL03140…嵯峨九嶺(中井天生手抄本, 1冊)
- 80CL03141…(現物未見)日初残稿(北山抄本)
- 80CL03142…懷徳堂考(西村天因著)(大島山三排印本, 明治43至44年刊, 2冊)
- 80CL03143…天因游草(西村天因著)(排印本, 1冊)
- 80CL03144…西岡小記(尚素堂石印本, 光緒15年序, 1冊)
- 80CL03145…
 ◦ 謙斎遺稿(北山稿本, 1冊)
 ◦ 謙斎遺稿(校正用本, 1冊)
 ◦ 富永謙斎先生小伝(石浜純太郎著)(玉樹安造排印本, 昭和12年刊, 1冊)
 ◦ 富永謙斎先生紀念展観目錄(排印, 1部)

- 富永謙斎先生紀念展観の案内(石浜純太郎より北山宛、封書1通)(富永謙斎先生紀念展観目録1部を付す)

- 80CL03146…呉山社初会記(抄本, 1冊)(呉山社稿本用箋)
- 80CL03147…呉山社膳録(1至73回)(油印本, 1冊)(紙片多数を付す)
- 80CL03148…◦ 呉山社膳録(1至44回)(油印本, 2冊)
- 呉山社膳録(1至30回)(油印本, 1冊)
 - 北山呉山社稿(第1冊)(昭和5至8年)(抄本, 1冊)(呉山社稿本用箋)
- 80CL03149…◦ 北山呉山社稿本(第2至4冊)(昭和9至20年)(抄本, 3冊)(呉山社稿本用箋)
- 呉山社席上詩(昭和6至丁亥年)(抄本, 1冊)(北山艸堂用紙)
- 80CL03150…北山社小集(昭和5年作)(抄本, 1冊)(呉山社稿本用箋)
- 80CL03151…呉山社雜報・例会(新聞切抜)(1冊)
- 80CL03152…活獨體(西村天囚著)(伊藤誠之堂排印本, 明治21年刊, 1冊)
- 80CL03153…赤穂義士実話(重野安繹述, 西村天囚編)(吉川半七等排印本, 明治22年刊, 1冊)
- 80CL03154…論語札記(北山講義用本カ)(ノート3冊)
- 80CL03155…北山雜抄(重修惇明館記ほか)(合1冊)
- 80CL03156…北山燕京通信(新聞の切抜など)(1冊)
- 80CL03157…新題百首(加藤竹里他)(抄本, 1綴)(懷徳堂用箋)
- 80CL03158…懷徳堂概要(北山記)(抄本, 1冊)
- 80CL03159…新題和歌百首(北山抄本, 1綴)(小天地閣叢書本より抄カ, 校記多し)
- 80CL03160…和歌新題百首詩(殷軒著)(北山抄本, 1綴)(懷徳堂用箋)
- 80CL03161…蘭洲十三回忌辰追悼和歌並詩連(三宅春樓他)(抄本, 1綴)(懷徳堂用箋)(寒泉旧蔵本より抄)
- 80CL03162…蘭洲先生遺稿目次(抄本, 1綴)(懷徳堂用箋)
- 80CL03163…蘭洲先生遺稿(抄本, 1綴)(懷徳堂用箋など)
- 80CL03164…雜抄(旭荘の池田寓居ほか)(抄本, 1冊)(大阪朝日新聞社用箋)(拓本類数点を付す)
- 80CL03165…支那古代思潮(抄本, 1冊)(大阪朝日新聞社用箋)
- 80CL03166…經學歴史要領(抄本, 1冊)(大阪朝日新聞社用箋)
- 80CL03167…加藤竹里詩稿(抄本, 1綴)(懷徳堂用箋)
- 80CL03168…北山雜抄(抄本, 1冊)
- 80CL03169…◦ 富永謙斎先生小伝(石浜純太郎著)(玉樹安造排印本, 昭和12年刊, 1冊)
- 又(1冊)
 - 富永謙斎先生紀念展観目録(排印, 1部)
 - 仲基關係『懷徳』抜刷類(合1冊)
 - 關係資料写真など(1式)
- 80CL03170…(現物未見)懷徳堂雜稿(古文真宝雕題ほか)
- 80CL03171…春のことは(中井甕庵撰)(北山校抄本, 1綴)(懷徳堂用箋)

- 先哲手簡第一(竹山宛6件)(抄本, 1綴)(懷徳堂用箋)
- 反古帖(二帖のうち小帖)(並河寒泉序)(北山抄本, 1綴)
- 80CL03172…◦ 北山詩稿未定稿(抄本, 1冊)
 - 吳山初集記(天生自筆本, 1冊)(吳山社稿本用箋)
 - 中井天生詩文稿(題鍾馗図ほか)(抄本, 1冊)(吳山社稿本用箋)
 - 狩野直喜書簡(北山宛)
 - 論唐虞三代先聖対天信念(天生自筆本, 1冊)(景社文稿用箋)
 - 破甲篇(天生自筆, 1枚)(左右双辺, 9行不定字)
 - 金剛子念珠銘并序(天生自筆, 2枚)(左右双辺, 9行不定字)
 - 諭叢序ほか(天生自筆)(抄本, 1冊)(左右双辺, 9行不定字)(石庵先生遺稿追加分)
 - 揖保のなこりの巻のおくかきほか(抄本, 1冊)(懷徳堂用箋)(整庵先生遺集追加分)
 - 岡山源六詩・秋月胤維詩・小倉正恒詩・鈴木虎雄詩(『懷徳』原稿か)(1綴)
 - 北山夫人輓歌(中井天生)
 - 岡田雲介輓歌(中井天生)
 - 草稿(2枚)(吳山社稿本用箋)
 - 草稿(1枚)(北山艸堂用箋)
 - 函上識語(北山艸堂用箋)
 - 寒泉筆「如在館」マクリ(1枚)
 - 哭北山先生内子ほか(林田炭翁ほか)(抄本, 8枚)(北山艸堂用箋)
 - 題北山草堂(中尾邦ほか)(抄本, 8枚)
- 80CL03173…◦ 池田郷賢参考資料(北山輯カ, 4束)
- 80CL03174…◦ 万葉集選(林森太郎手稿本, 1冊)
- 80CL03175…◦ 万年遺稿拾遺書込(『懷徳』18号抜刷に北山が大幅な補訂を施したもの)
 - 懷徳堂先賢先賢未見遺書目(北山抄本)・門人帖・中井蕉園年譜資料(合綴)(北山抄, 庚辰, 1冊)(懷徳堂先賢表(北山抄)・懷徳堂未見遺書目(油印)を付す)
 - 中井蕉園文(二源論)(抄本, 5葉)(懷徳堂用箋)
 - 三村崑山文(記事三条)(抄本, 3葉)(懷徳堂用箋)
 - 史記雕題序・同跋(抄本, 5葉)(懷徳堂用箋)
 - 並河寒泉詩稿(草稿本, 1冊)
 - 懷徳堂水哉館遺書遺物目録(『懷徳』抜刷, 1冊)(北山正嗣記入用本)(北山宛天生葉書1葉を付す)
 - 懷徳堂年譜(抄本, 1冊)(大正甲子仲夏中井天生識, 尚文堂用箋)
- 80CL03176…◦ 中国文学教科書(油印本, 断裂数束)(懷徳堂講義用本カ)
 - 北山雜稿(抄本, 仮綴1冊)
- 80CL03177…◦ 懷徳堂講義講演目次(排印本, 昭和9至18年, 3束)

- 80CL03178…◦ 冨春曳研究資料ほか(抄本, 合1綴)(北山宛田中一寧封書などを付す)
- 桐江逸文(抄本, 1冊)
 - 箕山賞楓稿(北山抄本, 1冊)
 - 鷄肋集補遺など(北山抄本, 1綴)
 - 懷徳堂夜話(抄本, 1綴)
 - 年表(排印, 1枚)(貞享至大正, 書入多数)
 - その他北山草稿など数点
- 80CL03179…◦ 関西大学創立五十周年記念文学部展覧目録(排印, 1部)(北山カ書入)
- 方正学遜志雜銘(抄本, 1冊)(北山識語)(淡輪家旧蔵)
 - 淡輪家ヨリ出タル雜稿(抄本, 合1綴)(北山綴)
- 80CL03180…呉山社席上詩稿(碩園遺稿)(1束)
- 80CL03181…呉康斎言行録草稿(7枚)(桐華原稿用紙)(弘文堂に関わりあるか)
- 80CL03182…説文提要(刊本, 同治11年序, 1冊)(北山書入多し)
- 80CL03183…干支甲骨文説(抄本, 1冊)(懷徳堂記念会用箋)
- 80CL03184…詩經解説(抄本, 明治34年抄, 1冊)
- 80CL03185…◦ 中井黄裳先生呉山社席上分韻詩稿(抄本, 1綴)
- 岡田雲介先生呉山社席上分韻詩稿(抄本, 1綴)
- 80CL03186…大阪先賢碑伝集(「儒林」部分のみ)(油印本, 2冊)(北山編)
- 80CL03187…みよのひとの記(臨愚山荅)(抄本, 1冊)(関西速記用達社用箋)
- 80CL03188…山陵考略(山川正宣遺書)(能勢久三油印本, 昭和19年刊, 1冊)
- 80CL03189…賀知章本孝経校記(抄本, 1冊)
- 80CL03190…雜抄(外題「みたれ草」)(抄本, 1冊)
- 80CL03191…東洋史札記・樸学大師列伝札記・水滸伝注記・国学概論雜記(ノート6冊1箱)
- 80CL03192…懷徳堂先賢表附未見書目(油印藍本, 1冊)
- 80CL03193…北山少年時代之詩稿(紅梅詩集)(抄本, 1冊)
- 80CL03194…北山呉山社席上詩稿(昭和21至戊子年)(抄本, 1冊)(呉山社稿本用箋等)
- 80CL03195…北山隨筆『懷徳』抜刷類6部, 稿本2部)
- 80CL03196…◦ 石樵遺稿(中西石樵)(抄本, 1冊)
- ほか多数
- 80CL03197…韓非子翼載(『漢文大系』8)(富山房排印本, 明治44年刊, 1冊)
- 80CL03198…漢籍国字解(1)(早稲田大学出版部排印本, 大正15年刊, 1冊)
- 80CL03199…漢籍国字解(2)(早稲田大学出版部排印本, 大正15年刊, 1冊)
- 80CL03200…漢籍国字解(3)(早稲田大学出版部排印本, 大正15年刊, 1冊)
- 80CL03201…漢籍国字解(4)(早稲田大学出版部排印本, 大正15年刊, 1冊)
- 80CL03202…漢籍国字解(5)(早稲田大学出版部排印本, 大正15年刊, 1冊)
- 80CL03203…漢籍国字解(6)(早稲田大学出版部排印本, 大正15年刊, 1冊)

- 80CL03204…漢籍国字解(7)(早稲田大学出版部排印本, 大正15年刊, 1冊)
- 80CL03205…漢籍国字解(8)(早稲田大学出版部排印本, 大正15年刊, 1冊)
- 80CL03206…漢籍国字解(9)(早稲田大学出版部排印本, 大正15年刊, 1冊)
- 80CL03207…漢籍国字解(10)(早稲田大学出版部排印本, 大正15年刊, 1冊)
- 80CL03208…漢籍国字解(11)(早稲田大学出版部排印本, 大正16年刊, 1冊)
- 80CL03209…漢籍国字解(12)(早稲田大学出版部排印本, 昭和2年刊, 1冊)
- 80CL03210…左氏会箋(上)『漢文大系』10(富山房排印本, 明治44年再版, 1冊)
- 80CL03211…左氏会箋(下)『漢文大系』11(富山房排印本, 明治44年4版, 1冊)
- 80CL03212…校定翁草(京都五車楼排印本, 明治38年刊, 15冊)
- 80CL03213…水滸(1)(上海亜東図書館排印本, 1928年刊, 1冊)
- 80CL03214…水滸(2)(上海亜東図書館排印本, 1928年刊, 1冊)
- 80CL03215…水滸(3)(上海亜東図書館排印本, 1928年刊, 1冊)
- 80CL03216…水滸(4)(上海亜東図書館排印本, 1928年刊, 1冊)
- 80CL03217…中国四代美人全史(世界書局排印本, 民国12年刊, 4冊)
- 80CL03218…詩經研究(国学小叢書)(商務印書館排印本, 民国12年刊, 1冊)
- 80CL03219…・絵図二十四孝(上海世界書局石印本, 民国12年刊, 1冊)
- ・絵図名賢集(京都文成堂石印本, 1冊)
 - ・絵図増注千字文(上海文華書局石印本, 1冊)
 - ・図注千字文(上海普通書局石印本, 1冊)
 - ・牙牌神数七種(上海広益書局石印本, 1冊)
 - ・絵図増注歴史三字経(上海広益書局石印本, 1冊)
 - ・絵図釈音百家姓(上海文華書局石印本, 1冊)
 - ・絵図弟子規(京都文成堂石印本, 1冊)
 - ・絵図女兒経(上海普通書局石印本, 1冊)
 - ・改良絵図四言雜字便説(石印本, 1冊)
 - ・絵図六言操字(上海普通書局石印本, 1冊)
 - ・改良絵図幼学操字(上海広益書局石印本, 1冊)
 - ・絵図孝経説本(上海広益書局石印本, 1冊)
 - ・共和新編輓聯分類合璧(巻3~5のみ)(上海広益書局石印本, 民国4年刊, 1冊)
- 80CL03220…聖祖仁皇帝庭訓格言(上海文瑞廬石印本, 1冊)
- 80CL03221…中国寓言(沈徳鴻編)(商務印書館排印本, 民国11年4版, 1冊)
- 80CL03222…石川丈山『偉人叢書』21(裳華房排印本, 明治31年刊, 1冊)
- 80CL03223…俳人としての寿江女(岡田利兵衛著)(排印本, 昭和7年, 1冊)(200部のうち第55号)
- 80CL03224…成虫楼隨筆(天沼俊一)(一条書房排印本, 昭和18年刊, 1冊)
- 80CL03225…中華六十名家言行録『麗澤叢書』7(弘文堂書房排印本, 1冊)
- 80CL03226…山片蟠桃(亀田次郎著)(全国書房排印本, 昭和18年, 1冊)

80CL03227…武野燭談(国史研究会)(友文社排印本,大正6年,1冊)
 80CL03228…訳文箋略・用字格(須原屋書店排印本,明治41年,1冊)
 80CL03229…富永仲基(石浜純太郎著)(創元社排印本,昭和15年,1冊)
 80CL03230…支那思想史(武内義雄)(岩波全書,昭和11年排印本,1冊)
 80CL03231…華国風味(背木背児著)(弘文堂排印本,昭和24年,1冊)
 80CL03232…広藝舟双楫(上海広藝書局排印本,民国5年,1冊)
 80CL03233…鳩巢先生孟子講義(抄本,1冊)(無界無野,9行20字)
 80CL03234…論語義疏(武内義雄校定)(懷徳堂記念会排印本,大正13年,6冊)
 80CL03235…竈君靈籤(刊本,光緒乙亥,1冊)
 80CL03236…昔々春秋(松村九兵衛刊本,1冊)
 80CL03237…夜船閑話(岡野廉平排印本,昭和8年,1冊)
 80CL03238…中庸達原・大学雜義(岡田利兵衛排印本,昭和2年,2冊)
 80CL03239…懷沙篇(内藤湖南)(浜田蔵刊本,明治44年序,1冊)
 80CL03240…漫遊記・避寒紀行(内藤調一著)(内藤湖南排印本,明治44年,1冊)(書袋「吉田鋭雄様」1面を付す)
 80CL03241…華甲寿言(宝許齋排印本,大正丙寅,1冊)
 80CL03242…航歌集(内藤湖南)(排印本,1冊)
 80CL03243…烹飪一斑『女学叢書』一)(中華書店排印本,民国11年5版,1冊)
 80CL03244…星巖集註(上函)(小倉正恒校刊本,昭和3年,4冊)
 80CL03245…星巖集註(下函)(小倉正恒校刊本,昭和3年,4冊)(北山宛書簡1通を付す)
 80CL03246…碩園先生遺集(懷徳堂記念会排印本,5冊)
 80CL03247…息抱斎詩稿(80CL03108と同版,1冊)
 80CL03248…東亜文明の黎明(浜田青陵著)(創元社排印本,昭和14年4刷,1冊)
 80CL03249…近世文学史論(内藤湖南)(創元社排印本,昭和16年,1冊)
 80CL03250…葉根譚講義(山田孝道著)(光融館排印本,明治41年,2冊)
 80CL03251…京阪文化史論(史学地理学同攷会)(星野書店排印本,大正9年,1冊)
 80CL03252…論語之研究(武内義雄著)(岩波書店排印本,昭和14年,1冊)
 80CL03253…日出づる国の太子(池田栄著)(山口書店排印本,昭和18年,1冊)
 80CL03254…考古学入門『創元選書』78)(浜田青陵)(創元社排印本,昭和17年63版,1冊)
 80CL03255…逸語訓訳(曹庭棟輯,遠藤隆吉訓訳)(博文館排印本,明治44年,1冊)
 80CL03256…新鏡類解官様日記故事大全(三書堂刊本,天保辛卯再刻序,合1冊)
 80CL03257…蘇浙遊記(小倉正恒)(上海刊本,昭和4年,1冊)
 80CL03258…勢語通(松村文海堂排印本,明治44年,2冊)
 80CL03259…竹山国字牘(松村文海堂排印本,明治44年,2冊)(北山書入あり)
 80CL03260…国朝翰源流編年(呉鼎受著)(刊本,乾隆58年序,1冊)
 80CL03261…訳芥子園画伝(須原屋等刊本,文政2年,3冊)

80CL03262…列仙伝校本附夢書(双蓮書屋刊本, 嘉慶17年序, 1冊)

80CL03263…延徳本大学(西村天四郎影印本, 大正13年, 1冊)(100部のうち第61号)

80CL03264…日知録集釈(上帙)(黄汝成)(湖北崇文書局刊本, 同治壬申, 8冊)(西村天四郎旧蔵)

80CL03265…清輝閣藏帖(巻1～巻5)(5帖)

80CL03266…清輝閣藏帖(巻6～巻10)(5帖)

80CL03267…(現物未見)李氏五種(李兆格)

80CL03268…(現物未見)李氏五種(李兆格)

80CL03269…十竹齋書畫譜(上海江東書局コロタイプ版, 8冊)

80CL03270…列女伝補注(嘯書堂刊本, 嘉慶壬申, 5冊)

80CL03271…俳諧逸話全集(博文堂排印本, 明治33年, 1冊)

80CL03272…四大奇書集古隨筆(平義器談ほか)(井口松之助編)(魁真社排印本, 明治32年, 1冊)

80CL03273…
 ・古詩評注説本(上海文明書局排印本, 民国14年12版, 合綴1冊)
 ・古詩評注説本(上海文明書局排印本, 民国22年15版, 2冊)

80CL03274…百科通俗講演集(1)(懷徳堂記念会編)(弘道堂排印本, 大正14年, 1冊)

80CL03275…顔氏家訓(縮印知不足齋叢書本, 2冊)

80CL03276…支那風俗の歴史(三宅俊成著)(文字同盟社排印本, 民国16年, 1冊)

80CL03277…曾文正公嘉言鈔(梁啓超編)(商務印書館排印本, 民国10年7版, 1冊)

80CL03278…日本政記考証(林正躬輯)(浅井吉兵衛等刊本, 明治7年, 2冊)

80CL03279…校正日本政記(頼氏蔵版)(中川清次郎等刊, 明治30年再版, 8冊)

80CL03280…草茅危言(懷徳堂記念会排印本, 昭和17年, 5冊)

80CL03281…周易逢原(排印本, 大正15年, 3冊)

80CL03282…周易逢原(排印本, 大正15年, 3冊)

80CL03283…箕陰集(松村文海堂排印本, 明治44年, 5冊)

80CL03284…碩園先生屈原賦説(上巻のみ)(排印本, 仮綴1冊)(遺文集の試刷カ)

80CL03285…洛汭五子遺集(高橋五子著, 中井天生刪定)(中井天生排印本, 昭和6年, 1冊)

80CL03286…古本大学詳解(抄本, 1冊)(小林印行用箋)

80CL03287…雜記(高階秀実手抄本, 1冊)

80CL03288…壬子雜記(抄本, 1冊)

80CL03289…燕居筆記(抄本, 1冊)

80CL03290…月溪句集(蝸牛廬排印本, 昭和5年, 1冊)

80CL03291…春秋左伝補註(惠棟)(山城屋佐兵衛等刊本, 天保8年, 6冊)

80CL03292…資治精要(抄本, 天明3年序, 1冊)

80CL03293…唐賢百絶(北山抄本, 明治30年抄, 1冊)(明治25年石村貞一刊本を底とす)

80CL03294…履軒弊帚(抄本, 1冊)(懷徳堂蔵本との篇目対照表を附す)

80CL03295…錦洞小稿(市村水香著)(市村文排印本, 明治40年, 1冊)

80CL03296…日知録集釈(下帙)(黄汝成)(同治壬申, 湖北崇文書局刊本, 8冊)(西村天四郎旧蔵)

- 80CL03297…藝舟双楫(上海古今書室排印本, 民国12年)
- 80CL03298…篆文孝經(蘇州振新書社景吳大徵本, 民国8年3版, 1冊)
- 80CL03299…双梅景閣叢書(葉德輝郎園刊本, 丁未, 6冊)
- 80CL03300…說書指南(弘文堂排印本, 昭和10年, 1冊)
- 80CL03301…松屋文集(藤居高尚作)(刊本, 文化8年序, 1冊)
- 80CL03302…孝經啓蒙新解(王沢厚)(積善堂刊本, 光緒壬辰, 1冊)
- 80CL03303…不問語(懷德堂紀念会排印本, 1冊)
- 80CL03304…古本大学讀義(三輪執斎著, 東正堂述)(松山堂排印本, 明治43年, 1冊)
- 80CL03305…箕山勝遊詩文集(林田炭翁輯)(蝸牛盧排印本, 昭和4年, 1冊)
- 80CL03306…日本倫理彙編(卷十)独立学派の部(井上哲次郎・蟹江義丸共編)(育成会排印本, 明治36年, 1冊)
- 80CL03307…片山翁小伝(中島錦三郎編)(片岡商店排印本, 昭和13年, 1冊)
- 80CL03308…伊丹風俳諧全集(上卷)鬼貫編(岡田利兵衛編)(岡田利兵衛排印本, 昭和15年, 1冊)
- 80CL03309…山片蟠桃翁の事蹟・同補遺・愛日区内先賢小伝・愛日教育7号(亀田次郎等)(合綴1冊)
- 80CL03300…百家説林(吉川半七排印本, 明治24年)(残6冊(1, 2, 4, 5, 6, 7巻のみ))
- 80CL03311…雜著三種(内田銀蔵)(抜刷合綴, 1冊)
- 80CL03312…九桂草堂隨筆を説む(内田銀蔵)(『史林』3-3抜刷, 1冊)
- 80CL03313…近世の日本(内田銀蔵)(富山房排印本, 大正8年, 1冊)
- 80CL03314…肄業餘稿(池田草庵)(清海清排印本, 大正5年, 1冊)
- 80CL03315…補註孟子集註(簡野道明補註)(明治書院, 昭和15年修正40版, 1冊)
- 80CL03316…漢字音之系統(後藤朝太郎)(六合館排印本, 明治42年, 1冊)
- 80CL03317…賭子概説(武内義雄著)(弘文堂書房排印本, 昭和10年, 1冊)
- 80CL03318…日本古文書学(中村直勝著)(日本文学社内国史講座刊行会排印本, 昭和10年, 1冊)
- 80CL03319…広益新撰玉篇(鍾美堂, 明治42年5版, 1冊)
- 80CL03320…食譜大全(上海世界書局排印本, 民国12年3版, 1冊)
- 80CL03321…近畿墓跡考 大阪の部(鎌田春雄著)(大鐙閣排印本, 大正11年, 1冊)
- 80CL03322…草庵文集ほか(青谿書院全集第2編)(池田久米次郎排印本, 大正2年, 2冊)
- 80CL03323…屑屋の籠(西村天囚著)(博文堂排印本, 大正13年5版, 1冊)
- 80CL03324…清代婦女文学史(梁乙真編)(中華書局排印本, 民国16年, 1冊)
- 80CL03325…清国通考第1篇(服部宇之吉撰)(三省堂排印本, 明治38年, 1冊)
- 80CL03326…清国通考第2篇(服部宇之吉撰)(三省堂排印本, 明治38年, 1冊)
- 80CL03327…說書纂餘(狩野直喜)(弘文堂書房排印本, 昭和22年, 1冊)
- 80CL03328…中国婦女文学史(謝无量編)(中華書局排印本, 民国5年, 1冊)
- 80CL03329…日本宋学史(西村天囚著)(梁江堂排印本, 明治42年, 1冊)
- 80CL03330…老子と莊子『学芸叢書』10(武内義雄)(岩波書店, 昭和10年3刷, 1冊)

80CL03331…支那語教育の理論と實際(倉石武四郎著)(岩波書店, 昭和16年, 1冊)

80CL03332…日本古文書学(中村直勝著)(日本文学社内国史講座刊行会排印本, 昭和9年, 1冊)

80CL03333…北宋五子哲学(松山直蔵著)(懷徳堂記念会排印本, 昭和6年, 1冊)

80CL03334…文学博士西村時彦先生講演速記(排印本, 大正9年, 1冊)

80CL03335…懷徳堂考(財団法人懷徳堂記念会排印本, 大正14年, 1冊)

80CL03336…懷徳堂夜話(排印本, 1冊)(北山校本)

80CL03337…西岡集(北山抄本, 明治30年抄, 1冊)(大阪府用箋)

80CL03338…日本詩紀(国書刊行会排印本, 明治44年, 1冊)

80CL03339…明良洪範(国書刊行会排印本, 明治45年, 1冊)

80CL03340…事実文編第一(国書刊行会排印本, 明治43年, 1冊)

80CL03341…事実文編第二(国書刊行会排印本, 明治43年, 1冊)

80CL03342…事実文編第三(国書刊行会排印本, 明治44年, 1冊)

80CL03343…事実文編第四(国書刊行会排印本, 明治44年, 1冊)

80CL03344…事実文編第五(国書刊行会排印本, 明治44年, 1冊)

80CL03345…甲子夜話第一(国書刊行会排印本, 明治43年, 1冊)

80CL03346…甲子夜話第二(国書刊行会排印本, 明治43年, 1冊)

80CL03347…甲子夜話第三(国書刊行会排印本, 明治43年, 1冊)

80CL03348…甲子夜話続篇第一(国書刊行会排印本, 明治44年, 1冊)

80CL03349…甲子夜話続篇第二(国書刊行会排印本, 明治44年, 1冊)

80CL03350…甲子夜話続篇第三(国書刊行会排印本, 明治44年, 1冊)

80CL03351…仁聚堂法帖(米芾)(1帖)

80CL03352…仁聚堂法帖(老子道德経など)(1帖)

80CL03353…仁聚堂法帖(蘇軾)(1帖)

80CL03354…仁聚堂法帖(1帖)

80CL03355…仁聚堂法帖(米芾)(1帖)

80CL03356…仁聚堂法帖(孔子廟堂之碑など)(1帖)

80CL03357…仁聚堂法帖(董其昌)(1帖)

80CL03358…仁聚堂法帖(黄庭堅)(1帖)

80CL03359…儒教の精神(武内義雄)(岩波新書, 昭和14年, 1冊)

80CL03360…東洋倫理(西晋一郎)(岩波全書, 昭和15年, 1冊)

80CL03361…日本外史質問録(巻之下)(松下喜輔)(石田清兵衛等刊本, 明治9年, 1冊)

80CL03362…碩園先生追悼録(『懷徳』2号)(懷徳堂堂友会排印本, 大正14年, 1冊)

80CL03363…(現物未見)稲東香山遺稿

80CL03364…永田理事長・松山教授追悼録(『懷徳』6号)(1冊)

80CL03365…懷徳堂五種(排印本, 明治44年, 1冊)

80CL03366…登極詔(鄭孝胥書)(海蔵楼刊本, 康德元年, 1冊)

- 80CL03367…明拓石鼓文(有正書房, 民国11年, 1冊)
- 80CL03368…北宋拓聖教序(有正書房, 民国9年, 1冊)
- 80CL03369…桑蓬集(小川琢治撰)(小川琢治排印本, 昭和5年, 1冊)
- 80CL03370…助字新詁(東堂一条)(尚友館藏刊本, 明治2年, 2冊)
- 80CL03371…清詩選選絶句集(抄本, 1冊)(無界無野, 10行20字, 梁田銳巖鑑)
- 80CL03372…蘭居詩存(藤田東湖)(抄本, 1冊)(無界無野, 12~13行不定字)
- 80CL03373…暗室灯(同治乙丑重刊本, 1冊)
- 80CL03374…南海先生後集(排印本, 昭和3年, 1冊)
- 80CL03375…文房肆攷(唐衡銓著)(刊本, 乾隆43年序, 2冊)
- 80CL03376…杏邨詩稿(田中桐江)(藤浦知排印本, 昭和11年, 1冊)
- 80CL03377…夢庵芹菰集(林田炭翁輯)(池田史談会排印本, 昭和3年, 1冊)
- 80CL03378…通鑑(頼山陽)(頼又二郎刊本, 明治9年, 合1冊)
- 80CL03379…十八史略纂語字類大全(久留間瓊三)(明治刊本, 2冊)
- 80CL03380…駿台雜話(室鳩巢著)(積善刊排印本, 明治42年, 1冊)
- 80CL03381…詩雕題略上(抄本, 1冊)(四周半辺無野, 9行20字)
- 80CL03382…○肥長電信録初編(青山蕉)(阪田伝七刊本, 明治9年, 2冊)
○肥長電信録二編(青山蕉)(阪田伝七刊本, 明治10年, 2冊)
- 80CL03383…北宋汴学二体石經記(刊本, 咸豐8年序, 1冊)
- 80CL03384…春秋左伝撻覽(龔而安)(吉田松根堂刊本, 安永9年, 1冊)
- 80CL03385…五經(単經収袖本)(伊丹屋善兵衛等刊本, 明治3年, 4冊)
- 80CL03386…屑屋の籠(前篇)(博文堂排印本, 明治20年, 1冊)
- 80CL03387…屑屋の籠(後篇)(博文堂排印本, 明治21年, 1冊)
- 80CL03388…山鹿兵藤次秀遠(秋山光清著)(山鹿秀遠顕彰会排印本, 昭和7年, 1冊)
- 80CL03389…去国吟(蒋智由著)(中井木菟麻呂排印本, 民国6年, 1冊)
- 80CL03390…隨園隨筆(袁枚)(著易堂排印本, 民国10年, 4冊)
- 80CL03391…清代樸学大師列伝(上)(支偉成纂述)(上海泰東書局排印本, 民国14年, 1冊)
- 80CL03392…清代樸学大師列伝(下)(支偉成纂述)(上海泰東書局排印本, 民国14年, 1冊)
- 80CL03393…蘭洲茗話(松村文海堂排印本, 明治44年, 1冊)(北山書入あり)
- 80CL03394…篆刻入門(孔雲白著)(商務印書館, 民国24年, 1冊)
- 80CL03395…山水入門(胡錫銓著)(商務印書館, 民国11年3版, 1冊)
- 80CL03396…中国神童故事(凌善清編)(大東書局排印本, 民国13年, 合綴1冊)
- 80CL03397…わくら葉(多田春子詠)(蝸牛盧排印本, 昭和9年, 1冊)
- 80CL03398…懷德堂旧記(幸田成友排印本, 明治44年, 1冊)
- 80CL03399…画禅室隨筆(荳其昌著)(広益書局排印本, 民国6年, 1冊)
- 80CL03400…○郷土先儒遺著聚英目録(大阪府立図書館刊本, 昭和13年, 1冊)
○郷土先儒遺著展覽会目録(大阪府立図書館刊本, 昭和13年, 1冊)

80CL03401…撰津池田稻東松軒所蔵品入札目録(昭和9年, 1冊)
 80CL03402…林叟遺稿(林田良平著)(太陽日報社排印本, 大正15年, 1冊)
 80CL03403…曾文正公家書種(著易堂石印本, 7冊)
 80CL03404…道澄寺鐘銘(拓本, 1帖)
 80CL03405…○ 翁之文(博文堂影印本, 大正13年, 1冊)(延享3年刊本より影印)
 ○ 翁の文(山田勝享社油印本, 昭和10年, 1冊)
 80CL03406…便蒙統字聚文韻略(八尾堪兵衛刊本, 延宝4年序, 2冊)
 80CL03407…頭字韻(余春亭)(津藩有造館刊本, 天保壬辰, 2冊)
 80CL03408…操觚字訣附補遺(須原屋書店, 明治40年4版, 1冊)
 80CL03409…唐宋詩語玉屑(岡田茂兵衛等刊本, 明治12年3版, 合1冊)
 80CL03410…辭源(丁種)(上冊)(商務印書館, 民国12年18版, 1冊)
 80CL03411…辭源(丁種)(下冊)(商務印書館, 民国12年18版, 1冊)
 80CL03412…白話詞典(方資觀編)(商務印書館排印本, 民国13年, 1冊)
 80CL03413…増補日本外史(柳原喜兵衛等刊本, 明治18年, 12冊)
 80CL03414…懷德堂考(懷德堂記念会排印本, 大正14年, 1冊)
 80CL03415…広列女伝(両浙節孝總廟排印本, 4冊)
 80CL03416…唐詩評注説本(文明書房排印本, 民国18年, 2冊)
 80CL03417…荀子(掃葉山房石印本, 民国3年, 4冊)(北山書入多し)
 80CL03418…楚辭集註(掃葉山房石印本, 民国25年, 4冊)
 80CL03419…日本外史質問録(巻之中)(松山喜輔著)(石田清兵衛等刊本, 明治9年, 1冊)
 80CL03420…秋斎問語(柳原喜兵衛等刊本, 宝暦8年, 4冊)
 (未受入) …北京佩文齋書韻碑帖目録(年次不明, 2枚)
 (未受入) …文殿閣旧書目第四期(排印本, 民国27年, 1冊)
 (未受入) …酒人觴政雅篇(文求堂書目ほか合綴)(1冊)
 (未受入) …文奎堂書目(排印本, 民国26年重訂第11期, 1冊)

いわゆる「北山文庫」は図書・典籍類を中心とするが、「北山文庫続」には、北山の手による懷德堂関係・池田関係の抄本のほか、北山自身の草稿やノート類が多数含まれている。また重建懷德堂の講義録などが豊富に含まれており、重建懷德堂の研究上 貴重な資料となろう。

しかし「北山文庫続」には、性質の異なる複数の資料に対して同一の number を付与し、また本来一体であるべき資料を分割して numbering しているなど多くの問題点がある。すくなくとも後者は受入時に生じた問題であろう。

また、金属製のクリップで纏められていた一部の資料については、クリップの酸化により資料が汚損され、かつ各葉がバラバラに分散してしまっており(80CL03178や80CL03196など)、これらの原秩序を復元した上で内容を調査するためには、さらなる時間と労力が必要となる。

ついでに指摘しておくならば、クリップの酸化による資料の汚損は、懷徳堂文庫に架蔵されている並河寒泉の詩文集や第二次新田文庫の中井家歴代喪事録などについても同様に進行中であり、早急な対策(クリップの除去と本紙の洗滌、製本・造狭など)が必要と思われる。

なお、あきらかに北山文庫に由来する資料でありながら受入手続きが行われていない(と思われる)資料も若干が存在した。もしこれらを改めて受け入れるのであれば、資料番号上、北山文庫はさらに分散してしまう。従って、昭和31(1956)年受入分・昭和55(1980)年受入分・文学研究科が管理する「器物」に加え、平成16(2004)年以降に受け入れられるであろう資料までを「北山文庫」として統一的に把握しておかねばならない。(一括受入した資料群を「図書」と「器物」とに分類し、附属図書館と文学研究科とに分散させるという措置は respect des fonds の原則に外れており、公的機関による管理としては問題がある。)なお本稿は、昭和55(1980)年受入分および未受入分のみに関するもので、かつ、調査の不十分な部分や体裁の不統一を残したものである。不備の責は筆者の無能と調査期間の不足とに帰すが、より根本的な原因としては、懷徳堂文庫に関する専任スタッフが本学に配置されていないことが挙げられよう。

北山文庫・新田文庫など未調査の資料に満ちた懷徳堂文庫は、未だ掘られざる宝の山である。たとえば、ロシア正教の日本における受容や布教の歴史は従来かならずしも充分には明らかとされていなかったが、新田文庫所蔵資料(パウエル中井木菟麻呂やワルワラ中井終子の遺稿など)の調査によって最近、この分野の研究に飛躍的な進展が見られた(中村健之助・中村悦子『ニコライ堂の女性たち』教文館、2003年)。今回の「北山文庫続」の調査によってもたとえば、儒教の「天」の「汎神論」・「多神教」的な面と「一神教」的な面とを論じた木菟麻呂の自筆論文が発見されたが(80CL03172)、これなどは日本における正教初期の思想的営為の一端を示すものとして、また懷徳堂に生まれ育ちながら正教へ入信した木菟麻呂個人の思想をうかがわせるものとして、興味深い資料であるといえよう。またたとえば、宮内庁蔵『懷徳堂紀年』の稿本が北山文庫続に架蔵されている(80CL03017)ことが最近報告されたが(竹田健二『懷徳堂紀年』とその成立過程』『中国研究集刊』調号、2003年)、今回の調査によって、これよりもさらに古い段階のものと思われる草本を新たに見出した(80CL03175)。懷徳堂文庫には、さらにどれほどの資料が眠っているのか、その全貌はいまだ明らかとされていないのである。

今後も、懷徳堂文庫に関する基礎的な調査を続けたい。

注記：「懷徳堂文庫」という呼称は、重建懷徳堂から本学へ寄贈された「懷徳堂遺存」三万数千点の他、以降に本学が受贈し購入した岡田文庫・木間瀬文庫・北山文庫・新田文庫なども含めた計約五万点の資料の総称として通用している。また、これらの資料が保管されている附属図書館新館六階貴重書庫をも「懷徳堂文庫」と呼ぶが、これは資料群ではなく保管場所に対する呼称である。

(本センター非常勤事務補佐員)

